兵庫県文化財調査報告　第151冊

三木市所在

西ケ原遺跡

—山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XIX—

1996年3月

兵庫県教育委員会

兵庫県文化財調査報告　第151冊

三木市所在

西ケ原遺跡

（にしがはら）

—山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XIX—

1996年3月

兵庫県教育委員会

遺跡の遠景（南西から）

遺跡の遠景（南東から）

ＳＨ01　カマド（南東から）

ＳＨ02　カマド（南から）

ＳＨ06　カマド（南東から）

ＳＨ38　土坑３遺物出土状況（西から）

SH01

SH01

SH02

SH02

SH02

SH02

SH03

SH03

SH03

SH03

SH05

SH05

SH06

SH06

SH06

SH07

SH08

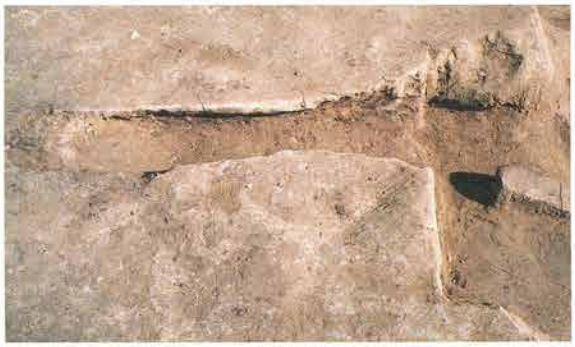
SH08

SH08

SH08

SH11

SH11



SH11

SH11

SH12

SH12

SH14

SH15

SH15

SH16

SH16

SH16

SH16

SH18

SH18

SH18

SH18

SH20

SH20

SH25

SH25

SH28

SH28

SH29

SH24・34

SH32

SH35

SH35

例　　言

1．本書は、兵庫県三木市細川町西字前・久留美字西ケ原に所在する西ケ原遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、山陽自動車道（神戸～三木）の建設に伴い、日本道路公団の依頼を受けて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が平成元年度から平成２年度にかけて実施した。

3．本書に掲載した位置図には建設省国土地理院発行の５万分の１「高砂」と「神戸」、20万分の１の「姫路」と「京都及大阪」を使用した。

4．本書に使用した方位は国土座標第Ｖ系を基準にし、水準は東京湾平均水準（Ｔ．Ｐ．）を使用したものである。方位は座標北を指す。

5．遺物は土器については数字番号のみ、金属製品をＳ、玉類をＪと分類し、数字番号にて個体の識別を行っている。

6．本書の図版２に使用したブロックダイヤグラムは、Tak. OHI氏の作成した「BIRD'S-EYE」を使用した。

7．本報告にかかる遺物・写真・図面等の資料は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町２丁目１－５）及び、魚住分館（明石市魚住町清水字立合池の下630－１）に保管している。

7．ＳＨ38出土の木材の樹種鑑定については京都大学木質科学研究所の伊東隆夫教授に依頼し、玉稿をいただいた。

8．本書の執筆・編集は小川美奈の補助を得て、高瀬一嘉が行った。

9．発掘調査および整理作業にあたっては、下記の諸氏にご教示・ご指導をいただいた。
高橋　学（立命館大学助教授）・毛利哲夫・松村正和・小網　豊（三木市教育委員会）

本　文　目　次

第１章　調査の経緯

１．調査に至る経過……（１）

２．発掘調査の経過……（１）

３．整理作業の経過……（２）

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境……（３）

第２節　歴史的環境……（４）

第３節　三木市周辺の山陽自動車道関連遺跡……（10）

第３章　確認調査

１．調査の概要……（17）

２．調査の結果……（17）

第４章　全面調査の結果

第１節　遺跡の立地と基本層序……（19）

第２節　Ａ地区検出の遺構と遺物……（22）

第３節　Ｂ地区の調査……（70）

第４節　Ｃ地区検出の遺構と遺物……（72）

第５節　Ｄ地区検出の遺構と遺物……（84）

第６節　Ｅ地区検出の遺構と遺物……（89）

第５章　まとめ

第１節　検出状況の確認……（99）

第２節　出土遺物の検討……（105）

第３節　各期ごとの住居跡の変遷……（115）

第４節　大池古墳群との関係について……（121）

第５節　調査の成果……（125）

付載

西ケ原遺跡出土の木材の樹種について（伊東隆夫・藤田淳）……（127）

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置
第２図　周辺の遺跡……（６）
第３図　山陽自動車道関連の遺跡の位置図　1/80,000……（16）
第４図　確認調査の試掘坑設定図……（18）
第５図　遺跡周辺の地形模式図……（20）
第６図　ＳＨ01の位置……（23）
第７図　ＳＨ02の位置……（24）
第８図　ＳＨ03の位置……（26）
第９図　ＳＨ04の位置……（27）
第10図　ＳＨ05の位置……（29）
第11図　ＳＨ06の位置……（30）
第12図　ＳＨ07の位置……（32）
第13図　ＳＨ08の位置……（34）
第14図　ＳＨ10の位置……（36）
第15図　ＳＨ11の位置……（38）
第16図　ＳＨ12の位置……（39）
第17図　ＳＨ13の位置……（41）
第18図　ＳＨ14の位置……（42）
第19図　ＳＨ15の位置……（43）
第20図　ＳＨ16の位置……（45）
第21図　ＳＨ18の位置……（46）
第22図　ＳＨ19の位置……（48）
第23図　ＳＨ20の位置……（49）
第24図　ＳＨ21の位置……（51）
第25図　ＳＨ22の位置……（52）
第26図　ＳＨ23の位置……（53）
第27図　ＳＨ24の位置……（54）
第28図　ＳＨ25の位置……（55）
第29図　ＳＨ26の位置……（56）
第30図　ＳＨ27の位置……（58）
第31図　ＳＨ28の位置……（59）
第32図　ＳＨ29の位置……（60）
第33図　ＳＨ30の位置……（60）
第34図　ＳＨ33の位置……（61）
第35図　ＳＨ34の位置……（62）
第36図　ＳＨ35の位置……（63）

第37図　ＳＢ01の位置……(65)
第38図　ＳＸ01・02の位置……(66)
第39図　ＳＤ01の位置……(67)
第40図　包含層出土小玉グラフ……(69)
第41図　Ｂ地区　トレンチ断面図……(71)
第42図　ＳＨ36の位置……(72)
第43図　ＳＨ37の位置……(74)
第44図　ＳＨ38の位置……(76)
第45図　ＳＨ39の位置……(79)
第46図　ＳＨ40の位置……(80)
第47図　ＳＢ02の位置……(81)
第48図　ＳＤ02の位置……(82)
第49図　Ａ地区　重複して検出した竪穴住居　（１）……(103)
第50図　Ａ地区　重複して検出した竪穴住居　（２）……(104)
第51図　出土須恵器（杯身・杯蓋）の編年……(107)
第52図　Ⅰ期の住居跡……(115)
第53図　Ⅲ期の住居跡……(116)
第54図　Ⅳ期の住居跡……(117)
第55図　Ⅴ期の住居跡……(118)
第56図　Ⅵ期の住居跡……(119)
第57図　Ⅶ期の住居跡……(120)
第58図　西ケ原遺跡と大池古墳群の位置関係……(121)
第59図　大池古墳群出土土器（杯身・杯蓋）……(123)

表　目　次

表１　周辺の遺跡一覧表（１）……（７）
表２　周辺の遺跡一覧表（２）……（８）
表３　周辺の遺跡一覧表（３）……（９）
表４　包含層出土小玉計測表……(69)
表５　出土土器観察表（１）……(92)
表６　出土土器観察表（２）……(93)
表７　出土土器観察表（３）……(94)
表８　出土土器観察表（４）……(95)
表９　出土土器観察表（５）……(96)
表10　出土土器観察表（６）……(97)
表11　出土土器観察表（７）……(98)
表12　Ａ地区　竪穴住居跡出土土器の時期……(114)

図　版　目　次

図版１　遺跡の位置　（上）1/200,000 ・（下）1/50,000
図版２　遺跡周辺のブロックダイヤグラム　北東方向から（上）・南東方向から（下）
図版３　西ケ原遺跡周辺の山陽自動車道関連の遺跡(1/10,000)
図版４　Ａ地区基本層序（南壁）
図版５　Ｃ地区基本層序（北壁）
図版６　Ｄ地区基本層序（北～東壁）
図版７　西ケ原遺跡遺構全体図（1/2,000）
図版８　Ａ地区全体図（1/400）
図版９　ＳＨ01全体図(1/60)・カマド全体図(1/30)
図版10　ＳＨ02全体図(1/60)・カマド全体図(1/30)
図版11　ＳＨ03全体図(1/60)・カマド全体図(1/30)
図版12　ＳＨ04全体図(1/60)
図版13　ＳＨ05全体図(1/60)・カマド全体図(1/30)
図版14　ＳＨ06全体図(1/60)
図版15　ＳＨ06カマド全体図(1/30)
図版16　ＳＨ07全体図(1/60)・カマド全体図(1/30)
図版17　ＳＨ08全体図(1/60)・カマド全体図(1/30)
図版18　ＳＨ10全体図(1/60)
図版19　ＳＨ11全体図(1/60)
図版20　ＳＨ11カマド全体図(1/30)・ＳＨ12カマド全体図(1/30)
図版21　ＳＨ12全体図(1/60)
図版22　ＳＨ13・21全体図(1/60)
図版23　ＳＨ14全体図(1/60)・ＳＨ15（カマド部分のみ）全体図(1/30)
図版24　ＳＨ16全体図(1/80)・カマド全体図(1/30)
図版25　ＳＨ18全体図(1/60)・カマド全体図(1/30)・ＳＨ19（カマド部分のみ）全体図(1/30)
図版26　ＳＨ20全体図(1/60)・カマド全体図(1/30)
図版27　ＳＨ22全体図(1/60)
図版28　ＳＨ23・30全体図(1/60)・ＳＨ35全体図(1/60)・カマド全体図(1/30)
図版29　ＳＨ24全体図(1/60)・カマド全体図(1/30)
図版30　ＳＨ25全体図(1/60)・カマド全体図(1/30)
図版31　ＳＨ26全体図(1/60)
図版32　ＳＨ27全体図(1/60)・ＳＨ33全体図(1/60)
図版33　ＳＨ34全体図(1/80)・カマド全体図(1/30)
図版34　ＳＸ01全体図(1/60)
図版35　ＳＸ02全体図(1/20)
図版36　ＳＢ01全体図(1/80)・ＳＢ02全体図(1/60)

図版37　Ｃ地区全体図(1/400)
図版38　ＳＨ36全体図(1/60)
図版39　ＳＨ37全体図(1/60)
図版40　ＳＨ38全体図(1/60)・土坑３遺物出土状況(1/15)
図版41　ＳＨ39全体図(1/60)
図版42　ＳＨ40全体図(1/30)
図版43　Ｄ地区全体図(1/400)
図版44　ＳＫ01(1/60)・ＳＫ03・04・05・06(1/30)
図版45　ＳＫ08・09・10・11・12(1/30)
図版46　Ｅ地区全体図(1/400)
図版47　Ａ地区ＳＨ01・02出土土器
図版48　Ａ地区ＳＨ03・04・05出土土器
図版49　Ａ地区ＳＨ06・07・08出土土器
図版50　Ａ地区ＳＨ10・11・12出土土器
図版51　Ａ地区ＳＨ14・15・16・18・20出土土器
図版52　Ａ地区ＳＨ13・21・23・24・25・26出土土器
図版53　Ａ地区ＳＨ26・27・28・30・34・35出土土器
図版54　Ａ地区ＳＨ35・ＳＢ01出土土器
図版55　Ａ地区ＳＸ01・ＳＸ02出土土器
図版56　Ａ地区包含層出土土器
図版57　Ａ地区出土玉類・出土鉄器
図版58　Ｃ地区ＳＨ36・37・38・39・40出土土器
図版59　Ｃ地区ＳＤ02・包含層出土土器
図版60　Ｄ地区ＳＫ08・ＳＤ07・ＳＤ10・包含層出土土器

写真図版目次

〔巻頭カラー〕

巻頭図版１　・上　遺跡の遠景（南西から）　・下　遺跡の遠景（南東から）
巻頭図版２　・上　ＳＨ01カマド（南東から）　・下　ＳＨ02カマド（南から）
巻頭図版３　・上　ＳＨ06カマド（南東から）　・下　ＳＨ38土坑３遺物出土状況（西から）
巻頭図版４　Ａ地区検出竪穴住居跡カマド（ＳＨ01～03）
巻頭図版５　Ａ地区検出竪穴住居跡カマド（ＳＨ05～08）
巻頭図版６　Ａ地区検出竪穴住居跡カマド（ＳＨ11～15）
巻頭図版７　Ａ地区検出竪穴住居跡カマド（ＳＨ16～20）
巻頭図版８　Ａ地区検出竪穴住居跡カマド（ＳＨ25～35）

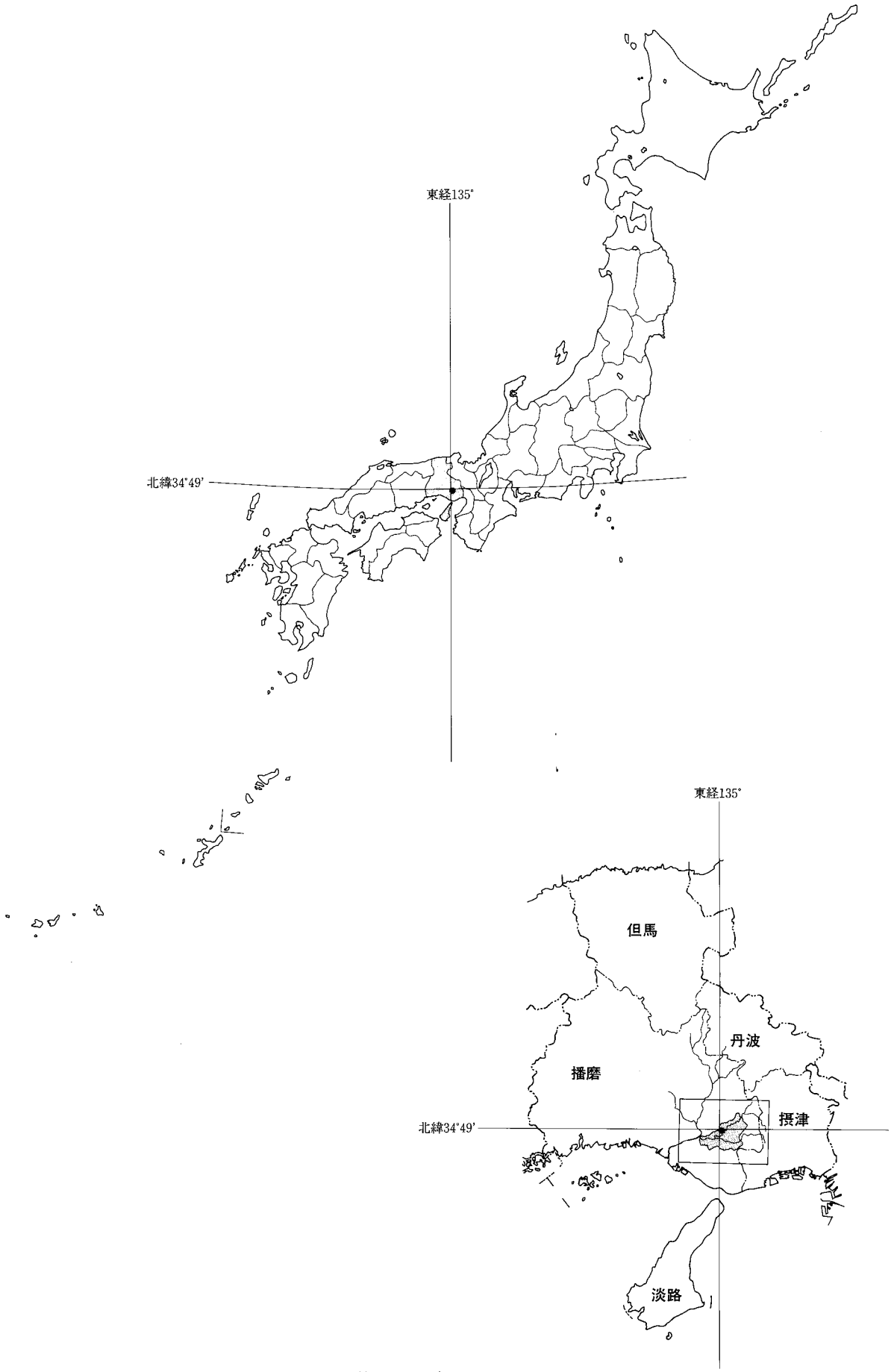
〔遺構写真〕

写真図版１　西ケ原遺跡の位置（国土地理院撮影）

写真図版２	・上　遺跡の遠景（南から）	・下　遺跡上空から
写真図版３	・上　Ａ地区東部遺構検出状況	・下　Ａ地区中央部遺構検出状況
写真図版４	・上　Ａ地区東部遺構検出状況	・下　Ａ地区中央部遺構検出状況
写真図版５	・上　ＳＨ01　全景	・下　ＳＨ01　カマド
写真図版６	・上　ＳＨ01　カマド	・下　ＳＨ02　全景
写真図版７	・上　ＳＨ02　カマド	・下　ＳＨ02　土器出土状況
写真図版８	・上　ＳＨ03　全景	・下　ＳＨ03　カマド
写真図版９	・上　ＳＨ04　全景	・下　ＳＨ04
写真図版10	・上　ＳＨ05　全景	・下　ＳＨ05　カマド
写真図版11	・上　ＳＨ06　全景	・下　ＳＨ06　カマド
写真図版12	・上　ＳＨ06　カマド	・下　ＳＨ06　炭化物検出状況
写真図版13	・上　ＳＨ06　カマド縦断面	・下　ＳＨ07　全景
写真図版14	・上　ＳＨ08　全景	・下　ＳＨ08　カマド
写真図版15	・上　ＳＨ08　土坑１	・下　ＳＨ10　全景
写真図版16	・上　ＳＨ11　全景	・下　ＳＨ11　カマド
写真図版17	・上　ＳＨ12　全景	・下　ＳＨ12　カマド
写真図版18	・上　ＳＨ14　全景	・下　ＳＨ15　カマド
写真図版19	・上　ＳＨ16　全景	・下　ＳＨ16　カマド
写真図版20	・上　ＳＨ18　全景	・下　ＳＨ18　カマド
写真図版21	・上　ＳＨ18　カマド	・下　ＳＨ18　土坑１
写真図版22	・上　ＳＨ20　全景	・下　ＳＨ20　カマド
写真図版23	・上　ＳＨ13・21	・下　ＳＨ13　土器出土状況
写真図版24	・上　ＳＨ22　全景	・下　ＳＨ23　全景
写真図版25	・上　ＳＨ25　全景	・下　ＳＨ25　カマド
写真図版26	・上　ＳＨ26　全景	・下　ＳＨ27　全景
写真図版27	・上　ＳＨ28　カマド	・下　ＳＨ30　全景
写真図版28	・上　ＳＨ33　全景	・下　ＳＨ34　全景
写真図版29	・上　ＳＨ34　カマド	・下　ＳＨ24・34　カマド
写真図版30	・上　ＳＨ35　全景	・下　ＳＨ35　カマド
写真図版31	・上　ＳＢ01　全景	・下　ＳＸ01　全景
写真図版32	・上　ＳＸ02　全景	・下　ＳＸ02　遺物出土状況
写真図版33	・上　Ｃ地区　全景	・下　Ｃ地区　遺構検出状況
写真図版34	・上　ＳＨ36　全景	・下　ＳＨ36　集石検出状況
写真図版35	・上　ＳＨ37　全景	・下　ＳＨ37　全景
写真図版36	・上　ＳＨ37　中央土坑	・下　ＳＨ37　高床部
写真図版37	・上　ＳＨ37　土坑４	・下　ＳＨ37　土坑３

写真図版38　・上　ＳＨ38　全景　　・下　ＳＨ38　土坑３遺物出土状況
写真図版39　・上　ＳＨ39　全景　　・下　ＳＨ39　中央土坑
写真図版40　・上　ＳＨ39　中央土坑断面　　・下　ＳＨ39　中央土坑完掘状況
写真図版41　・上　ＳＨ40　全景　　・下　ＳＢ02　全景
写真図版42　・上　ＳＨ36　調査風景　　・下　ＳＨ37　調査風景
写真図版43　・上　Ｄ地区　全景（空撮）　　・下　Ｄ地区　全景
写真図版44　・上　Ｅ地区　全景（空撮）　　・下　Ｅ地区　全景

〔遺物写真〕
写真図版45　Ａ地区出土土器（１）　ＳＨ01・02・03・05
写真図版46　Ａ地区出土土器（２）　ＳＨ04・06・07
写真図版47　Ａ地区出土土器（３）　ＳＨ10・12
写真図版48　Ａ地区出土土器（４）　ＳＨ14・15・16・18・20・13・21
写真図版49　Ａ地区出土土器（５）　ＳＨ23・24・26・34・35、ＳＢ01
写真図版50　Ａ地区出土土器（６）　ＳＸ01・02
写真図版51　・上　Ａ地区出土土器（７）包含層出土　　・下　包含層出土小玉
写真図版52　Ｃ地区出土土器　　，ＳＨ36・37・38・39、ＳＤ02
写真図版53　Ｃ地区包含層出土土器、Ｄ地区出土土器　ＳＤ07
写真図版54　ＳＨ39出土珪化木、出土鉄器



第１図　遺跡の位置

第１章　調査の経緯

１．調査に至る経過

山陽道、正式には「高速自動車国道　山陽自動車道　吹田山口線」は、吹田市を起点にして瀬戸内沿岸の都市を結んで山口市に至る総延長約434kmの高速道路である。

このうち、神戸～三木間（28.6km）は第９次施工命令区間として、昭和57年に整備計画が決定した。その後、昭和59年11月30日に施工命令が出され、昭和60年３月25日に路線発表が行われた。

事業区域内の埋蔵文化財包蔵地の取扱いについては、日本道路公団と兵庫県教育委員会で協議を重ね、昭和61年４月と昭和62年３月の２回にわたって分布調査を実施した。その結果、52箇所について確認調査の必要が認められた。

この結果を受けて、兵庫県教育委員会では平成元年度より確認調査を実施した。三木市久留美から細川町にかけては、確認調査でのNo.35～41地点が存在している地区である。当該地区の確認調査はNo.35～38・40・41地点が平成元年度に、No.39地点が平成２年度に実施した。今回報告を行う西ケ原遺跡はNo.40地点にあたる。

２．発掘調査の経過

確認調査（遺跡調査番号890099）

調査担当者　岡田章一・山下史朗・高瀬一嘉・中村　弘・多賀茂治

山陽自動車道（神戸～三木間）建設に伴って昭和61・62年度に分布調査が実施された。この調査の際、細川西～西ケ原地区周辺では土器の分布が認められ、集落遺跡が存在する可能性が指摘された。このため、この時点でNo.40地点と仮称して確認調査を実施することとなった。

確認調査は平成元年度に山陽自動車道（神戸～三木間）関連で行った39の地点のうちの１地点として実施した。平成元年度は平成２年１月10日～３月30日の期間に確認調査を行ったが、No.40地点はこのうち１月23～２月８日の期間に実施した。

調査は山陽自動車道の路線に平行して３列ずつ、合計56箇所の試掘坑を設定し、人力により慎重に掘削を行い、遺物・遺構の検出に努めた。

その結果、３・８・11・18・30・32・33・34の各試掘坑からは中世の柱穴、溝、土坑などの遺構と、これらに伴って土師器鍋・羽釜、須恵器椀・鉢などの遺物が検出された。また、調査区の東側で設定した48・50・51・52・53・55の各試掘坑からは古墳時代の柱穴、住居跡・土坑などの遺構と共に須恵器土師器などの遺物が検出された。

全面調査（遺跡調査番号900035）

調査担当者　小川良太・岡田章一・高瀬一嘉・三原慎吾・西原雄大

確認調査の結果により、No.40地点ではほぼ全域にわたって遺構が存在することが判明した。日本道路公団と兵庫県教育委員会との協議の結果、現状保存の処置をとることが不可能であると判断されたため、発掘調査を行い記録保存することとした。

全面調査は日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施し

た。調査対象範囲は確認調査の結果により美嚢川東岸から県道加古川・三田線までの路線幅分10,056㎡である。

調査にあたっては、農業用水の確保、あるいは農道の確保の必要があったため、分割して調査区を設定し、発掘調査を実施した。調査区はＡ～Ｅの５地区で東側から順に命名した。各地区の調査面積の内訳は次のとおりである。Ａ地区－2,340㎡・Ｂ地区－202㎡・Ｃ地区－1,953㎡・Ｄ地区－2,105㎡・Ｅ地区－3,456㎡である。

調査は重機で表土・無遺物層を除去した後に、人力により遺物包含層の掘削および遺構の検出を行った。遺構検出後は写真撮影、図面での記録保存の処置を行った。

全ての遺構を検出したのちに、ヘリコプターによる航空写真撮影を計５回実施した。調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の前記５名の職員が行い。現場補助員に高島知恵子、室内作業員に五百蔵道代、舟坂好子、上田かよ子が調査に参加した。

３．整理作業の経過

出土品の整理作業は、日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて平成６・７年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で実施した。

平成６年度の整理作業

出土品の水洗い、ネーミングは現地調査の期間で完了していたために、接合・補強、実測作業を実施した。

整理担当職員	整理普及班	技術職員	高瀬一嘉
	調査第３班	研修員	三原慎吾
整理技術嘱託員		主任技術員	小川美奈
		企画技術員	密谷美音
		図化技術員	早川亜紀子・飯田章子・蔵　幾子・横山麻子・島田留里 船木昌美・松浦郁子
		図化補助技術員	中西睦子
		日々雇用職員	藤池亜希

平成７年度の整理作業

復元、写真撮影、写真整理、遺構図補正、トレース、レイアウト、金属器保存処理の作業を実施し、発掘調査報告書を刊行した。

整理担当職員	整理普及班	主　査	加古千恵子
		主　任	高瀬一嘉
整理技術嘱託員		主任技術員	小川美奈
		企画技術員	横山麻子
		図化技術員	中田明美・和田寿佐子・蔵　幾子・木場裕美・鈴木まき子 喜多山好子・村上京子・上山雅代
		図化補助技術員	茅原加寿代
		日々雇用職員	藤池亜希

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

三木市は兵庫県の中央部から少し南寄りに位置し、面積120.13㎢・人口78,095人を数える。南部では神戸市と、西部では加古川をはさんで加古川市・加古郡稲美町とそれぞれ境を接する。東播磨を流れる加古川の中流域に位置する中規模都市である。市の主要産業は、酒米（山田錦）やブドウを中心とした近郊農業と金物生産などで、特に大工道具・家庭用刃物・精密機械器具の生産を中心とする金物産業は隆盛を誇り、「金物の町」としてのイメージを定着させている。地形的には標高100～200m前後の丘陵地が市域の大半を占め、各丘陵を縫うような形で、美嚢川およびその支流が流れている。三木市の面積の80パーセントを占める丘陵地は、扇状地性台地として知られる「いなみの台地」に南部が、北部は「小野台地」にそれぞれ含まれる。

市域の西端で加古川へと注ぐ美嚢川は、三木市内を北東から南西へ縦断し、市中央部からやや西寄りで志染川と合流する。これらの河川が、丘陵地を浸食することによって狭隘な谷地形を形成する。河岸段丘や沖積地からなるこれら小河谷では、集落が形成され、水田開発が盛んに行われている。

一方で、これらの台地は大阪層群の砂礫やシルトに覆われて貯水能力に乏しい特質を持ち、安定した水の確保が困難である。中世末から近世にかけての生産力増加を背景に新田開発が盛んになると、丘陵地縁辺部の段丘上も水田形成の対象となり、灌漑用水の確保を目的とした溜め池が数多く造られた。三木市内にも丘陵縁辺を中心に、大小２千ヶ所以上を数える。今回の調査地である西ケ原遺跡周辺にも大池・大道池などが点在し、段丘上に造られた水田へ水を供給している。農業用水確保において不可欠な存在であった溜め池は、加古川流域に幅広く分布し、周辺一帯（印南野）のランドマークとして知られてきたが、近年のベットタウン化によって姿を消しつつある。

三木市の中心部は、美嚢川と志染川の合流点・上の丸町周辺に広がっている。扇状地形が中心となっている市域において、唯一のまとまった平野部にあたり、羽柴秀吉の攻城戦で有名な三木城が築かれた周辺でもある。その城下町的な集落として形成されていったと考えられる。

報告を行う西ケ原遺跡は、市の中央から北東方向へ約2.5kmに位置する。志染川との合流点に近い美嚢川右岸の扇状地・自然堤防上に位置し、標高およそ54～57mを測る。同じく美嚢川右岸の中位段丘上に立地する田井野遺跡のすぐ東側にあたり、段丘の縁辺を境に20m以上の標高差がある。

東側には細川町西・西側には久留美の集落があり、両者のちょうど中間地点にあたる。調査前の現地は緩い傾斜面を切り開いた水田が広がり、ほ場整備前の周辺一帯には農村の面影が色濃く残されていた。付近の様子は「明治19年測量陸軍仮製測量図」と比較しても大きな変化は見られず、基本的には明治初年の景観が変わることなく保持されていたといえる。

最近は、山陽自動車道の建設と前後して、のどかな田園風景にも大きな変化が起こりつつある。特に丘陵の開発は著しく、市域の東部には数多くのゴルフ場、南部の志染町緑が丘付近には住宅地に関連した大規模な造成が行われている。周辺環境の変化は、田園都市からの脱皮を促進し、阪神間のベットタウン・レジャー都市といった新しいイメージを育みつつある。

そして山陽自動車道の開通に伴って、三木市はどのように変貌してゆくのだろうか。

第２節　歴史的環境

三木市付近では旧石器・縄文時代の遺跡は今のところ確認されていない。加古川中流域は石器散布地が濃密に分布しいる地域であるものの、三木市内ではこれまで与呂木で尖頭器、正法寺山でナイフ形石器が採集されているのみである。しかし、兵庫県の実施した与呂木遺跡の調査ではチャート製石核等が出土している。この調査区は丘陵の縁辺部で、遺跡の中心は丘陵上にあると予想される。ただし、平成７年に三木市が実施した確認調査では中世の柱穴が検出されたのみで、旧石器・縄文時代の遺構・遺物は今のところ確認されていない。平成７年度に加古川を渡った小野市黍田町の勝手野古墳群で旧石器の調査が実施されており、今後三木市域についてもこの時期の遺跡が明らかになるものとみられる。

三木市内で生活の痕跡が顕著に認められるのは弥生中期以降である。

平成元年に三木市によって調査された井上遺跡では、中期の土器を包含する溝・土壙などがの遺構が検出され、平成７年に調査された宿原遺跡で方形周溝墓７基が検出された。

山陽自動車道の建設に関連して兵庫県が行った調査では貝谷遺跡・貝谷古墳群で中期の土器棺５基、木棺墓36基あまりを検出、年ノ神遺跡からは13軒の弥生時代中期末～後期にかけての円形・方形の竪穴住居跡を調査している。中期後半の集落としては細川女谷遺跡・与呂木遺跡で検出されている。このうち与呂木遺跡では径９ｍを越える住居跡が検出され、内部から複数の鉄製品が出土している。

弥生後期から古墳時代にかけての集落は市内各地で確認されている。

三木市の行った調査から述べれば、昭和55年調査の戸田遺跡第１・２地点では弥生末から古墳時代の溝・土壙が検出され、多量の弥生土器・古式土師器が出土している。この中には搬入土器と推定される壺型土器が含まれている。第３地点ではカマドをもつ方形の竪穴住居跡１軒が検出されている。昭和53年調査の吉田南遺跡で弥生後期の溝、古墳時代の住居跡を検出している。昭和55年調査の平井遺跡で方形の竪穴住居跡１軒、昭和58年調査の久留美西ノ谷遺跡で方形の竪穴住居跡２軒、59年調査の細目有田遺跡で方形の竪穴住居跡２軒、昭和62年調査の志染中遺跡でカマドをもつ竪穴住居跡５軒、平成５年調査の久留美松ノ下遺跡と久留美丈ノ越遺跡ではカマドをもつ方形の竪穴住居跡を各１軒、平成７年調査の宿原遺跡で方形の竪穴住居跡２軒を検出している。宿原遺跡はかなり高い密度で遺構が検出されており、その範囲は8,000㎡に及ぶと考えられる遺跡である。

昭和63年に毛谷窯跡群埋蔵文化財調査会で調査された毛谷石原・女谷遺跡では弥生時代の竪穴住居跡２軒、古墳時代の竪穴住居跡３軒を検出している。

山陽自動車道の建設に関連して兵庫県が行った調査では平成５・６年度に調査した年ノ神遺跡でカマドをもつ竪穴住居跡２軒を検出している。平成２年調査の西ケ原遺跡で弥生時代後期末の竪穴住居跡５軒と、古墳時代後期のカマドをもつ竪穴住居跡31軒を検出している。検出した固体数としては三木市内で群を抜いている。しかも、この調査の範囲は集落の一部であり三木市が実施した、ほ場整備にともなう確認調査でも周囲に同時期の竪穴住居跡の存在が確認されており、この地域に大規模な古墳時代の集落が存在していることが明らかとなった。平成２～４年調査の田井野遺跡でも３軒のカマドを持つ竪穴住居跡が検出されている。

この他、古くは吉田遺跡では弥生時代末の壺棺墓が検出されている。弥生時代を特徴づける青銅器は正法寺山で細形銅剣が、高篠地区で小銅鐸が出土している。

古墳時代に入ると三木市内でも多くの古墳が築造される。市内には 400基以上の古墳が確認されてい

るが、その大半は後期の小型古墳である。

三木市内で前期まで遡りうる古墳は加古川・美嚢川合流点付近の丘陵上に築造された前方後円墳の愛宕山古墳と平成６年に山陽自動車道建設に伴って調査された年ノ神６号墳のみである。後期古墳の多くは群集墳を形成している。なかでも小野市にまたがって所在する樫山古墳群は150基以上の大規模な群集墳の総称で、数支群に分かれている。樫山古墳群と同一丘陵の三木側には正法寺山、和田愛宕山・妙界寺、才神、年ノ神などと命名された古墳群が所在する。これらの古墳群を樫山古墳群の支群として捉えるのか、あるいはそれぞれ独立した古墳群とするのかは確定はしていない。この付近の山陽自動車道に伴う調査が終了した時点で、新たな資料を加えて検討する必要があると思われる。その他、加佐、久留美・毛谷、与呂木・平井、吉田、広野古墳群等が三木市域を取り巻く台地の縁辺部に所在している。当地方の特徴として、これらの古墳群は内部主体は横穴式石室のものが比較的が少なく、木棺直葬や箱式石棺が大半を占める傾向にある。木棺直葬墳は三木山１号墳、大池７号墳の調査で明らかなように、１墳丘に５主体部（三木山１号墳）、６主体部（大池７号墳）などと多重埋葬を特徴とする。横穴式石室の導入時期とその政治的意味と併せて興味深い特色である。

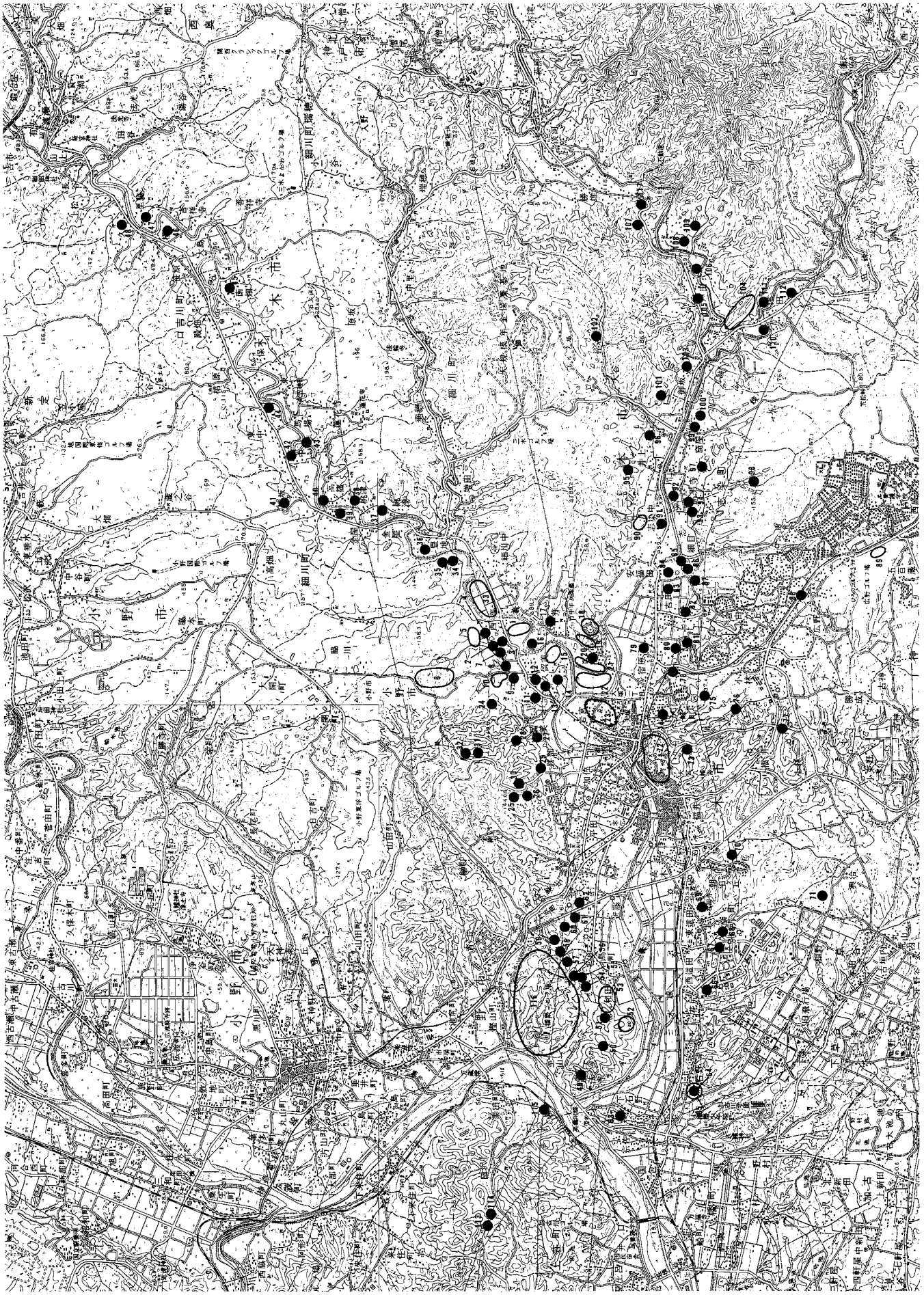
三木市内で発掘調査の行われたものとしては、吉田古墳群（昭和35年）、高木古墳群（昭和39年）、三木山１号墳（昭和58年）、巴１号墳（昭和59年）、窟屋扇ノ坂古墳（昭和61年）大池７号墳（平成３年）、加佐３・４号墳（平成４年）、年ノ神古墳群（平成５・６年）、正法寺古墳群（平成６年）、大年山古墳（平成８年）などである。また、耕地の開墾、宅地造成などで消滅した古墳も数多い。

加古川中下流域では奈良時代に入ると次々と寺院が建立されるが三木市域ではこの時期の寺院跡は知られていない。しかし、小和田神社裏遺跡から白鳳期とみられる塼仏が出土しており、当地域にも仏教の受容があったことは間違いない。志染町の志染中地区・戸田遺跡、細川町の東中遺跡・細川中遺跡、久留美の田井野遺跡では律令期の集落が確認されている。

三木市域を取り巻く台地縁辺には、９世紀から13世紀の長期にわたり須恵器及び瓦を生産した窯跡群が所在する。北部の山塊谷部には跡部・久留美窯跡群、南部の台地には吉田・宿原窯跡群、美嚢川と志染川にはさまれた丘陵には平井・与呂木窯跡群がある。このうち、久留美窯跡群柳谷支群11～14号窯・跡部４号窯、西ノ谷窯跡が奈良時代のものである。平成５年に兵庫県が調査した法鑑遺跡では奈良時代の土師器焼成窯１基が検出されている。平安時代の窯跡は瓦陶兼業窯が多く、ここで生産された瓦は平安京内の寺院に供給されていたことが指摘されている。

中世には東吉田遺跡・豊地遺跡・西中遺跡・久留美地区の門前・中筋・松ノ下・丈ノ越・上野ノ下遺跡等各地で集落が形成されている。なかでも、平成２～６年に、ほ場整備にともなって調査された久留美地区の５つの遺跡は瓦葺きを想定させるものを含む掘建柱建物跡を合計31棟検出している。戸田遺跡では鎌倉時代とみられる集石墓が検出されている。

三木市街南側の丘陵上には中世後期に別所氏築造の三木城が所在する。城内は部分的に発掘調査が行われ、西ノ丸跡と推定される場所からは貯蔵庫とみられる大甕群等が検出されている。三木城を遠望できる丘陵上には織田軍側が城攻めの際に築造した平井山本陣をはじめ陣城が展開する。このうち調査が行われたもとして、昭和63年に三木市が調査した君ケ峰城跡、平成３～４年にかけて兵庫県が調査した加佐山城跡・慈眼寺山城跡がある。地誌『播磨鑑』に記載されている、「大塚町上君ケ峰」・「加佐村ノ上」・「久留美村慈眼寺山項」にそれぞれあたるものと考えられ、文献と整合した貴重な調査成果が得られている。



第２図　周辺の遺跡分布図

表１　周辺の遺跡一覧表（１）

番号	遺　跡　名	時　　期	概　　要
1	西ケ原遺跡	弥生～古墳	本報告遺跡
2	田井野遺跡	古墳～平安	第３節に記述・兵庫県文化財調査報告第154冊『田井野遺跡』
3	大池古墳群	古墳	第３節に記述・兵庫県文化財調査報告第137冊『大池７号墳』、『三木の古墳』
4	毛谷古墳群	古墳	直径4.5～12mの円墳４基。『三木の古墳』
5	石原・女谷遺跡	弥生～奈良	弥生時代の住居跡２軒、古墳時代の住居跡３軒、他土壙。『久留美毛谷』
6	毛谷窯跡群	平安	平安時代の窯跡27基。瓦陶兼業窯。『久留美毛谷』
7	大池窯跡群	平安	久留美大池の北西域に所在する瓦陶兼業窯３基
8	宮の池包蔵地	平安	第３節に記述
9	久留美・宮の西遺跡	平安	掘建柱建物跡２棟。平成６年三木市調査
10	久留美窯跡群柳谷支群	奈良～平安	第３節に記述
11	久留美門前遺跡	平安～鎌倉	総柱掘建柱建物跡３棟、土壙13基。平成２年三木市調査
12	久留美中筋遺跡	平安末	掘建柱建物跡17棟、土壙14基、井戸２基。平成６年三木市調査
13	久留美松ノ下遺跡	古墳～平安	掘建柱建物跡７棟、井戸３基、竪穴住居跡１軒。平成５年三木市調査
14	久留美丈ノ越遺跡	古墳～中世	掘建柱建物跡５棟、竪穴住居跡１軒、古墳１基。他土壙、柵。平成５年三木市調査
15	久留美上野ノ下遺跡	古墳～平安	掘建柱建物跡２棟、集石土壙２基、古墳１基、溝。平成３年三木市調査
16	平井遺跡	古墳	６世紀後半の方形の竪穴住居跡１軒。昭和55年三木市調査。字鍛冶屋尾に古墳１基
17	平井窯跡群	平安	平井皿池内南斜面に所在する３基の窯跡群
18	与呂木古墳群	古墳	東開地（２）・東上野（６）・高越（23）・庵元（３）・高辻（８）の計40基
19	与呂木窯跡群	平安	野々池内に７基（消滅）、通り池内に２基（現存）
20	与呂木大畑遺跡	中世	中世の柱穴検出。平成７年三木市調査
21	与呂木遺跡	弥生・鎌倉	弥生時代中期の円形竪穴住居跡、掘建柱建物跡、兵庫県文化財調査報告第133冊
22	与呂木散布地	中世	三木市教育委員会分布調査による。中世の須恵器の散布が認められる。
23	岩宮散布地	弥生～中世	段丘下段で試掘。段丘上段からの土器流れ込み。平成元年三木市調査
24	慈眼寺山城跡	室町	第３節に記述。兵庫県文化財調査報告第144冊『加佐山城跡・慈眼寺山城跡』
25	加佐山城跡	室町	第３節に記述。兵庫県文化財調査報告第144冊『加佐山城跡・慈眼寺山城跡』
26	加佐古墳群	古墳	第３節に記述。兵庫県文化財調査報告第144冊『加佐山城跡・慈眼寺山城跡』
27	久留美西ノ谷遺跡	古墳	方形の竪穴住居跡２軒、溝１条、柱穴を検出した。昭和58年三木市調査
28	西ノ谷窯跡	奈良	第３節に記述
29	跡部１号窯	平安	三木高校グランド・定池の東側
30	跡部４号窯	奈良	第３節に記述。奥池の西側
31	跡部２号窯	平安	三木市清掃センター入り口の南東部
32	跡部３号窯	平安	三木市清掃センターの北東盛土下
33	細川中遺跡	弥生～平安	奈良時代の掘建柱建物跡。昭和52年三木市調査
34	円満寺遺跡	古墳・鎌倉	竪穴住居跡、掘建柱建物跡、溝、土壙。昭和61年三木市調査
35	細川中古墳群	古墳	直径11m前後の４基の古墳。円墳があったとされるが、現在は消滅
36	豊地遺跡	中世（鎌倉）	掘建柱建物跡５棟。昭和60年三木市調査
37	桃津遺跡　第１地点	鎌倉	柱穴、溝。昭和62年三木市調査
38	桃津遺跡　第２地点	鎌倉	柱穴、土壙。昭和62年三木市調査
39	高篠谷ノ郷遺跡	弥生～平安	掘建柱建物跡、鉄滓土壙、溝。小銅鐸・須恵器。昭和63年三木市調査
40	高篠遺跡	平安～鎌倉	柱穴、溝。昭和63年三木市調査

表２　周辺の遺跡一覧表（２）

番号	遺　跡　名	時　　期	概　　要
41	黄金塚古墳	古墳	６世紀中頃。大型の横穴式石室。須恵器（180点）、鉄器、玉類。昭和初年乱掘
42	西中遺跡	中世	溝、土壙、柱穴。平成２年三木市調査
43	衣笠城跡	室町	三木合戦の際の三木方の城跡
44	東中遺跡	奈良～平安	掘建柱建物跡５棟、柵列、溝。「鴨ふ家」の墨書土器。平成元年三木市調査
45	南畑遺跡	鎌倉	柱穴、溝。昭和61年三木市調査
46	槇遺跡	中世	柱穴、土壙、溝。平成５年三木市調査
47	里脇遺跡	鎌倉～室町	柱穴、土壙、溝。須恵器、土師器、陶磁器、宋銭。平成４年三木市調査
48	久次遺跡	鎌倉	柱穴、土壙、溝。平成３年三木市調査
49	正法寺古墳群	古墳	７世紀初。13基の横穴式石室の円墳。平成６年三木市調査。１・５～９号墳が残存
50	銅剣出土地点	弥生	明治27年頃出土『三木市史』
51	小和田神社裏遺跡	奈良	塼仏出土。寺院跡と考えられている。『三木市史』
52	和田愛宕山古墳群	古墳	直径７～21m横穴式石室を主体とする15基の古墳群。樫山古墳群と同一山塊にあり
53	天王山・妙界寺古墳群	古墳	直径4.4～12.4mの横穴式石室を主体とする14基（妙界寺）・３基（天王山）の古墳群。天王山古墳群は小和田神社付近に、妙界寺古墳群は東側山麓に所在する。
54	和田神社遺跡	弥生	平成６年度兵庫県確認調査。平成８年度全面調査予定
55	大年山遺跡	弥生	第３節に記述
56	大年山古墳	古墳	第３節に記述
57	貝谷遺跡　第２地点	弥生	第３節に記述
58	貝谷遺跡　第１地点	弥生	第３節に記述
59	貝谷古墳群	弥生	第３節に記述
60	年ノ神古墳群	弥生～古墳	第３節に記述
61	年ノ神遺跡	弥生～古墳	第３節に記述
62	大仁遺跡	弥生～古墳	第３節に記述
63	下石野古墳群	古墳	全長95mの前方後円墳である愛宕山古墳を含む５基からなる古墳群。『三木市史』
64	皇子経塚	平安	地滑りにより発見。須恵器の経筒、土師器の外容器出土。
65	皇子山古墳群	古墳	直径５～14mの円墳14基からなる。10号墳は箱式石棺を持つ。
66	花尻・石野古墳群	古墳	直径4.5～11mの円墳８基（花尻）・12基（石野）からなる。破壊が著しい。
67	巴古墳群	古墳	７基からなる古墳群。１号墳16×17mの方墳。木簡直葬。昭和59年三木市調査
68	土山街道古墳群	古墳	三木環状線（土山街道）の東側に５基所在している。
69	在田寺裏古墳群	古墳	直径７～15.5mの12基からなる古墳群
70	高木古墳群３・４支群	古墳	56基が存在したが、現在は第３・４支群の15基を残す。他は昭和39年調査し消滅
71	興治古墳群	古墳	直径７～22mの14基からなる。内８～10号の３基全壊。10号は平成２年三木市調査
72	三木城跡	室町	別所氏の居城。天正８年（1580）落城
73	三木山１号墳	古墳	直径10mの円墳に５つの木棺直葬を主体部とする。昭和58年三木市調査
74	君ケ峰散布地	中世	『全国遺跡地図　兵庫県』（文化庁）による。
75	君ケ峰城跡	室町	三木城攻めの際の織田方の付城。主廓部で礎石建物検出。昭和63年三木市調査
76	二位谷山城跡	室町	三木城攻めの際の織田方の付城
77	小林八幡神社遺跡	中世	三木合戦時の付城にともなう盛土と下層に掘建柱建物跡群。平成５・６年三木市調査
78	宿原城推定２地点	中世	土塁を確認している。
79	宿原遺跡	弥生～奈良	弥生中期の方形周溝墓７基、古墳時代初頭の竪穴住居跡２軒、後期の溝１条、奈良時代の方形土壙１基、鎌倉時代の掘建柱建物跡２棟検出。平成７年三木市調査

表３　周辺の遺跡一覧表（３）

番号	遺　跡　名	時　　期	概　　要
80	宿原中世墓	中世	現代の墓地内にあり
81	宿原窯跡群１～３	平安末	皿池の南斜面に所在する。
82	宿原窯跡群４・５	平安末	昭和52年三木市調査。瓦陶兼業窯
83	吉田南遺跡	弥生～古墳	弥生時代後期の溝、古墳時代の住居跡を検出。昭和53年三木市調査
84	吉田東遺跡	古墳～鎌倉初	弥生時代の竪穴住居跡確認。鎌倉初頭の柱穴・土壙検出。昭和57年三木市調査
85	吉田散布地	中世	三木市分布調査による。中世墓か
86	吉田村ノ上の塁	中世	『播磨鑑』に記述の同名の付城か
87	吉田古墳群	古墳	北の15基（第１群）南の７基（第２群）。第１群の６基は昭和35年調査。木棺直葬
88	広野野々池沢尻古墳群	古墳	直径５～17mの９基が残る。大半は消滅。木棺直葬か
89	広野ゴルフ場内古墳群	古墳	ゴルフ場内に６基が残存する。直径6.5～14m。木棺直葬か
90	志染中水谷遺跡	奈良～平安	良好な包含層が残存し、墨書土器、瓦、木器が出土した。昭和62年三木市調査
91	志染中遺跡	古墳	カマドを持つ竪穴住居跡５軒と堀建柱建物跡１棟を検出。昭和62年三木市調査
92	窟屋藤木遺跡	古墳	竪穴住居跡、溝、柱穴。昭和59年三木市調査。盛土保存
93	高男寺本丸遺跡	鎌倉	掘建柱建物跡２棟、溝２条。昭和58年三木市調査
94	細目有田遺跡	弥生末	方形の竪穴住居跡２軒、昭和59年三木市調査
95	井上経塚	平安	『全国遺跡地図　兵庫県』による。頂上付近に須恵器・石材散布
96	井上遺跡	弥生	溝、土壙、弥生土器多量に出土。平成元年三木市調査
97	窟屋扇ノ坂古墳	古墳	６世紀後半。直径10mの円墳で主体部は無袖横穴式石室。昭和61年三木市調査。
98	高男寺廃寺	室町	石組み溝、縁石、焼土面を検出。貞和２（1346）銘の軒平瓦と鬼瓦が出土。付近より経筒（1156）出土。昭和57年三木市調査
99	どっこいさん	古墳？	整地作業中、石棺の蓋が出土。昭和61年度に三木市が調査したが遺構なし。
100	窟屋遺跡	中世	柱穴、土壙検出。平成４年三木市調査
101	法鑑遺跡	奈良～平安	第３節に記述
102	伽耶院東遺跡	室町	土壙21基、井戸２基、溝３条、柱穴多数を検出。平成元年三木市調査。
103	御坂遺跡	弥生～江戸	鎌倉時代の水田、土壙、弥生時代の土壙、柱穴。兵庫県文化財調査報告第132冊
104	三津田城跡	中世	三木合戦の際の織田方の城跡。有馬氏入城と伝わる。
105	戸田遺跡第１・２地点	弥生～鎌倉	弥生時代後半の土器を多量に出土した溝、土壙、平安時代前期の掘建柱建物跡２棟鎌倉時代後半の配石墓５基。現状保存。昭和55年三木市調査
106	戸田遺跡第３地点	古墳時代	カマドを持つ１辺約4.6mの方形の竪穴住居跡１軒。平成３年三木市調査
107	戸田神宮寺遺跡	鎌倉	柱穴検出。昭和57年三木市調査
108	小戸田遺跡	弥生末・室町	竪穴住居跡５軒、集石土壙（室町）２基、土壙11基。平成２年三木市調査
109	小戸田山角散布地	中世	『全国遺跡地図　兵庫県』による
110	下明神遺跡	平安～鎌倉	溝、土壙、柱穴を確認。現状保存。平成３年三木市調査
111	上明神遺跡	中世	確認調査の結果、中世の須恵器、土師器が出土したのみ。平成４年三木市調査
112	三津田遺跡	中世	掘建柱建物跡１棟、井戸１基、土壙を検出。平成２年三木市調査
113	白沢放山遺跡	飛鳥～奈良	第３節に記述
114	白沢３・５号窯	奈良	第３節に記述
115	勝手野古墳群	旧石器・古墳	第３節に記述
116	樫山古墳群	古墳	三木・小野の市境の山塊に展開する古墳群の総称で、150基以上と言われる。三木市内の正法寺～才神古墳群との区別が不明瞭で、さらに山陽自動車道関連の調査が行われたのを契機に新たに名称を整備する必要性が認められる。
117	勝雄経塚	室町	第３節に記述

第３節　三木市周辺の山陽自動車道関連遺跡

山陽自動車道の建設に伴って、三木市周辺では平成２年度から遺跡の全面調査が実施された。三木市内だけでも平成７年度までに19地点に及ぶ。これらの発掘調査はこれまで三木市内で実施されたものと較べてはるかに大規模なものである。山陽自動車道関連の発掘調査は平成８年度をもって大部分が終了するが、ここから得られた成果はこれまで認識していた三木市周辺の歴史的な環境の概念を大きく変えるものであろう。整理作業工程を経た後、調査報告書が刊行されるが、平成７年度までに発掘調査の行われた三木市周辺の山陽自動車道関連の遺跡について、その位置と調査の概要を簡潔に述べる。

113. 白沢放山（しらさわはなれやま）遺跡　　遺跡調査番号　930186

加古川市上荘町白沢字釜山、放山に所在する。平成６年２月１日～３月25日にかけて調査を実施した。遺跡は丘陵南斜面に立地する。遺構は飛鳥時代末～奈良時代前半に属する土器を焼成した半地下式の登り窯１基と埋土に炭が混入している土坑９基を検出している。

114. 白沢（しらさわ）３・５号窯　　遺跡調査番号　930029

加古川市上荘町白沢字大谷44－４に所在する。平成５年５月７日～９月10日にかけて調査を実施した。遺跡は丘陵南斜面に立地する。遺構は３号窯・５号窯の遺存状況の良好な２基の半地下式の登り窯と、それに伴う工房遺構がセットで検出された。３号窯からは杯身・杯蓋・壺・甕・円面硯が、５号窯からは杯身・杯蓋・椀・円面硯など奈良時代初期の土器が出土している。５号窯から出土した高さ12.5cmの陶製人形が注目される。

115. 勝手野（かってのの）古墳群　遺跡調査番号　950182～950191

小野市黍田町字勝手野に所在する。平成７年５月１日～平成８年３月25日にかけて調査を実施した。遺跡は加古川右岸の丘陵東向斜面に立地している。11基の円墳からなる後期古墳群で、今回、路線内にかかる８基の古墳について調査を実施した。いずれも横穴式石室を主体部とし、出土した遺物からこの古墳群は６世紀末から７世紀前半にかけて構築されたものと判明した。

遺物として注目されるものに、装飾付須恵器があげられる。６号墳石室入口の左右に立てられていたもので、２個体のうちの１個体が残存状況が良好で、10体の小像が装飾として復元されている。小像は須恵器の肩部に立て並べられており、狩猟など４つの情景を表現している。また、古墳群内で最も大きい３号墳からは、家形石棺の底板、鍍金された馬具一式が出土している。

古墳以外に11世紀代の４基の窯跡も検出された。さらに下層の旧石器時代の遺跡の調査を行い、A.T.下層よりナイフ形石器、台形様石器など約50点の石器が出土した。

54. 和田神社（わだじんじゃ）遺跡

平成８年度調査予定

55. 大年山（おおとしやま）遺跡　遺跡調査番号　950296

三木市鳥町字大年山に所在する。平成７年11月９日～平成８年２月15日にかけて調査を実施した。遺

跡は小野・三木市境となる丘陵の南向き斜面に位置している。約3500㎡を調査し、奈良時代の住居跡、土壙と掘建柱建物跡が２棟検出されている。

56. 大年山（おおとしやま）１号墳　遺跡調査番号　950297

三木市鳥町字大年山に所在する。平成７年11月９日～平成８年２月15日にかけて調査を実施した。遺跡は小野・三木市境となる丘陵の南向き斜面に位置している。約370㎡を調査した。古墳は３基の木棺直葬を主体部とした方墳である。周溝から６世紀初頭の杯・甕が出土している。墳丘周辺では土壙墓が検出さた。

57. 貝谷（かいたに）遺跡第２地点　　遺跡調査番号　940241

三木市鳥町876－８に所在する。平成６年11月８日～平成６年12月16日にかけて調査を実施した。遺跡は小野・三木市境となる丘陵から南に派生する尾根上に位置する。遺構は弥生時代中期の土器棺１基と木棺墓６基を検出している。

58. 貝谷（かいたに）遺跡第１地点　　遺跡調査番号　940240

三木市鳥町876－48に所在する。平成６年10月11日～平成７年１月26日にかけて調査を実施した。遺跡は小野・三木市境となる丘陵から南に派生する尾根上に位置しているが、第２地点とは尾根が違い、１本東側に所在する。遺構は弥生時代中期の土器棺４基と木棺墓29基、焼土壙２基、煙管状窯１基を検出している。主体部の周囲には溝があり周溝墓であったと考えられる。遺物は周溝内より壺、甕、高杯などが出土している。

59. 貝谷（かいたに）古墳群　　遺跡調査番号　940226

三木市鳥町876－72他に所在する。平成６年10月24日～平成７年１月５日にかけて調査を実施した。遺跡は小野・三木市境となる丘陵から南に派生する尾根上に位置しており、貝谷遺跡第１地点の北東側に所在する。Ａ・Ｂの２つの調査区を設定している。Ａ地区からは奈良時代～平安時代の須恵器片と炭化物を包含する土坑４基を検出している。Ｂ地区からは弥生時代中期後半の土器棺１基と掘り方内に弥生時代中期後半の土器を供献する木棺１基を検出した。両地区ともに調査区全面にわたって不定形の土坑が検出されているが、その時期は不明である。なお、当遺跡は貝谷古墳群として調査にあたったが、古墳は存在しないことが判明したため、将来遺跡名を変更するのが適切と考える。

60. 年ノ神（としのかみ）古墳群　　遺跡調査番号　930117・940225

三木市鳥町字年ノ神他に所在する。調査は平成５年度と６年度にわたって実施した。

平成５年度は10月５日～翌６年３月25日にかけて調査を実施した。遺跡は小野・三木市境となる丘陵の南面する緩やかな斜面地上に位置している。遺構は横穴式石室の主体部をもつ２基と小石室の主体部をもつ３基の合計５基の古墳（年ノ神１～５号墳）を検出した。

１号墳は15×13mの円墳で、横穴式石室の規模は長さ6.3m、奥壁幅1.3m、玄門幅1.1m、最大幅は1.75mである。出土遺物は７世紀前半の須恵器と馬具・棺金具・耳環・ガラス玉が出土した。２号墳は16.3m×15mの円墳で、横穴式石室の規模は長さ7.2m、奥壁幅1.75m、玄門幅1.3m、最大幅は2.15mである。出

土遺物は７世紀前半の須恵器と馬具・鉾先などが出土した。３号墳は長軸７m、短軸５mの方墳で、小石室の規模は長さ2.1m、幅1.1mである。遺物は出土していない。４号墳は長軸９m、短軸8.5mの方墳で、小石室の規模は長さ4.5m、幅２mである。遺物は出土していない。５号墳は長軸8.5m、短軸５mの方墳で、小石室の規模は長さ2.8m、幅1.7mである。遺物は大刀１本・鉄鏃２点が出土している。３～５号墳は土器が出土していないため時期を決定することは困難であるが、立地条件などから１・２号墳よりやや新しい時期と考えられる。

平成６年度は８月10日～12月21日にかけて調査を実施した。遺跡は小野・三木市境となる丘陵から西に派生する尾根上に位置しており、ここから南東方向に下がると平成５年度に調査した年ノ神１～５号墳の所在する緩斜面に至る。遺構は木棺直葬を主体部とする古墳４基(年ノ神６～９号墳)、古墳時代の溝、弥生時代と中世の土坑を検出した。

６号墳は13.3×9.5mの方墳で東西方向に木棺を直葬している。墓壙の規模は4.25×2.4m、木棺の規模は3.1×1.0mで木棺は割竹形木棺である。遺物は棺内から頭位上で鉋２点、曲刃鎌１点、三角板革綴短甲（頸甲・肩甲を含む）が、頭付近ではガラス玉約250点、ヒスイ製勾玉１点、四獣鏡１面、竪櫛３点が、胴部付近には切先を足側に向けた直刀２本、剣１本、鉄鏃１点が出土している。棺外からは南棺側より剣１本、鉄鏃54点が棺上から鉄斧２点、U字形鋤先１点が出土している。墳丘および周溝からは初期須恵器もしくは韓式系土器が数個体分出土している。

７号墳は尾根を外れた北側傾斜地に位置しており、土砂の流出のためかろうじて木棺の基底部のみが検出された。周溝や盛土は認められない。木棺は長軸を東西方向にとっている。遺物は頭位付近で勾玉１点が、棺内から鉄刀１本が出土した。

８号墳は径約７mの円墳で東西方向に木棺を直葬している。盛土が流出しているため墳丘は約1/2 の残存で、主体部もその規模は明らかではない。遺物は棺内から剣１本が出土している。出土した遺物が少ないため古墳の築造時期は明確ではないが、６世紀代のものと推定する。

９号墳は墳丘の約半分が用地外である。径約10mの円墳で東西方向に木棺を直葬している。主体部は大半が調査区外となるため、全容は不明である。遺物は周溝内から鉄斧片の他、須恵器の杯、甕の破片が出土している。周溝底付近から５世紀後半の時期のものが出土している。

調査区内からは５世紀代に遡る可能性のある土器を出土した溝を検出している。墓域を区画する性格のものと考えられる。この他、弥生時代の土器を出土した土坑２基を検出した。

61. 年ノ神遺跡　　遺跡調査番号　930116・940224

三木市鳥町882－56他に所在する。調査は平成５年度と６年度にわたって実施した。

平成５年度は10月５日～翌６年３月25日にかけて、年ノ神古墳群と並行して調査を実施した。遺跡は小野・三木市境となる丘陵の尾根先端部を造成して作った畑地である。遺構は弥生時代中期末～古墳時代後期初頭にかけての竪穴住居跡９軒と土器棺１基、溝、柱穴群、石組み遺構を検出した。竪穴住居跡は円形のものが３軒（径８～９m)、方形のものが６軒（一辺４～６m）である。

平成６年度は７月５日～翌７年１月６日にかけて調査を実施した。遺跡はA～Dの４地区分かれている。このうちA～C地区は前年度調査を実施した年ノ神遺跡と同一の尾根にあるが、D地区のみは小さい谷を隔てた東側の尾根に位置している。A～C地区は住居跡、柱穴、溝、土坑が検出されたが遺存状況は良好とはいえず、遺物の出土も少ない。D地区では弥生時代中期末の竪穴住居跡４軒と土器棺、古

墳時代末の竪穴住居跡２軒、奈良時代以降の掘建柱建物跡３棟を検出している。弥生時代中期末の竪穴住居跡は１軒が円形、３軒が隅円方形を呈する。古墳時代末の竪穴住居跡はいずれもカマドをもつ形態で方形を呈する。

62. 大仁（おおふた）遺跡　　遺跡調査番号　940242

三木市鳥町字大仁９－１他に所在する。調査は平成６年度は11月16日～12月21日にかけて実施した。遺跡は国道175号線の東則道脇に所在しており、土石流タイプ扇状地末端の谷部に位置している。遺構は検出されなかったが、地表下約70～100cmに堆積した灰色細礫～中砂･黒色シルト混じり中砂から保存状態の極めて良好な古墳時代の須恵器、弥生時代中期の土器が出土した。

25. 加佐山（かさやま）城跡　　遺跡調査番号　910105・920223

三木市加佐字湯谷1133他に所在する。調査は平成３年の12月２日～翌４年３月13日と４年の８月４日～11月２日の両年度に実施した。遺跡は三木市街を見下ろす山塊の標高138m付近に位置する。遺構は土塁囲いの主曲輪を中心に配し、その周囲の緩斜面を横堀で囲い曲輪とする「二重構造」山城であることが明らかになった。この構造が織豊系の付城と共通点が多いことや、近世の地誌である『播磨鑑』に「加佐山ノ上」に三木城攻めの際の付城があったことが記載されていることなどから、天正６～８(1578～80)年の間に築かれた織田方の付城である可能性が極めて高い。

26. 加佐（かさ）３・４号墳　　遺跡調査番号　920223

三木市加佐字湯谷1133他に所在する。調査は平成４年10月12日～12月１日にかけて実施した。遺跡は加佐山城跡から南東につづく尾根上の標高131m付近に位置する。古墳はいずれも明確な墳丘をもたず尾根を溝で区画しただけの簡単な構造のものである。主体部は木棺直葬の形態をとる。３号墳の棺内から刀子１点が、４号墳の墳裾の土坑内から須恵器の蓋２点と高杯４点が出土している。これらの土器から５世紀末の時期が与えられる。

30. 跡部（あとべ）４号窯跡　　遺跡調査番号　920222

三木市加佐字湯谷に所在する。調査は平成４年７月27日～７月31日にかけて実施した。遺跡は加佐山城跡の所在する尾根の東側の開析谷に位置する。遺構は奈良時代の半地下式構造の須恵器窯を検出した。焼成部の上端と煙道部の約４m程度が残存していた。焼成部の下端から灰原にかけては溜め池により削平され欠失している。遺物は窯体内から杯・杯蓋・皿・壺などが出土した。

28. 西ノ谷（にしのたに）窯跡　　遺跡調査番号　910033

三木市加佐字西ノ谷に所在する。調査は平成３年５月15日～６月１日にかけて実施した。遺跡は美嚢川右岸の南北に長い開析谷に所在する。久留美・柳谷窯跡群よりも１本西側の開析谷である。遺構は奈良時代の半地下式構造の須恵器窯を検出した。燃焼部から焼成部のごく一部のみが検出されている。検出された長さは最大で1.75mである。焼成部の大半は調査範囲外に残存しているようである。遺物は須恵器の杯・杯蓋・盤・皿・壺などが出土した。

24．慈眼寺山城跡　　遺跡調査番号　920254

三木市久留美字内界地1723－74他に所在する。調査は平成４年８月４日～11月20日にかけて実施した。遺跡は慈眼寺の裏山の標高147m付近に位置する。当地からは三木市街地及び平井山本陣跡が一望できる。遺構は主曲輪の南側一部とそれを巡る堀を検出した。さらに南側尾根づたいに小規模な曲輪をもつ。主曲輪上では礎石が検出され３×４間以上の建物が想定されるが、北側は調査範囲外に展開する。この城跡は加佐山城跡と同様に『播磨鑑』に記載されている「慈眼寺山上ノ一本松ノ所ニ」あった付城の可能性が高い。

10．久留美窯跡群・柳谷支群　　遺跡調査番号　910108他・920396

三木市久留美字柳谷・宮の西に所在する。調査は平成３年５月15日～翌４年３月６日と平成４年５月１日～８月４日の両年度に実施した。遺跡は美嚢川右岸の標高150m程度の山塊から南北に開析する通称「柳谷」とその支谷に展開している。２年度にわたり奈良時代の窯跡４基、平安時代の窯跡11基の計15基の窯跡を調査した。奈良時代の窯跡（11～14号窯）からは須恵器の杯・杯蓋・盤・甕などが出土しているほか、円面硯・「下」のヘラ描きのある杯の出土が注目される。平安時代の窯跡はほとんどのものが瓦陶兼業窯と考えられる。出土遺物には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦、須恵器の椀・小皿・甕・鉢などがある。なかでも、六勝寺および鳥羽離宮出土の瓦と同笵もしくは同文の瓦が多数出土しており、平安京の寺院等との関係が注目される。

８．宮の池包蔵地　　遺跡調査番号　920255

三木市久留美字石原1852－54他に所在する。調査は平成４年８月４日～11月20にかけて実施した。遺跡は久留美・柳谷窯跡群と同じ「柳谷」にあり八雲神社の北西、宮の池南堤帯下にひろがる。遺構は検出されなかったが、土師器の杯、須恵器の杯・杯蓋・壺、瓦などが出土した。軒丸瓦・軒平瓦のなかには京都の尊勝寺出土瓦と同笵関係のものがある。

２．田井野遺跡　　遺跡調査番号　900107・910107・920087

三木市久留美字田井野99他に所在する。調査は平成３年１月21日～３月15日、平成３年５月15日～11月13日、平成４年５月15日～６月３日の３年度にわたって実施した。遺跡は美嚢川右岸の更新世段丘面に立地する。遺構は古墳時代後期のカマドをもつ竪穴住居跡２軒と奈良時代の掘建柱建物跡15棟、土坑、溝を検出した。詳細は兵庫県文化財報告第154冊『田井野遺跡』に記載。

３．大池７号墳　　遺跡調査番号　920086

三木市久留美字田井野181－４他に所在する。調査は平成４年６月３日～７月23日にかけて実施した。遺跡は田井野遺跡と同じ段丘面の東端の大池古墳群内に立地する。古墳は直径16mの円墳で、高さは2.2mを測る。主体部は木棺直葬の形態をとり、上下２面で合計６基の主体部を検出した。遺物は須恵器の杯身・杯蓋・壺・甕・高杯・提瓶、鉄器の鉄刀・鉄鏃・刀子・斧・鑿・鑿、玉類として勾玉・ガラス小玉・ガラス粟玉・碧玉製管玉・水晶製切子玉などが出土している。６世紀中葉のものである。詳細は兵庫県文化財報告第137冊『大池７号墳』に記載。

１．西ケ原遺跡　　遺跡調査番号　900035

本報告の遺跡。

101．法鑑遺跡　　遺跡調査番号　930156

三木市志染町御坂字法鑑に所在する。調査は平成６年１月10日～３月25日にかけて実施した。遺跡は志染川右岸に向かう開析谷である「大谷」の支谷の北斜面に立地する。遺構は奈良時代の土師器焼成窯１基、平安時代末の火葬墓２基、近世墓・石碑・道状遺構が検出さたが、なかでも土師器焼成窯が注目される。

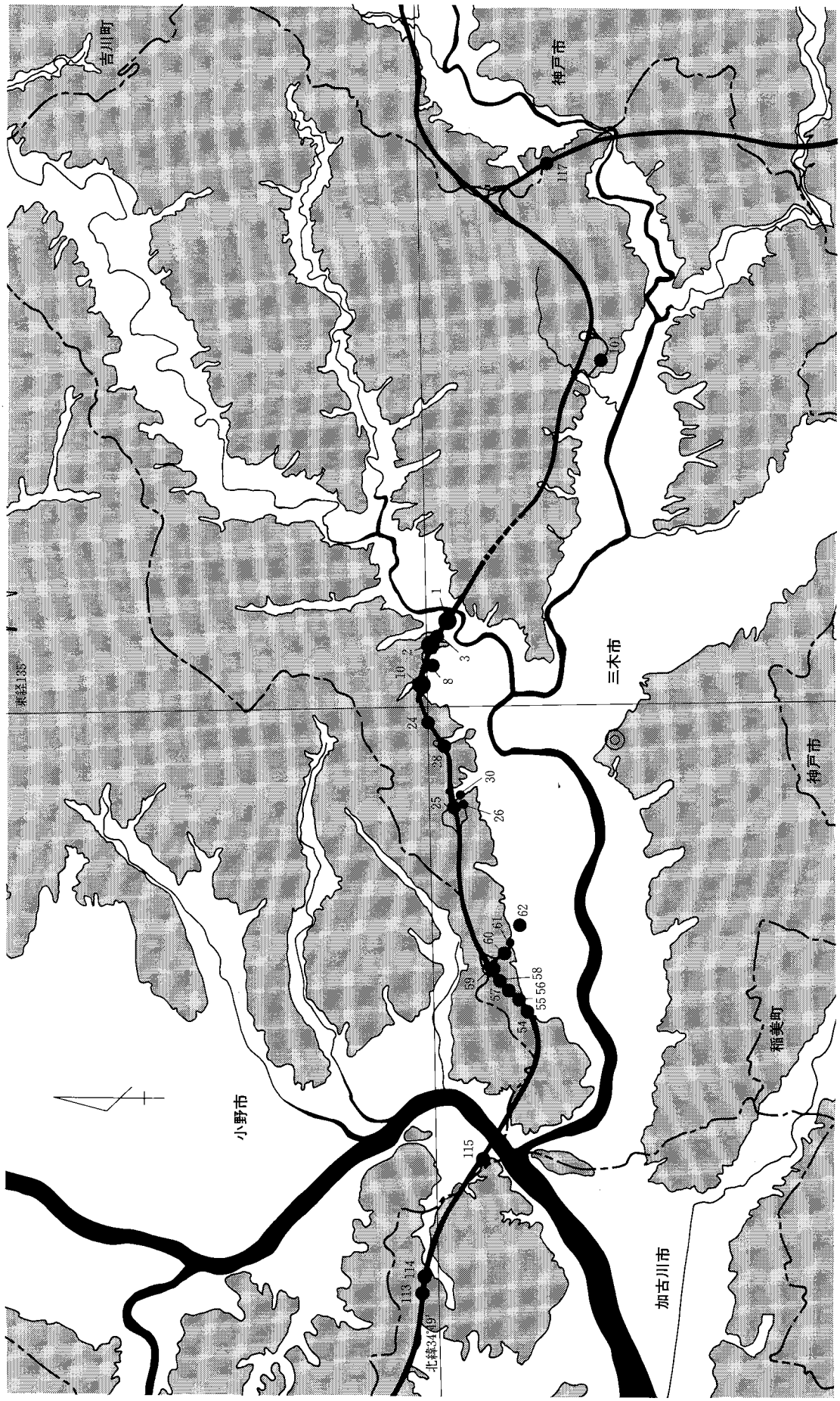
117．勝雄経塚　　遺跡調査番号　940310

神戸市北区淡河町勝雄城に所在する。調査は平成７年２月13日～３月12日にかけて実施した。遺跡は淡河川右岸の標高176mの尾根上に立地している。遺構は直径20cm程度の土坑内に木製の蓋を付けた備前焼の壺を設置し、その中に銅製の経筒を納めていた。経筒は高さ11.4cm、直径4.7cmの円筒形で、蓋の最頂部には宝珠と蓮弁をかたどった摘みをもつ。経筒表面には鍍金が施されており、銘文から1530年のものと判明した。筒身の中身には法華経八巻がほぼ完全な形で残っており、奉納時の状態をとどめるものとしては唯一のものである。室町時代後半（16世紀前半）に流行した「六十六部聖」の廻国納経の様相を知る上で貴重な資料として注目される。

参考文献

・『三木市の古墳』　三木市文化財保護委員会　岡村覚二・岡本道夫
・『三木市史』　兵庫県三木市　1970
・『兵庫県史』第１巻　兵庫県史編集専門委員会　1974
・『兵庫県大辞典』　神戸新聞出版センター　1983
・『社会教育活動状況報告書』　三木市教育委員会 1985～1994
・『三木市埋蔵文化財調査概報』－昭和50年度～昭和59年度－　三木市教育委員会　1986
・『久留美毛谷』－古窯跡群等の発掘調査報告書－　毛谷古窯跡群埋蔵文化財調査会　1990
・『御坂遺跡』兵庫県文化財調査報告第132冊　兵庫県教育委員会　1994
・『与呂木遺跡発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告第133冊　兵庫県教育委員会　1994
・『大池７号墳』兵庫県文化財調査報告第137冊　兵庫県教育委員会　1995
・『加佐山城跡・慈眼寺山城跡』兵庫県文化財調査報告第144冊　兵庫県教育委員会　1995

※周辺の遺跡分布図作成及び遺跡の性格については三木市教育委員会の松村正和氏の御教示に負うところが大きい。



第３図　三木市周辺の山陽自動車道関連の遺跡位置図

第3章　確認調査

1．調査の概要

第1章で述べたとおり昭和61年度に実施した分布調査で遺物の散布が認められたため、平成元年度に№40地点として確認調査を実施した。

調査は路線計画のSTA №233からSTA №237までの延長約400m、幅42～43mの範囲を対象としている。対象面積は約17,000m²である。

調査は2×2mの試掘坑を路線幅内に3箇所(北東端、中央、南西端)設置することを基本として、それを約20m間隔で設定した。設置した試掘坑は合計56箇所である。

2．調査の結果

結論からいうと、全面調査の必要のない部分、トレンチ調査の必要な部分、全面調査の必要な部分の3つに区分されることとなった。

全面調査の必要のない部分

確認調査対象範囲最東端に位置する№56の試掘坑からは遺物あるいは遺構の検出は全くみられず、西側の列(№ 53～55)を設定した地表と約1.8mの段差が認められた。このような状況から判断してこの試掘坑周辺は美囊川の河道内に存在すると考えられ、この意味から全面調査の対象外とした。

トレンチ調査の必要な部分

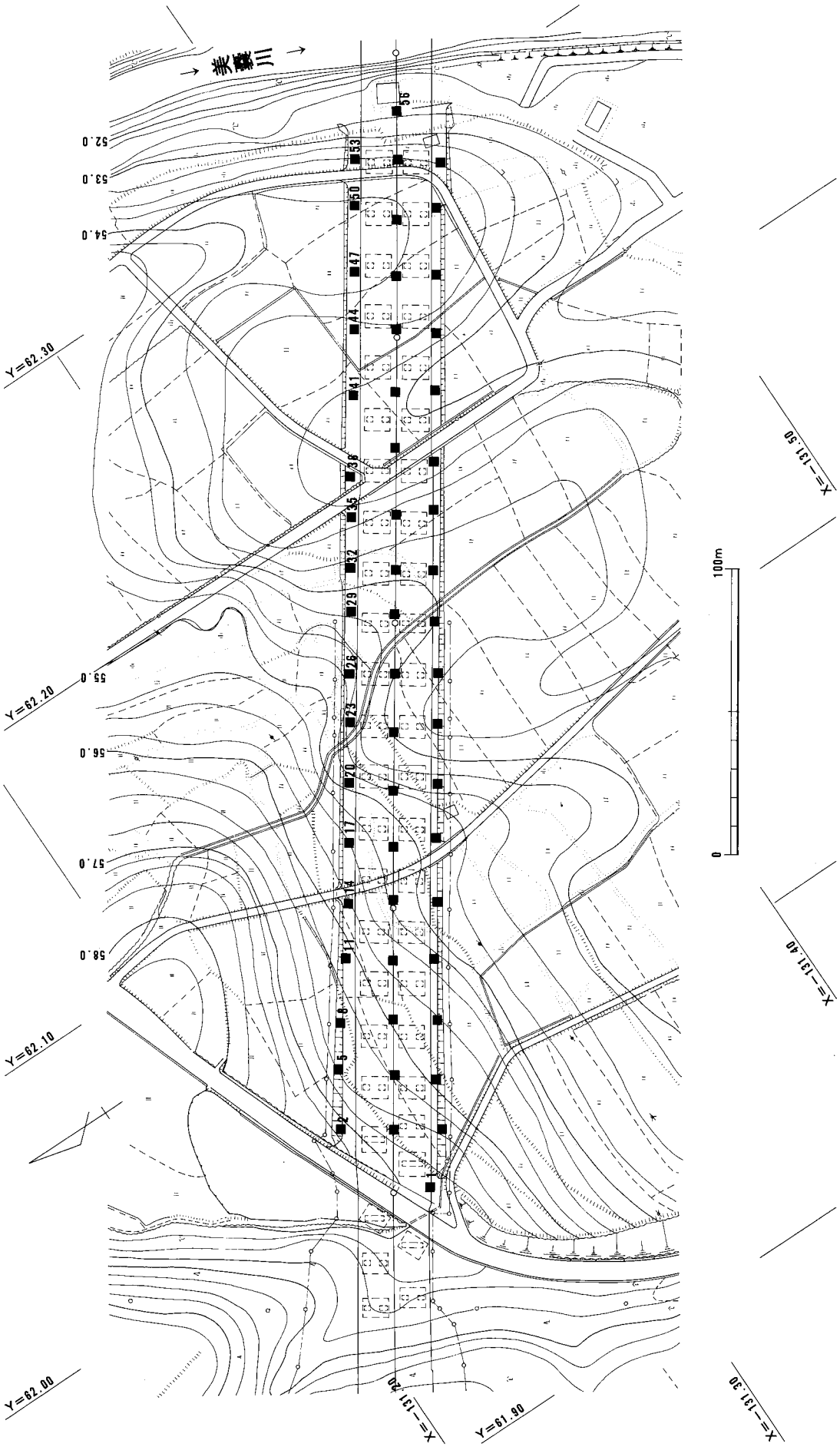
№38～46付近は、現状の微地形を復元してみると、谷状に等高線が入り込んでおり、美囊川の旧河道か、東側に存在する自然堤防の後背湿地の可能性が考えられた。前記の試掘坑を掘削した結果、何面かの旧地表面は認められたものの、遺構・遺物は検出されなかった。ただし、旧地表面が土壌化しており、水田としての土地利用の可能性もあるため、トレンチ調査による第2次確認調査を実施する必要が認められた。

全面調査の必要な部分

今回の確認調査の範囲の大部分は全面調査の必要な範囲とされたが、上記の後背湿地を境にして東側と西側で様相に違いがみられる。すなわち、東側の部分は美囊川の氾濫にともなう自然堤防がみられ、西側は段丘から続く緩傾斜面である。

自然堤防上に設定した№44・45・47～55の試掘坑からはカマドをもつ古墳時代の竪穴住居とそれに伴う須恵器を検出しており、集落の存在が想定できる。全体の傾向としては、東側にしたがって遺構の密度が高いと思われる。

西側の段丘に至る緩傾斜面では、№23・26・29・30・32～40の付近の試掘坑での遺物・遺構の検出が顕著である。ここからは、主に弥生時代後期～古墳時代にかけての溝・土坑・柱穴とそれに伴う遺物を検出している。さらに西側では密度は疎らではあるが、弥生時代の土坑とそれに伴う遺物を検出しており、弥生時代を中心とした集落の存在が想定された。出土した遺物のなかには中世のものも若干含まれていたが、遺構からの出土は確認していない。



第4図 確認調査の試掘坑設定図

第４章　全面調査の結果

第１節　遺跡の立地と基本層序

立地

西ケ原遺跡は三木市細川町西字前・久留美字西ケ原に所在する。三木市の市街地中心部より約2.5km北東方向に位置している。このあたりは、加古川の支流である美嚢川の流域にあたる。調査地周辺の地形は大まかには、北西側の山地・それに続く更新世段丘面・東側を蛇行しながら南北に流れる美嚢川両岸の完新世段丘面に概観することができる。

地形的な特徴を模式的にしたものが第５図である。北西側の山地は三木市の北西部に連なるものであるが、標高は最高でも150m程度のもので全体に低い山塊である。兵庫県史には、これは高位段丘として記されている。この高位段丘から東側に派生する段丘は更新世段丘で標高は70～90mを測る。ここには田井野遺跡、久留美窯跡群が立地している。更新世段丘から東側は完新世段丘である。更新世段丘との比高差は約20mを測る。西ケ原遺跡はこの完新世段丘II面上に立地している。北から流れてきた美嚢川はこの段丘を避けて東側に大きく膨らみ蛇行して南下している。

次に、西ケ原遺跡の立地している段丘面についてもう少し微視的に観察したい。現状の水田面の標高を参考にして25cmの等高線を引いてみると、微地形を復元することができる。この微地形を復元したものが第４図である。西ケ原遺跡の立地している段丘は南にしたがって均等ににその高度を下げているようにみえるが、実際はかなり複雑な様相を呈している。

まず美嚢川に沿って南北に伸びる微高地が観察される。これは、調査区でいえばＡ地区にあたる。美嚢川は完新世段丘を避けて東側に大きく蛇行しているが、降雨による増水の際には洪水となってこの段丘東部を覆っていたものと思われる。第５図に網かけで示した南北に細く伸びる部分はその攻撃面にあたり、ここに自然堤防が形成されている。この自然堤防上に古墳時代後期の集落が営まれている。弥生時代の遺構はみられないことから自然堤防はこの両者の時期の間に形成されたものであろう。

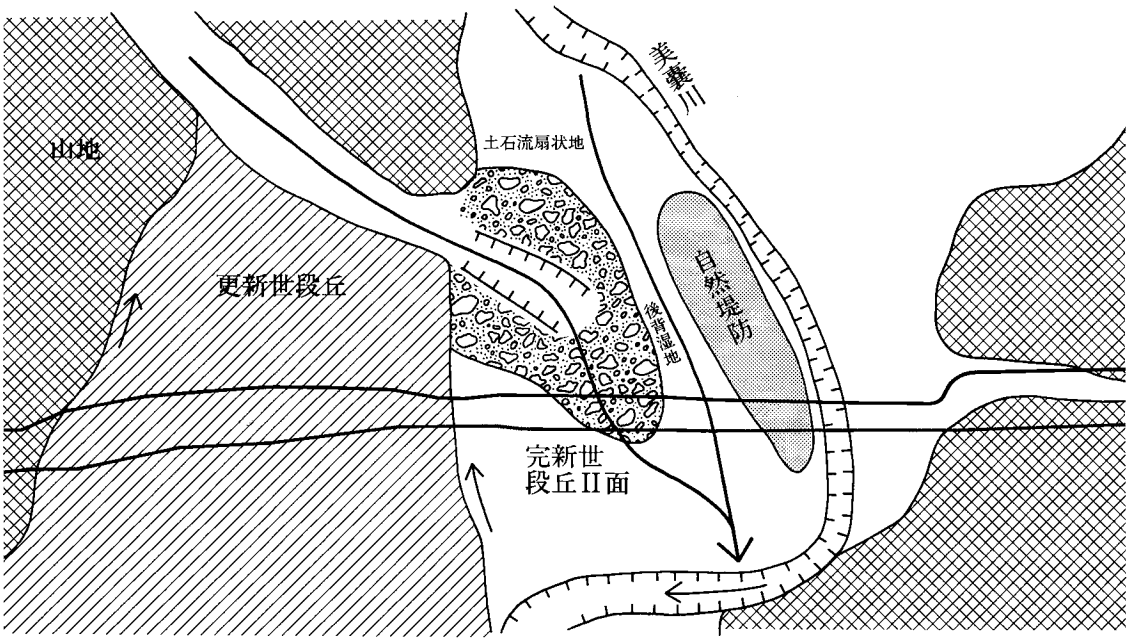
調査区のＢ地区では逆に等高線が谷状に入りこんでいる。これは自然堤防に続く後背湿地と理解することができる。

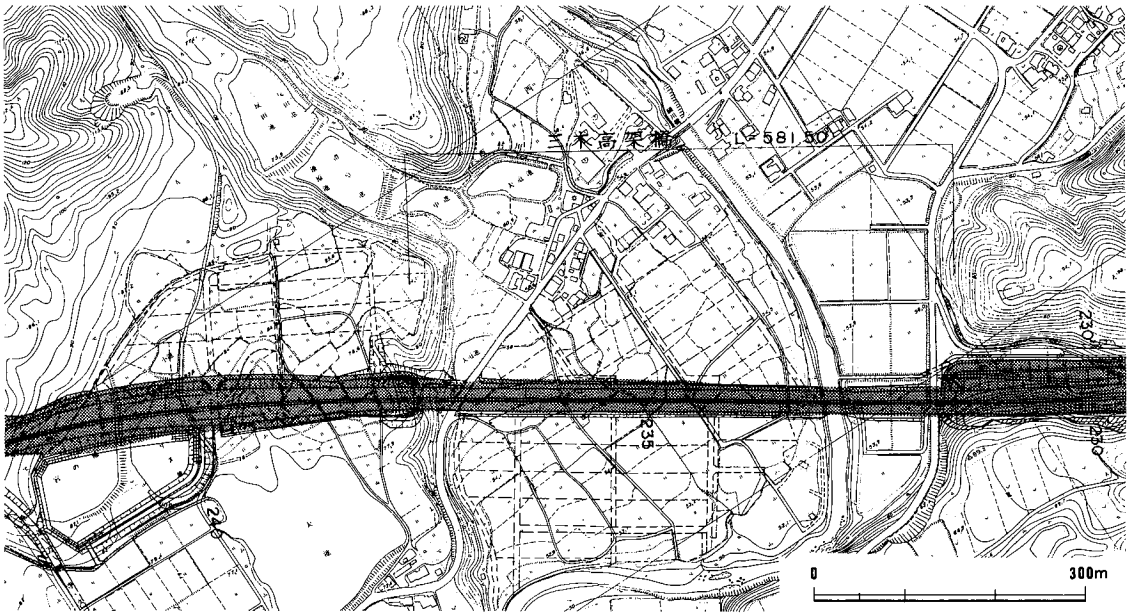
Ｂ地区以西は基本的には西側の更新世段丘に向かい、次第にその標高を上げていく傾向を示しているが、調査区のＣ地区とＤ地区の境界あたりとＤ地区とＥ地区の境界あたりの２箇所に等高線の張り出しが観察される。これは開析谷である毛谷から流出した土石流の堆積を示している。この土石流は弥生時代末の遺構を埋没させていることから、これより新しい時期に発生した土石流である。

基本層序

〔Ａ地区〕

Ａ地区は南北方向に伸びる微高地の南部を東西に横切っている。基本層序は図版４に示した。これは南側の壁の断面図であるが、現地表面は、ほぼ水平を保っており微高地の状況はあまり明確にみることはできない。しかし、現耕作土以下では西側に向かって傾斜する状況を観察することができる。ここでは、微高地の最高点が調査区内を南北に横断している農道付近で、そこから東西両側は次第に低くなっ





第５図　遺跡周辺の地形模式図

ている様子が観察できる。

Ａ地区南壁断面では10層の土層の堆積が認められた。数字は同一時期に堆積した土層を表し、土壌化している部分をａ層、非土壌化部分をｂ層としている。１ａ層は現耕作土である。この１ａ層のみが人為的な堆積で、以下はすべて自然堆積と考えられる。２ａ層は土壌化しており、水田としての土地利用が考えられるが、出土した遺物から中世以降のものと考えられる。当地区で遺構の確認ができたのは５ａ層を除去した段階である。遺構は上下２面で確認できた。すなわち、上層で確認したものは、６ａ層を切っており、下層で確認したものは６ａ層を除去した後のものである。たとえば、断面にかかっているＳＨ13・21は６ａ層を切っており、ＳＨ05・11などは６ａ層が後から堆積している。通常、遺構は土壌化した層で確認することが困難であるが、その生活面は直上の土壌層として捉えることが一般的である。この意味から、上層で検出した遺構は５ａ層上面を生活面とする遺構群、下層で検出した遺構は６ａ層上面を生活面とする遺構群とすることができる。しかし、５ａ層と６ａ層との間には非土壌化の土層が認められない。土層を分層する際に、非土壌化の土層が間に認められる場合は明らかに異なる堆積として認識することができるが、当地区の５ａ層と６ａ層のようにａ層どうしが接している場合は困難を伴う。両者の粒子や色調の違いから判断することになり、今回はこの両者を別の時期の堆積として分層したが、両者ともに褐色の極細砂を呈して非常に近似しており、同一層であった可能性も捨て切れない。７層以下には遺物は包含しておらず、下層には遺構の存在はないと考えられる。

〔Ｃ地区〕

Ｃ地区は毛谷から供給された土砂による土石流タイプの扇状地の先端部分にあたる。基本層序は図版５に示した。これは、北壁の断面図である。現地表面の標高は西側の55.0mが最も高く、東側では53.4mとなり約1.6mの比高差を生じている。毛谷から供給された土石流は４ｂ層と13ｂ層の２層認められ、少なくとも２回の土石流が発生したことが確認された。特に13ｂのものは、弥生時代末のＳＤ02を埋没させていることから比較的近い時期に発生したものと思われる。４ｂのものは、中世の遺物を包含していることからこの時期以降のものであろう。この地区で遺構の確認された面は16ｂ層と19ｂ層をベースとしている。北壁断面では16ｂ層は一部しか残存していないが、Ｃ地区全体では比較的広い部分に残存している。東側はＡ地区の自然堤防の後背湿地に向かって落ちており、19ｂ層の肩に堆積している12層中から土器を検出している。ＳＤ01は19ｂ層を切り込んで13ｂ層と15層を埋土としていおり、15層中から土器が出土している。13ｂ層はＳＤ01を埋没させている土層であるが、溝本来の堆積層である15層を一部削り込んでいるため、15層と同時期の堆積とは考えられない。

〔Ｄ地区〕

Ｄ地区もＣ地区同様土石流タイプの扇状地である。基本層序は図版６に示した。遺構は黄褐色のシルト質極細砂をベースとした面で確認した。ここでも、土石流による礫の堆積が確認されている。調査区の中央部では幅30mの流路が認められ、これが毛谷から土砂を供給した流路と考えられる。

〔Ｅ地区〕

Ｅ地区は段丘向かい次第に高度を上げてきており、東側の約1/3を除いて土石流の影響は受けていない。ベースは比較的しっかりした黄褐色シルト質極細砂である。Ｄ地区に近い約1/3の部分では耕土直下に礫層が、遺構面直上まで堆積している。

第２節　Ａ地区の検出の遺構と遺物

１．調査の概要

Ａ地区は西ケ原遺跡の東端部に位置している。立地は前節で述べたとおり、美嚢川の右岸に沿った自然堤防上である。

遺構の立地している自然堤防は、南北に細長くのびた形状を呈し、全長は約500m程度と考えられる。今回調査を実施したＡ地区はその自然堤防の南端部に位置している。

調査区内を南北に横切っている農道が存在しており、水田耕作中は使用されているため、この部分より西側の調査を先行させ、稲の刈り入れ後に農道を含めた東側の調査を実施した。Ａ地区全体の調査面積は2,340㎡である。

調査は重機と人力により掘り下げを行い、遺構の検出に努めた。まず、上層の１ａ層、２ａ層、３層、４層までは遺物の包含が認められないことから重機よって掘削を行い、遺物の包含している５ａ層からは人力による掘削を行った。

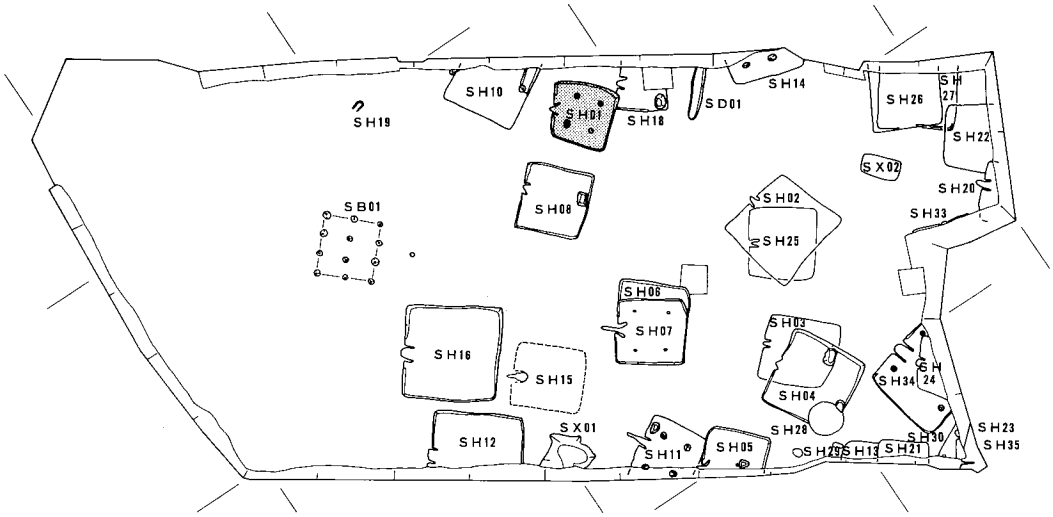
調査の結果、古墳時代後期の竪穴住居跡31軒（ＳＨ09・17・31・32は欠番)、掘建柱建物跡１棟、土坑２基、溝を１条を検出した。

地区内での自然堤防の標高はちょうど農道のあたりでピークに達し、それに続く西側の後背湿地に向かって次第に低くなっている。これに比例するように西側では遺構の密度は疎らになり、掘建柱建物跡であるＳＢ01以西では遺構は検出されていない。

調査区より東側は地表面が約1.8mの段差をもって落ちており、調査区東端で検出された数軒の住居跡は調査区外に残存している可能性はなく、美嚢川によって削平されているものと考えられる。

平成２年度に三木市教育委員会によって実施された、ほ場整備にともなう確認調査で、自然堤防上にあたる位置から竪穴住居跡、土坑などの遺構と、西ケ原遺跡のＡ地区で出土した遺物とほぼ同時期の遺物が検出されている。遺構は当調査区の北と南の両側で検出されており、Ａ地区で検出した古墳時代後期の集落の範囲は南北に細長い自然堤防上の大部分に広がるものと考えられる。当地区の立地から考えて、集落の中心部はさらに北側に存在している可能性が高い。なお、ほ場整備事業は地表下に遺構の存在が確認されたため、下層に損傷を与えないように実施され、遺構は保存されている。

２．遺構と遺物



第６図　ＳＨ01の位置

ＳＨ01

検出状況　　調査区の中央の北端で検出している。遺構は全体を確認することができた。当住居跡の東側にあるＳＨ18と切り合い関係が認められ、ＳＨ18を切って構築されている。北西約７ｍにＳＨ10が、南西約７ｍにＳＨ08が検出されているが、両者とは切り合っていない。

形状・規模　　平面形は方形を呈しているが、やや歪で台形に近い形状である。北西辺中央部にカマドを有している。カマドを基準として主軸を設定した。主軸の方位はN45°Wである。北西辺から順に時計回りに辺の長さを示せば4.40m、5.27m、4.60m、4.20mとなる。このうち、北東辺は直線的な形状ではなく、やや弧状を呈している。他の３辺は直線的であるが、カマドの設置されている北西辺はやや西側に振っており西部コーナーは直角に屈曲しておらず約110°程度の角度を計る。検出面から床面までの深さは27cm、床面の標高は 51.95mである。床面積は20.3m²である。

埋土　　カマドの部分を除いて４層が認められた。下層の周壁溝のあたりに暗褐色のシルト質極細砂と極細砂質シルト、中層に暗褐灰色の極細砂質シルト、上層に褐灰色シルト混じり細砂の堆積が認められた。

施設　　カマド・周壁溝・柱穴が検出された。

カマド　　北西辺のほぼ中央部で造り付けのカマドが検出された。カマドの主軸方位はN60°Wで住居跡の主軸と約15°の違いが認められるが、北西辺に対してはほぼ直交している。カマドは検出された限りでは、地山の削り出しによって築かれており、その規模は、焚口部の幅75cm、奥行き98cmを測り、残存高は最大値で25cmである。焼成部はごく僅かに窪み焚口部奥から屋外に向かって緩やかな傾斜をもって煙道部が取り付いている。屋外に突出した煙道部の長さは28cmである。石製の支脚は検出されていないが、焼成部の奥に土師器の甕(２)が伏せた状態で出土しており、これを支脚としていたものと思われる。カマド内の上層には炭を含む褐灰色シルト質極細砂が、下層には炭化層が堆積している。焼成部の底部は焼土面が観察される。

周壁溝　　周壁溝が検出され、北西辺のカマドの設置されている部分を除いて全周している。床面での幅は10～20cm、底での幅は３～10cmであり、床面からの深さは７～15cmを測る。

柱穴　　４本の柱穴が検出された。

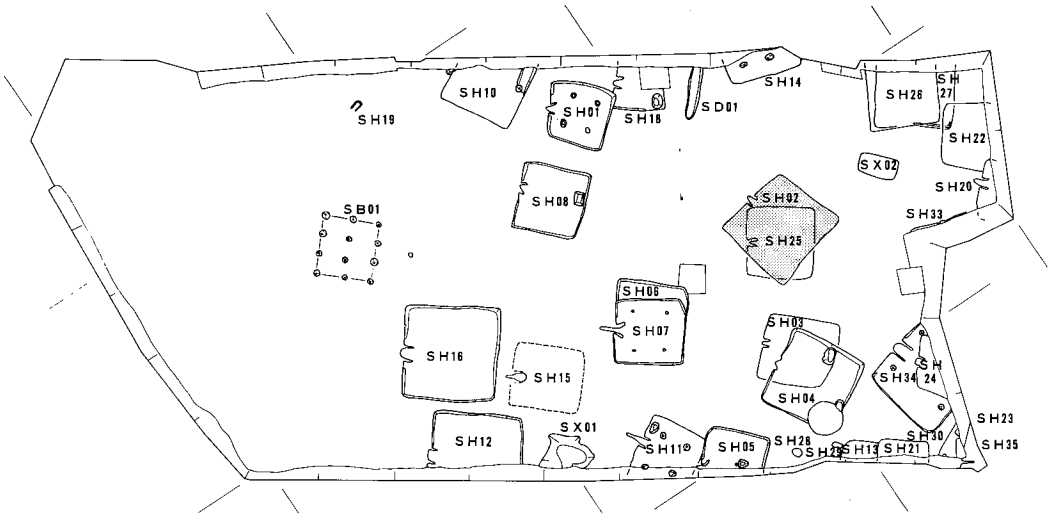
Ｐ１は掘り方の直径50cm、柱痕の直径30cm、床からの深さは24cmである。Ｐ２は掘り方の直径40cm、床からの深さは19cmである。Ｐ３は掘り方の直径45cm、柱痕の直径16cm、床からの深さは16cmである。Ｐ４は掘り方の直径38cm、床からの深さは22cmである。

柱穴間の距離は、Ｐ１～Ｐ２間が1.80m、Ｐ２～Ｐ３間が2.30m、Ｐ３～Ｐ４間が2.10m、Ｐ４～Ｐ１間が2.30mである。

出土遺物　　土器のみが出土している。

須恵器　　住居内床面上からは須恵器の杯身が出土し図化している。１は口縁部のみの1/9の残存である。立ち上がりは内傾して口縁端部は丸くおさめて面をなさない。

土師器　　主に遺物が出土しているのは、カマド内からである。図化しているのは２の土師器の甕である。底部の一部が欠けているが、ほぼ完形のものである。口縁部内外面に横方向のナデ、体部外面の上半に縦方向のハケを施す。下半はカマド使用時熱を受けたようで磨滅しており調整の観察はできない。内面は体部に斜め方向の板ナデ、底部に指頭圧痕が観察される。カマド内からは上記の甕のほかにさらに２個体以上の甕が出土しているが、いずれも破片で、図化することはできなかった。



第７図　ＳＨ02の位置

ＳＨ02

検出状況　　調査区の東側中央部で検出している。調査区を横切る農道の直下にあたる。このため調査の時期に若干のずれが生じた。遺構は全体を確認することができた。当住居跡の下層にあるＳＨ25を切って構築されている。西約13mにＳＨ06･07が、北東約14mにＳＨ14が、南西約10mにＳＨ03が検出されている。

形状・規模　　平面形は方形を呈しているが、やや歪で台形に近い形状である。北辺中央部にカマドを有している。カマドを基準として主軸を設定した。主軸の方位はN15°Wである。北辺から順に時計回りに辺の長さを示せば6.30m、5.75m、7.08m、6.85mとなる。北辺と東辺が他の２辺に較べて短いため平面形状が歪になり、台形状を呈する原因となっている。検出面

から床面までの深さは25cm、床面の標高は 52.50mである。床面積は40.7m²である。

施設　　カマドのみが検出された。周壁溝・柱穴等は検出されなかった。

カマド　　北辺のほぼ中央部で造り付けのカマドが検出された。カマドの主軸方位はほぼ北を指しており、住居跡の主軸と約15°の違いが認められる。カマドは盛土によって築かれているが住居跡埋土との区別は非常に困難である。規模は、焚口部の幅78cm、奥行き113cmを測り、残存高は最大値で25cmである。焼成部はごく僅かに窪み焚口部奥から屋外に向かって緩やかな傾斜をもって煙道部が取り付いている。屋外に突出した煙道部の長さは31cmである。焼成部の奥に石製の支脚がが設置されている。支脚は砂岩製のもので長さ28cm、幅11cm、厚さ６cmの板状を呈する。焼成時の影響で焼けて風化が著しい。右側の袖部の外面に長さ39cm、幅15cm、厚さ４cmの砂岩製の板状の石を貼り付けている。また、左側の袖部の内面に長さ20cm、幅10cm、厚さ６cmの砂岩製の板状の石が立脚している。この他に煙道部に直径７cm、深さ７cmの小穴が検出されている。何のための施設かは明らかではないが、ＳＨ18・19からも同様のものが検出されている。カマド内の上層には土器・炭化物を含む暗褐灰色シルト質極細砂が、下層には炭化物・灰を多く含む暗褐色シルト質極細砂が堆積している。焼成部のには焼土面が観察され、その範囲は長軸78cm、短軸54cmを測る。

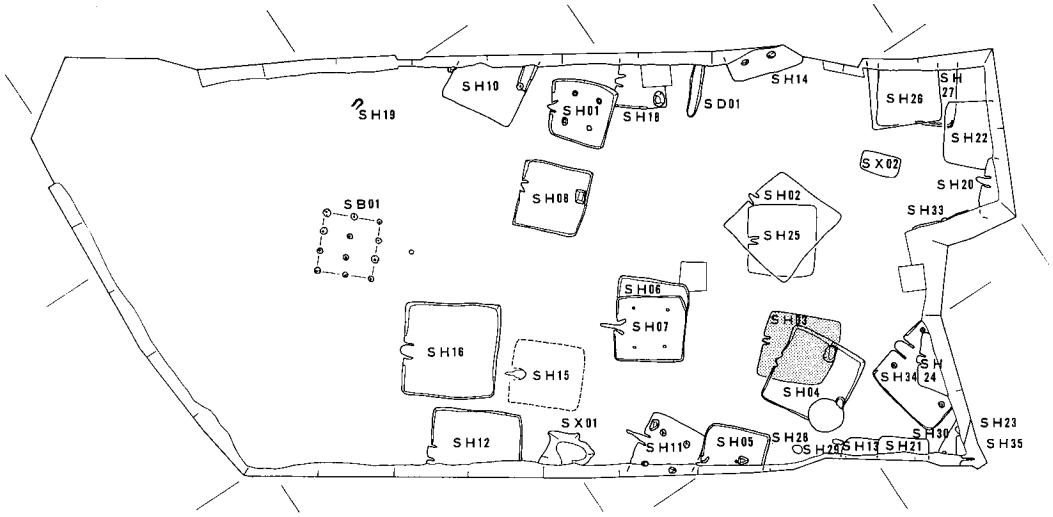
出土遺物　　土器のみが出土している。

主に遺物が出土しているのは、カマド内とカマドの右側の床面上からのものである。カマド内からは須恵器・土師器が出土しており、そのうち須恵器の６・８、土師器の17・18・19を図化している。カマドの右側の床面上から出土しているものはすべて須恵器で、そのうち５・７・９・10・12を図化している。特筆すべきは須恵器の杯身の11でカマド内から出土したものとカマドの右側から出土したものが接合し、同一個体であることが判明している。

須恵器　　出土した須恵器はすべて杯蓋・杯身である。杯蓋は６点図化している。３～７のものは口縁部が内湾している形態のもので、天井部と口縁部を分ける稜線は退化して５にかろうじてその痕跡が残るのみである。口縁端部内面も退化傾向にある。このうち７は丸くおさめている。８は形態が違い、口縁部が外反している。９は天井部と口縁部との境が不明瞭で口径も小さい。天井部はヘラ切り未調整である。ロクロ回転は３～７が右回転、９が左回転で、８は不明である。

杯身は３点図化している。いずれも口縁部は内傾して口縁端部は丸くおさめる。回転ヘラケズリの範囲は狭く。ロクロ回転は３点とも右回転である。

土師器　　土師器は８点図化している。13は小型の鉢とした。手づくねのもので内外面にハケ目を残す。北西部床面上から出土している。他の７点はすべて甕であるが、おおまかに大・小の２種に分けられる。小は口径が12～14cmのもの、大は15cm以上のものである。大型の19は体部の長いタイプのものと考えられる。体部外面の全面にハケ調整を施し、体部の内面はナデかハケ調整である。外面のハケ調整の後に口縁部内外面に横方向のナデを施す。いずれも、カマドで使用されていたようで外面が赤化している。



第８図　ＳＨ03の位置

ＳＨ03

検出状況　　調査区の南東部で検出している。調査区を横切る農道の直下にあたる。このため調査の時期に若干のずれが生じた。当住居跡はＳＨ04と重複して検出され、南西辺と南東辺の壁面の大部分をＳＨ04に削平されているが、遺構の規模・形状はほぼ全体を確認することができた。北西約12mにＳＨ06・07が、北東約10mにＳＨ02・25が、南東約10mにＳＨ32・24が検出されている。

形状・規模　　平面形は方形を呈している。北西辺の若干右寄りにカマドを有している。カマドを基準として主軸を設定した。主軸の方位はN44°Wである。北西辺から順に時計回りに辺の長さを示せば5.05m、5.50m、6.00m、5.57mとなる。南西辺にやや膨らみをもっているが、他の３辺は直線的である。検出面から床面までの深さは40cm、床面の標高は 52.27mである。床面積は32.3m²である。

施設　　カマド・土坑が検出された。周壁溝・柱穴は検出されなかった。

カマド　　北西辺の中央部やや右寄りで造り付けのカマドが検出された。カマドの主軸方位はほぼ住居跡の主軸と同じである。カマドは盛土によって築かれているが住居跡埋土との区別は非常に困難である。カマド内は炭化物・焼土等の存在により埋土と袖部との区別は比較的容易であるが、袖部外面についてはほとんど区別できない。規模は、焚口部の幅66cm、奥行き90cmを測り、残存高は最大値で22cmである。焼成部はごく僅かに窪み焚口部奥から屋外に向かって比較的急な傾斜をもって煙道部が取り付いている。屋外に突出した煙道部の長さは28cmである。焼成部の奥に石製の支脚がが設置されている。支脚は長さ30cm、径12cmの丸みを帯びたもので河原石をそのまま利用しているようである。焼成時の影響で焼けて赤化している。カマド内の上層には褐灰色シルト質極細砂が、中層には暗褐灰色極細砂が堆積している。この２層は住居跡内埋土と同質のものである。下層には土器を多く包含する炭化層が堆積している。焼成部の底部は焼土面が観察され、その範囲は長軸40cm、短軸32cmを測る。

土坑　　南東辺のほぼ中央部、カマドの対極に土坑１を検出した。壁面に接して設置されている。形状は長方形を指向しているが、不整形ぎみである。規模は長軸に140cm、短軸に80cmを測

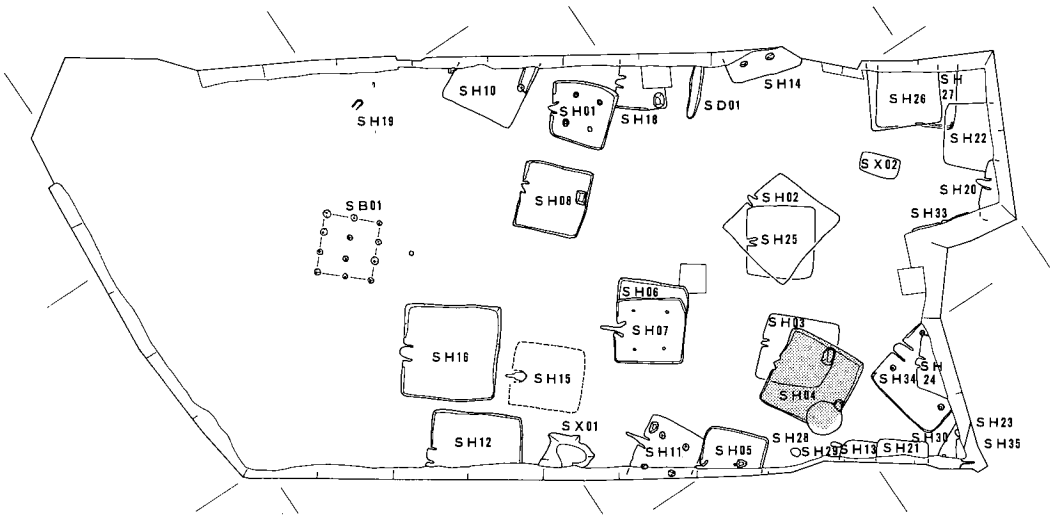
り、深さは20cmと浅く、断面形状は皿状を呈している。遺物は出土していない。

出土遺物　土器のみが出土している。

須恵器の杯蓋・杯身・甕、土師器の甕などが出土しているが、図化できたものは２点である。土器の出土は量的にはカマド内が最も多い。器種は土師器の甕が出土している。

須恵器　出土した須恵器のうち杯蓋の１点のみが図化できた。口縁部～天井部にかけて約1/3の残存である。欠失している天井部は丸みを帯びた形状であると思われる。天井部と口縁部の境には明瞭ではないが稜線が観察され、口縁端部内面は内傾する面をもっている。ロクロ回転は左回転である。この他に杯身が出土しているが口縁部を欠失しているため図化していない。ロクロ回転は左回転で底部に施された回転ヘラケズリは杯部高の約半分近くまで観察できる。口縁部を欠失しているため口径は不明であるが、12cmを越えないと思われる。他に甕の破片が１点出土している。

土師器　土師器は１点図化している。カマド内から出土したもので、底部を欠失しているが、全体としては3/4程度の残存である。体部の上位に最大径をもっている。調整は磨滅が激しいため調整の観察は困難であるが、体部内外面にハケ調整、口縁部に横方向のナデを施している。カマドからは他に２個体程度の甕の破片が出土しているが、図化はできなかった。



第９図　ＳＨ04の位置

ＳＨ04

検出状況　調査区の南東部で検出している。調査区を横切る農道の直下にあたる。このため調査の時期に若干のずれが生じた。当住居跡はＳＨ03と重複して検出され、切り合い関係が認められ、ＳＨ03を切って構築されている。南部コーナー部分を現代の撹乱と、カマド部分が土層観察用の側溝により削平されているが、遺構の規模・形状はほぼ全体を確認することができた。北西約12mにＳＨ06・07が、北東約10mにＳＨ02・25が、南東約10mにＳＨ32・24が検出されている。

形状・規模　平面形は方形を呈している。北西辺の中央部にカマドを有している。カマドを基準として主軸を設定した。主軸の方位はN31°Wである。北西辺から順に時計回りに辺の長さを示せば6.53m、6.28m、6.45m、6.45mとなる。各コーナー部はほぼ直角に屈曲し、各辺の長さも比較的揃い直線的である。検出面から床面までの深さは40cm、床面の標高は52.4m

である。床面積は35.9㎡である。

施設　　カマド・周壁溝・土坑が検出された。柱穴は検出されなかった。

カマド　　北西辺の中央部で造り付けのカマドが検出されたが、側溝により大半が削平されているため全容は不明確な点が多いが、主軸方位はほぼ住居跡の主軸と同じであると考えられる。カマドは盛土によって築かれているが住居跡埋土との区別は非常に困難である。規模は、焚口部の幅70cm、奥行き74cmを測り、残存高は最大値で10cmである。焼成部は側溝によって削平され欠失していおり、焚口部奥とそこから屋外に向かって比較的急な傾斜をもった煙道部のみが検出された。屋外に突出した煙道部の長さは18cmである。焼成部前面の床面上に炭化物の分布が認められる。

土坑　　南東辺のほぼ中央部から左にずれて土坑１を検出した。壁面に接して設置されているが大部分は撹乱により失われている。形状は長方形を指向していると思われるが、コーナー部は隅円状を呈している。規模は長軸で残存長80cm、短軸に72cmを測り、深さは20cmと浅く、断面形状は皿状を呈している。

出土遺物　　土器と鉄器が出土している。

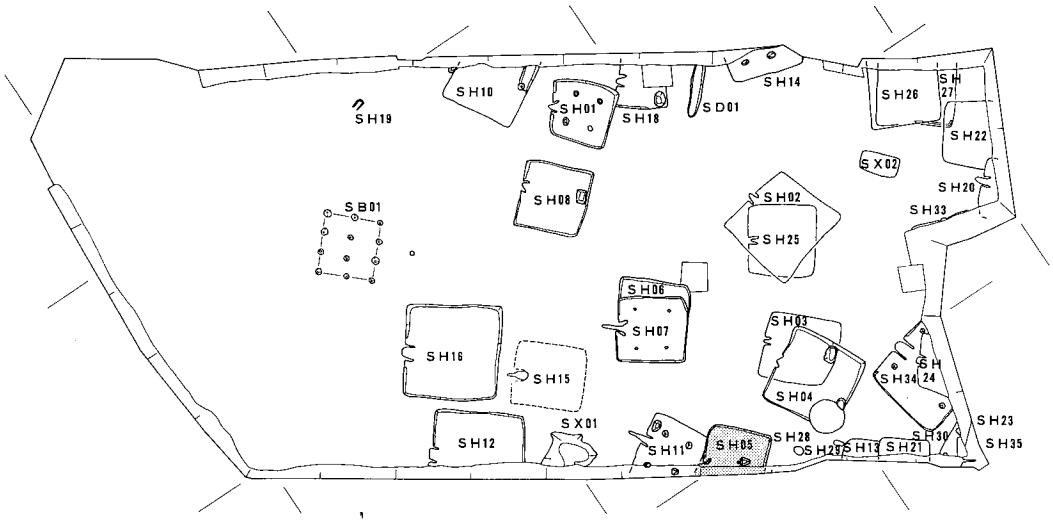
土器は須恵器の杯蓋・杯身・甕、土師器の甕などが出土しているが、図化できたものは９点である。土器の出土は量的にはカマド内が最も多い。器種は土師器の甕が出土している。鉄器は刀子が１点出土している。

須恵器　　出土した須恵器のうち杯蓋・杯身・壺の６点を図化している。２点が杯蓋で３点が杯身である。26・27は杯蓋であるが、どちらも天井部が比較的平坦な形態のものである。天井部と口縁部の境は27が稜線が認められるのに対して26は退化している。口縁部は26がやや外反ぎみである。口縁端部内面はどちらも内傾する面をもっており26は段を有する。ロクロ回転は26が左、27が右回転である。杯身は28～30の３点である。28・30の口縁部の立ち上がりは短く内傾するタイプのもので、29はこの２点に較べると直立ぎみで長い。３点とも底部の回転ヘラケズリの範囲は狭く、杯部高の1/4以下である。ロクロ回転は28が右、29・30が左回転である。この他に壺を図化している。床面検出時に出土したもので口縁部～体部にかけて1/4程度の残存である。口縁部～頸部の内外面にナデ、体部内面にナデ調整を施し、体部外面は全面にカキ目が観察される。他に須恵器の甕の破片が１点出土しているが、図化はしていない。

土師器　　土師器は３点を図化している。いずれも甕である。32はカマド内から出土したものである。口径15cm前後でどちらかといえば小型の部類である。調整は口縁部外面に横方向のナデ調整を行い、体部外面は全面に縦方向のハケ調整を施している。内面は底部に不定方向のハケ調整、体部上半に横方向のハケ調整、口縁部に横方向のハケ調整を施しているが、口縁部と体部で使用工具に違いがみられ、口縁部に施されたハケ目は単位が細かい。その後、体部上半には縦方向のナデが観察される。33は口縁部がやや短いタイプのもので底部は欠失しているが平坦な形状のものであろう。調整は基本的には32と同じであるが、体部内面は全面にナデを施している。34は当住居跡の床面より低いレベルで出土したもので、本来ここで報告すべきものではないが、直下ということで掲載した。頸部が締まり口縁部が外反する形態のもので、調整は外面の口縁部に横方向のナデ、体部は縦方向のハケ調整、

底部はタタキを施している。内面は口縁部に横方向のハケ調整、体部は下から上方向へのケズリを施し、底部には指頭圧痕が観察される。当住居跡から出土している遺物より古い時期のものと考えられる。下層の灰黄色極細砂内からの遺物であるが、この層中から出土した遺物はこの１点のみであり、遺構の存在も認められなかった。

鉄器　　Ｓ１は刀子で、両関造りのものである。全長6.5cmで、刀身部が３cm、茎部が3.5cmである。茎部のほうが長く、小型の製品である。



第10図　ＳＨ05の位置

ＳＨ05

検出状況　　調査区の南東部で検出している。検出した位置が調査区境にあるため住居跡の半分近くは調査区外に存在していると考えられ、全体を検出しているわけではない。検出したのは北部と東部の２つのコーナーを含む３辺である。北西部に位置するＳＨ11と重複して検出されており、両者には切り合い関係が認められ、ＳＨ11を切って構築されている。カマドの一部分が土層観察用の側溝により削平されている。東約８mにＳＨ03･04が、南東約４mにＳＨ28が検出されている。

形状・規模　　平面形は方形を呈していると思われる。北西辺にカマドを有している。カマドを基準として主軸を設定した。主軸の方位はN45°Wである。北西辺から順に時計回りに辺の長さを示せば（4.45m）、5.56m、（3.05m）、未検出となる。ただし、２番目に記している北東辺以外の２辺は全体を検出しておらず、本来の数値は確定できず検出長である。各コーナー部はほぼ直角に屈曲し、直線的である。検出面から床面までの深さは20cm、床面の標高は52.25mである。検出した床面積は19.3m²であるが全体では推定で30m²程度になると考えられる。

施設　　カマド・周壁溝が検出された。柱穴・土坑等は検出されなかった。

カマド　　北西辺で造り付けのカマドが検出された。側溝で半分近くが削平されているため全容は不明な点が多い。主軸方位はほぼ住居跡の主軸と同じであると考えて大過ないと思われる。カマドは盛土によって築かれているが住居跡埋土との区別は非常に困難である。規模は全体を検出していないため正確さを欠くが、焚口部の残存幅50cm、奥行き143cmを測り、残存高は最大値で20cmである。左側袖部と焼成部の一部は側溝によって削平され欠失している。

焼成部はごく僅かに窪み、焚口部奥とそこから屋外に向かって比較的急な傾斜をもって煙道部が検出された。屋外に突出した煙道部の長さは40cmである。焼成部の底部は焼土面が観察され、その範囲は長軸75cm、短軸25cmを測るが、この部分も削平されており、短軸方向は全体の半分程度の残存であると思われる。当住居跡のカマドからは支脚は検出されていない。

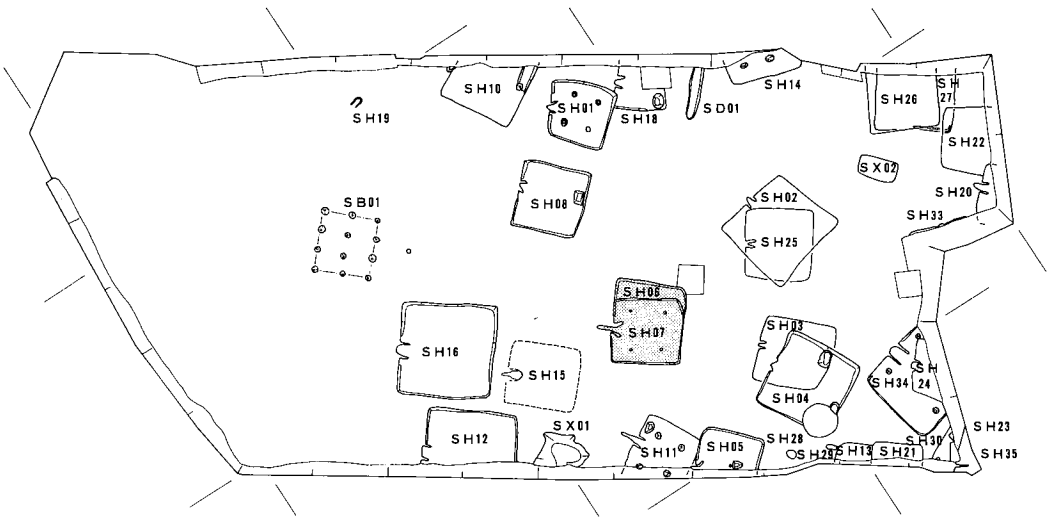
周壁溝　　周壁溝が検出され、検出した範囲内では北西辺のカマドの設置されている部分を除いて全周している。床面での幅は13～18cm、底での幅は８～10cmであり、床面からの深さは12～15cmを測る。

出土遺物　　土器のみが出土している。

須恵器の杯蓋・杯身・甕、土師器の甕などが出土しているが、図化できたものは３点である。土器の出土は量的にはカマド内が最も多い。器種は須恵器の杯蓋と土師器の甕が出土している。

須恵器　　出土した須恵器のうち杯蓋の２点を図化している。２点が杯蓋で３点が杯身である。23はカマドの右側の床面上から出土したもので約1/2が残存している。天井部と口縁部の境には稜線が認められる。口縁端部内面には内傾する面をもっている。ロクロ回転は右回転である。24はカマド内から出土したもので約3/4が残存している。天井部と口縁部の境には稜線は認められるが、かなり退化している。口縁端部内面には内傾しているが、面をもつほどではなく、どちらかといえば丸くおさめる。ロクロ回転は左回転である。この他、床面上から壺の口縁部が出土しているが、破片のため図化できなかった。

土師器　　土師器は１点図化している。やや小型の甕である。口縁部～体部に欠けて約1/4が残存しているのみである。口縁部内外面に横方向のナデ調整が、体部内面にナデ調整が観察される。体部外面はカマド内で使用されていたこともあり磨滅が激しく調整は不明である。カマド内からは以外に２個体程度の甕の破片が出土しているが、図化は出来なかった。



第11図　ＳＨ06の位置

ＳＨ06

検出状況　　調査区の中央部の南東寄りで検出している。当住居跡は確認調査のNo.51で確認されたものである。確認調査では住居跡の東部コーナーを検出した。遺構は全体を確認することが

できた。ＳＨ07と重複して検出されており、ＳＨ07を切って構築されているが３辺を共有している。このためＳＨ06はＳＨ07を拡張しているものと考えられる。東約13mにＳＨ02・25が、西約15mにＳＨ12・16が、北約13mにＳＨ08が、南約12mにＳＨ05・11が検出されている。

形状・規模　平面形は方形を呈している。北西辺の中央から左側に寄った位置にカマドを有している。カマドを基準として主軸を設定した。主軸の方位はN50°Wである。北西辺から順に時計回りに辺の長さを示せば7.00m、5.60m、6.25m、5.45mとなりカマドの設置されている対面の南東辺が短い。各辺は比較的直線的である。検出面から床面までの深さは30cm、床面の標高は52.17mである。検出した床面積は33.2m²である。

施設　カマド・周壁溝が検出された。柱穴・土坑等は検出されなかった。

カマド　北西辺で造り付けのカマドが検出されたが、辺の中央部には位置していない。凡そ６：４の割合で左側に寄っている。主軸方位はほぼ住居跡の主軸と同方向を指している。カマドは盛土によって築かれている。特に袖部外面は住居跡埋土との区別は非常に困難である。規模は、焚口部の幅90cm、奥行き260cmを測り、残存高は最大値で20cmである。焼成部は長軸96cm、短軸65cm、深さ12cmを測る。焚口部奥から屋外に向かっては段をもって煙道部が取り付いている。この煙道部自体は傾斜はほとんどない。屋外に突出した煙道部の長さは110cmと長い形態をもつものである。焼成部の奥に石製の支脚が設置されている。支脚は砂岩製のもので長さ20cm、幅９cm、厚さ７cmの板状を呈する。焼成時の影響で焼けて風化が著しい。左右の袖部内面に長さ20cm、幅12cm程度の砂岩製の板状の石を貼り付けている。この２石をもってカマド裾の端部と考えられる。カマド内の堆積は基本的には上下２層で上層には黄灰色細砂混じりシルト、下層には炭を含む暗褐灰色極細砂、暗褐色シルト質極細砂が堆積している。最下層にはブロック状に炭化物と焼土が混じっている。煙道部の上層には炭を含む暗褐灰色極細砂、下層には炭を含む淡黄褐色極細砂質シルトが堆積している。焼成部の全面には焼土面が観察され、範囲は長軸60cm、短軸35cmを測る。

周壁溝　周壁溝が検出され、検出した範囲内では北西辺のカマドの設置されている部分を除いて全周している。床面での幅は15～25cm、底での幅は５～８cmであり、床面からの深さは12～15cmを測る。

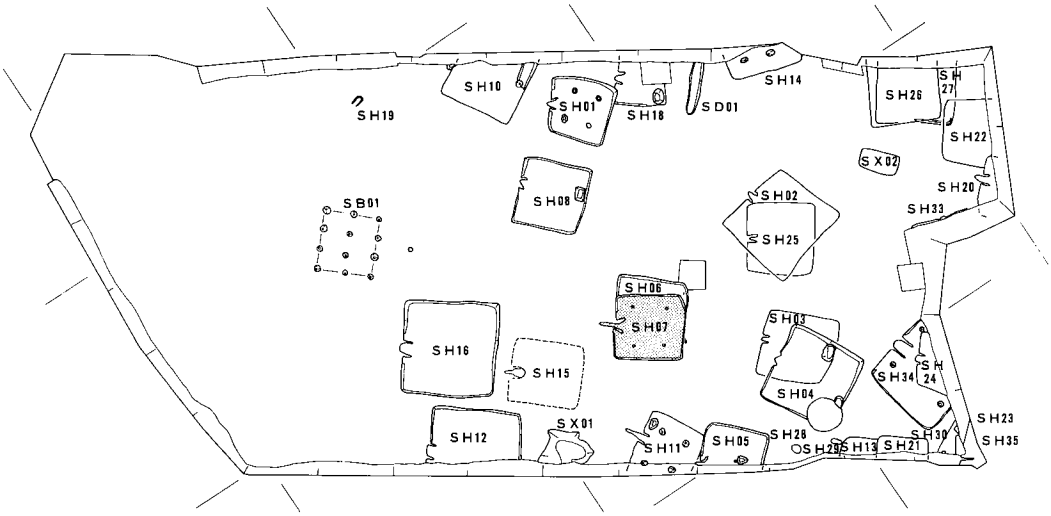
出土遺物　土器のみが出土している。

須恵器の杯蓋・杯身・甕・高杯、土師器の杯・甕・高杯・製塩土器などが出土しているが、図化できたものは10点である。土器の出土は量的にはカマド内が最も多い。器種は土師器の杯と甕を図化している。

須恵器　出土した須恵器のうち杯の４点を図化している。３点が杯蓋で１点が杯身である。杯蓋はこれ以外に２個体、杯身は３個体程度出土しているが、いずれも破片のため図化できていない。図化した４点は37を除いて床面上での出土で、37のみが埋土からの出土である。杯蓋の３点はいずれも天井部と口縁部の境には稜線が認められるが、さほど明瞭なものではない。口縁端部内面には内傾する面をもっている。ロクロ回転は左回転である。口径にはややばらつきがあり35が最も小さく、37が大きい。口径が大きいものほどその天井部は平坦さを増す傾向にある。回転ヘラケズリの範囲は狭く、いずれも天井部の1/2以下であ

る。38は約1/4の残存である。口径は比較的小さく、杯部は丸みを帯びているが底部は尖り気味である。口縁端部内面は内傾して面をもつ。ロクロ回転は左回転である。この他に須恵器としては甕と高杯が出土している。いずれも破片のため図化できなかったが、高杯は無蓋高杯である。

土師器　　土師器は６点図化している。39～41は杯である。杯部は39が浅く、40・41は比較的深い。40の外面は手づくねで、他のものは内外面ともにナデ調整を施しているが、磨滅が激しく観察は困難である。甕は２点図化している。42はカマドの左側床面上から出土したものであるが、カマドで使用されていたようで磨滅が激しいが体部は縦方向にハケ調整を施しているようで、口縁部は内外面ともに強く横方向にナデている。43はカマド内から出土したもので、口縁部を欠失しているが大型のものである。調整は内外面ともにナデ調整を行っている。44は製塩土器である。底部を欠失しているが、形態的にはいわゆるコップ形に属するものと考えられる。調整は内外面ともにナデで仕上げる。これら図化した土器以外に当住居跡からはコンテナ１箱分程度の土師器が出土しているが、いずれも小片で図化には至っていない。



第12図　ＳＨ07の位置

ＳＨ07

検出状況　　調査区の中央部の南東寄りで検出している。遺構は全体を確認することができた。ＳＨ06と重複して検出されている。ＳＨ06に切られて構築されており北東辺が欠失しているが他の３辺を共有している。東約13mにＳＨ02・25が、西約15mにＳＨ12・16が、北約13mにＳＨ08が、南約12mにＳＨ05・11が検出されている。

形状・規模　　平面形は方形を呈している。北西辺のほぼ中央部にカマドを有している。カマドを基準として主軸を設定した。主軸の方位はN50°Wである。北西辺から順に時計回りに辺の長さを示せば5.25m、5.60m、5.45m、5.72mとなりＳＨ06とは逆に主軸を設定した側の辺の方が長い。各辺は比較的直線的である。検出面から床面までの深さは30～40cm、床面の標高は52.09mで、ＳＨ06より約８cm下がる。検出した床面積は27.3m²である。

施設　　カマド・周壁溝・柱穴が検出された。土坑は検出されなかった。

カマド　　北西辺で造り付けのカマドが検出されている。主軸方位はほぼ住居跡の主軸と同方向を

指している。カマドはＳＨ06と共有しているが焼成部の底面がＳＨ06のものよりも約７cm下がっており、ここから床面に続いている。つまりＳＨ06に伴う焼成部（焼土面）を上層で確認し、さらに炭化層をはさんで７cm下でＳＨ07に伴う焼成部（焼土面）を確認したのである。カマドは焼成部のレベルに違いがみられるのみで、その規模や煙道部の形態は同じである。

周壁溝　周壁溝が検出され、検出した範囲内では北西辺のカマドの設置されている部分を除いて全周している。北東辺に沿う周壁溝以外はＳＨ06のものと共有している。床面での幅は15～25cm、底での幅は５～８cmであり、床面からの深さは12～15cmを測る。

柱穴　４本の柱穴が検出された。

Ｐ１は掘り方の直径22cm、床からの深さは32cmである。Ｐ２は掘り方の直径24cm、柱痕の直径14cm、床からの深さは30cmである。Ｐ３は掘り方の直径22cm、柱痕の直径14cm、床からの深さは34cmである。Ｐ４は掘り方の直径26cm、柱痕の直径12cm、床からの深さは36cmである。

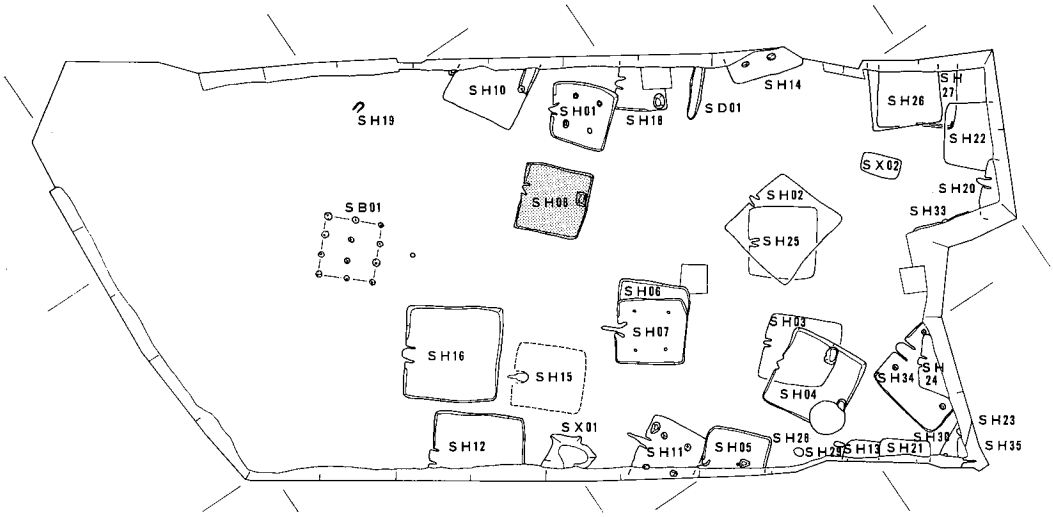
柱穴間の距離は、Ｐ１～Ｐ２間が3.00m、Ｐ２～Ｐ３間が2.70m、Ｐ３～Ｐ４間が2.95m、Ｐ４～Ｐ１間が2.45mである。

出土遺物　土器のみが出土している。

須恵器の杯身・甕、土師器の杯・甕・鉢などが出土しているが、図化できたものは７点である。土器の出土は量的にはカマド内が最も多い。器種は須恵器の杯身と土師器の杯・甕・鉢を図化している。

須恵器　出土した須恵器のうち杯身の１点のみを図化している。45はカマドの右側の床面上から出土したものである。底部は欠失しているが丸みをおびた形態をとると思われる。口縁端部は辛うじて内傾し、わずかに面を有する。回転ヘラケズリの範囲は狭く、杯部の1/2以下の範囲である。ロクロ回転は左回転である。須恵器は図化している１点以外に、甕の体部２個体分と甕の口縁部などが出土しているが図化するには至っていない。

土師器　土師器は６点図化している。46～48は杯である。46・47は底部を欠失しているが、どちらも丸みをおびた形態をとると思われる。48は平底である。３点ともに外面は磨滅が激しく調整は不明である。内面は基本的にはナデ調整を施しており、47は板状工具痕が観察される。46・47はカマドの焼成部手前から出土している。３点とも磨滅の状態からカマドでの使用が想定される。甕は49と50の２点である。49はカマドの右側の床面上から出土したものである。口縁部と体部の一部を欠失している。かなり細かく破砕された状態で出土した。小型の甕で、全体にやや厚手である。体部外面は縦方向、底部に至って横方向のハケ調整を交える。口縁部は内外面ともに横方向にナデており、内面は磨滅が激しいがナデ調整を施していたと思われる。内面には粘土紐痕を明瞭に残す。底部にカマドの支脚との接点の痕跡が観察される。50はカマドの左側で出土した、小型の甕の口縁部である。体部外面にハケ、口縁部内外面に横方向ナデ、体部内面に横方向のナデが観察される。51は鉢としている。内外面ともに磨滅が激しいが、内面は口縁部に横方向のナデ、杯部はナデ調整を施しているようである。外面の調整は不明である。



第13図　ＳＨ08の位置

ＳＨ08

検出状況　調査区の中央部の北東寄りで検出している。遺構は全体を確認することができ、他の遺構との切り合いは認められない。北東約７ｍにＳＨ01が、北約10mにＳＨ10が、南約13mにＳＨ06・07が、西約15mにＳＨ16が検出されている。

形状・規模　平面形は方形を呈している。北西辺の中央部やや右寄りにカマドを有している。カマドを基準として主軸を設定した。主軸の方位はN43°Wである。北西辺から順に時計回りに辺の長さを示せば5.48m、5.48m、5.22m、5.24mとなる。各辺は比較的直線的であるが、その長さにはばらつきがあり正方形にはならない。カマドを有する北西辺の長さが目につく。検出面から床面までの深さは30cm、床面の標高は51.90mである。検出した床面積は25.8㎡である。

施設　カマド・周壁溝・土坑が検出された。柱穴は検出されなかった。

カマド　北西辺で造り付けのカマドが検出されている。主軸方位はほぼ住居跡の主軸と同方向を指している。カマドは盛土によって築かれているが、シルト質極細砂を主体としたもので粘土等の使用は認められない。このカマドの盛土は住居跡埋土とよく似ており、その区別は非常に困難である。規模は、焚口部の幅84cm、奥行き144cmを測り、残存高は最大値で18cmである。焼成部は床面に較べてわずかに窪み、煙道は焚口部奥から急激な立ち上がりをみせ、検出面のレベルで屈曲して緩やかな傾斜となり屋外に向かっている。屋外に突出した煙道の長さは15cmである。カマド内には４層の土層の堆積が認められる。大きくは上に１層、下に３層の２つに分けられる。上層は褐灰色の極細砂、下層は焼土・炭化物の混じった褐色の極細砂質シルトと暗褐灰色の極細砂を主体としている。焼成部の底部には焼土面が確認され、その範囲は長軸30cm、短軸20cmを測る。支脚は検出されておらず、断ち割りの結果、その痕跡も認められなかったが、カマド内の埋土中から珪化木の破片が火を受けて赤化した状態で出土している。当地方では、珪化木をカマドの支脚として利用していることがあるため、当住居跡もその可能性が指摘される。

周壁溝　周壁溝が検出され、北西辺のカマドの設置されている部分を除いて全周している。床面での幅は10～25cm、底での幅は８～18cmであり、床面からの深さは10cmを測る。

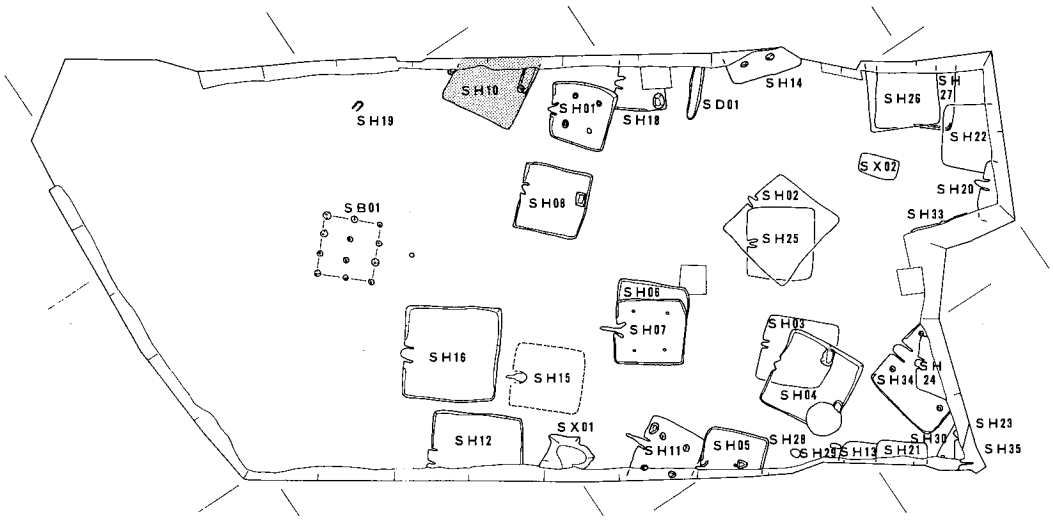
土坑　　カマドの対面の位置、南東辺に沿って、中心から右寄りで土坑１を検出した。形状は方形を呈している。規模は検出面で長軸100cm、短軸85cm、底面で長軸65cm、短軸38cm、深さは40cmを測る。この土坑は土手をもっており、特に、カマド側に顕著である。幅は最大部で上端で20cm、下端で40cmを測る。高さは最大でも３cmと低い。土手は南東辺に向かって次第に細くなり、南東辺に沿った部分では消滅している。土坑内の埋土は基本的には住居跡の埋土と変わりがないが、炭化物が混入している。

出土遺物　　土器のみが出土している。

須恵器の杯身・杯蓋・壺・高杯、土師器の杯・甕・製塩土器などが出土しているが、図化できたものは８点である。土器の出土は量的にはカマド内が最も多い。器種は須恵器の壺と土師器の甕を図化している。

須恵器　　出土した須恵器のうち杯身・杯蓋・高杯・壺を図化している。52はカマドの左側の床面上から出土したものである。天井部を欠失しており、約1/7の残存である。天井部と口縁部の境には稜線が認められるが、さほど明瞭なものではない。口縁端部内面には内傾して段をもっている。ロクロ回転は左回転である。53と54は杯身である。53はカマドの左側の床面上から、54は埋土中からの出土である。形態に違いがあり、53は口縁端部内面が内傾して面をもつのに対し、54は丸くおさめている。器壁も53が厚く、54は薄い。底部の回転ヘラケズリはどちらも狭い範囲にとどまり、ロクロ回転は左回転である。55と56は有蓋高杯である。55の口縁端部内面は内傾して面をもつ。脚部には３方向に方形透かしがみられる。56は杯部下半から脚部にかけてのものであるが、55と同じ形態のものと考えられる。57は壺の口縁部である。小型の部類のもので、上下２段に凸帯を配しその間に波状文がみられる。

土師器　　土師器は２点図化している。58はカマドから出土した小型の甕で、火を受け赤化している。内外面はナデ調整を基本としている。口縁部内面には指頭圧痕がみられる。59はカマドの左側床面上の出土である。内外面ともにナデ調整を基本としているが磨滅が激しく調整の観察は困難である。カマド内からは他に大型の甕の破片が２個体程度出土しているが図化には至っていない。



第14図　ＳＨ10の位置

ＳＨ10

検出状況　調査区の中央部の北東隅で検出している。遺構は調査区境に位置しているため、全体を検出することができなかった。西部コーナーと南部コーナーを含む３辺を検出しているが、２辺は調査区外にのびており全体を検出することは叶わず、北西辺の１辺のみを確認している。住居跡全体の６～７割程度の検出である。南東約７ｍにＳＨ01が、南約10mにＳＨ08が検出されている。調査区内の北東側ではこのさき北西の後背湿地に移行してゆく。生活面は、その標高を次第に下げてゆき、遺構密度は疎らになってゆく。

形状・規模　全体を把握していないが、平面形は方形を呈していると考えられる。北西辺のほぼ中央部と考えられるあたりにカマドを有している。カマドを基準として主軸を設定した。主軸の方位はN32°Wである。北西辺から順に時計回りに辺の長さを示せば（2.45m)、未検出、(5.50m)、6.05mとなる。各辺は比較的直線的である。検出面から床面までの深さは最も深い南東辺で25cmを測るが、北西辺では５cm程度と浅い。床面の標高は 51.75mである。検出した床面積は23.3m²であるが、これは2/3程度で全体では推定で35m²程度になるものと思われる。

施設　カマド・土坑が検出された。柱穴は検出されなかった。

カマド　北西辺で造り付けのカマドが検出されている。検出したのはその一部で半分近くは土層観察用の側溝によって削平された。主軸方位はほぼ住居跡の主軸と同方向を指していると思われる。検出されたのは煙道部と焼成部の一部で袖部は遺構の残りが良くないこともあって検出することはできなかった。規模は、焚口部の幅は検出している部分で40cm、奥行き70cmを測る。焼成部は床面に較べて約10cm程度窪み、平面的な規模は長軸45cm、短軸25cmである。ただし、短軸方向は全体を検出しておらず一部削平を受けている。煙道は焚口部奥から急激な立ち上がりをみせ、屋外に突出した長さは25cmである。焼成部の底部には焼土面が確認されるが、支脚は設置されているものは確認できなかった。遺物の中に長さ14cm、幅は残存で５cm、厚さ２cmの棒状の珪化木が出土している。観察すると火を受けた痕跡がみられたことから、カマド内で使用されていたことが想定され、支脚の一部であると考えられる。

土坑　カマドの対面の位置、南東辺に沿って、中心から右寄りで土坑１を検出した。形状は方形を呈していると思われるが北東部を欠失している。規模は検出面で長軸223cm、短軸105cm、深さは18cmを測る。さらに、この土坑と切り合い関係は不明であるが、径50cm程度の柱穴状の遺構が検出されている。深さは約20cmを測る。あるいは同一の遺構である可能性も考えられる。

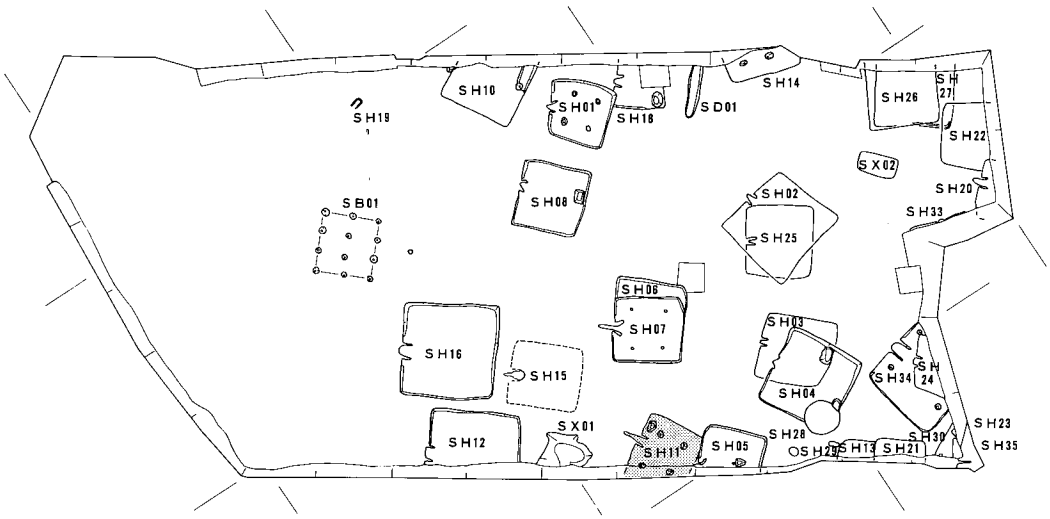
出土遺物　土器のみが出土している。

須恵器の杯身・杯蓋・壺、土師器の甕・高杯などが出土しているが、図化できたものは７点である。土器の出土は量的にはカマド付近が最も多い。器種は須恵器の杯と土師器の甕を図化している。図化していないが、他に須恵器の杯身が３個体、杯蓋が２個体、土師器の甕が２個体、高杯が１個体程度出土している。

須恵器　出土した須恵器のうち杯身・杯蓋・高杯・壺を図化している。杯蓋は天井部と口縁部との境に稜線のあるもの（60）とないもの（61）の２種を図化している。口縁端部内面はど

ちらも内傾して面をもっている。ロクロ回転は左回転である。62はカマド内から出土したもので、杯身としている。口縁部は直立ぎみで、口縁端部内面は内傾して面をもつ。ロクロ回転は左回転である。63は埋土から出土した有蓋高杯である。杯部約1/2と脚部の一部が残存している。脚部には３方に方形透かしが、杯部下半から脚部にかけてはカキ目がみられる。口縁部はやや内傾して立ち上がり、端部内面は内傾して面をもつ。ロクロ回転は左回転である。64は口縁部を欠失している壺である。おそらく短頸壺になるものと思われる。底部には回転ヘラケズリがみられ、体部は回転ナデで仕上げる。

土師器　　土師器は２点図化している。いずれもカマド内からの出土である。65は大型の甕で、若干長胴ぎみの形態を示す。頸部は比較的径が大きくこれが全体のプロポーションに影響を与えている。調整は体部外面に縦方向のハケ、口縁部部は横方向のナデで仕上げる。内面は逆に体部にナデ、口縁部は横方向のハケがみられる。ただし、体部外面のハケと口縁部内面のハケはその単位に違いをみせる。66は小型のもので、磨滅が著しく調整は不明であるが、口縁部には横方向のナデが施されていたものと思われる。どちらの土器もカマド内から出土していることもあり、火を受けた痕跡が顕著である。



第15図　ＳＨ11の位置

ＳＨ11

検出状況　　調査区の中央部の南端で検出している。遺構は調査区境に位置しているため、全体を検出することができなかった。北東部コーナーと南東部コーナー付近を含む３辺を検出しているが、２辺は調査区外にのびており全体を検出することは叶わず、西辺は全く範囲外で、全体を確認しているのは東辺の１辺のみである。他の遺構と重複して検出されており、ＳＨ05と切り合い関係が認められ、南東コーナーの部分はＳＨ05に切られている。住居跡全体の８割程度を検出しているものと思われる。北東約12mにＳＨ06･07が、北西約20mにＳＨ16が検出されている。

形状・規模　　全体を把握していないが、検出した状況から、これ以上形状の変化する可能性はなく、平面形は方形を呈していると考えられる。北西辺のほぼ中央部と考えられるあたりにカマドを有している。カマドを基準として主軸を設定した。主軸の方位はN27°Wである。北西辺から順に時計回りに辺の長さを示せば（4.80m)、4.90m、(3.40m)、未検出となる。各

辺は比較的直線的である。検出面から床面までの深さは40cmを測り、比較的深い。床面の標高は52.10mである。検出した床面積は20.5m²であるが、全体では推定で25m²程度になるものと考えられる。

施設　　カマド・柱穴・土坑が検出された。周壁溝は検出されなかった。

カマド　　北西辺で造り付けのカマドが検出されている。主軸方位はほぼ住居跡の主軸と同方向を指している。一部を撹乱により削平されているが、ほぼ全体を検出している。カマドは盛土によって築かれているが、住居跡埋土との区別は困難である。粒子等には違いが認められず、袖部は埋土と比較すると若干灰～白色系の色調を帯びているのが唯一の特徴である。ただし、カマド内については、焼土あるいは炭化物の存在から比較的袖部の立ち上がりの識別は容易である。検出したカマドは形態的には長い袖部と煙道をもつことを特徴としている。規模は、焚口部の幅68cm、奥行き254cmを測り、残存高は30cmである。焼成部は床面に較べて約８cm程度窪み、平面的な規模は長軸124cm、短軸82cmである。煙道は焚口部奥から壁のライン付近で緩やかに傾斜したあと屋外に突出した部分は水平ぎみに移行して、最後の５cmで急に立ち上がる。屋外に突出した長さは130cmである。この意味ではＳＨ06･07との類似した形態を示す。焼成部の底部には焼土面が確認され、その範囲は直径40cmの円形を呈しており、非常によく焼けている。カマド内には基本的には２層の土層の堆積が認められる。上層には暗褐色シルト質極細砂、下層には灰褐色シルト質極細砂～細砂が堆積しており、カマド底面には焼土・炭化物が堆積している。検出した焼土部分はカマドの袖部よりも住居跡中心部に近く位置しており、他の住居跡とのカマドと比較すれば袖部はいま少し、長くのびていたものと思われる。支脚は設置されていなかったが、住居跡埋土から赤化した石が出土しており、支脚として利用されていた可能性が考えられる。

柱穴　　４本の柱穴が検出された。

Ｐ１は掘り方の直径45cm、柱痕の直径20cm、床からの深さは40cmである。Ｐ２は掘り方の直径55cm、柱痕の直径30cm、床からの深さは45cmである。Ｐ３は掘り方の直径60cm、柱痕の直径35cm、床からの深さは50cmである。Ｐ４は掘り方の直径50cm、柱痕の直径35cm、床からの深さは55cmである。

柱穴間の距離は、Ｐ１～Ｐ２間が2.90m、Ｐ２～Ｐ３間が2.15m、Ｐ３～Ｐ４間が2.45m、Ｐ４～Ｐ１間が2.40mである。

土坑　　カマドの中心部から右側に150cm離れた北東部コーナー付近で土坑１を検出した。形状は不整形ながら楕円径を呈していると思われる。規模は検出面で長軸95cm、短軸60cm、底部で長軸50cm、短軸32cm、深さは23cmを測る。

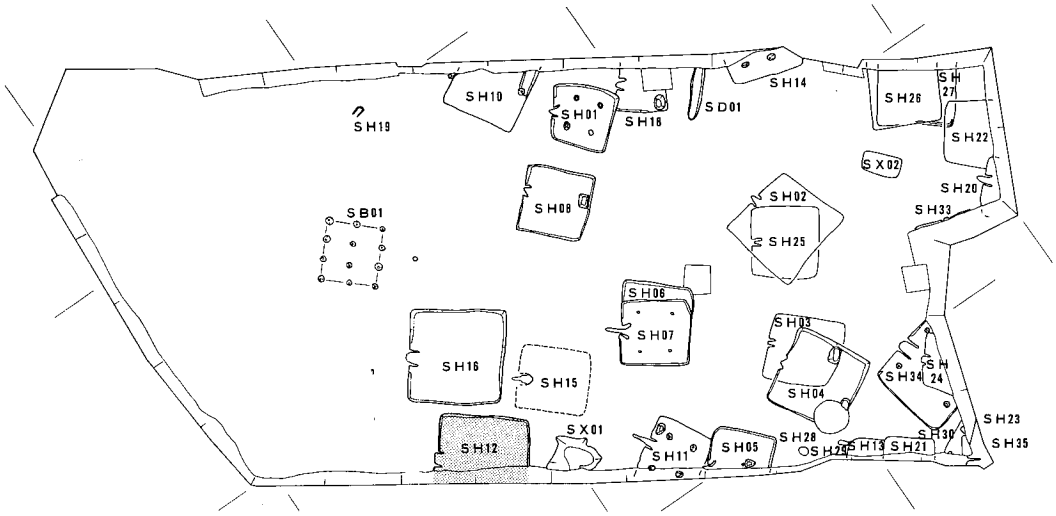
出土遺物　　土器のみが出土している。

須恵器の杯身・杯蓋・壺、土師器の甕・杯・製塩土器などが出土しているが、図化できたものは６点である。土器の出土は量的にはカマド付近が最も多い。器種は須恵器の杯身と土師器の椀・製塩土器を図化している。他に須恵器の杯身が１個体、甕が１個体、土師器の甕が４個体、杯が２個体程度出土しているが、いずれも破片の状態で、図化することができなかった。

須恵器　　出土した須恵器のうち杯身を図化している。67の杯身はカマド内から出土したもので、

口縁部は約2/3程度残存し、底部は欠失している。口縁部はやや内傾して立ち上がり、口縁端部内面はわずかに段を有しているが丸くおさめる傾向にある。外面に残存している範囲では回転ヘラケズリは観察できない。ごく狭い範囲に施されていたものと考えられる。ロクロ回転方向は不明である。

土師器　　土師器は５点図化している。このうち68・69・70・72はカマド付近から出土している。68は約1/3の残存で、調整は磨滅が激しく不明である。69は底部付近に指頭圧痕が観察されナデで仕上げている。70～72は製塩土器でる。72はカマドの左側袖付近の出土である。底部がやや尖底ぎみの形態をとるものである。他の２点は平底である。70には外面に平行タタキがみられる。



第16図　ＳＨ12の位置

ＳＨ12

検出状況　　調査区の中央部の南端で検出している。遺構は調査区境に位置しているため、全体を検出することができなかった。北部コーナーと東部コーナーを含む３辺を検出しているが、北西辺と南東辺の２辺は調査区外にのびており全体を検出することは叶わず、南西辺は全く範囲外で、全体を確認しているのは北東辺の１辺のみである。他の遺構との切り合いは認められない。住居跡全体の６割程度を検出しているものと思われる。南東約15mにＳＨ11が、北東約８ｍにＳＨ16が検出されている。

形状・規模　　全体を把握していないが、平面形は方形を呈していると考えられる。北西辺にカマドを有している。カマドを基準として主軸を設定した。主軸の方位はN52°Wである。北西辺から順に時計回りに辺の長さを示せば（4.65m）、7.15m、（3.70m）、未検出となる。各辺は比較的直線的である。コーナー部は北部は直角に屈曲しているのに対し、東部はやや開いている。検出面から床面までの深さは５～10cmを測り、比較的浅い。床面の標高は52.10mである。検出した床面積は28.4m²であるが、全体では推定で50m²程度になるものと考えられる、当遺跡では大型の部類にはいるものである。

施設　　カマド・周壁溝が検出された。

カマド　　北西辺で造り付けのカマドが検出されている。主軸方位は住居跡の主軸と同方向を指している。ほぼ全体を検出している。カマドは盛土によって築かれているが、住居跡埋土と

の区別は困難である。検出したカマドは形態的には幅が広く、煙道が短いことを特徴としている。ただし、住居跡全体の残存高が10cm以下と良好でないことで、当然煙道の検出長は短くなっていることは考慮すべきである。さらに、幅に対して袖部が比較的短いが、これも残存状況から袖部の端部を正確に捉えきれていないことが原因である。規模は、焚口部の幅115cm、奥行き136cmを測り、残存高は10cmである。焼成部は床面に較べて約10cm程度窪み、規模は長軸124cm、短軸110cmである。煙道は焚口部奥から屋外に突出した部分で急に立ち上がる。屋外に突出した長さは18cmである。焼成部の底部には焼土面が確認され、その範囲は長軸50cm、短軸40cmを測る。カマド内には基本的には１層の土層の堆積が認められる。暗褐色極細砂質シルトが堆積しており、下層には炭化物・焼土がみられる。支脚は設置されていなかったが、住居跡埋土から赤化した珪化木が出土しており、支脚として利用されていたものと考えられる。

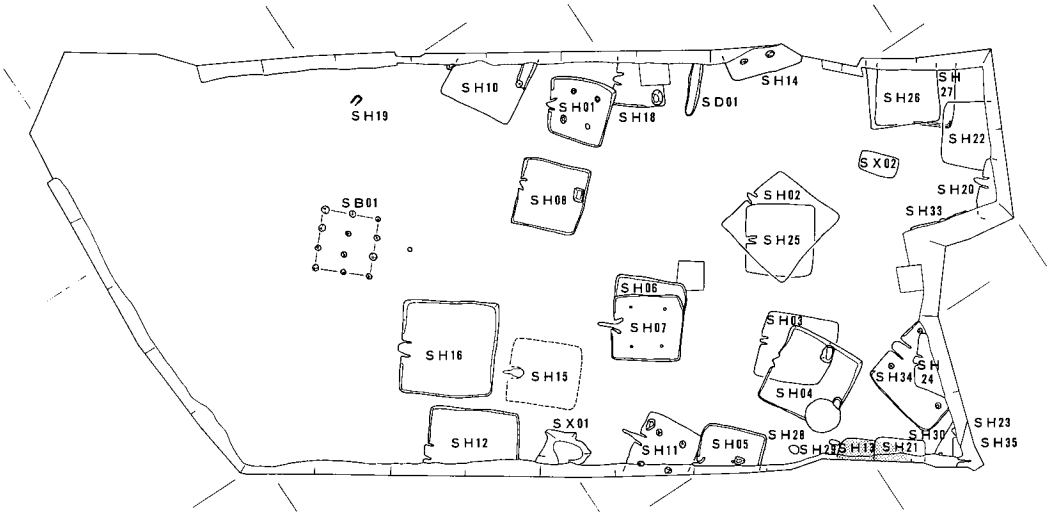
周壁溝　　周壁溝が検出されており、住居跡を検出した範囲内では、北西辺のカマドの設置されている部分を除いて全周している。床面での幅は５～10cm、底での幅は３～６cmであり、床面からの深さは６cmを測る。

出土遺物　　土器のみが出土している。

須恵器の杯身・杯蓋、土師器の甕・椀・甑などが出土しているが、図化できたものは11点である。土器の出土は量的にはカマド付近が最も多い。須恵器の杯身・杯蓋と土師器の甕・甑を図化している。他に須恵器の杯身・杯蓋、土師器の甕・杯が出土しているが、いずれも破片で図化することはできなかった。

須恵器　　出土した須恵器のうち杯身と杯蓋を図化している。このうち、73の杯蓋、79・80の杯身67の杯身はカマド内から出土したもので、78は南東辺に沿った床面上から出土している。杯蓋は４点図化している。４点とも天井部と口縁部を分ける稜線は退化して、わずかに73にその痕跡をとどめている。口縁端部は73・75・76は内面が内傾して面をもつ形態を示し、74は丸くおさめる。天井部に施されている回転ヘラケズリは範囲が狭い。ロクロ回転は73・76が左回転、74・75が右回転である。杯身は４点図化している。口縁部はいずれも内傾して、立ち上がりは比較的短い。すべて口縁端部は丸くおさめる形態をとる。杯部は全体に浅い。ロクロ回転は77・80が左回転、78が右回転である。79は不明である。回転ヘラケズリは底部のごく狭い範囲に限られる。

土師器　　土師器は３点図化している。このうち82・83がカマド内から出土している。81は小型のもので全体に歪であるが、体部から口縁部にかけてなだらかにひらく形態をもつ。調整は外面全体に縦方向のハケが施されていたようであるが、磨滅が激しく観察は困難である。内面は体部に縦方向の板ナデ、口縁部は横方向のハケ調整で仕上げている。火を受けた痕跡が顕著である。82は口縁部が短く外反するものである。体部外面に縦方向のハケ、体部内面に板ナデが観察できる。口縁部は内外面ともに横方向のナデで仕上げる。83は甑である。底部と把手の部分を欠失している。外面には縦方向、内面には横方向のハケが観察され、口縁部は内外面ともに横方向のナデで仕上げている。82は焼成を受けて磨滅・風化が激しいが、83は残存状況は比較的良好である。



第17図　ＳＨ13の位置

ＳＨ13

検出状況　調査区の南端で検出している。遺構は調査区境に位置しているため、全体を検出することができなかった。北部コーナーと２辺を検出しているが、北西辺は調査区外にのび、北東辺は他の遺構に切られており一部のみしか検出されなかった。他の遺構との切り合いが認められ、ＳＨ21に切られている。北西約10mにＳＨ05が、南約７mにＳＨ04が検出されている。

形状・規模　全体を把握していないが、平面形は方形を呈していると考えられる。北東辺にカマドを有していたと考えている。カマドを基準として主軸を設定した。主軸の方位はN53°Eである。検出した規模は北西辺が（2.50m）北東辺が（4.30m）である。コーナー部は直角よりやや開いている。検出面から床面までの深さは38cmを測り、比較的深い。床面の標高は52.25mである。検出した床面積は9.4m²であるが、全体の２割以下の検出であると考えている。

施設　カマドの痕跡が検出された。他の施設は検出されなかった。

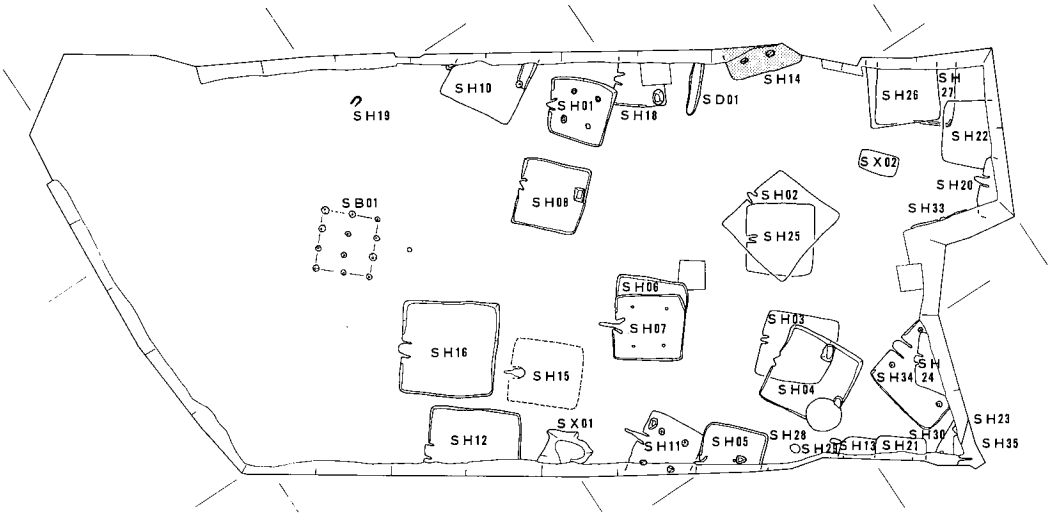
カマド　北西辺で造り付けのカマドが検出されている。ただし、焼土部分を検出しているのみで、しかも位置はＳＨ21の床面上である。ＳＨ13は21と重複して検出されている。断面では両者の切り合い関係はＳＨ21の方が新しいと判断できたが、残念ながら両者を平面的に区別することができなかった。検出した焼土はその位置関係から当初ＳＨ21のカマドに関連するものかと考えた。しかし、袖の部分や煙道部が削平されていること、遺物量が極端に少ないことなどから、ＳＨ21に関連するものではなく、むしろＳＨ13のカマドの焼成部の痕跡であると考えるに至った。あとから築かれたＳＨ21は床面の標高がＳＨ13より低く、ＳＨ13のカマドを完全に削平したものと考えられる。焼成部の焼土のみがＳＨ21の床面に痕跡をとどめているのみである。焼土の範囲は長軸55cm、短軸40cmを測る。

出土遺物　土器のみが出土している。

須恵器の杯身・杯蓋、土師器の甕などが出土しているが、図化できたものは須恵器の２点である。

須恵器　出土した須恵器のうち杯身と杯蓋を図化している。この２点が、出土位置の明確なものである。コーナー部分の床面上から出土している。105は杯蓋である。約1/2の残存で、天

井部は丸い形態をとる。天井部と口縁部部を分ける稜線は退化しており沈線を１条施しているのみである。口縁端部は丸くおさめる。天井部の回転ヘラケズリは1/2以下の範囲に限定され、ロクロ回転は左回転である。109は杯身である。径が比較的大きく、偏平な印象をもつものである。口縁部はやや内傾して立ち上がり、底部の回転ヘラケズリの範囲は1/2以下と狭い。ロクロ回転は右回転である。



第18図　ＳＨ14の位置

ＳＨ14

検出状況　　調査区の北東部で検出している。遺構は調査区境に位置しているため、全体を検出することができなかった。北西部コーナーと南西部コーナーを含む３辺を検出しているが、西辺と東辺の２辺は調査区外にのびており全体を検出することは叶わず、北辺は全く範囲外で、全体を確認しているのは南辺の１辺のみである。他の遺構との切り合いは認められない。住居跡全体の３割程度を検出しているものと思われる。南西約14mにＳＨ02が、西約９mにＳＨ18が、南東約13mにＳＨ26・27が検出されている。

形状・規模　　全体を把握していないが、平面形は方形を呈していると考えられる。西辺にカマド施設を有している。カマドを基準として主軸を設定した。主軸の方位はN72°Wである。西辺から順に時計回りに辺の長さを示せば（2.80m）、未検出、（2.00m）、5.85mとなる。南辺をみるかぎり比較的直線的である。コーナー部は両方ともに直角より若干ひらいている。検出面から床面までの深さは45cmを測り、比較的深い。床面の標高は51.55mである。検出した床面積は10.4m²である。全体の４割程度と考えられる。

施設　　カマドの一部と柱穴を検出した。

カマド　　西辺で造り付けのカマドの一部が検出されている。カマドの半分以上は調査区外に存在しているが、残存していた部分も土層観察用の側溝により削平され、袖部を欠失している。検出したのは、焼土と堆積した炭化物である。従って、主軸方位は不明であるが焼土の位置は南西コーナー部から約３m内側で検出している。焼土はカマドの焼成部にあたると考えられ、その範囲は長軸40cm、短軸30cmを測る。煙道部は検出されず、また支脚も調査範囲内では設置された痕跡はなかった。

柱穴　　２本の柱穴が検出された。

４本柱の住居跡と想定して、位置関係からＰ１、Ｐ４と命名した。Ｐ２とＰ３は調査範囲外と想定される。Ｐ１は平面形が楕円形を呈し、掘り方は長軸60cm、短軸40cm、床からの深さは55cmである。Ｐ２も平面形は楕円形を呈し、掘り方は長軸65cm、短軸55cm、床からの深さは60cmである。

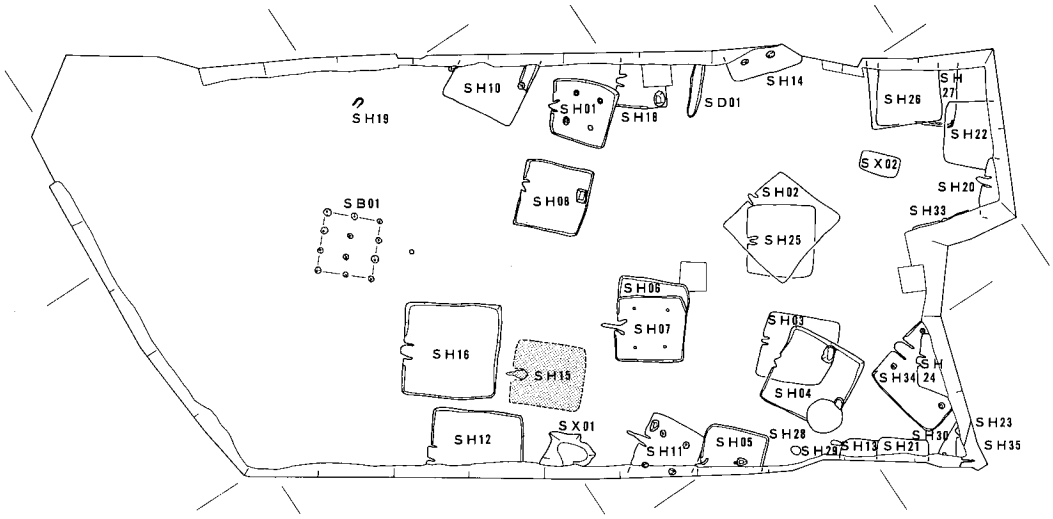
柱穴間の距離は2.10mである。

出土遺物　土器のみが出土している。

須恵器の杯身・器台、土師器の甕・鉢などが出土しているが、図化できたものは３点である。出土した遺物の量は全体に少ないがカマド付近から比較的多く出土している。図化している以外にカマド付近から土師器の甕、須恵器の杯蓋・甕が出土しているが、いずれも破片のため、図化はできなかった。

須恵器　84は側溝内から出土したものである。ほぼ完形のものである。口縁部は内傾して立ち上がり短い。口縁端部は丸くおさめる。底部の回転ヘラケズリは1/4以下に限定されており、ロクロ回転は右回転である。85は器台の脚部である。３段の凹線で区切られた上下に波状文を施している。上段は３条、下段は２条の単位である。４方向に方形の透かしが２段認められる。内面には指頭圧痕が観察される。

土師器　カマド付近から出土した86を図化している。底部を欠失しており、鉢とした。口縁部外面に横方向のナデ、底部から体部にかけては下→上方向に強い指ナデと指頭圧痕が観察される。内面には横方向にナデ調整を施している。



第19図　ＳＨ15の位置

ＳＨ15

検出状況　調査区の南東部で検出している。ＳＨ16、ＳＨ12、ＳＨ07に囲まれた位置で検出している。遺構は残存状況が非常に悪く、カマドとそれに付随する北西辺の一部のみを検出したにとどまった。ＳＨ16・12に隣接しているが、検出状況からは切り合いは認められない。カマドの検出状況から推して、床面は削平を受けていないと思われるが、大部分の壁が残存しておらず、また周壁溝をもたない住居跡であったと思われ、そのため形状・規模は明らかではない。当住居跡のカマドとＳＨ16の南東辺とは約80cm、ＳＨ12の北東辺とは３mの距離である。

形状・規模　カマドのみの検出のため、住居跡の形状及び規模は不明である。床面の標高は残存しているカマドの周囲で52.0mである。

施設　カマドのみを検出している。その他の施設である柱穴、周壁溝、土坑等は検出されなかった。

カマド　北西辺で造り付けのカマドが検出されている。ただし、残存状況は良好とは言えず、袖の部分で高さ約５cm程度残っているのみである。袖部は左右を検出しているが、不明確な状況といえる。カマドの内面については焼成時の堆積物との差異により、その立ち上がりは比較的容易に区別できた。しかし、外面については住居内埋土がほとんど残存しておらず、検出した袖部についても盛土の様相を呈していないため、その立ち上がりの有無については疑問が残る。このカマドについては、焼成部と煙道を検出したのみと考えた方が良いと思われる。

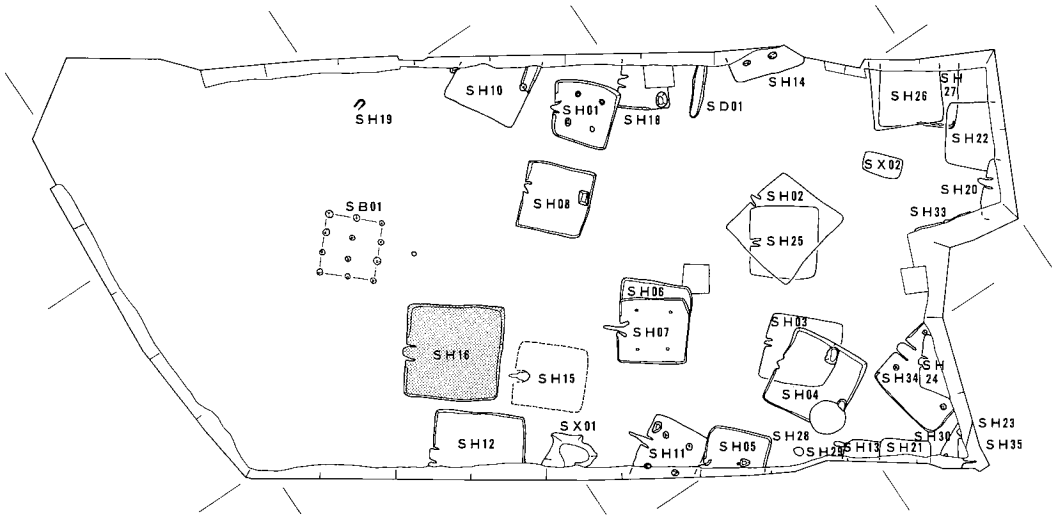
カマドは主軸方位をN50°Wにとり、規模は焚口部の幅90cm、奥行き147cmを測る。焼成部はごく僅かに窪み、平面的には隅円の三角形状を呈している。規模は長軸88cm、短軸84cmで、深さは７cmである。屋外に向かって緩やかな傾斜をもって煙道が取りついており、突出した煙道の長さは60cmと住居跡の残りが悪いわりには長い。焼成部の奥に支脚が設置されている。支脚は石製のもので長さ25cm、幅14cm、厚さ８cmの偏平なものである。約８cmを地中に埋め込んでいる。したがって17cmが地表に突出しており、このことから少なくとも17cmの深さで住居跡が残存していることが想定できたが、埋没面の土壌化の影響で平面的な検出はできなかった。カマド内焼成部には炭化物の堆積が観察された。焼成部の底部には焼土面があり、その範囲は長軸35cm、短軸30cmを測る。

出土遺物　土器のみが出土している。

須恵器の杯身・杯蓋・壺、土師器の甕などが出土しているが、図化できたものは３点である。カマド内からは土師器の甕の破片が出土しているが、いずれも小片のため図化することはできなかった。カマドの周辺と、住居跡の床面の範囲内と考えられる地点から遺物が出土している。土器の分布からおよその住居の規模は想定することができ、１辺５m程度のものであったと思われる

須恵器　87・88ともに当住居跡の床面の範囲内と想定される位置から出土したものである。87はカマドの右側から出土したので1/6の残存の小片である。天井部と口縁部を分ける稜線は退化し、口縁端部内面はやや肥厚し内傾した面をもっている。88は内傾した口縁部をもつ杯身である。口縁端部は丸くおさめる。ロクロ回転は左回転である。

土師器　89の甕も床面の範囲内と想定される位置から出土したものである。口縁部から底部にかけての約1/3が残存している。口縁部の径が反転復元で12.6cmと小型のものである。形状は頸部径が比較的大きく口縁部は緩やかにひらいている。体部の内外面はナデ調整を施しており、口縁部内外面は横方向のナデで仕上げている。器壁は厚く、内面には粘土紐の痕跡が明瞭に観察できる。



第20図　ＳＨ16の位置

ＳＨ16

検出状況　　調査区の中央部の南東部で検出している。遺構は全体を検出することができた。他の遺構と切り合い関係は認められない。南西約８ｍにＳＨ12が、北約12mにＳＢ01が、東約15mにＳＨ08が検出されている。ＳＨ12とは中心部で８ｍ離れているが、実際には隣接して検出されており、ＳＨ12の北東辺とＳＨ16の南西辺はほぼ平行しており、両者は60cm程度の間隔に過ぎない。

形状・規模　　平面形は方形を呈している。北西辺のほぼ中央部にカマドを有している。カマドを基準として主軸を設定した。主軸の方位はN54°Wである。北西辺から順に時計回りに辺の長さを示せば7.32m、7.54m、7.44m、7.52mとなる。カマドの設置されている北西辺と対面である南東辺は直線的であるが、他の２辺は中央部にやや膨らみをもっている。コーナーは基本的には直角に屈曲するが、２辺が膨らんでいる影響で若干ひらいている。検出面から床面までの深さは８～16cmと浅く、床面の標高は52.0mである。床面積は52.8m²と当遺跡では最大の面積をもつものである。

施設　　カマド・周壁溝が検出された。柱穴・土坑は検出されなかった。

カマド　　北西辺で造り付けのカマドが検出されている。カマドの主軸方位は住居跡の主軸とほぼ同じである。カマドは盛土によって築かれているが、住居跡埋土との区別は非常に困難である。カマド内部は炭化物・焼土等の存在で埋土と袖部との区別は比較的容易であるが、袖部外面についてはほとんど区別できない。規模は焚口部の幅100cm、奥行き120cmを測り、残存高は最大値で15cmである。焚口部奥から屋外に向かって比較的急な傾斜をもって煙道部が取り付いている。屋外に突出した煙道部の長さは28cmと短いが、幅は最大値で90cmと広い。カマド内は５層の土層堆積が観察され、上部に堆積している極細砂を主体としたものは住居跡埋土と近似した土層で、下部に堆積している、暗褐色シルト質極細砂、炭化層、灰白色極細砂シルトの３層が焼成時にともなう堆積物であろう。焼成部には焼土面があり、その範囲は長軸45cm、短軸42cmとほぼ円形を呈する。カマド内には支脚は設置された状況は確認されなかったが、住居跡埋土中より長さ14cm、幅８cm、厚さ２cmの偏平な砂岩系の石材が出土している。一部赤化していることから、支脚として使用されていたものの可能性が高い。

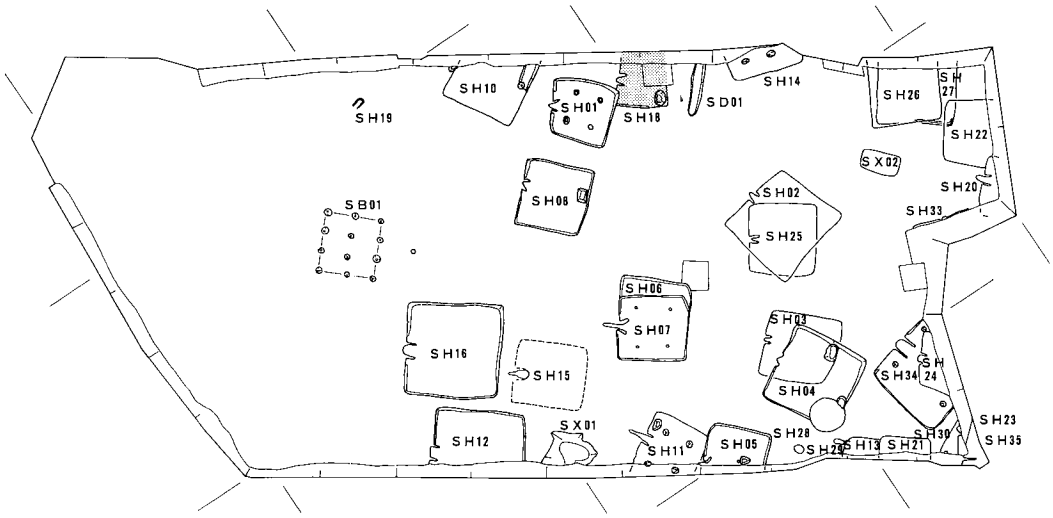
周壁溝　　周壁溝が検出され、北西辺のカマドの設置されている部分を除いて全周している。床面での幅は10～20cm、底での幅は８～10cmであり、床面からの深さは８cmを測る。検出例でみるかぎり周壁溝は一様にカマドの袖部で途切れており、その位置が周壁溝とカマドとの接点であるとするならば、当住居跡のカマドの袖の基部の幅はさらに広く60cm程度の幅をもっていた可能性も考えられる。袖部の外面と住居内埋土との区別が困難な状況ではひとつの目安とすべきであると考えている。

出土遺物　　土器のみが出土している。

須恵器の杯身・杯蓋・壺、土師器の甕などが出土しているが、図化できたものは３点である。土器の出土は量的にはカマド付近が最も多い。器種は須恵器の杯身・杯蓋と土師器の甕を図化している。量的に多いカマド内からの遺物はそのほとんどが土師器の甕であったが、いずれも小片のため図化できなかった。

須恵器　　出土した須恵器のうち杯身・杯蓋の２点を図化している。90の杯蓋は1/10以下の小片である。天井部と口縁部を分ける稜線は退化し、凹線で区切っている。口縁端部内面は内傾して面をもつ。91の杯身は深い杯部と短く内傾する口縁部をもつものである。口縁端部は丸くおさめている。底部の回転ヘラケズリは1/2以下の範囲に限定される。ロクロ回転は左回転である。

土師器　　土師器は92の甕の１点を図化している。カマドの右側から出土している。口縁部のみ約1/3程度の残存である。ナデ調整を施しているが、カマドで使用されていたようで、赤化し、磨滅が激しく調整の観察は困難である。



第21図　ＳＨ18の位置

ＳＨ18

検出状況　　調査区の中央の北東部で検出している。遺構は調査区境に位置しているため、全体を検出することができなかった。他の遺構と切り合い関係が認められ、ＳＨ01と西部コーナー付近で重複して検出されており、切られている。遺構は３辺を検出しているが、コーナー部が確認できたのは南部コーナーのみである。南東辺は、確認調査のグリッドによって、壁の一部が削平されており、完全に検出した辺は１辺もない。北東辺は調査区外にあり、北西辺、南西辺も調査区外にのびている。東約９ｍにＳＨ14が検出されている。

形状・規模　平面形は全体を検出していないが、方形を呈していると思われる。北西辺にカマドを有している。カマドを基準として主軸を設定した。主軸の方位はN53°Wである。北西辺から順に時計回りに辺の長さを示せば(3.45m)、3.65m、(3.55m)、(4.15m)となる。カマドの設置されている北西辺は、カマドを基準にしてやや開いている。コーナーの屈曲は直角より鋭角ぎみである。検出面から床面までの深さは20cm、床面の標高は52.05mである。検出した床面積は12.5m²であるが、全体では推定で16m²程度になるものと考えられる。

施設　カマド・周壁溝・土坑が検出された。柱穴は検出されなかった。

カマド　北西辺で造り付けのカマドが検出されている。主軸方位は住居跡の主軸とほぼ同じである。カマドは盛土によって築かれているが、住居跡埋土との区別は非常に困難である。カマド内部は炭化物・焼土等の存在で埋土と袖部との区別は比較的容易であるが、袖部外面についてはほとんど区別できない。袖部は検出状況のものより幅広であった可能性も否定できない。規模は焚口部の幅75cm、奥行き86cmを測り、残存高は最大値で22cmである。焚口部奥から屋外に向かって急な傾斜をもって煙道部が取り付いている。屋外に突出した煙道部の長さは24cmと短い。カマド内は５層の土層堆積が観察されるが、カマド本体内は４層の堆積である。大きくは上下２層に分けられ、上部に堆積している黄褐色、淡褐色系の極細砂からシルト質極細砂を主体としたものは住居跡埋土と近似した土層で、下部に堆積している褐色、黒褐色系のシルト質極細砂やシルトは炭化物・灰を含有しており焼成時にともなう堆積物であろう。焼成部の底部には焼土面があり、その範囲は直径約26cmの円形を呈する。カマド内には石製の支脚が設置されている。長さ21cm、幅12cm、厚さ７cmを測る。支脚は約10cmを地中に埋め込んでいる。この支脚から煙道部にかけてのスペースに小穴が５箇所検出されている。平面形は円形～楕円形を呈しており、深さは８～15cm程度のものである。煙道部で近接している３穴は、垂直に掘削されてはいない。底部から上面にかけて内側、つまりカマドの焼成部に向かって開口している。埋土は淡黄褐色の極細砂が堆積しており、カマドの底部との違いは明瞭である。

周壁溝　周壁溝が検出されているが、南西辺のみで確認されたのみである。西部コーナーではSH01に切られて欠失しており、反対側は土坑１の手前で途切れている。周壁溝は壁に沿って検出され、長さは260cm、床面での幅は15cm、底での幅は５cmであり、床面からの深さは７cmを測る。

土坑　土坑を１基南部コーナーに接して検出している。土手をもった形態のもので、土手を含めた平面形は長方形を呈している。規模は長軸方向に142cm、短軸方向に107cm、土手の高さは10cmを測る。土坑部分の平面形は楕円形を呈する。規模は検出面で、長軸116cm、短軸79cm、底部で長軸63cm、短軸45cmを測る。深さは45cmである。断面形状は底部から約25cmは垂直に掘削され、そこから上部検出面にかけては屈曲して緩やかに広がる。

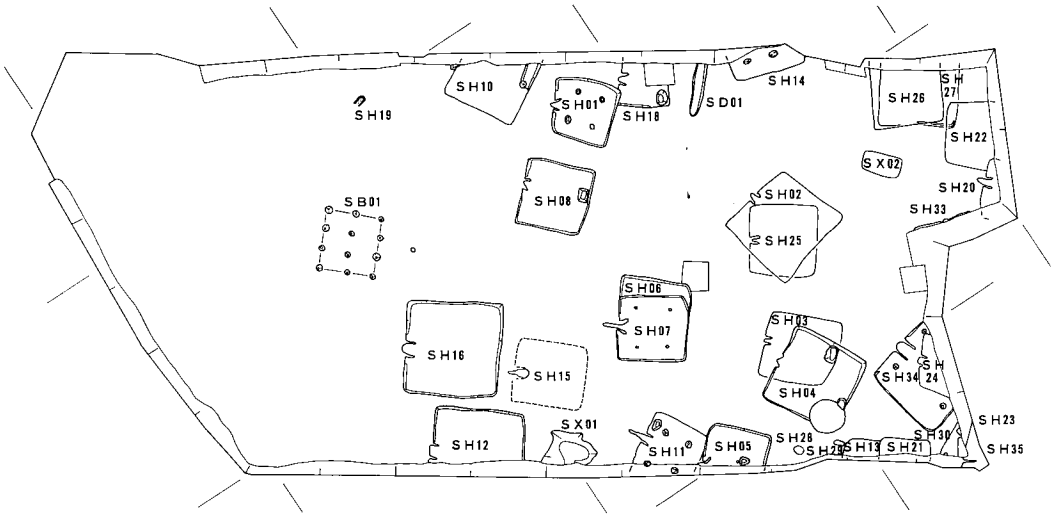
出土遺物　土器のみが出土している。

須恵器の杯身・甕、土師器の甕・製塩土器などが出土しているが、図化できたものは５点である。土器の出土はカマド付近が最も多い。特徴的なのは、カマドの左右脇で製塩土器の破片が出土していることである。小片のものがほとんどで、図化できたものは１点のみであるが、８～10個体程度になると思われる。すべてコップ形の形態をとるものと考え

られる。

須恵器　出土した須恵器のうち杯身の２点を図化している。このうち、93はカマド内から出土している。底部にやや丸みを帯びた形態を示し、口縁部は若干内傾ぎみである。口縁端部内面は内傾して面をもち、底部に施されている回転ヘラケズリは杯部の1/3程度に限定される。ロクロ回転は左回転である。94は確認調査の際にNo.50グリッドから出土しているものであるが、当住居跡のものと判断した。底部を欠失しており、約1/4の残存である。口縁部は93よりやや直立ぎみで、口縁端部内面は段をもつ。底部の回転ヘラケズリは杯部の1/2程度と考えられる。ロクロ回転は左回転である。この他、床面上から甕の肩部の破片が出土しているが図化できなかった。外面に縦方向の平行タタキが観察される。

土師器　土師器は３点を図化している。いずれもカマドの右側から出土している。95は体部から緩やかに頸部に至るものである。頸部の径は比較的小さく、短く外反する口縁部をもつ。体部外面は縦方向に板ナデが観察され、下部は磨滅のため観察不能である。体部内面に斜め方向のナデ、口縁部は内外面ともに横方向のナデを施している。96は大型の部類にはいるものである。95と較べると肩が張り口縁部の屈曲も急である。内面はナデが観察されるが外面は磨滅が激しい。両者ともカマドで使用されていたようで、赤化している。97は製塩土器である。口縁部が狭まり底部にかけて下膨れになっていくようであるが、底部を欠失している。内外面ともにナデ調整を行っているようである。



第22図　ＳＨ19の位置

ＳＨ19

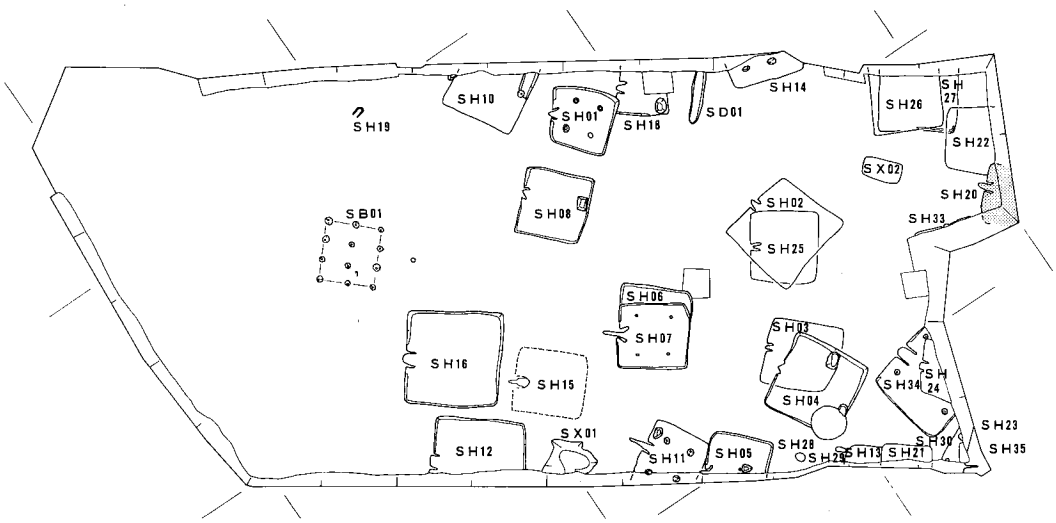
検出状況　調査区の中央の北西部で検出している。遺構は残存状況が非常に悪く、カマドのみを検出したにとどまった。他の遺構と切り合い関係は認められない。遺構が検出された地形は、北西に向かって次第に下がっており、カマドの主軸方向から考えて床面は欠失しているものと考えられる。東約10mにＳＨ10が、南西約12mにＳＢ01が検出されている。当地区ではこのＳＨ19が最も端部で検出された遺構で、これより先では遺構の検出は確認されていない。

形状・規模　カマドのみしか検出していないため、住居跡全体の形状および規模は全く不明である。

施設　カマドのみの検出にとどまった。

カマド　　カマドが検出されているが、その検出状況は良好とはいえない。焼成部と煙道部のみを検出しており、袖部は欠失している。主軸はN70°Eに方位をとっており、当地区で検出されたものとは全く方向を違えている。規模は焚口部の幅42cm、奥行き73cmを測り、残存高は最大値で10cmである。焚口部奥から屋外に向かって緩やかな傾斜をもって煙道部が取り付いているが屋外に突出している長さは不明である。カマド内には石製の支脚が設置されている。長さ22cm、幅23cm、厚さ13cmを測る。支脚は約12cmを地中に埋め込んでいる。この支脚から煙道部にかけてのスペースに小穴が２箇所検出されている。平面形は円形～楕円形を呈しており、深さは20cm程度のものである。ＳＨ18で検出されているものと同様に斜め方向に掘削されている。

出土遺物　　遺物は出土していない。



第23図　ＳＨ20の位置

ＳＨ20

検出状況　　調査区の中央の東端で検出している。遺構は調査区境に位置しているため、全体を検出することができなかった。他の遺構と切り合い関係が認められ、ＳＨ22と北部コーナー付近で重複して検出されており、ＳＨ22を切っている。遺構は２辺を検出しているが、コーナー部が確認できたのは北部コーナーのみである。住居跡の半分程度が調査区外にあり、調査区内に残存しているうちのかなりの部分が土層観察用の側溝によって削平されている。西部コーナーもこの中におさまるものと考えられる。東約５mにＳＨ33が検出されているが切り合い関係は明らかではない。

形状・規模　　平面形は全体を検出していないため明らかではないが、方形を呈していると思われる。北西辺にカマドを有している。カマドを基準として主軸を設定した。主軸の方位はN44°Wである。北西辺から順に時計回りに辺の長さを示せば（4.00m）、（1.75m）、未検出、未検出となる。唯一検出されている北部コーナーはほぼ直角に屈曲する。検出面から床面までの深さは45cmと比較的深く、床面の標高は52.25mである。検出した床面積は3.3m²である。

施設　　カマドのみが検出された。周壁溝・柱穴・土坑等は検出されなかった。

カマド　　北西辺で造り付けのカマドが検出されている。カマドの主軸方位は住居跡の主軸とほぼ

同じである。カマドは盛土によって築かれているが、住居跡埋土との区別は非常に困難である。残存状況は良くない。規模は焚口部の幅100cm、奥行き177cmを測り、残存高は最大値で40cmである。焚口部奥から屋外に向かって急な傾斜をもって煙道部が取り付いている。屋外に突出した煙道部自体は傾斜がほとんど認められない。煙道部の長さは70cmと長い。残りの良くない袖部であるが、その方向は住居跡の北西辺に直交している。これに対して、煙道部は屈曲しており、北方向に振っている。カマド内は４層の土層堆積が観察される。大きくは上下２層に分けることができる。上部に堆積している１．茶褐色シルト、２．暗茶褐色極細砂質シルトの２層は住居跡埋土と近似した土層である。下部に堆積している３．暗灰色極細砂・４．炭化層の２層はカマド使用時に伴う堆積物であろう。焼成部の底部には焼土面があり、その範囲は長軸54cm、短軸38cmの楕円形を呈する。カマド内には支脚は設置されていない。

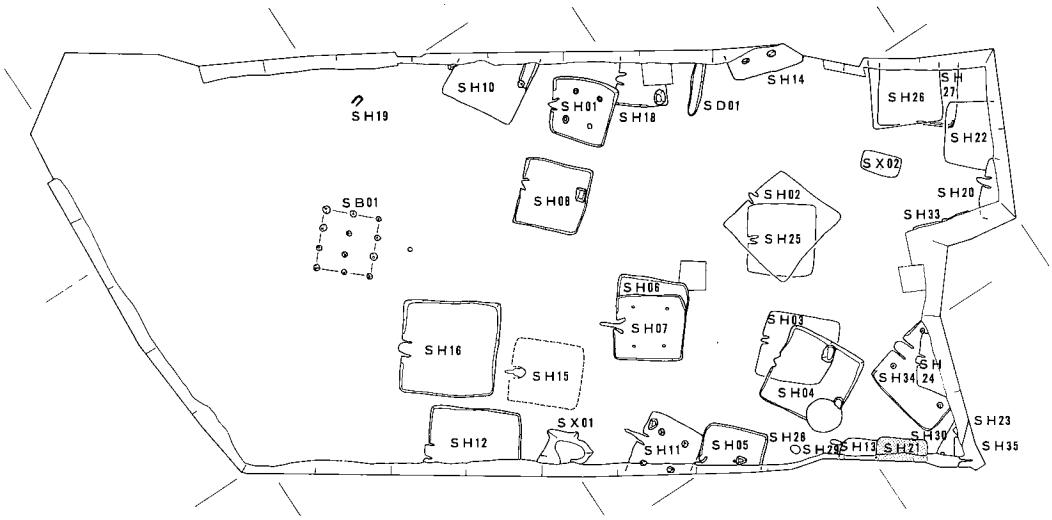
出土遺物　土器のみが出土している。

須恵器の杯身・杯蓋・壺、土師器の甕などが出土しているが、図化できたものは６点である。カマド内から出土したものは３点図化している。

須恵器　出土した須恵器のうち杯身の４点を図化している。このうち、99と101はカマド内から出土している。98は底部を欠失し1/4程度が残存している杯身である。口縁部は内傾ぎみに立ち上がり、口縁端部内面は段を有する。底部の回転ヘラケズリの範囲は1/2以下でロクロ回転は右回転である。99はごく小片のものである。丸い天井部をもつ形態のものと考えられる。天井部と口縁部を分ける稜線は比較的明瞭で、口縁端部内面は内傾して面をもっている。ロクロ回転は右回転である。100は98に較べると径が大きく、天井部と口縁部を分ける稜線はやや鈍い。口縁端部は拡張して内面に段を有する。回転ヘラケズリは残存している範囲にはみられず、天井部の狭い範囲に施されていたものと思われる。ロクロの回転方向は不明である。101は口縁部約1/2の残存である。ただし、下部は頸部との変換点に近いと思われる。壺の口縁部とした。外面に上下動の激しい波状文が観察される。

土師器　土師器は２点を図化している。102は大型のものであるが、口縁部外面に横方向のナデが観察されるのみで他の調整は磨滅が激しく不明である。103はカマド内から出土している小型のものである。調整は内外面ともにナデが観察されるが、102と同様磨滅が激しい。底面には粘土紐痕が観察される。

土師器はカマド内の焼成部、煙道部あるいは床面上から多数の出土をみている。器種は見たかぎりすべて甕である。破片ばかりで図化することはできなかったが、図化した２点のほかに少なくも３～４個体の識別ができた。口縁部が１cm程度短く外反するタイプの甕も出土している。



第24図　ＳＨ21の位置

ＳＨ21

検出状況　調査区の南端で検出している。遺構は調査区境に位置しているため、全体を検出することができなかった。南側の大半が調査区外に存在する。北部コーナー付近に、確認調査のNo.55グリッドがあり、北西辺と北東辺の一部が削平されて欠失している。したがって、検出しているのは東部コーナーを含む２辺である。他の遺構と切り合い関係が認められ、ＳＨ13と一部重複している。ＳＨ13を切っているが、平面的には確認調査のグリッド内に位置しており、平面的な検出はできていない。壁面の断面精査により切り合い関係を決定した。

形状・規模　全体を把握していないが、平面形は方形を呈していると考えられる。当住居跡ではカマドは検出されなかった。したがって、主軸方位は決定できないが、住居跡の壁の方向はＳＨ13と平行している。北西辺から順に時計回りに辺の長さを示せば(2.20m)、4.50m、(2.10m)、未検出となる。検出した２辺は比較的直線的である。検出面から床面までの深さは55cmを測り、深い。床面の標高は52.15mである。検出した床面積は6.0m²であるが、これは全体の３割程度であろう。

施設　屋内施設として検出されたものはない。

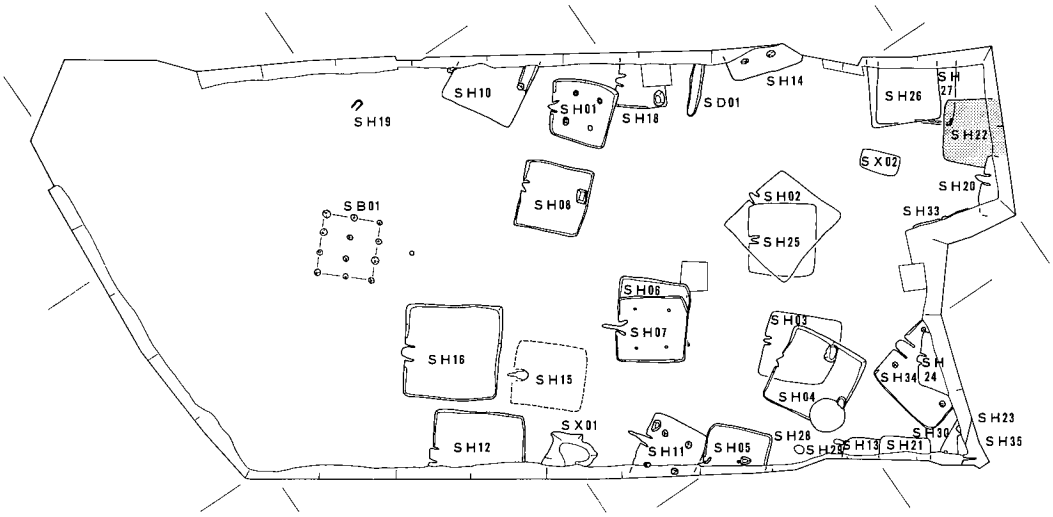
出土遺物　土器のみが出土している。

須恵器の杯身・杯蓋・壺、土師器の甕・高杯などが出土しているが、図化できたものは11点である。土器の出土は確認調査のグリッド内から出土したものが多い。図化したもののうち104・106・114・116の４点が確認調査での出土である。

須恵器　出土した須恵器のうち杯身・杯蓋・壺を図化している。104の杯蓋は天井部と口縁部とを分ける稜線は退化し、凹線によって区分している。口縁端部は丸くおさめる。天井部の回転ヘラケズリは1/2程度の範囲にとどまる。ロクロ回転は右回転である。杯身は４点図化している。このうち106は径が小さく、口縁端部内面に段を有し、口縁部が直立ぎみに立ち上がるなど、他の３点とは異なった特徴を備えている。あとの３点はいずれも口縁部が内傾して短い。径は108が最も大きく、107は杯部が深い。ロクロ回転は107・109が右回転、110は左回転である。底部に施された回転ヘラケズリはいずれも範囲が狭く、特に107にその傾

向が顕著である。111は短頸壺である。体部～口縁部にかけて約1/3を欠失している。調整は外面は口縁部に横方向のナデ、肩部にカキ目が観察され、底部は回転ヘラケズリが施される。内面の調整は横方向のナデを基本としているが、底部にのみ一方向ナデを施している。

土師器　　土師器は５点図化している。甕の２点はいずれも破片から復元した。112は小片であり、口径に若干の不安は残るが大型のものとしてよいと思われる。口縁部内外面に横方向のナデ、体部外面には７条／cmの比較的細かいハケが観察される。113は体部の張りが少なく、緩やかに口縁部に移行するタイプである。磨滅の度合いは112よりも激しく、調整等の観察は、口縁部に微かに横方向のナデの痕跡が認められる程度である。カマド内で使用されたものであろう。高杯は２点図化している。２点ともに脚部で、形態的には屈曲して広がる裾部をもつものである。内面の調整に違いをみせ、114は脚柱部に横方向のケズリが観察されるのに対して、115は未調整でシボリ目がみられる。裾端部は両者ともに内外面に横方向のナデを施す。116はミニチュア土器としている。厚手の粗製のもので、内外面ともに指頭圧痕が目立つ。



第25図　ＳＨ22の位置

ＳＨ22

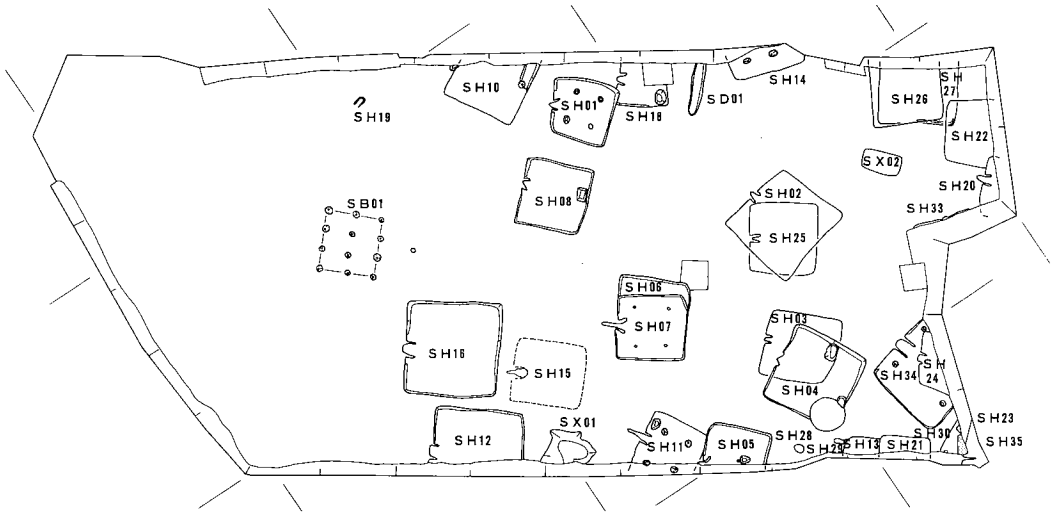
検出状況　　調査区の中央部の東端で検出している。遺構は調査区境に位置しているため、全体を検出することができなかった。北部コーナーと西部コーナー付近を含む３辺を検出しているが、そのうち２辺は調査区外にのびており全体を検出することは叶わず、南東辺は全く範囲外で、全体を確認しているのは北西辺の１辺のみである。他の遺構と重複して検出されており、ＳＨ20、ＳＨ27と切り合い関係が認められ、南部でＳＨ20に切られており、北部コーナー付近でＳＨ27を切っている。

形状・規模　　全体を把握していないが、検出した状況から方形を呈すると思われる。主軸の方位はカマドを検出していないため決定できないが、住居跡の壁の方向としては近接するＳＨ20と基本的には同一の方向を指している。北西辺から順に時計回りに辺の長さを示せば4.75m、(4.40m)、未検出、(3.45m)となる。各辺は比較的直線的であるが、南西辺が若干開いている。検出面から床面までの深さは25cmを測り、床面の標高は52.5mである。検出した床面

積は18.2㎡であるが、これは全体の半分程度であろう。

施設　　屋内施設として検出されたものはない。

出土遺物　　遺物は出土していない。



第26図　ＳＨ23の位置

ＳＨ23

検出状況　　調査区の南東端で検出している。遺構は調査区境に位置しており大部分が調査範囲外にあるため、ごく一部の検出にとどまった。北西辺の一部とカマドの煙道部の一部のみを検出している。ＳＨ30・35と重複して検出されており、これらを切っている。

形状・規模　　ごく一部の検出のため全体の形状および規模は不明である。北西辺にカマドを有している。カマドを基準として主軸を設定した。主軸の方位はN55°Wである。検出した北西辺の長さは2.80mである。検出面から床面までの深さは25cmを測り、床面の標高は52.55mである。検出した床面積は0.7㎡であるが、これはごく一部であり全体の面積は明らかではない。

施設　　カマドが検出された。

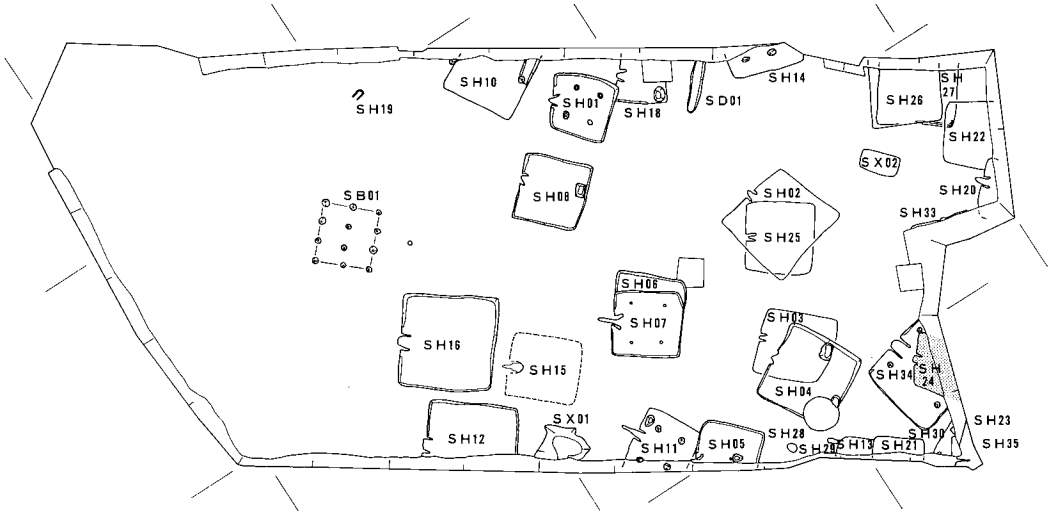
カマド　　北西辺で造り付けのカマドが検出されている。主軸方位はほぼ住居跡の主軸と同方向を指している。検出されたのは、煙道部のみで、焼成部は調査範囲外である。

出土遺物　　土器のみが出土している。

須恵器の杯身、土師器の壺・甕・椀・甑などが出土しているが、図化できたものは１点のみである。土器はカマド付近の焼成部に近い壁面から多く出土している。

須恵器　　図化した杯身が唯一の須恵器である。口縁部の約半分を欠失している。口径は9.9cmと小さく、底部は丸い。口縁部は若干内傾して立ち上がり、口縁端部内面には段が認められる。受部はほぼ水平にひらくものである。底部の回転ヘラケズリの範囲は1/2をわずかに超える。ロクロ回転は左回転である。

土師器　　土師器はいずれも小片のために図化することはできなかった。器種としては、壺・甕・椀が認識できる。壺を除いた器種はカマド内で使用されていたようで、赤化しており磨滅が著しい。



第27図　ＳＨ24の位置

ＳＨ24

検出状況　調査区の南東隅で検出している。遺構は調査区境に位置しているため、全体を検出することができなかった。北部コーナーと西部コーナーを含む３辺を検出しているが、全体を検出できたのは北西辺の１辺のみで、２辺は調査区外にのびており全体を検出することは叶わず、南東辺は完全に調査区外存在する。検出した割合は全体の半分弱程度と考えている。他の遺構と切り合い関係が認められ、ＳＨ34と重複して検出されている。当住居跡はＳＨ34の床面でプランの確認ができたため、これに切られていることが明白である。北西約11mにＳＨ03・04が南西約７mにＳＨ23・30・35が検出されている。

形状・規模　全体を把握していないが、平面形は方形を呈していると思われる。ただし、コーナー部は、直角に屈曲しているとは言えず、北東辺と南西辺がほぼ平行であるのに対して、北西辺はこの２辺に対して斜め方向に位置している。カマドの袖部は両側壁の方向と違和感はない。北西辺にカマドを有している。カマドを基準として主軸を設定した。主軸の方位はN33°Wである。北西辺から時計回りに辺の長さを示せば、4.10m、(1.65m)、未検出、(3.75m)となる。検出面から床面までの深さは15cmを測り、床面の標高は 52.35mである。検出した床面積は6.7m²である。

施設　カマドが検出された。他の施設は検出されなかった。

カマド　北西辺で造り付けのカマドが検出されている。主軸の方位は住居跡と同じである。袖部は、住居跡埋土との区別が困難で、その先端部分を掘削時に欠失してしまっているが、検出しているより、さらにのびるようである。規模は、焚口部の幅80cm、奥行き105cmを測り、残存高は最大で10～15cmである。煙道は焚口部奥から急激な立ち上がりをみせ、屋外に突出した長さは18cmである。焼成部には焼土面が確認され、その範囲は長軸45cm、短軸35cmを測り、楕円形を呈する。支脚は設置されていなかった。

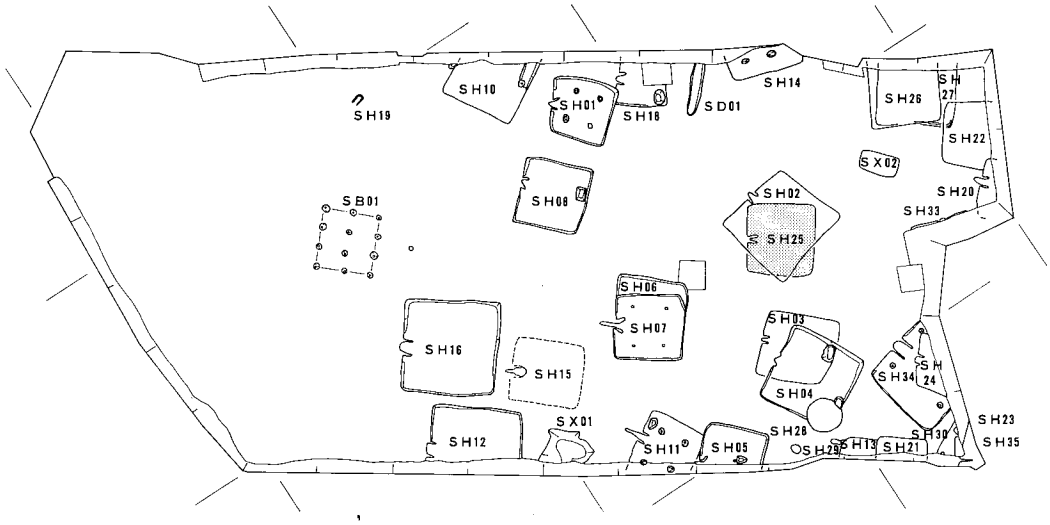
出土遺物　土器のみが出土している。

出土した遺物は少ない。須恵器の杯蓋・高杯、土師器の甕・椀・高杯が出土している。このうち３点を図化している。

須恵器　118は天井部と口縁部を分ける稜線は退化しており、口縁端部は丸くおさめる。119は118

に較べて稜線は明瞭で口縁端部内面に段を有する。この他、高杯の脚部が出土している。短脚のもので方形の透かしが観察されるが小片のため図化できなかった。

土師器　　120の１点を図化している。底部まで残存しているが、1/8以下の残存率である。体部外面の調整は縦方向のハケの後ナデを施し、口縁部は内外面ともに横方向のナデ調整が観察される。この他に高杯脚柱部・杯・甕の破片が出土しているが、いずれも小片で図化できなかった。



第28図　ＳＨ25の位置

ＳＨ25

検出状況　　調査区の東側中央部で検出している。遺構は調査区を横切る農道の真下にあたる。遺構は全体を確認することができた。他の遺構と切り合い関係が認められ、ＳＨ02と重複して検出されている。ＳＨ02の床面よりさらに15cm程度下がって面があり、これより古い時期の遺構である。

形状・規模　　平面形は方形を呈している。北西辺にカマドを有している。カマドを基準として主軸を設定した。主軸の方位はN54°Wである。北西辺から時計回りに辺の長さを示せば、5.45m、5.35m、5.75m、5.10mとなる。全体としては横長の形状を呈している。検出面から床面までの深さは５～15cmを測り上部はＳＨ02によって削平されている。床面の標高は52.3mである。検出した床面積は28.5m²である。

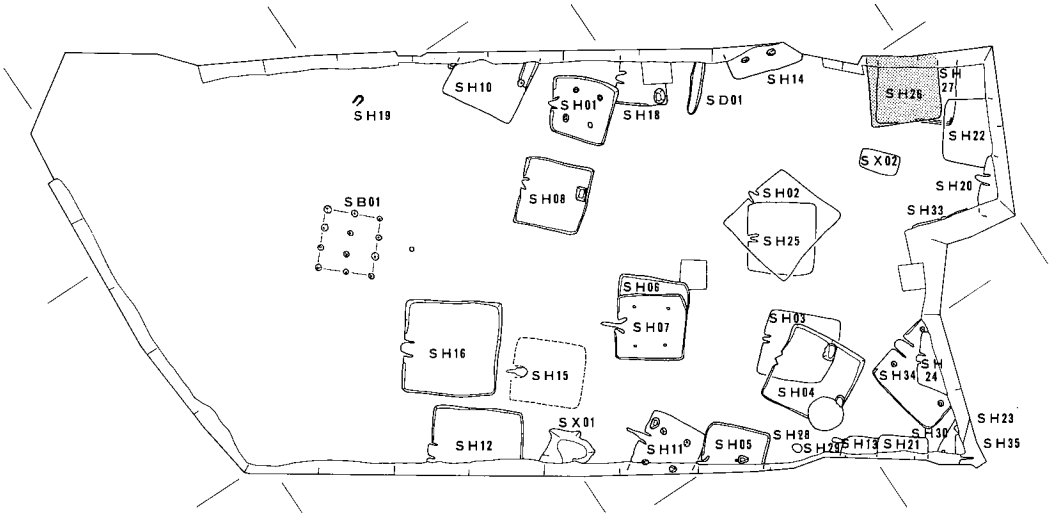
施設　　カマドが検出された。他の施設は検出されなかった。

カマド　　北西辺で造り付けのカマドが検出されている。主軸の方位は住居跡と同じである。上部をＳＨ02に削平されているため残存状況は良好とはいえない。袖部の内壁はその埋土との区別で比較的明瞭なのに対して、外面は住居内埋土との区別が非常に困難で明確さを欠いている。規模は、焚口部の幅65cm、奥行き105cmを測り、残存高は最大で６cmである。住居跡自体の残りが悪いため、煙道部は削平されて検出できなかった。カマド内に堆積している土層は１層のみが確認されている。暗灰色の炭化物を含む極細砂である。焼成部には焼土面が観察され、その範囲は長軸33cm、短軸27cmを測る。焼成部奥からは支脚が検出された。赤化した板状の砂岩で長さ22cm、幅17cm、厚さ３cmのものである。

出土遺物　　土器のみが出土している。

出土した遺物は非常に少なく、須恵器の杯蓋の１点のみがカマド内から出土している。この１点を図化している。

須恵器　121は小片で約1/6程度の残存率である。天井部と口縁部を分ける稜線はシャープさを欠いている。口縁部は若干外方に開きぎみで、口縁端部内面は内傾して面をもっている。天井部に施されている回転ヘラケズリの範囲は広く、口縁部との稜線近くまで観察できる。ロクロ回転は左回転である。



第29図　ＳＨ26の位置

ＳＨ26

検出状況　調査区の北東隅で検出している。遺構は調査区境に位置しているため、全体を検出することができなかった。西部コーナーと南部コーナーを含む３辺を検出しているが、北西辺と南東辺の２辺は調査区外にのびており全体を検出することは叶わず、北東辺は全く範囲外で、全体を確認しているのは南西辺の１辺のみである。ＳＨ27と重複して検出され、切っている。南約７ｍにＳＨ22が、南西約６ｍにＳＸ02が検出されている。

形状・規模　全体を把握していないが、平面形は方形を呈していると考えられる。カマドを検出していないため主軸方位は決定できないが、壁の方向としてはＳＨ22などと大きく違っているものではない。北西辺から順に時計回りに辺の長さを示せば（5.53m)、未検出、(5.10m)、5.45m、となる。コーナー部に膨らみがみられるが、各辺は比較的直線的である。検出面から床面までの深さは35cmを測り、床面の標高は52.35mである。検出した床面積は22.5m²である。

施設　屋内施設は検出されなかった。

出土遺物　土器のみが出土している。ＳＨ27と大部分で重複しており、単独の遺構にともなうものとしては無理がある。時期的にも差がみられる。須恵器の杯身・杯蓋・壺・甕・高杯、土師器の甕・甑・ミニチュア土器などが出土している。図化できたものは22点である。

須恵器　15点を図化している。杯蓋と杯身が多い。杯蓋は６点図化しているが、形態的にはそれぞれ異なるタイプである。

杯蓋の122～124は口径の小さいものである。122は口縁部の大半を欠失している。天井部と口縁部を分ける稜線にはシャープさがない。口縁端部内面には段をもち、天井部の回転

ヘラケズリの範囲は1/2程度である。123は1/4以下の破片であるが、丸い天井部をもつものであろう。122と同様に稜線にシャープさはみられないが、天井部の回転ヘラケズリは稜線近くまで施されている。124は稜線がさらに鈍くなっており、回転ヘラケズリの範囲は1/2以下である。ロクロ回転は３点とも左回転である。125～127は口径がやや大きいものである。125は天井部が平坦な形態を示す。稜線はさらに鈍くなり、丸みを帯びる。天井部の回転ヘラケズリの範囲は1/2以下である。126は天井部がやや高いものである。稜線は完全に退化して、凹線で区分するにすぎない。回転ヘラケズリの範囲も1/3以下である。ロクロ回転は３点とも左回転である。口縁端部内面は６点ともに丸くおさめるものはなく、内傾して面をもつか、段を有しているものであるが、126のみはその度合いが低い。

杯身は７点を図化している。128～131は口径の小さいものである。128と129は底部が丸い形態のものである。口縁部の立ち上がりは 128が直立ぎみ、129～131はやや内傾している。底部に施された回転ヘラケズリの範囲は128が3/4、130と131が1/2程度であるが、129が1/4以下と狭い。口縁端部内面はいずれのものも内傾して面をもっている。132は口径が大きいものである。口縁部はの立ち上がりは直立して長い。杯部はやや浅く、底部は平坦である。回転ヘラケズリの範囲は1/2程度である。口縁端部は肥厚し、内面に面をもつ。ロクロ回転は130のみが右回転、他の４点は左回転である。128と129には、底部にヘラ記号かみられる。133と134は小破片である。133は口縁部が内傾して立ち上がり、端部を丸くおさめる。134は口縁部は直立して、端部内面に面をもつ。

135は脚部を欠失しているが、無蓋高杯である。外方にひらく口縁部をもつ。口縁部と杯部は２条の突帯によって分けられている。脚部には方形の透かしをもっていた痕跡が、杯底部に観察される。

136は壺の口縁部で２条の凹線の間に波状文を施している。

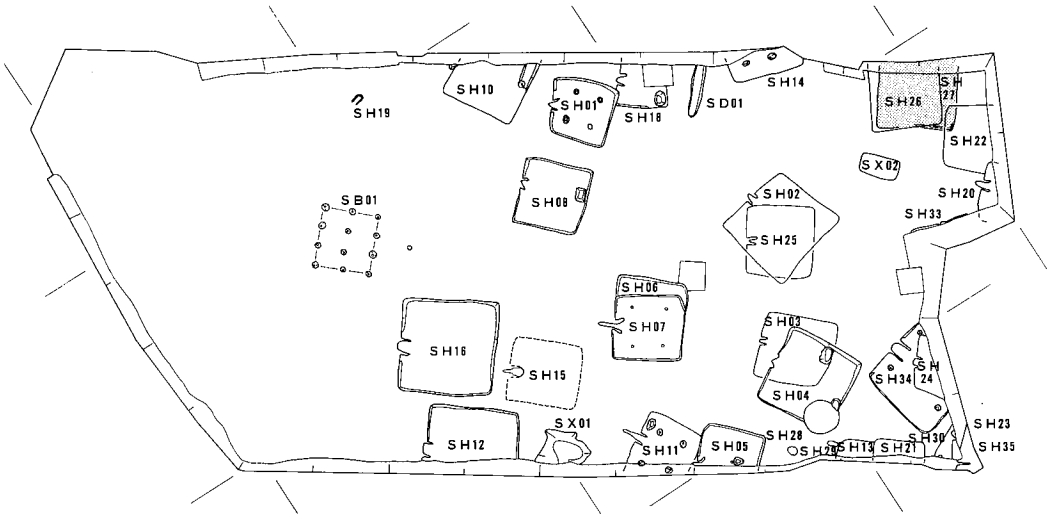
須恵器は図化している以外に杯が４個体程度と壺か甕の体部が３～４個体分、破片として出土しているが、いずれも口縁部を欠いているものばかりで図化には至らなかった。

土師器　７点を図化している。このうち、137～140・143は確認調査の№53グリッドから出土したものである。このグリッドはＳＨ26内に完全に収まるものである。同時にＳＨ27内にも収まっているため、ＳＨ26に伴うものと断定するには不安は残るが、ここではＳＨ26出土のものとして扱った。

137～140は甕である。いずれも、口縁部から体部にかけての破片である。137は体部に縦方向のハケを施し、口縁部～頸部外面には横方向のナデがみられる。口縁部内面は横方向のハケ調整が施されるが、９条／cmと体部外面のものよりも細い。138・139も調整は基本的に137と変わりがない。140は口縁部が短く外反するもので、磨滅が激しく、調整は観察が困難であるが、口縁部に横方向のナデ調整を加えているようである。

141・142は甑で、底部のみの残存である。いずれも、外面はナデ調整を施している。内面は基本的にはナデの調整であるが、142はハケ目が観察される。底部は141が５穴、142は２穴である。

143はミニチュア土器で内面にナデ、外面は指頭圧痕が観察される。



第30図　ＳＨ27の位置

ＳＨ27

検出状況　　調査区の北東隅で検出している。遺構は調査区境に位置しているため、全体を検出することができなかった。西部コーナーと南部コーナーを含む３辺を検出しているが、北西辺と南東辺の２辺は調査区外にのびており全体を検出することは叶わず、北東辺は全く範囲外で、全体を確認しているのは南西辺の１辺のみである。ＳＨ26と重複して検出され、切られている。南約７ｍにＳＨ22が、南西約６ｍにＳＸ02が検出されている。

形状・規模　　全体を把握していないが、平面形は方形を呈していると考えられる。カマドを検出していないため主軸方位は決定できないが、壁の方向としてはＳＨ22などと大きく違っているものではない。ただし、重複して検出されたＳＨ26とはやや方向を違えており、ＳＨ26よりも５°程度西に振っている。北西辺から順に時計回りに辺の長さを示せば(5.00m)、未検出、(6.35m)、6.20mとなる。北西辺と南西辺は直線的とは言いがたく、内側に反っている。南東辺は比較的直線的である。検出面から床面までの深さは最大で45cmを測り、床面の標高は52.25mである。検出した床面積は27.4m²である。

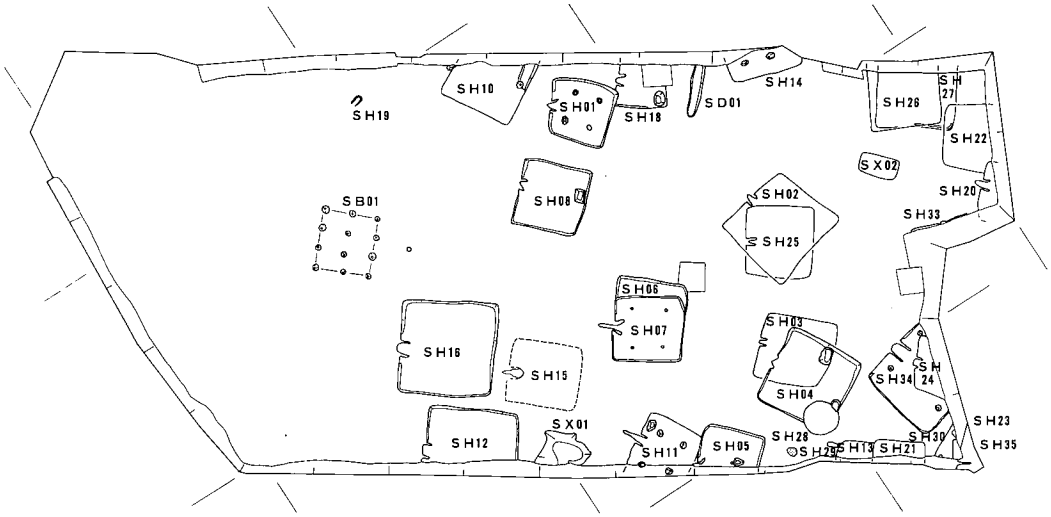
施設　　周壁溝のごく一部が検出されている。

周壁溝　　南西辺から南部コーナーにかけて周壁溝が検出されたが、残存状況は良好とはいえない。検出された長さは全体で３m程度にとどまり、しかも一部で途切れている。床面での幅は10cm、底での幅は５cmであり、床面からの深さは最大で８cmを測る。検出された状況からは全周していたかどうかは疑わしい。

出土遺物　　土器のみが出土している。

須恵器の杯身・杯蓋、土師器の甕などが出土しているが、図化できたものは須恵器の杯身の１点である。他のものは小片で出土しており、図化することはできなかった。

須恵器　　144は1/8以下の小片で復元図化している。底部を欠失している。内傾して立ち上がる口縁部をもち口縁端部内面は不明瞭な段を有している。底部の回転ヘラケズリの範囲は狭く、1/3以下の範囲であると思われる。この土器をみるかぎり、ＳＨ26よりも新しい時期のものであるが、図化していない須恵器の杯蓋に垂直に垂下する口縁部に天井部と口縁部を明瞭に分ける稜線をもつ古いタイプのものが出土している。



第31図　ＳＨ28の位置

ＳＨ28

検出状況　調査区の南東部で検出している。遺構自体は検出することができず、カマドの支脚のみが検出された。支脚は約12cm程度が地上に突き出ている。このことは、少なくともこの高さまでは住居跡の壁やカマドの袖部が残存しているはずである。しかし、遺構の検出されたレベルが52.8mと他の遺構に較べて高く、現地表面に近いため、土壌化している関係でその平面的な検出はできなかった。北西約５mにＳＨ04が、南東約５mにＳＨ13が、北西約５mにＳＨ05が検出されている。

形状・規模　検出したのが支脚のみのため、住居跡の形状・規模は全く不明である。

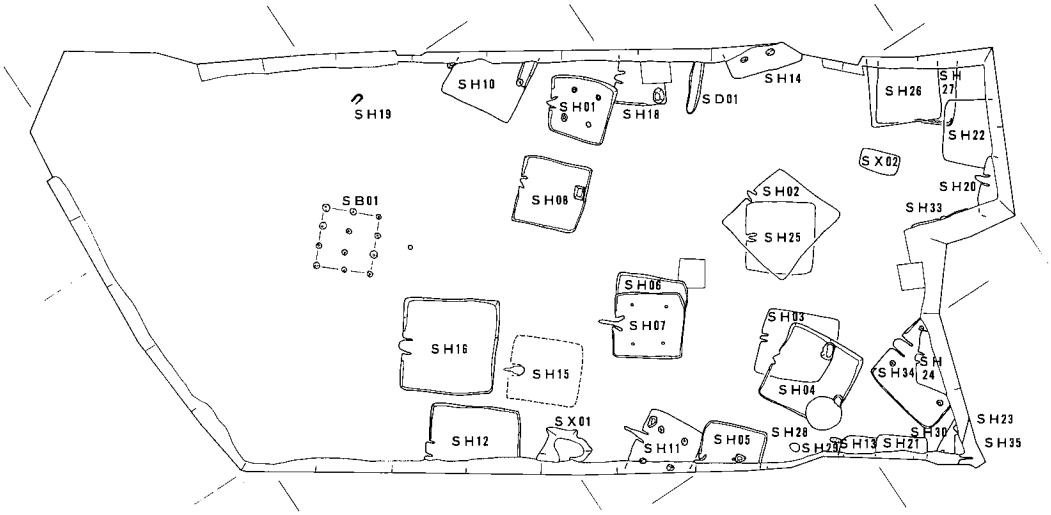
施設　カマドの支脚のみを検出している。

カマド　支脚のみを検出しているが、地中に埋め込んだ状態で検出された。石製のもので石材は花崗岩である。形状は方形の柱状で長さ26cm、幅8.5cm、厚さ７cmのものである。支脚は約14cmを地中に埋め込んで据え付けられており、地上に突き出ている長さは12cmである。支脚の周辺に焼土面が検出されていないため、カマドの方向を明らかにすることはできないが、支脚の北側に若干の炭化物の散布が認められること、支脚の北側２面が火を受けて赤化しており、反対の南側２面に煤が付着していることなどを考えあわせると、他の住居跡が北西方向、あるいは北方向にカマドを設置しているのとは逆に、ＳＨ28は南側方向にカマドを設置していたのではないかと考えている。

出土遺物　土器のみが出土している。

須恵器の杯身・杯蓋の２点が出土しており両者とも図化している。支脚の周辺から出土したものである。当住居跡は床面が削平されていると思われ、この２点が当住居跡に伴うものかどうかも不確かであるが、一応、ＳＨ28のものとして扱っている。

須恵器　145は残存率1/8以下の杯蓋である。天井部と口縁部とを分ける稜線は稜を保っており口縁端部内面には段を有する。天井部に施されている回転ヘラケズリの範囲は狭く、1/3程度であろう。ロクロ回転は左回転である。146は杯身であるが、杯部の大半を欠失している。内傾ぎみの口縁部で口縁端部内面は弱い段をもつ。ロクロ回転は左回転であると考えられる。



第32図　ＳＨ29の位置

ＳＨ29

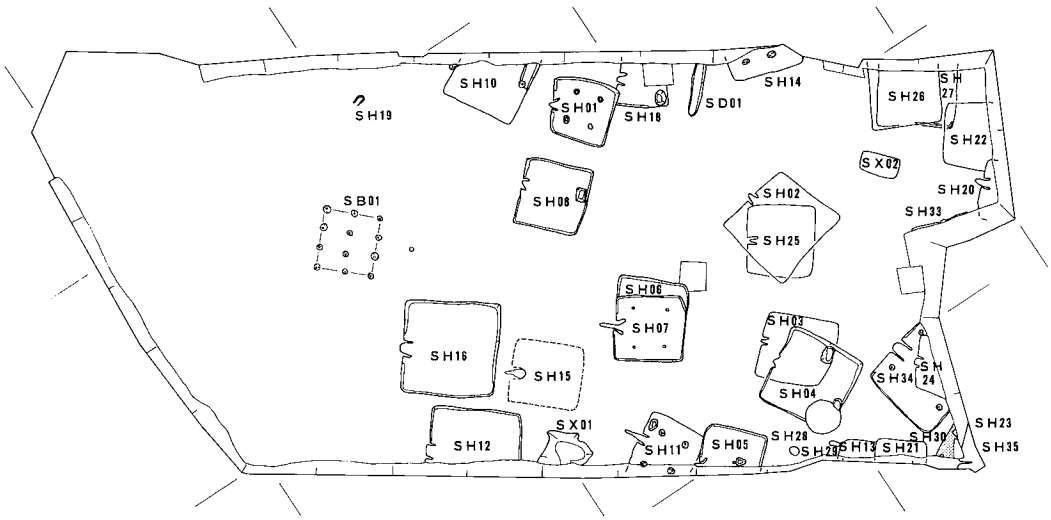
検出状況　　調査区の南東部で検出している。遺構自体は検出することができず、カマドの痕跡のみが検出された。痕跡の検出されたレベルが52.7mと他の遺構に較べて高く、床面は削平されていたものと考えられる。ほぼ同一レベルで検出されたＳＨ28は北西約３mに位置している。

形状・規模　　検出状況が悪いため、住居跡の形状・規模は不明である。

施設　　カマドの痕跡のみを検出している。

カマド　　検出されたのは、焼土面と炭化物のみである。焼土面は平面形は楕円形を呈し、長軸40cm、短軸30cmを測る。焼土面の周囲約10cmの幅と南東部に約40cm突出して炭化物の散布がみられる。この形状からカマドの主軸を設定すれば、N136°Eとなり、南東方向に煙道がのびるカマドになる。ＳＨ28と同様に当遺跡で検出している住居跡のカマドとは大きく方向を違えている。

出土遺物　　遺物は出土していない。



第33図　ＳＨ30の位置

ＳＨ30

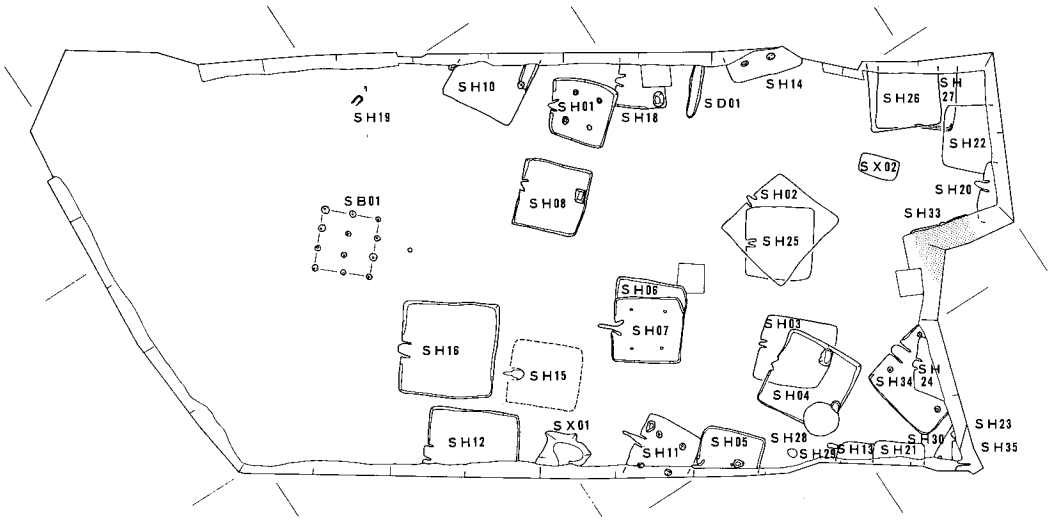
検出状況　調査区の南東隅で検出している。調査区境に位置しているため、遺構全体のごく一部を検出したにとどまった。方形の住居跡とすればその北西辺の一部を検出している。他の遺構と切り合い関係が認められ、ＳＨ35を切り、ＳＨ23に切られている。

形状・規模　１辺のみしか検出していないが、方形を呈すると思われる。主軸方位はカマドが検出されていないため決定できないが、北西辺にカマドをもつものと仮定すれば、N25°Wとなる。検出した辺の長さは(3.80m)である。検出面から床面までの深さは50㎝、床面の標高は52.3mである。検出した床面積は3.1㎡である。

施設　屋内施設は検出されていない。

出土遺物　土器のみが出土している。土師器の甕・製塩土器が出土しているが、図化しているのは甕の１点である。全体に遺物の出土量は少ないが、そのなかで製塩土器の比率が比較的高い。

土師器　147は口縁部～体部にかけて1/8程度の残存である。体部下半は欠失している。調整は口縁部から体部の外面に縦方向ハケ、内面は口縁部に横方向ハケ、体部に横方向の板ナデがみられる。口縁部は内外面ともに横方向ナデで仕上げている。



第34図　ＳＨ33の位置

ＳＨ33

検出状況　調査区の中央の東端で検出している。遺構は調査区境に位置しているため、全体を検出することができなかった。他の遺構と切り合い関係は認められない。遺構は辛うじて３辺を検出しているが、全体を検出したのは北辺の１辺のみで他の２辺はごく一部である。

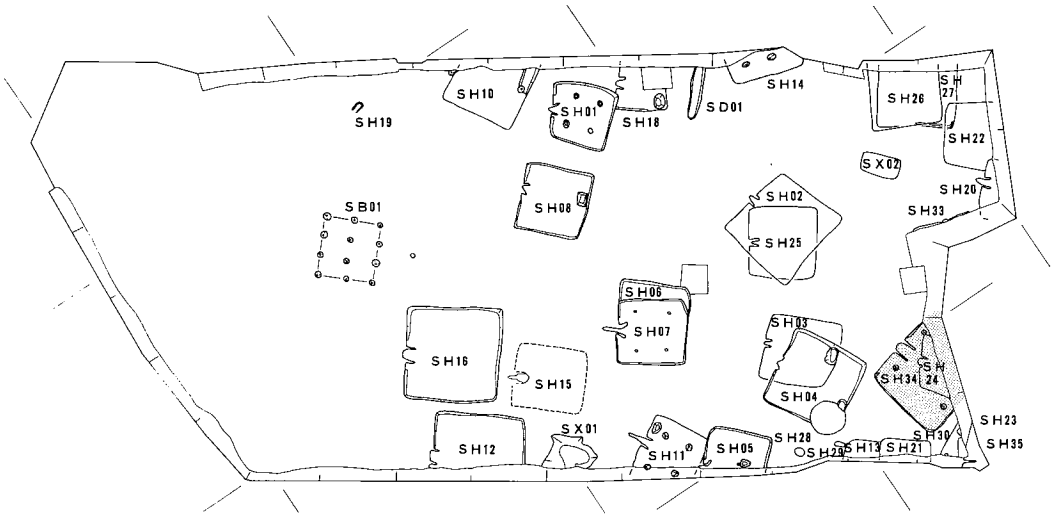
形状・規模　平面形は全体を検出していないが、方形を呈していると思われる。北辺にカマド施設を有している。カマドを基準として主軸を設定した。主軸の方位はN15°Eである。北辺から順に時計回りに辺の長さを示せば5.20m、(1.15m)、未検出、(1.20m)となる。検出面から床面までの深さは12㎝、床面の標高は52.5mである。検出した床面積は0.7㎡である。

施設　カマド・周壁溝が検出された。

カマド　北辺で造り付けのカマドが検出されている。カマドは煙道部のみが検出されたのみで、焼成部は側溝により削平されているものと思われる。

周壁溝　　西辺と東辺で周壁溝を検出している。床面での幅は10cm、床面からの深さは５cmを測る。周壁溝はコーナー部で途切れて、北辺にはみられない。実際検出した周壁溝の長さは30cm程度のものであり、その存在にはやや疑問も残る。

出土遺物　　土器のみが出土している。すべて土師器であるが、いずれも小片のため図化することはできなかった。器種は甕・高杯などが出土している。



第35図　ＳＨ34の位置

ＳＨ34

検出状況　　調査区の南東端で検出している。遺構は調査区境に位置しているため、全体を検出することができなかった。遺構は北西部コーナーと南西部コーナーを含む３辺を検出しているが、全体を検出できたのは西辺の１辺のみで２辺は掘削範囲外にのびており全体を検出することはできず、東辺は完全に範囲外に存在する。ただし、北東部コーナーは土層観察用の側溝の範囲内におさまっているものと考えられる。他の遺構と切り合い関係が認められ、ＳＨ24と重複して検出されており、これを切っている。

形状・規模　　平面形は全体を検出していないが、方形を呈している。北辺にカマドを有している。カマドを基準として主軸を設定した。主軸の方位はN15°Wである。北辺から順に時計回りに辺の長さを示せば（4.80m）、未検出、（2.40m）、5.15mとなる。検出面から床面までの深さは10～15cm、床面の標高は 52.65mである。検出した床面積は29.0m²であるが、全体では36m²程度になると思われる。

施設　　カマド・周壁溝・柱穴が検出された。

カマド　　北辺で造り付けのカマドが検出されている。カマドの主軸方位はN22°Wで住居跡の主軸より７°西に振っている。カマドは盛土によって築かれているが、住居跡内埋土との区別は非常に困難である。規模は焚口部の幅120cm、奥行き153cmを測り、残存高は最大値で15cmである。焼成部はごく僅かに窪み、焚口部奥から屋外に向かって煙道部が取り付いている。屋外に突出した煙道部の長さは23cmである。カマド内の土層の堆積は１層で、濁黄灰色極細砂で、底部には炭化物が薄く堆積している。焼成部には焼土面があり、その範囲は長軸40cm、短軸35cmを測る。

周壁溝　　周壁溝が検出され、北辺の一部を除いて全周している。北辺の周壁溝はカマドの右側で

は袖部の手前で途切れ、左側では北西部コーナーで途切れている。カマドの右側の状況から、カマドの袖部は検出した幅よりも30cm程度広いものであった可能性が高い。周壁溝の床面での幅は10cm、底での幅は３～５cmであり、床面からの深さは５cmを測る。

柱穴　　３本の柱穴が検出された。

Ｐ１は掘り方の直径35cm、柱痕の直径20cm、床からの深さは20cmである。Ｐ２は掘り方の直径30cm、床からの深さは20cmである。Ｐ３は未検出で、Ｐ４は掘り方の直径40cm、柱痕の直径20cm、床からの深さは20cmである。

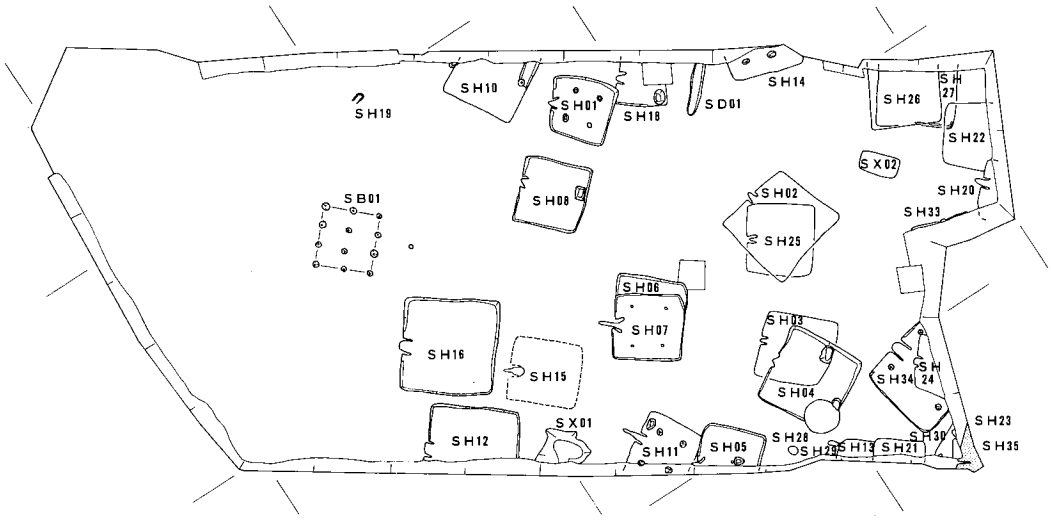
柱穴間の距離は、Ｐ１～Ｐ２間が2.65m、Ｐ４～Ｐ１間が3.80mである。

出土遺物　　土器と鉄器が出土している。土器は須恵器の杯蓋・杯身、土師器の甕・高杯などが出土しているが、図化しているものは６点である。鉄器は板状のものである。

須恵器　　須恵器は５点を図化している。器種は杯蓋が４点と杯身が１点である。148の杯身は約1/3程度が残存している。口縁部はやや内傾して立ち上がり、口縁端部内面には弱い段が観察される。底部の回転ヘラケズリの範囲は1/3以下である。ロクロ回転は左回転である。149～150は杯蓋である。150は天井部のみであるが、つまみをもっている。他の３点はいずれも1/4以下の残存のものである。天井部と口縁部を分ける稜線はいずれも稜を保ち、口縁端部内面は内傾して面をもつか段を有している。天井部の回転ヘラケズリの範囲は1/2程度である。ロクロ回転は149・151が左回転、150・152が右回転である。

土師器　　153の高杯の１点のみを図化している。脚柱部で、外面の調整はナデ、内面は脚柱部が横方向のヘラケズリ、裾部には横方向のナデが観察される。

鉄器　　Ｓ２は長さ5.25cm、幅2.20cm、厚さ0.20cmの薄い板状の製品で一部上側辺を折り曲げている。側辺、下辺は切断されていない。刃部は観察されない。



第36図　ＳＨ35の位置

ＳＨ35

検出状況　　調査区の南東隅で検出している。調査区境に位置しているため、遺構全体のごく一部を検出したにとどまった。遺構の大半は調査範囲外にあるが、調査区の南東側は約1.8mの段差で落ちているため、遺構は美嚢川によって削平されていることが予想される。他の遺構と切り合い関係が認められ、ＳＨ23・30と重複して検出されており、これらに切られてい

る。

形状・規模　１辺のみしか検出していないが、方形を呈すると思われる。カマドの設置された北西辺のカマドの右側のみを検出している。辺は調査区境付近で屈曲する傾向をみせている。辺自体は直線的とは言いがたく、やや弧状を呈しておりしかもカマドとは方向を違えている。主軸はカマドを基準にしてを設定した。主軸の方位はN59°Wとなる。検出した辺の長さは(4.00m)である。検出面から床面までの深さは25cm、床面の標高は 52.05mである。検出した床面積は4.0m²である。

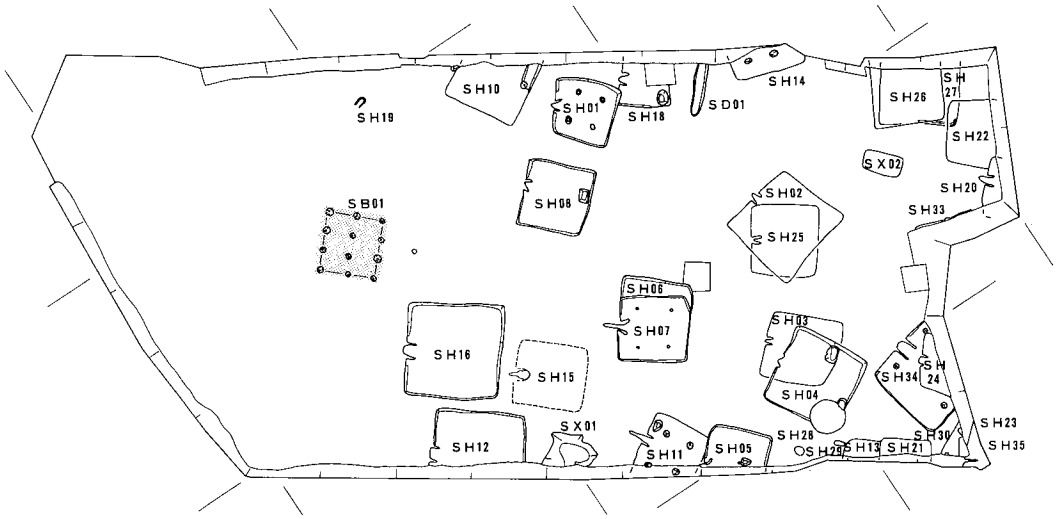
施設　カマドのみを検出している。

カマド　北西辺で造り付けのカマドを検出している。規模は、右側の袖部のみの検出のため焚口部の幅は明確ではない。検出した幅は残存している範囲で74cmである。奥行きは128cmを測り、残存高は最大で15cmである。煙道部は緩やかな傾斜をもって立ち上がっているが、住居跡自体の残存高が少ないため、煙道部も削平されており、屋外まで突出していない。カマド内の埋土は２層が堆積しており、上層に褐灰色極細砂、下層に炭化物が堆積している。焼成部に焼土面があり、不整形ぎみの楕円形を呈する。長軸50cm、短軸35cmを測る。

出土遺物　土器のみが出土している。須恵器の杯身、土師器の甕・甑が出土しており、７点を図化している。

須恵器　154と155の２点を図化している。いずれも杯身である。154はほぼ完形、155は1/8以下の破片である。両者とも口縁部はやや内傾ぎみに立ち上がり、口縁端部内面は154が段を155が面をもっている。底部の回転ヘラケズリの範囲は154が1/3程度であるのに対し、155は受部近くまでみられる。ロクロ回転は154が右回転、155が左回転である。

土師器　156と157は小型の甕であるが、157はプロポーションから壺とした方が良いかもしれない。調整は口縁部内外面に横方向ナデ、体部に縦方向のハケ、体部内面は156が横方向ナデ、157が縦方向のハケである。ハケは156が細く、157は粗い。カマド内から出土したものに158～160のものがある。158は長胴の甕である。調整は体部外面に縦方向のナデ、内面に縦方向のヘラケズリを施している。口縁部内外面は横方向のナデで仕上げる。体部中位に格子のヘラ記号がみられる。159・160は甑である。両者ともに底部を欠失している。外面の調整は159が縦方向の板ナデ、160が縦方向のハケと違いをみせる。160は把手の痕跡を残す。



第37図　ＳＢ01の位置

ＳＢ01

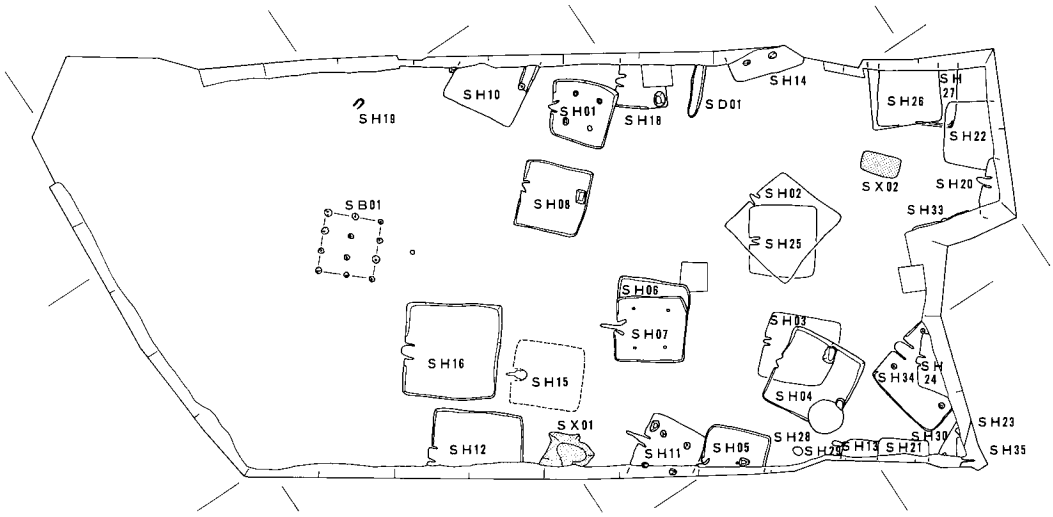
検出状況　　調査区の北西部中央に位置している。この位置は自然堤防から後背湿地に移行する地点にあたり、当地区の自然堤防の最高地点と考えられるＳＨ02付近の検出レベルと比較すると約65cm低い位置で検出されている。地形は北西にしたがってさらに下がり、地区内ではこのＳＢ01以西では遺構は存在しない。

形状・規模　　N42°Eに棟軸の方向をとる梁行２間、桁行３間の掘建柱建物跡である。規模は、桁行方向に4.60m、梁行方向に4.36mを測る。柱穴で囲まれた面積は19.6m²である。柱穴間の心々距離の平均値は桁行で1.58m、梁行で2.19mである。

柱穴　　12穴を検出している。掘り方の径は40～60cmを測り、検出面からの深さは40～72cmである。また柱痕の径は18～24cmと掘り方の径に比して小さい。

出土遺物　　Ｐ３・９・10・11より土器が出土している。そのうち、Ｐ11から出土した土師器の甕の２点を図化している。Ｐ11は北東から第２列の真ん中に位置する柱穴である。掘り方の径は42cm、検出面からの深さは55cm、柱痕の径は20cmを測る。土器は掘り方の埋土中より、５～７cm程度の破片となって出土している。162は１片のみからの図化であるが、161は接合可能な破片で、口縁部のごく一部と体部～底部にかけて1/2が残存している甕に復元できたものである。この他、Ｐ３・９・10からも土師器が出土しているが、いずれも細辺であるため、図化できなかった。

土師器　　161は前述したとおり、1/2程度の残存率であるが、口縁部はごく一部にすぎない。やや長胴ぎみのプロポーションを呈し、調整は口縁部内外面に横方向のナデ、体部内面にナデが観察されるが、体部外面は磨滅により調整の観察は困難であるが、一部に縦方向のハケの痕跡を残している。全体に火を受けていたようで赤化しており、竪穴住居跡のカマドで使用されていた土器とその残存状況が似ている。カマド内で使用した甕を破砕して、柱穴の掘り方内に意識的に混入させたようである。162は口径が大きく、頸部のくびれの少ない甕である。調整は外面が口縁部に横方向ナデ、体部に縦方向のハケ、内面は口縁部に横方向のハケ、体部に横方向のナデが観察される。



第38図　ＳＸ01・02の位置

ＳＸ01

検出状況　調査区中央部の南端で検出している。遺構は調査区内におさまっているものと思われるが、南端を土層観察用の側溝によって削平されているため、全体を検出するには至っていない。ＳＨ11と12の間で検出している。ＳＨ12の南東辺とは約1.4m離れている。

形状・規模　検出面での形状は不整形を呈している。底部では北西－南東方向に長軸をもつ楕円形を呈しているようであるが、南西方向に突出した部分がある。規模は検出面での最も長い部分で4.38mを測り、それに直交する方向は検出した範囲で2.60mを測る。深さは最大で28cmである。

出土遺物　須恵器の杯身・壺・甕・器台、土師器の甕・高杯・ミニチュア土器が出土しているが、そのうち図化しているものは７点である。

須恵器　杯身の１点のみを図化している。他のものはいずれも小片で出土している。163は底部を欠き約1/4の残存である。口縁部は内傾ぎみに短く立ち上がる。口縁端部内面は内傾して段をもつ。底部の回転ヘラケズリの範囲は1/2以下で、ロクロ回転は右回転である。

土師器　高杯の３点とミニチュア土器の３点を図化している。164はややひらきの少ない杯部をもつものである。杯部底部と口縁部の境にはにぶい凹線が巡る。脚部は裾部が屈曲してひらくタイプのものである。調整は外面は杯部が横方向ナデ、脚柱部に縦方向のハケの後横方向のナデを施している。内面はナデ調整が観察されるが、脚柱部にはシボリ目が観察される。165は164に較べて口縁部がひらき、口径が大きいものである。杯部と杯底部との境には稜線は認められない。内外面の調整は基本的には164と同じであるが、脚部は中実である。166は脚部のみである。外面は縦方向のハケのちナデ、内面はナデ調整を施している。167～169はミニチュア土器である。口径は４～５cmで手づくねでつくられており、内外面に指頭圧痕を顕著に残す。

ＳＸ02

検出状況　調査区東部で検出している。ＳＨ02・26・33などに囲まれた場所に位置している。遺構は全体を検出しているが、平面プランは明確とはいえない。

形状・規模　検出面での形状は不明確である。一応、長方形の平面形を想定しているが、この遺構が

確認面から掘り下げていたという痕跡は確認することができなかった。わずかに、周辺と色調の違う範囲を区切ったのみである。出土した遺物は地表面に並べられていた可能性も考えられる。区切った範囲は長方形を呈しており、規模は長軸方向に3.12m、短軸方向に1.67mを測る。

出土遺物　土器が出土しており、器種は須恵器の杯蓋・杯身・甕、土師器の甕・ミニチュア土器が出土している。そのうち15点を図化している。遺物は中央部付近にかたまって出土しており、須恵器の杯身は底部を下に、杯蓋は天井部を下にした状態で出土しており、伏せた状態のものは１点もみられない。遺物は土坑のような深度のある遺構に廃棄された状態とは違って、床面上に並べられていたことを窺わせる。ただし、出土レベルは同一ではなく、床面には凹凸があったようである。

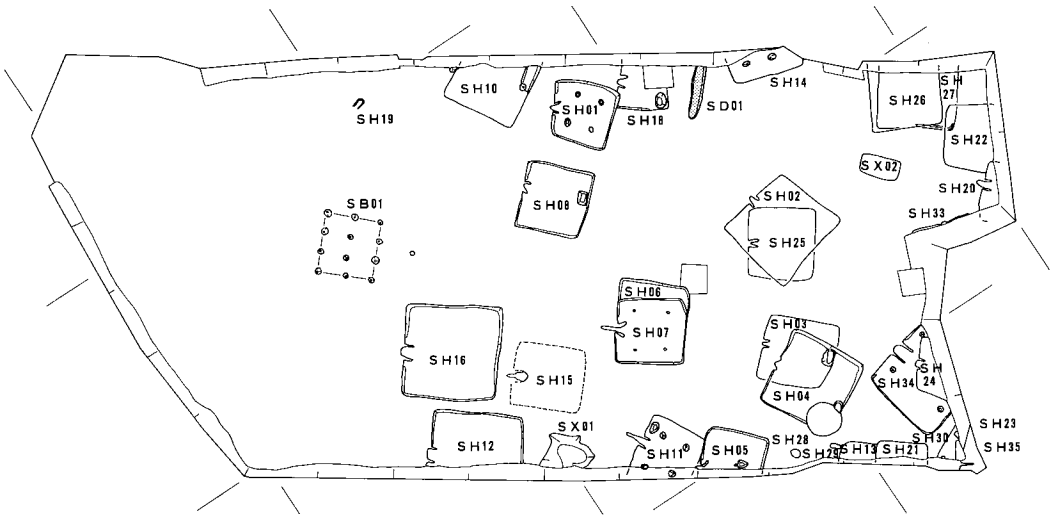
須恵器　杯蓋５点と杯身７点、甕の底部１点の13点を図化している。

杯蓋は174を除いて、天井部と口縁部を分ける稜線は退化し、凹線で代用している。174のみが稜線の体裁をとっているが、これも天井部からの移行はなめらかである。口縁端部内面は５点ともに内傾して段を有している。天井部の回転ヘラケズリは1/2以下の範囲に限定される。ロクロ回転は 170が右回転、171・173・174が左回転である。172は不明である。

杯身は口縁端部内面が内傾して面をもつ175・176と、丸くおさめている177～181がある。175は底部にふくらみをもつタイプで 176は底部が偏平なものである。176は口縁部高と杯部の深さがほぼ同じである。178は口縁部の立ち上がりが長く、179･180は短い。杯部は178が浅く、177･180は深く丸い底部をもつ。底部の回転ヘラケズリの範囲は1/2以下で、ロクロ回転は175・177が右回転で、179～181が左回転である。176と178は小片のため不明である。

182は甕の底部である。外面に平行タタキ、内面は同心円文をなかば擦り消している。

土師器　２点を図化している。183は小型の甕である。頸部のくびれは少なく、短く外反する口縁部をもつ。使用時に火を受けていたようで、外面の調整は観察できない。184は内外面にケズリを加え、外面はナデで仕上げている。



第39図　ＳＤ01の位置

ＳＤ01

検出状況　北西部で検出している。調査区境で検出しているため、全体を検出しているわけではない。遺構は調査区外にのびるものと思われる。ＳＨ14とＳＨ18の間に位置している。

形状・規模　溝の方向は北東－南西を指している。検出した長さは5.40mで幅は最大で95cmを測る。深さは15～20cmと比較的浅い。

出土遺物　遺物は出土していない。

包含層出土の遺物

須恵器　包含層から出土した須恵器のうち比較的残存率のよいものを図化している。器種は杯蓋が６点、杯身が３点、高杯が２点、甕が２点である。

杯蓋は天井部と口縁部の境界を稜線あるいは凹線で区分しているもの（186～189）と境界が明確でないもの（190～191）がある。口縁端部内面は186・187は内傾して面をもつが、188以下のものは不明瞭で、191はまるくおさめている。天井部の回転ヘラケズリは186が比較的広範囲に施されているが、他のものは天井部の1/2以下の範囲に限定されている。ロクロ回転は187・188が左回転、189・190が右回転である。186は磨滅が激しく観察は困難であるが、右回転であると思われる。

杯身は口径が小さく、比較的直立ぎみの口縁部をもつタイプのものである。口縁端部内面はいずれも内傾して面をもつ。底部に施された回転ヘラケズリは1/2以下の範囲に限定され、ロクロ回転は192・193が左回転、194が右回転である。

高杯は２点ともに有蓋高杯で195が口径が小さいタイプのもの、196が口径の大きいものである。195は脚部以下を欠失している。両者ともに口縁端部は丸くおさめる。196は脚部に三角形の透かしを３ヶ所穿っている。ロクロ回転は左回転である。

甕の２点はいずれも口縁部から体部上位にかけてのものである。短く外反する口縁部をもつ。体部外面の調整は縦方向のタタキのちカキ目が観察され、内面には同心円文が観察される。口縁部は内外面ともに横方向のナデで仕上げている。

土師器　199は鉢で口縁部が短く外反する。調整は外面に板ナデがみられる。200と201は土錘である。200は外面に指頭圧痕が観察される。201は長さ10cmを超える大型のもので、外面に縦方向のナデが観察される。

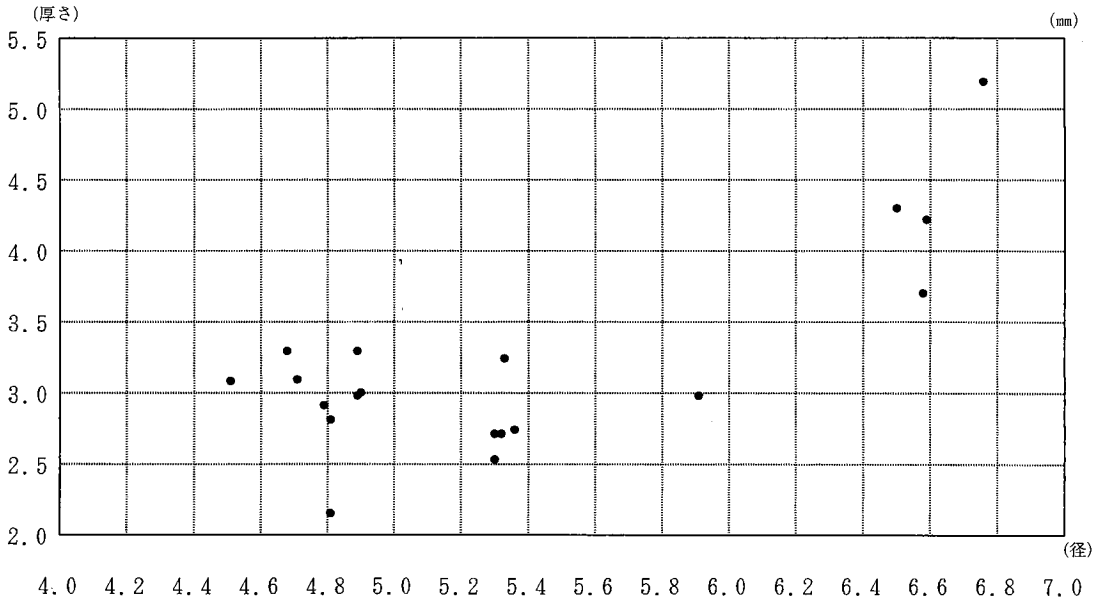
カマド　185はＳＨ06とＳＸ01との中間から出土したものである。住居跡検出面より上層から出土しており、遺構にともなって出土したものではない。

土師器の移動式のカマドである。破片で出土し、残存率は良くない。移動復元して図化している。口縁部径29.4cm、頸部の内面径26cm、底部径49.6cm、高さ39.0cmを測る。底部は約12cm程度はやや直立ぎみに立ち上がり、そこから頸部にかけてゆるやかに径を減じた後、口縁部にかけて外反する。焚口部は推定で幅30cm、高さ26cm程度の半円形の開口部をもっており、開口部に沿った外面には幅４cm、高さ４cmの鍔を貼り付けていたようである。調整は、口縁部内外面は横方向のナデで仕上げ、体部は内外面ともに４条／cmの単位のハケを施している。ただし、外面は縦方向、内面は横方向である。底部の接地面端部は肥厚させており、指頭圧痕が顕著に観察される。内面には粘土紐痕がみられる。

玉類　185とほぼ同じ位置から玉類が出土している。これも、遺構に伴って出土したものではなく、遺構検出面を精査中に出土したものである。出土した玉はおよそ50cmの範囲内に集中しており、出土レベルに差は認められない。合計19個体を回収している。石製の小玉である。色調はにぶい緑色を呈しており、すべて同一の母岩からのものと思われる。

玉の直径は最大のもので6.76mm（Ｊ－１）、最小のもので4.51mm（Ｊ－16）である。厚さは最大のもので5.19mm（Ｊ－１）、最小のもので2.15mm（Ｊ－12）である。重量は最大で0.34ｇ、最小で0.07ｇである。

鉄器　確認調査のNo.54 グリッドから出土したものである。Ｓ３は長さ4.95cm、幅2.80cm、幅0.25cmの板状の製品で図の上辺は折れている。他に移動式カマド・玉類が出土した付近から鉄釘が２点出土している。いずれも、両端とも欠損しており図化していない。



第40図　包含層出土小玉グラフ

表４　包含層出土　小玉計測表

番　号	直径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)	番　号	直径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	重量(g)
J-1	6.76	5.19	2.20	0.34	J-11	4.89	2.98	2.05	0.08
J-2	6.50	4.30	2.20	0.27	J-12	4.81	2.15	2.00	0.07
J-3	6.58	3.70	2.40	0.18	J-13	4.79	2.91	2.00	0.09
J-4	6.59	4.22	2.30	0.25	J-14	4.68	3.29	2.20	0.09
J-5	5.91	2.98	2.65	0.13	J-15	5.30	2.53	1.90	0.08
J-6	5.33	3.24	1.90	0.14	J-16	4.51	3.08	2.00	0.07
J-7	5.30	2.71	1.80	0.12	J-17	4.71	3.09	2.45	0.08
J-8	4.89	3.29	2.00	0.10	J-18	4.90	3.00	2.10	0.08
J-9	5.36	2.74	1.70	0.13	J-19	4.81	2.81	2.10	0.08
J-10	5.32	2.71	1.80	0.12	総　重　量				2.50

第３節　Ｂ地区の調査

１．立地

Ｂ地区はＡ地区とＣ地区の間に位置している地区である。すでに述べたように、Ａ地区は美嚢川右岸に発達した自然堤防が調査区の2/3を占めている。その自然堤防は北西にしたがってその高度を下げており、自然堤防に続く後背湿地はＡ地区の北西部ですでに始まっている。第４図に示した、現状微地形を復元した等高線では、ちょうどＢ地区にあたる位置に谷状に入り込んだ地形が読み取れる。

２．概要

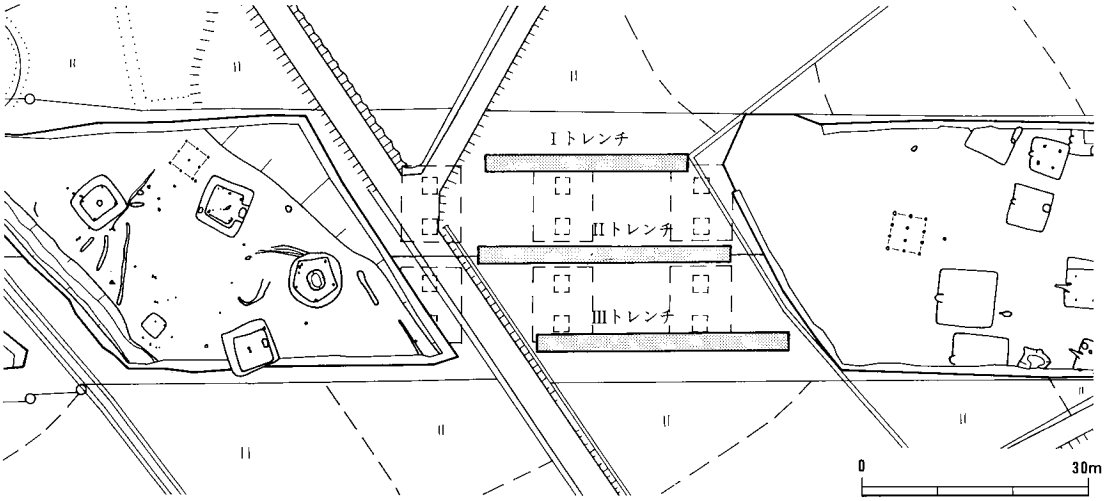
Ｂ地区は確認調査で№38・39・41～43・46のグリッドを設定した地区である。調査の結果、遺物の出土が極端に少なく、遺構の検出もみられなかった。ただ、土壌化した土層が何面か観察され、層の性格を把握するため、トレンチによる調査を行った。調査は、路線に平行して３本のトレンチを設定して行った。北側のものがⅠトレンチで延長28m、真ん中のものがⅡトレンチで延長35m、南側のものがⅢトレンチで延長36mである。深さは1.1 ～1.3mを掘り下げた。

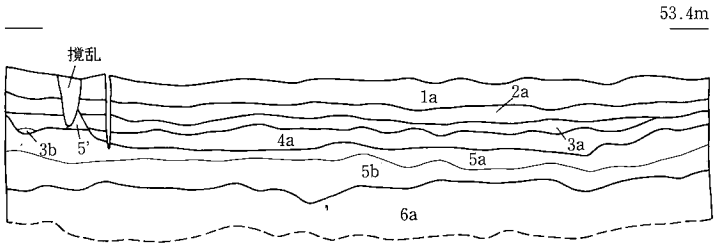
３．土層

確認調査の結果と同様に３本のトレンチからは住居跡・土坑・溝などの遺構は確認することができなかった。トレンチの断面精査の結果、ほぼ水平に堆積した土層が確認された。遺物の出土が極端に少ないため、各土層の堆積した時期などは明確ではないが、６ａ層付近から古墳時代の須恵器片が若干出土している。層の特徴などから、この６ａ層はＡ地区で遺構を検出したベース面と同一のものであると考えられる。Ⅱトレンチの北西部の下部でみられる８ｂ層は褐黄色のシルト混じり細砂で、次節で述べるＣ地区の遺構を検出したベース面と同一の土層である。この他の１ａ～５ｂ層は、若干中央部の標高が低いものの基本的に水平の堆積を示しているものである。１層ごとの堆積は比較的薄い堆積で、５層以外は非土壌化の部分が観察されない。水田としての土地利用が想定されるが、１ａ～４ａ層では畦畔は確認されていない。５ａ層では、Ⅰトレンチの北西部とⅢトレンチの中央部で、高さ15cm程度の畦畔を断面で確認しており、水田としての利用が確定的であるが、遺物が出土していないため、その時期は明らかではない。

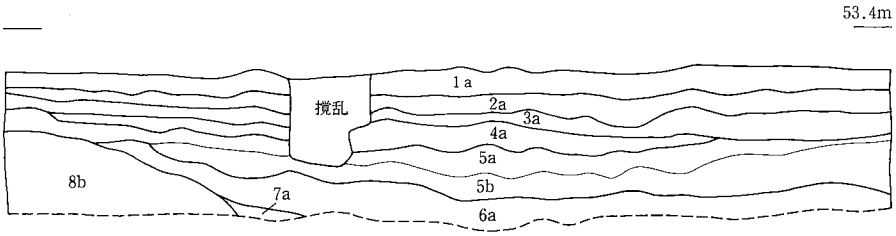
４．まとめ

Ｂ地区は美嚢川によって形成された自然堤防の後背湿地にあたる。３本設定したトレンチ調査の結果、南東部に隣接するＡ地区と北西部に隣接するＣ地区につながる遺構の存在は認められなかった。掘削した深度内では、土層は基本的に水平な堆積をしており、各層は土壌化している。５ａ層では畦畔が認められ、水田としての土地利用が考えられるが、時期は不明である。Ｃ地区は地形としては扇状地であるため、後背湿地としての範囲は非常に狭い。水田の性格としては、初原的な形態の、いわゆる谷水田であったと考えらる。

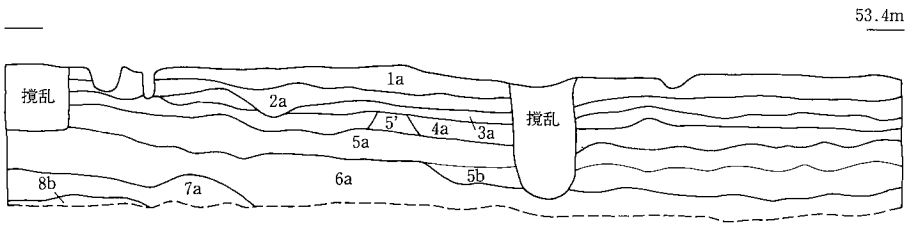




Ⅰトレンチ

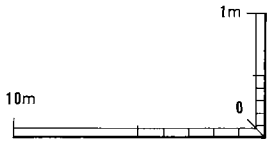


Ⅱトレンチ



Ⅲトレンチ

1a 黄灰色　極細砂（Fe^2O^3混じる）
2a 灰色　細砂混じり極細砂
3a 灰白色　細砂混じりシルト質極細砂
3b 淡灰黄色　極細砂
4a 灰色　シルト質極細砂（Mn混じる）
5a 暗灰色　極細砂質シルト
5' 淡灰色　極細砂質シルト（上面にFe^2O^3）畦畔
5b 褐黄色　極細砂質シルト
6a 褐黄色(東側)　緑灰色（西側）極細砂質シルト（西側植物遺体混じる）
7a 黒褐色　細砂混じりシルト　φ3～5mm礫混じる
8b 褐黄色　シルト混じり細砂（Fe^2O^3混じる）下層は細砂



第41図　Ｂ地区　トレンチ断面図

第４節　Ｃ地区の遺構と遺物

１．調査の概要

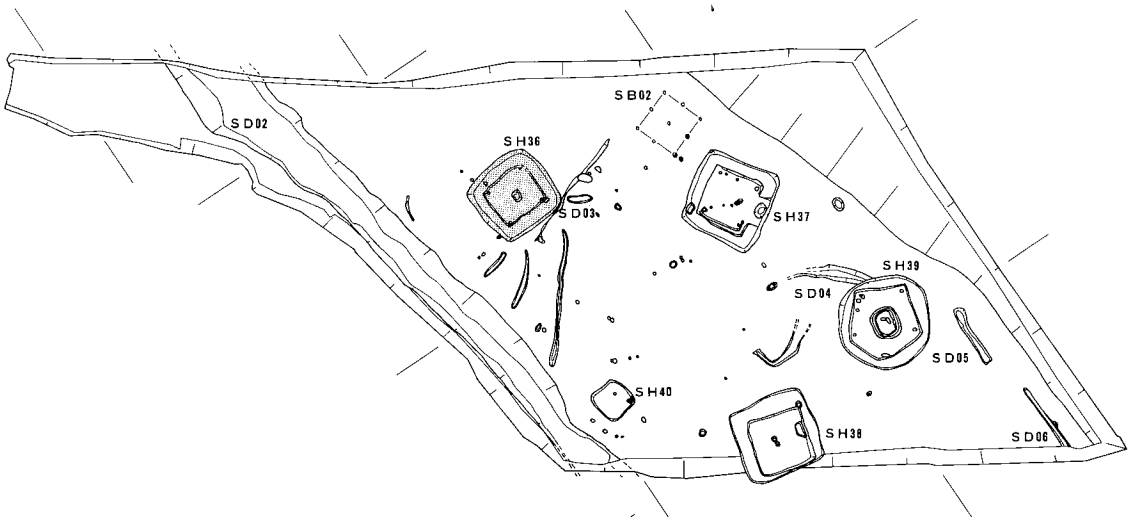
Ｃ地区は西ケ原遺跡のほぼ中央部に位置し、三木市細川町側にあり久留美との境に所在する。立地は土石流タイプの扇状地の先端部にあたる。

調査区は、東側のＢ地区とは幅５ｍの農道で、西側のＤ地区とは用水路で区分している。東側の農道は扇状地と後背湿地との境界部に、西側の用水路は「毛谷」から供給された土石流の端部に沿って設置されているようである。Ｃ地区全体の調査面積は1,953㎡である。

調査は重機と人力により掘り下げを行い、遺構の検出に努めた。基本的には４ｂ層までは遺物の包含が認められないことから、重機によって掘削を行い、遺物の包含する５ａ層以下を人力による掘削を行った。

調査の結果、弥生時代後期末の竪穴住居跡５軒、掘建柱建物跡１棟、溝、土坑を検出した。調査区の東側はＢ地区の後背湿地に向かって自然に落ちており、以東には遺構の存在の可能性は認められなかったが、落ちの肩部で堆積している黒色シルト質粘土の12層中より土器を主体とした遺物が出土している。調査区の西側は調査区境に沿ってＳＤ02がほぼ北－南方向に検出された。ＳＤ02は検出された範囲内では直線的で、両端とも調査区外に伸びている。遺構はこの東側の落ちと西側のＳＤ02に挟まれた、幅約25mの南北に延びる地域で検出している。竪穴住居跡の検出レベルは53.1～53.4mと比較的差がなく、平坦な様相を呈している。

２．遺構と遺物



第42図　ＳＨ36の位置

ＳＨ36

検出状況　　調査区の北西部で検出している。遺構は全体を検出することができた。当地区で検出された５軒の竪穴住居跡のうちで最も北西に位置している。柱穴あるいは溝と一部で重複して検出されているが、大きな切り合い関係は認められない。東南東約15mにＳＨ37が検出されている。

形状・規模　平面形は基本的には方形を呈している。ただし、各コーナー部は直角に屈曲せず隅円状に曲がり、辺によっては若干弧状を呈するものもみられる。主軸は北辺を基準として設定しており、当住居跡はほぼ座標北に主軸をとっている。北辺から順に時計回りに辺の長さを示せば、6.25m、5.45m、5.55m、5.25mとなる。全体として、北・南辺が長く、東・西辺が短い傾向にあり長方形ぎみの形状である。各辺は、東辺と南辺が直線的であるのに対し北辺と西辺は弧状を呈する。検出面から床面までの深さは37cm、床面の標高は52.65mである。床面積は27.6m²を測る。

埋土　５層の堆積が認められた。細砂からシルトを主体としたものであるが、上層にシルトなどの粒子の細かいもの、下層に細砂などの比較的粒子の粗いものが堆積している。床面は青灰色シルト層をベースとしているが、地下水位の変化の影響を受けて、各所で湧水箇所がみられ非常に軟弱な床面となっている。結局、調査終了まで板材等の補助なしには床面上に立つことはできなかった。

施設　柱穴・周壁溝・高床部・土坑が検出された。

柱穴　６本の柱穴が検出されているが、主柱穴を構成しているものはＰ１～４の４本の柱穴であると考えられる。

Ｐ１は掘り方の直径24cm、床からの深さは21cmである。Ｐ２は掘り方の直径20cm、床からの深さは34cmである。Ｐ３は掘り方の直径26cm、床からの深さは29cmである。Ｐ４は掘り方の直径25cm、床からの深さは26cmである。

柱穴間の距離は、Ｐ１～Ｐ２間が3.15m、Ｐ２～Ｐ３間が2.90m、Ｐ３～Ｐ４間が3.10m、Ｐ４～Ｐ１間が2.90mである。

各柱穴は高床部と床面との境界の各コーナーに設置してある。Ｐ３とＰ４の中間部に柱穴が検出されたが、補助的な柱である可能性がある。北高床部で検出されたものは、時期的に差のある別の遺構の可能性が高い。

周壁溝　周壁溝が検出され、全周している。床面での幅は12～15cm、底での幅は２～５cmであり、床面からの深さは４～７cmを測る。

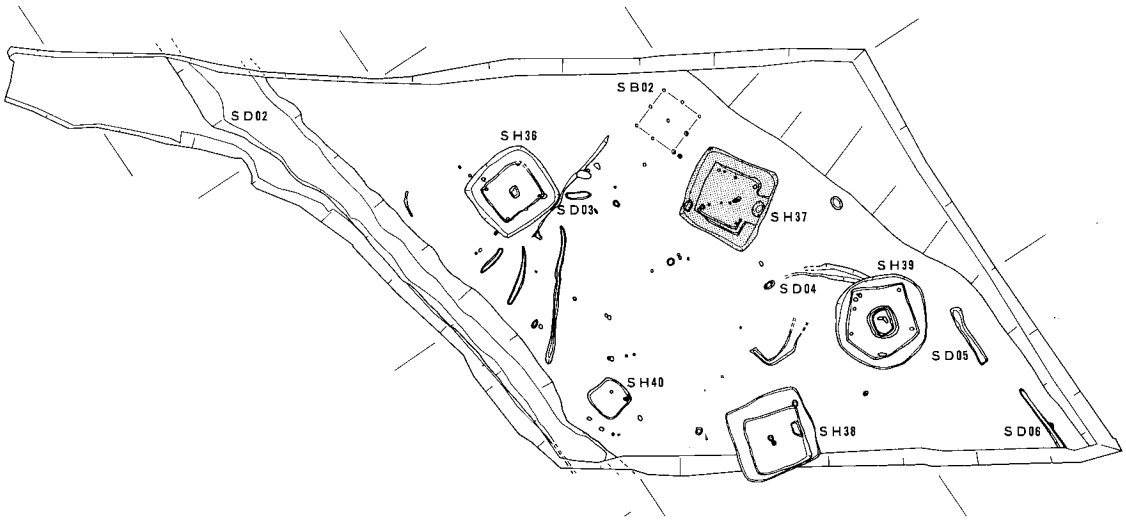
高床部　周壁に沿って全周する高床部（ベッド状遺構）を検出した。高床部内側の平面形は周壁の平面形と相似形を示している。周壁溝の肩から測る高床部との幅は70～90cmとほぼ一定している。床面との比高差は12～15cm、検出面からの深さは22～25cmを測る。高床部の面積は13.7m²を測り、対床面積比は49.6％である。高床部は地山を削り出して構築されている。

土坑　床面の中央部付近で土坑１を検出した。検出面での平面形は円形ぎみであるが、土坑底部での形状は双円形を呈している。規模は長軸方向に83cm、短軸方向に75cmを測る。深さは５cmと浅い。埋土は１層のみの堆積が認められる。炭化物を主体としたもので、底部の一部には灰が若干観察される。

出土遺物　土器のみが出土しているが、遺構の残存状況が良好なわりには量は少ない。器種としては壺・甕・高杯などが出土しているが、そのうち図化しているのは４点のみである。202は短脚の高杯脚部で、裾端部はごく僅かの残存である。脚柱部は中空で杯部との接合部に円盤を充塡している。調整は磨滅のため観察は困難であるが、裾部に円形の透かしが４方向

に配されている。203～205は甕である。203は肩部から口縁部にかけてのもので、体部外面にタタキ、内面に強いナデが観察される。口縁部は内外面ともにヨコナデを施している。204は底部で丸底化の傾向を示す。外面のタタキは底まで施されているが、一部に縦方向のハケが観察される。内面にはハケ調整を施している。205は従来からの弥生型の底部である。外面のタタキは底まで施され、内面はハケ調整である。底面には木葉痕が観察される。小型のもので、鉢の可能性も考えられる。

その他　　Ｐ１と床面の北西部コーナーとの間で石が出土している。合計で12個体出土しており、細長い、いわゆる河原石で加工痕や使用痕は認められなかった。長さは20cm、幅・厚さともに10cmに満たないものがほとんどで、形態的に比較的よく揃っている。出土状態から、意識的に置かれていたものと思われ、何らかの用途のために備蓄してあったものと考えられる。同じように、その対角のＰ３と床面の南東部コーナーとの間でも２個体の同様の石が出土している。



第43図　ＳＨ37の位置

ＳＨ37

検出状況　　調査区の中央部のやや東寄りで検出している。遺構は全体を検出することができた。他の遺構との切り合い関係は認められない。西北西約15mにＳＨ36が、南約15mにＳＨ39が検出されている。

形状・規模　　平面形は基本的には方形を呈している。ただし、各コーナー部は、直角に屈曲せず隅円状に曲がっている。主軸は北西辺を基準として設定しており、当住居跡はN32°Wに主軸の方向をとっている。北西辺から順に時計回りに辺の長さを示せば、6.05m、6.28m、6.70m、6.30mとなる。北東辺と南西辺がほぼ同じ長さであるのに対し、北西辺は南東辺に較べて65cm短い。このことが住居跡の形状を決定づけており、南西辺を斜辺とする台形状を呈している。各辺はそれぞれ直線的である。検出面から床面までの深さは58cm、床面の標高は52.60mである。床面積は34.9m²を測る。

埋土　　６層の土層の堆積が認められた。細砂からシルトを主体としたものである。遺物は主に第３層の灰色シルト質極細砂から出土しており、床面上には炭化物を多く含む黒灰色シルトが堆積している。床面は青灰色シルト層をベースとしているが、ＳＨ36と同様の状態で

各所で湧水箇所がみられ非常に軟弱な床面となっている。

施設　柱穴・周壁溝・高床部・土坑が検出された。

柱穴　12本の柱穴が検出されているが、主柱穴を構成しているものは床面上の各コーナー部で検出された、Ｐ１～４の４本の柱穴であると考えられる。他の８本は周壁面で検出されたもので、主柱穴とは考えられない。

Ｐ１は掘り方の直径30cm、柱痕の直径15cm、床からの深さは42cmである。Ｐ２は掘り方の直径18cm、床からの深さは25cmである。Ｐ３は掘り方の直径26cm、床からの深さは31cmである。Ｐ４は掘り方の直径20cm、床からの深さは25cmである。

柱穴間の距離は、Ｐ１～Ｐ２間が3.30m、Ｐ２～Ｐ３間が3.20m、Ｐ３～Ｐ４間が3.20m、Ｐ４～Ｐ１間が3.15mである。柱穴内の埋土は灰色極細砂質シルトを主体としており、床面のベースの青灰色シルトとは明瞭に区別できた。

周壁面で検出された８本の柱穴は、北東辺と南東辺で４本ずつ検出されている。北西辺と南西辺では確認されていない。埋土は主柱穴と同様に灰色極細砂質シルトを主体としたもので、周壁面との区別は非常に明瞭である。埋土内の上層では炭化物が多く混じっている。柱穴の底は周壁溝の底部までは至らずに、約10cm程度上で止まっている。これらの柱穴は周壁面で検出されていることもあり、平面形としては半円形を呈する。この状態では、柱としての安定性に欠けており、住居跡内に残り半分を固定する施設が必要である。このことから周壁溝内に巡らされた板材の存在が想定できる。柱穴の用途としては、住居跡の屋根を上げて延長し、屋外に庇状に張り出して、軒下としての空間を確保するためのものではないかと考えている。

周壁溝　周壁溝が検出され全周している。床面での幅は10～15cm、底での幅は３～５cmであり、床面からの深さは10cmを測る。

高床部　土坑３のある南辺の一部が切れて「コ」字形に巡る高床部を検出した。高床部内側の平面形は周壁の平面形と相似形を示している。周壁溝の肩から測る高床部との幅は70～80cmとほぼ一定している。床面との比高差は20～25cm、検出面からの深さは33～35cmを測る。高床部の面積は20.0m²を測り、対床面積比は42.7％である。高床部は地山を削り出して構築されている。床面の一部には高床部に沿って溝がみられる。床面の北東辺と、そこから屈曲する南東辺、南西辺の一部と、そこから屈曲する南東辺である。北西辺と土坑３に沿った高床部際には見られない。南西辺ではさらに内側に屈曲した溝を検出している。幅は７～10cm深さは５cm未満のものである。当初は内側の溝に沿って高床部が巡らされており、その後、床面を拡張するために高床部を削ったものと思われる。

土坑　床面上と高床部で合計４基の土坑を検出した。

土坑１は床面の中央部で検出された。平面形は楕円形を呈している。規模は長軸が70cm短軸が35cmで深さは12cmを測る。埋土には炭化物が厚さ７cmにわたって堆積している。

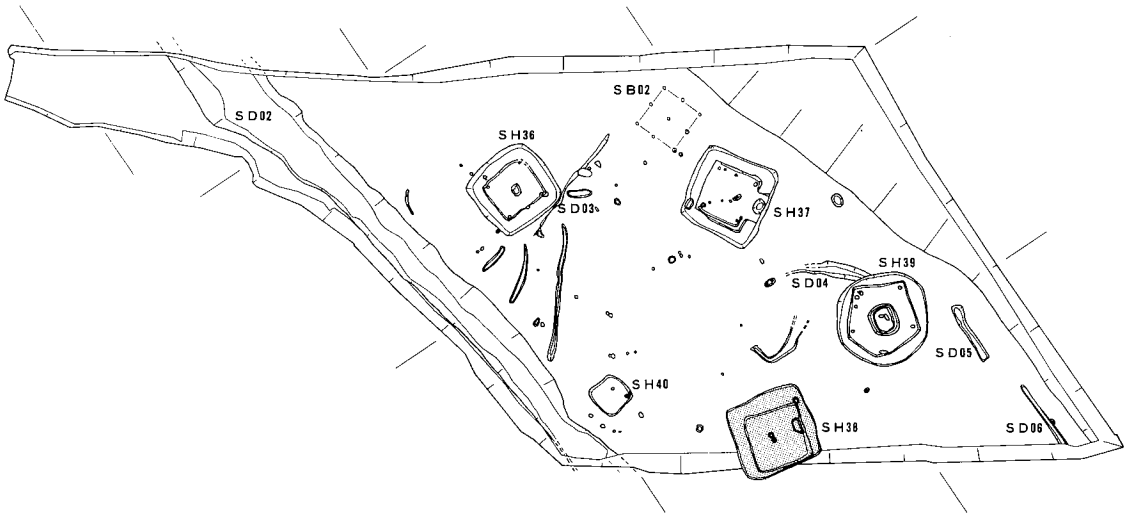
土坑２は土坑１の西側に近接して検出された。平面形は円形に近い。規模は長軸が25cm短軸が22cmで深さは15cmを測る。埋土には土坑１と同様に炭化物が堆積している。

土坑３は南東辺に接して検出されたものである。平面形は楕円形を呈している。規模は長軸が127cm、短軸が82cmで深さは30cmを測る。埋土は１層の堆積で、黒灰色極細砂質シル

トで青灰色シルトがブロックで混入し、炭化物が混じっている。この土坑の底部から高杯と鉢が出土している。

土坑４は高床部の西部コーナー付近で周壁溝に接して検出された。平面形は楕円形を呈している。規模は長軸が88cm、短軸が72cmで深さは43cmを測る。土坑の壁面の傾斜角度は急である。埋土は灰色細砂混じり極細砂質シルトが堆積しているが、下層には地山がブロック状にかなりの量で混入している。埋土内から高杯の口縁部の破片が１点と甕の破片が数点出土している。

出土遺物　土器のみが出土しているが、遺構の残存状況が良好なわりには量は少ない。器種としては壺・甕・鉢・高杯・器台などが出土しているが、そのうち図化しているのは６点のみである。206は細頸の壺である。体部の下半を欠失しているが玉葱形の体部をもっていたものと思われる。頸部は細く、口縁部は直線気味にひらく。外面の調整は全体的に横方向のミガキを施している。内面は磨滅が激しく観察は困難であるが、口縁部に横方向のナデを施している。体部上半にはシボリ目が観察される。207は土坑３から出土したものである。口縁端部の1/2程度を欠失している。杯部は外反してひらく口縁部をもち、脚部は屈曲せず直線的なものである。調整は内外面ともにハケ調整を施したのち脚部内面以外はミガキで仕上げている。一部にハケ調整の痕跡を残す。杯部底部は充塡法をとる。208は脚裾部を欠失し、口縁部はごく僅かの残存である。口縁部は大きく外反し、脚柱部は中実のものである。磨滅が激しく調整は観察できない。209は土坑３から207と一緒に出土した鉢である。底部は丸底である。調整は内外面ともにミガキを施し、外面は横方向、内面は縦方向である。口縁端部は内外面ともに弱くナデているようである。210と211はともに残りが悪く、器台と高杯に分類しているが両者とも器台の可能性も残る。211には僅かにミガキの痕跡が観察される。



第44図　ＳＨ38の位置

ＳＨ38

検出状況　調査区の中央部の南端で検出している。遺構は当初設定した調査区外にのびていたため部分的に１m程度拡張して全体の検出に努めた。その結果、２軒の竪穴住居跡が重複していることが判明した。内側の住居跡の方が新しい。内側の住居跡を38-1、外側のものを38-2

と命名した。遺構は38-2のなかに38-1が完全におさまっているため、当初は同一の遺構として調査を行ったが、埋土断面の観察の結果38-1の埋土が38-2の埋土を切っていることが判明したため時期の違う住居跡であると決定した。その他の遺構との切り合い関係は認められない。東約12mにＳＨ39が検出されている。

形状・規模　38-1の平面形は方形を呈している。東辺から順に時計回りに辺の長さを示せば、4.45m、4.40m、4.35m、4.45mとなり、ほぼ正方形である。辺は南辺がやや歪に湾曲しているが、他の３辺は直線的である。検出面から床面までの深さは53cm、床面の標高は 52.95mである。床面積は16.6m²を測る。

38-2の平面形は方形を呈しているが、東辺の中央部に2.35mの幅で張り出しが設置されている。ただし、張り出しの程度は弱く、約20cm程度のものである。東辺から順に時計回りに辺の長さを示せば、5.85m、6.15m、6.05m、5.95mとなる。各コーナーは比較的直角に屈曲するが、南西部コーナーは隅円状である。各辺は直線的である。検出面から床面までの深さは20cm、床面の標高は53.25mである。床面積は35.2m²を測る。

住居跡の主軸の方位は北辺を基準に設定しており、38-1がＮ18°Ｅに、38-2がＮ12°Ｅにそれぞれの方向をとっている。

埋土　７層の土層の堆積が認められたが、１～６層までは38-1にともなう埋土で、７層のみが38-2にともなう埋土である。

38-1の埋土は上層の３層に出土した土器の大半が包含されている。下層の４・５層は灰色～暗灰色の極細砂質シルト～シルト層を主体とするもので炭化物や地山がブロック状に混入しているが、遺物の包含は少量である。６層は土坑内の堆積で、炭化物が充塡されている。

38-2の埋土は７層のみの単一層の堆積である。淡褐色の極細砂質シルトで、遺物の包含はみられない。

施設　周壁溝・土坑が検出された。

周壁溝　それぞれの住居跡から周壁溝が検出されている。

38-1のものは全周している。ただし、東辺に沿って検出された土坑３の位置する部分については、土坑３に切られていようである。床面での幅は15～25cm、底での幅は７～10cmであり、床面からの深さは９～14cmを測る。

38-1の周壁溝は、東辺の中央の張り出し部と南辺の一部で途切れているほかは全周している。床面での幅は５～15cm、底での幅は３～５cmであり、床面からの深さは５～８cmを測る。

出入口　38-2で注目すべきは、東辺張り出し部である。周壁溝は北東と南東のコーナーから屈曲して周壁に沿った直線部分では検出されているが、ちょうど張り出し部が始まる変化点の両端で途切れている。周壁溝は周壁に沿って設置された板材の固定のために掘削されたものであるとされており、この周壁溝が切れていることは、そこに板材の想定は考えらない。本来、板材の高さは住居跡の壁の高さを凌駕するものであったことが想定されているが、そうであれば、この張り出し部は約2.5mの幅で板材との間に空間を生じることとなり、この空間は、住居跡の出入口としての利用以外には考えられない。

土坑　　38-1で３基、38-2で１基の合計４基の土坑を検出した。

38-1で検出された３基の土坑のうち、土坑１と土坑２は中央部、土坑３は東辺に沿って検出された。

土坑１の平面形は、ほぼ円形を呈している。規模は長軸が46cm短軸が42cmで深さは13cmを測る。埋土には底部まで炭化物が堆積している。

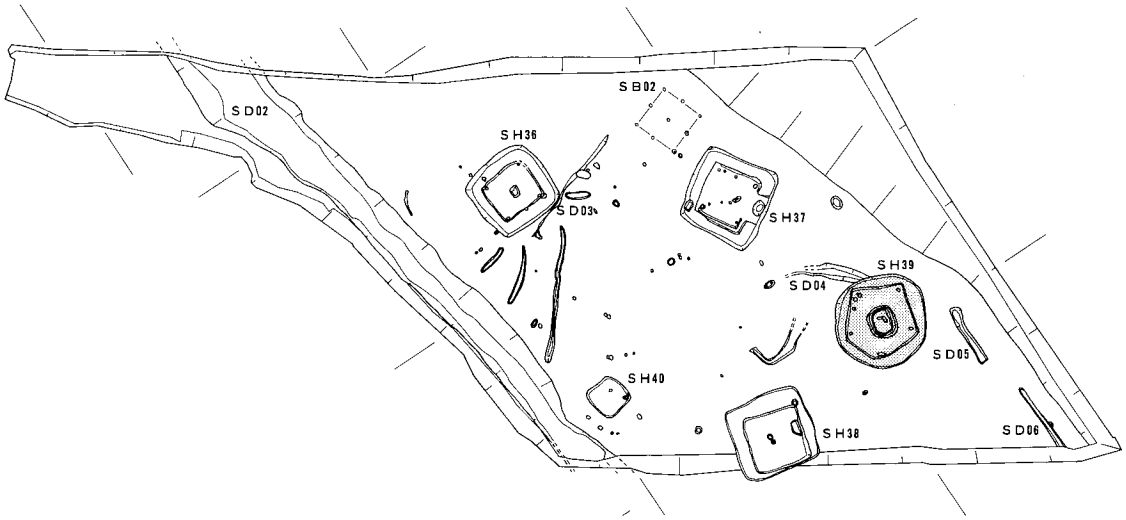
土坑２は土坑１の南側に近接して検出された。平面形は円形に近い。規模は長軸が36cm短軸が32cmで深さは14cmを測る。埋土には土坑１と同様に炭化物が堆積している。

土坑３は東辺に接して検出されたものである。平面形は台形状を呈している。規模は長辺が140cm、短軸が50cmで深さは80cmを測る。深さは床面から７cm程度と比較的浅いものである。埋土は１層の堆積で、黒灰色シルトで炭化物がかなり混じっている。この土坑の長辺に沿って板材が出土した。板材は長さ100cm、幅38cmで厚さは２cm程度のものである。平板な形状ではなく、両側の長側辺が内側に向かって湾曲している。遺存状況は非常に悪い。樹種はコウヤマキである。この板材の上から213の高杯・218の鉢・221の甕が、西側に約５cm離れて223の鉢が出土している。

土坑４は38-2にともなうもので、北東部コーナー付近で検出された。平面形は楕円形を呈している。規模は長軸が61cm、短軸が42cmで深さは５cmを測る。埋土は炭化物が堆積している。遺物は出土していない。

出土遺物　　土器のみが出土しているが、すべてが38-1から出土しているもので、38-2からのものは認められなかった。遺物は埋土の上層から出土したものが大多数で、床面上からのものは比較的少ない。埋土からは、甕・壺・高杯などが出土しているが、高杯脚部が多く見受けられる。

212は壺である。直線的にひらく口縁部をもつ。調整は外面に横方向のミガキ、内面に縦方向のミガキを施し、口縁端部に刻み目が観察される。213～217は高杯である。このうち213のみが土坑３から出土し、その他のものは埋土からの出土である。213は口縁部と脚裾端部の一部を欠失している。直線的にひらく口縁部と、裾部が屈曲してひらく脚部をもつものである。脚柱部は中実である。調整は脚部外面に縦方向のケズリの後、脚柱部に横方向のミガキを施している。杯部については磨滅が激しく調整の観察は不明である。埋土から出土したもののうち、214のみが屈曲してひらく口縁部をつもので、他のものは直線的にひらく口縁部の形態をとる。216と217は埋土の上層から出土しており、口縁部と杯部との境は不明瞭な形態のものである。調整は、基本的にはミガキで仕上げているようである。215は杯部の外面に縦方向の、内面に横方向のハケが観察される。脚部には４方向に透かしを穿っている。218は土坑３から出土した台付鉢である。台端部を欠失している。体部の調整は内外面ともにミガキ、台部はナデを施している。219～221は甕である。底部はいずれも丸底化の傾向を示す。調整は内面はナデ、外面はタタキが底部に及ぶ。219はナデ調整、220はハケ調整を体部の大半に施す。221は土坑３から出土したもので、体部外面に煤が付着している。222は口縁端部を欠失しているが、鉢であろう。平坦な底部をもちタタキは底部に及ぶ。磨滅が激しく調整の観察は困難である。223も土坑３から出土した鉢である。内外面に丁寧なナデ調整を加える。



第45図　ＳＨ39の位置

ＳＨ39

検出状況　調査区の南東部で検出している。遺構は全体を検出することができたが、遺存状態は良好とはいえない。住居跡の上部大半が削平を受けており、周壁は全く失われている。ＳＤ04と重複して検出されている。ＳＤ04を切っているが、ＳＤ04の残りが悪いこともあってその関係は必ずしも明確ではない。西約12mにＳＨ38が、北約15mにＳＨ37が検出されている。

形状・規模　平面形は基本的には円形を呈しているが、高床部で区切られた床面の平面形は五角形を呈している。規模は直径7.60mを測る。検出面から床面までの深さは15cmであるが高床部と検出面に比高差は認められず、周壁溝でのみ区切られている。床面の標高は 52.65mである。床面積は39.0m²を測る。

施設　柱穴・周壁溝・高床部・土坑が検出された。

柱穴　内区五角形を呈する高床部の各コーナー部ごとに計５本の柱穴が検出された。各柱穴は主柱穴であると考えられる。北端の柱穴から順にＰ１～Ｐ５と命名した。

Ｐ１は掘り方の直径18cm、床からの深さは27cmである。Ｐ２は掘り方の直径31cm、床からの深さは22cmである。Ｐ３は掘り方の直径28cm、柱痕の直径16cm、床からの深さは28cmである。Ｐ４は掘り方の直径35cm、柱痕の直径20cm、床からの深さは40cmである。Ｐ５は掘り方の直径28cm、柱痕の直径25cm、床からの深さは36cmである。

柱穴間の距離は、Ｐ１～Ｐ２間が3.10m、Ｐ２～Ｐ３間が3.20m、Ｐ３～Ｐ４間が3.00m、Ｐ４～Ｐ５間が3.15mである。Ｐ５～Ｐ１間が3.10mである。

周壁溝　周壁溝が検出され全周している。この周壁溝の形状で当住居跡の平面径が円形であることが確定した。床面での幅は10～23cm、底での幅は５～８cmであり、床面からの深さは７～10cmを測る。

高床部　５本の柱穴をコーナー部とした内区が五角形を呈する高床部を検出している。床面との比高差は15cm、検出面との比高差はない。遺構の上部が削平を受けているが、この高床部にも削平が及んでいることが十分に想定される。高床部の面積は14.5m²を測り、対床面積比は37.2%である。

土坑　　土坑を２基検出している。

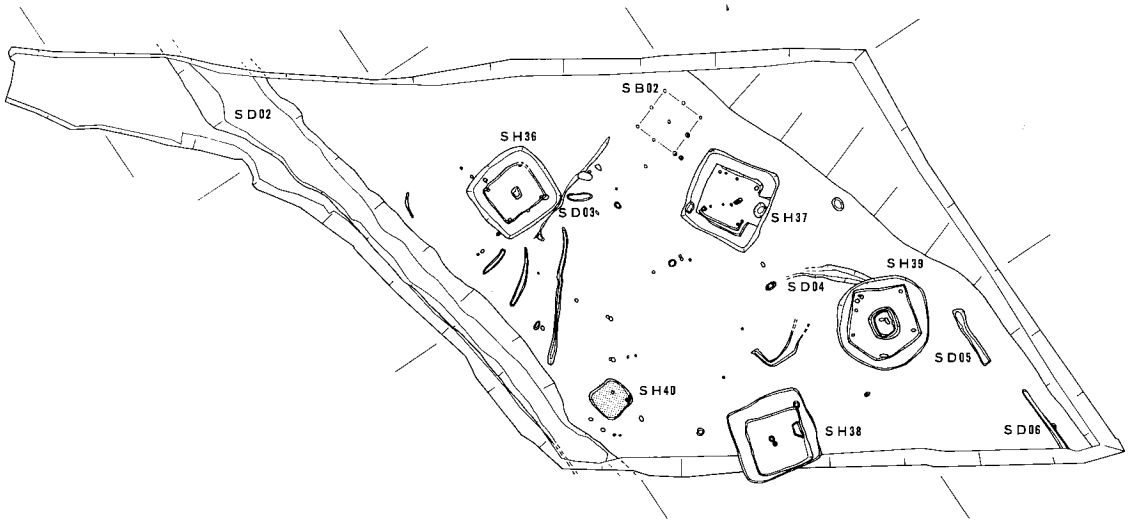
土坑は床面の中央部で検出された。土坑の周囲に土手をもつ形態のもので、その平面形は楕円形を呈している。規模は長軸が262cm短軸が218cmで、高さは５cmを測る。土手自体の幅は上端で10～16cm、下端で32～55cmである。

土手内にある土坑１は、中心部からやや東に位置している。平面形は楕円形である。規模は長軸が68cm短軸が30cmで深さは38cmを測る。断面の形状は垂直な壁面をもつが、底部の形状は不整形である。埋土は黒色の極細砂が堆積しており、土器片や炭化物を包含している。

土坑２は土坑１の北西に近接して検出された。平面形は不整形の円形を呈している。規模は長軸が28cm、短軸が25cmで、深さは24cmを測る。埋土は土坑１と同質のものが認められる。土坑１と土坑２とは上部付近で結合している。

出土遺物　　土器のみが出土している。遺物の大半は住居跡埋土内からの出土である。壺・甕の底部高杯の脚部・鉢などか出土しているが、ほとんどが細片である。床面上からは遺物は出土しておらず、土坑内から壺・甕の破片が出土している。土坑１の南側で珪化木が床面上に据え置かれていた。加工痕、使用痕などはみられない。

224は壺の口縁部である。土坑１から出土している。直立する頸部から大きくひらく口縁部をもつ。磨滅のため調整の観察は困難であるが、口縁端部内外面に横方向のナデを施しているようである。225は鉢で土坑直上の住居跡埋土から出土したものである。口縁部の一部を欠失している。表面のほとんどが剥離しているが、内外面の一部にミガキが残っている。226は壺の底部である。土坑１から出土している。調整は外面に縦方向のミガキ、内面にハケを施している。



第46図　ＳＨ40の位置

ＳＨ40

検出状況　　調査区の南西部で検出している。遺構は全体を検出することができた。他の遺構との切り合い関係は認められないが、周囲にある柱穴と重複している可能性は否定できない。北西約13mにＳＨ38が検出されている。

形状・規模　　平面形は基本的には方形を呈しているが、コーナーでは隅円状である。北辺から順に辺

の長さを示せば、2.65m、2.55m、2.55m、2.55mとなる。検出面から床面までの深さは20cm、床面の標高は53.20mである。床面積は5.4m²と小型の住居跡である。

施設　　柱穴・周壁溝・焼土面が検出された。

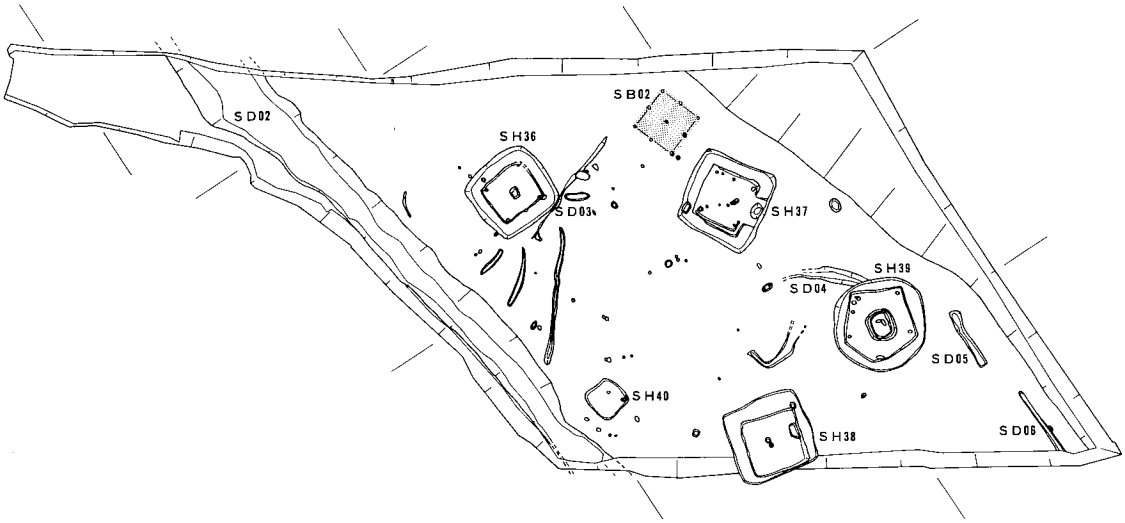
柱穴　　２本の柱穴を検出している。

Ｐ１は掘り方の直径25cm、床からの深さは20cmである。Ｐ２は掘り方の直径28cm、床からの深さは17cmである。柱穴間の距離は、3.10mである。ただ、この２穴の柱穴は当住居跡に付随するものとしては位置的に疑問が残る。違う時期の遺構である可能性も考えられる。

周壁溝　　周壁溝が検出されているが、全周しているわけではない。北辺と東辺、そして西辺の一部の全体の約半分強に認められる。床面での幅は20cm、底での幅は５cmであり、床面からの深さは５cmを測る。

焼土面　　住居跡の中央部で焼土面と炭化物を検出した。形状は不整形ぎみの楕円形を呈しており。規模は長軸85cm、短軸65cmを測る。床面は他と較べて若干窪んでいる。

出土遺物　　土器のみが出土しているが、量は少ない。鉢・壺底部・甕・高杯脚部が出土しているが図化したのは１点のみである。227は有孔鉢である。体部下半から底部に欠けてのものである。調整は外面にタタキ、内面にハケが観察される。



第47図　ＳＢ02の位置

ＳＢ02

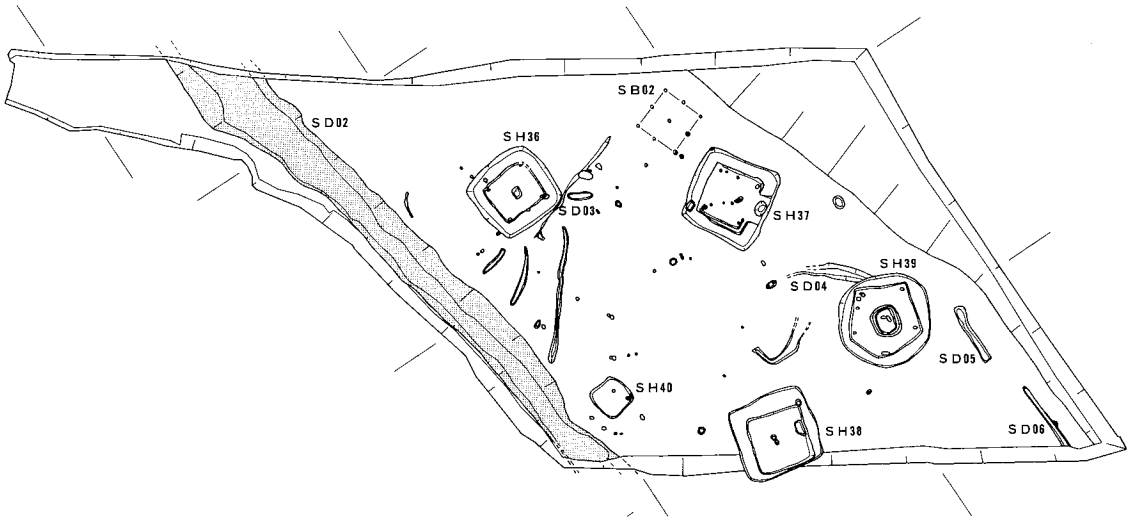
検出状況　　調査区の北西部で検出している。遺構は全体を検出することができた。他の遺構との切り合い関係は認められない。南約10mにＳＨ37が検出されている。

形状・規模　　N69°Eに棟軸の方向をとる梁行２間、桁行２間の掘建柱建物跡である。規模は桁行方向に3.55m、梁行方向に3.75mを測る。柱穴で囲まれた面積は13.3m²である。柱穴間の心々距離の平均値は桁行で1.83m、梁行で1.88mである。

柱穴　　９穴を検出している。掘り方の径は24～34cmを測り、検出面からの深さは20～32cmである。また、柱痕はＰ３とＰ４に認められ、径は両者とも15cm程度のものである。

埋土　　掘り方内には黒褐色極細砂が堆積している。竪穴住居跡埋土とは明らかに違う。

出土遺物　　遺物は出土していない。



第48図　ＳＤ02の位置

ＳＤ02

検出状況　調査区の西端で検出している。遺構は調査区内では収束せず、調査区外南北両側にのびている。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　溝の方向は、ほぼ北－南を指しているが、若干西側に振っている。検出した長さは約47ｍで、幅は検出面で2.50～6.40mを測るが西側の肩部が完全に確認できたのは北側の６ｍ程度で、以南は調査区境にあるため土層観察用の側溝により削平を受けている。深さは15～65cmで北側の方が深い。

出土遺物　埋土中より土器が出土している。壺・甕・鉢・高杯・蓋などが出土している。図化しているものは11点である。

228は体部の一部と口縁部の3/4が残存している壺である。短く直立する頸部から屈曲してひらく口縁部をもち口縁端部をわずかにつまみ上げる。調整は内外面ともに頸部から体部にかけてはハケ調整、口縁部に横方向のナデを施す。頸部内面のみはその後、横方向のミガキで仕上げている。229は大型の、230は小型の甕である。229の調整は体部外面がタタキ後縦方向のハケ、内面が横方向のハケを施す。口縁部内外面には横方向のナデがみられる。ハケは内面と外面で使用工具に違いがみられる。230は口縁部までタタキがみられ、外面は頸部に縦方向のハケ、内面は口縁部に横方向のハケを施している。231の鉢は底部までタタキを施し、口縁部内外面に横方向のナデでタタキを消している。厚手のものである。232は鉢か甕の頸部で外面のタタキは右上りである。233は高杯の脚部で中実の脚柱部に屈曲してひらく裾部をもつ。裾部に円形の透かしを３ケ所配している。外面の調整はハケの後脚柱部に縦方向の裾部に横方向のミガキを施す。端部は横方向のナデか。内面はナデ調整である。234は蓋である。つまみをもち、指頭圧痕が顕著である。内外面ともにハケ調整を基本とし、口縁部に横方向のナデを施す。235～238は底部である。235は壺、236･237は甕、238は有孔鉢である。甕は底部の退化がみられる。

包含層出土の遺物

当地区の基本層序は第１節で述べたが、主に遺物を包含している土層は遺構面を検出し

たベースとなっている19ｂ層上に堆積している８ａ層（黒色極細砂質シルト）と東側の落ち際に堆積している12層（黒色シルト質粘土）である。この両層からは弥生時代後期～末にかけての土器が出土している。壺・甕・鉢・高杯などの土器が出土しているが、そのうち図化しているものは13点である。上層の４ａ層からは中世の土器が出土しているが、ごく細片であるため図化はできなかった。

甕　239～241は甕である。239は寸のつまった球形の体部をもつものである。ドーナツ状の底部をもつ。外面の調整は体部から底部にかけて右上がりのタタキを施し、ごく一部に縦方向のハケが観察される。内面については体部全体にハケ調整を行っている。口縁部は内外面ともに横方向のナデで仕上げている。240は239に較べて体部の肩が張らない長胴のものであるが、体部下半を欠失している。外面の調整は239とよく似ており、体部から底部にかけて右上がりのタタキ、体部下半にはその後、左上がりの方向にハケ調整をを施している。内面については体部全体にハケ調整を行い、口縁部は内外面ともに横方向のナデで仕上げている。241は短く外反する口縁部をもつ小型のものである。外面のタタキは口縁部までみられる。内面は体部がケズリ、口縁部が横方向のハケ調整を施している。

鉢　242は鉢である。底部はドーナツ状を呈する。外面の調整はタタキの後ナデている。内面は上下方向にハケ調整を施した後、口縁部のみに斜め方向の単位の細かいハケ調整を加えている。

底部　243～246は甕の底部である。丸底のものはみられない。外面の調整はタタキが観察される。すべて右上がりである。内面の調整は243にハケが観察され、残りのものはナデである。

高杯　247～249は高杯である。杯底部から屈曲してひらく口縁部をもつ形態のものである。247は内外面ともにナデ調整を施しているが、内面に一部ミガキが観察される。248と249は脚のみである。いずれも中空で屈曲してひらく裾部をもつ。外面脚柱部に縦方向のミガキ、内面に横方向のケズリを施し、裾端部は横方向のナデ調整で仕上げている。250と251は有孔のものである。250の外面はタタキ、内面にハケ調整が観察される。251は磨滅が激しいが内面にはナデ調整が観察される。

第５節　Ｄ地区の遺構と遺物

１．調査の概要

Ｄ地区は西ケ原遺跡内を屈曲しながら南下し、三木市細川町と久留美を分けている水路より西側、つまり三木市久留美地区に所在している。

調査区は、基本的にはＣ地区と同じ土石流タイプの扇状地に立地している。北側の「毛谷」から供給された土石流はＣ地区とＤ地区を分けている水路付近で最も厚く堆積している。遺構面は黄褐色のシルト質極細砂をベースとした面で確認している。調査区の中央部に、土石流を供給したと考えられる流路（ＳＲ01）がありその東側と西側で遺構検出の標高に差が認められる。東側は基本的には隣のＣ地区と同じ様相で53m前後であり、西側はそれよりも約１～1.2m程度高い検出面となっている。地区全体の調査面積は2,105㎡である。

調査の結果、調査区の中央部で北東－南西方向の流路をはさんで、東側で土坑２基、西側で土坑６基と溝３条を検出した。出土した遺物は少ないが、ＳＫ08から弥生時代後期の土器を２点、ＳＤ07から弥生時代中期～古墳時代の土器を９点、包含層から弥生時代中期の土器を１点図化している。

２．遺構と遺物

ＳＫ01

検出状況　調査区の西部のＳＲ01より西側で検出している。遺構は全体を検出することができた。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　平面形は台形状を呈している。規模は長軸で4.65m、短軸で3.38mを測る。深さは平面規模に比して浅く、15cm程度のもので、平坦な底部をもっている。

埋土　２層のみが認められた。下層には青灰色シルト質極細砂、上層には暗黒灰色極細砂混じりシルトが堆積している。

出土遺物　土器のみが出土している。直口壺の口縁部と考えられる。調整は、外面に縦方向のハケ、内面に横方向のハケが観察され、口縁端部は内外面ともに横方向のナデで仕上げている。口縁端部は丸くおさめる。古墳時代前期の遺物と思われる。

ＳＫ03

検出状況　調査区の西部のＳＲ01とＳＤ07の間で検出している。遺構は全体を検出することができた。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　平面形は不整形である。北側で大きくひろがっている。規模は長軸で1.82m、短軸のひろがった部分で1.08m、狭い部分で0.58mを測る。深さは10cm程度と浅い。

埋土　１層のみが認められ、暗黒灰色シルト質極細砂質極細砂が堆積している。

出土遺物　土器のみが出土している。甕・高杯脚部などが出土しているが、いずれも破片であるため図化することはできなかった。高杯脚部は中空の短いもので、内面に粘土紐痕とシボリ目が観察される。内面の裾部と外面は横方向のナデで仕上げているようである。甕は２～３個体分がみられるが、赤変あるいは外面に煤が付着している。外面の調整はハケ調整、口

縁部は横方向にナデが観察される。内面は指頭圧痕がみられるものがあり、一部にはハケが観察される。古墳時代前期の遺物と思われる。

ＳＫ04

検出状況　調査区の西部のＳＫ01の西側で検出している。遺構は全体を検出することができた。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　平面形は楕円形を呈する。規模は長軸で1.17m、短軸で0.69mである。深さは13cmを測る。

埋土　２層の堆積が認められる。下層に青灰色シルト質極細砂、上層に暗黒灰色極細砂混じりシルトが堆積している。

出土遺物　遺物は出土していない。

ＳＫ06

検出状況　調査区の西部のＳＤ09の北側で検出している。遺構は全体を検出することができた。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　平面形は楕円形を指向しているようであるが、西側がひろがっている。規模は長軸で1.21m、短軸で0.87mである。深さは26cmを測る。

埋土　３層の堆積が認められる。断面の北側に暗黒灰色細砂混じりシルトが堆積し、これを切るように灰褐色極細砂混じりシルトと黒色シルト質極細砂が堆積している。

出土遺物　遺物は出土していない。

ＳＫ07

検出状況　調査区の北西隅で検出している。遺構は全体を検出することができた。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　平面形は楕円形を指向しているようである。規模は長軸で1.33m、短軸で0.65mである。深さは６cmと非常に浅いものである。

埋土　堆積している土層は１層のみで、暗黒灰色シルト質極細砂である。

出土遺物　遺物は出土していない。

ＳＫ08

検出状況　調査区の西部で検出している。ＳＤ09より北側、ＳＤ07より西側に位置している。遺構は全体を検出することができた。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　平面形は楕円形を呈する。規模は長軸で1.53m、短軸で0.75mである。深さは27cmを測る。断面形は逆台形状を呈する。

埋土　２層の堆積が認められる。下層に青灰色シルト質極細砂、上層に暗黒灰色極細砂混じりシルトが堆積している。

出土遺物　土器のみが出土している。壺と高杯が出土しており、この２点を図化している。252は高杯の杯部である。脚部以下を欠失しているが、杯部は口縁部のごく一部を除きほぼ完存し

ている。口径27.4cmと大型のものである。体部から屈曲して外反する口縁部をもつ形態のものである。外面の調整は体部が横方向のち縦方向のミガキ、口縁部には横方向ナデののち、縦方向のミガキを加えている。内面の調整は体部にハケのち縦方向のミガキ、口縁部に横方向ののち一部に横方向のミガキが観察される。253は壺の口縁部である。口縁端部は肥厚させ、端面をもつ。調整は体部に縦方向の細かいハケ調整、口縁部には内外面ともに横方向のナデを施している。

ＳＫ09

検出状況　調査区の東部で検出している。ＳＲ01より東側に位置している。遺構は全体を検出することができた。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　平面形は長楕円形を指向しているようである。規模は長軸で2.39m、短軸で0.96mである。深さは24cmを測る。断面形はＵ字形を呈する。

埋土　２層の堆積が認められる。下層に暗褐灰色極細砂混じりシルト、上層に褐灰色小礫混じりシルトが堆積している。

出土遺物　土器のみが出土している。須恵器の小片１点と土師質の壺・甕の小片が３点出土しているが、図化することはできなかった。須恵器が出土していることから古墳時代以降の遺構と考えられる。

ＳＫ10

検出状況　調査区の東部で検出している。ＳＲ01より東側、ＳＫ09より西側に位置している。遺構は全体を検出することができた。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　平面形は東側が膨れた溝状を呈している。規模は長軸で2.85m、短軸の最も幅の広い部分で0.57m、狭い部分で0.19mである。深さは10cmを測る。断面形はＵ字形を呈する。

埋土　１層の堆積が認められ、暗褐灰色極細砂混じりシルトが堆積している。

出土遺物　遺物は出土していない。

ＳＤ07

検出状況　調査区の西部で検出している。ＳＲ01より西側にありＳＲ01と一部並行しているが南端では流路は西側に振れている。遺構は調査区内に収まらず両側の範囲外に延びている。切り合い関係が認められ、ＳＲ01に一部切られているようであるが、ＳＲ01は幅が広く、かつ傾斜が非常に緩やかであるため、ある意味ではＳＤ07はＳＲ01の範囲内に収まっているともいえる。このため切り合い関係は不明確である。ＳＤ09には明確に切られている。

形状・規模　溝は全体として東北東－西南西に方向をとっているが、南下するにしたがってその方向を西側に振っている。地形のコンターに沿っているものと思われる。溝の幅は、狭い部分で0.6m、広い部分で1.9m程度である。深さは37～43cmである。

埋土　１層の堆積が認められ、暗黒褐色細礫～極細砂混じりシルトが堆積している。

出土遺物　土器のみが出土している。弥生土器・土師器が出土しており、器種としては壺・甕・鉢高杯・小型丸底壺などがみられる。遺物は北側の調査区境から約10mの位置に集中してい

る。ＳＤ07から出土したものとしているが、検出状況でも述べたとおり、ＳＲ01との切り合い関係が明確とは言い難いため、どちらに伴う遺物かを判断するのは困難である。出土した土器のうち９点を図化している。254は弥生時代中期後半の甕である。短く「く」字状にひらく形態の口縁部をもち端部は拡張して面をもっている。調整は体部内面に縦方向のハケ、口縁部内外面に横方向のナデを施す。口縁端面と体部外面状上半に櫛描きの波状文、頸部に直線文を施している。255も弥生時代中期後半の甕である。「く」字状にひらく形態の口縁部と拡張した口縁端部をもつが254のものよりは拡張が弱い。調整は内外面ともに磨滅が激しく不明である。256は弥生時代中期後半の鉢である。底部を欠失し体部から口縁部にかけて約2/3程度の残存である。胴の張った体部から内側に折れる口縁部をもつ。口縁部付近には径５㎜の穿孔が２ケ所みられる。外面の調整は、体部上半に縦方向のハケ後横方向のミガキ、下半にタタキ後縦方向のミガキを施す。内面の調整は、体部に縦方向のハケ後横方向のミガキを施す。口縁部は内外面ともに横方向のナデである。257は頸部に突帯が巡る壺の口縁部である。内外面ともに強く横方向にナデている。258は土師器の甕である。直線的にひらく口縁部をもつ。口縁部内外面にナデ調整を施し、体部外面には一部縦方向のハケがみられる。体部内面にはケズリを施している。259と260は高杯である。259は杯部で体部から口縁部になだらかに移行し口縁端部はわずかに外反するタイプのものである。内外面ともに横方向のナデで仕上げられており、底部内面には一方向ナデを施している。260は脚部である。中空の脚柱部から屈曲してひらく裾部をもつものである。外面にナデ、脚部内面にヘラケズリが観察される。261と262は小型丸底壺とした。261は口縁部が長く、体部が寸詰まりの形態を示す。262は体部が口縁部を凌駕している。調整は両者ともハケ調整の後、ナデを加えることを基本としている。

これら図化した遺物以外にも、弥生時代中期末の甕の底部、後期のＶ様式系の甕の体部・鉢、土師器の甕の体部、高杯の脚柱部などが出土しており、時期的な差がかなり顕著である。

ＳＤ08

検出状況　調査区の西部で検出している。ＳＤ07と09の間に位置している。遺構は西側調査範囲外に延びている。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　検出した範囲では直線的である。規模は幅0.6m、深さ15㎝、検出長４ｍを測る。

出土遺物　遺物は出土していない。

ＳＤ09

検出状況　調査区の西部で検出している。切り合い関係が認められ、ＳＤ07を切り、ＳＲ01に切られているが同時に存在した可能性もある。

形状・規模　西側が調査範囲外に延びている。遺構は東－西方向から北西－南東方向に屈曲している。規模は幅1.3～1.5m、深さ37㎝、検出長28mを測る。

出土遺物　土器のみが出土しているが、いずれも小片のため図化していない。土師器の甕、高杯などが出土している。古墳時代の遺物と考えられる。

ＳＲ01

検出状況　調査区のほぼ中央付近を北東－南西方向に流れているのがＳＲ01である。これは、人工的な遺構ではなく、開析谷である「毛谷」から続いている自然の流路であると考えられる。幅は35～40m程度で、深さは約３ｍである。中央部が比較的深くなっているが、全体に緩やかな傾斜である。当調査区の遺構検出面のレベルでは、この流路の部分のみが軟弱なベースとなっており、非常に明確な違いがみられた。堆積している土層は上層に黒褐色のシルト、中層は淡青灰色極細砂質シルト、黄橙色極細砂が堆積し、下層は植物遺体を包含する灰色砂質シルトである。北東部のＣ地区にかけては、礫層が約２ｍ程度堆積している。この礫層は何層かに分かれて堆積しており、かなりの回数の土石流があったことを窺わせるが、その最終に近い礫層中から中世の須恵器片が出土している。

下層のシルト系の堆積物のなかには、時期を判別できる遺物の出土がなかったため、この流路の機能していた正確な時期は明らかではない。

第６節　Ｅ地区の遺構と遺物

１．調査の概要

Ｅ地区は西ケ原遺跡の最も北西端に位置している調査区である。地形的には完新世段丘の北西端にあたり、調査区北西部は更新世段丘との境界にあたる。調査区は傾斜をもち、更新世段丘にむかって次第に標高が高くなっている。遺構検出面での標高は南東端で54.3m、北西端で56.4mと２m程度の高度差が認められる。

当地区は、東側のＤ地区に較べると「毛谷」からの土石流の影響は少ない。ただ、Ｄ地区と接する東側の面積にして約1/3程度の範囲は耕土直下に礫層が堆積しており、土石流がこのあたりまで及んでいたことが確かめられる。西側は、高度が次第に上がっていることもあって、土の供給は比較的少なく、遺構検出面としている黄褐色シルト質極細砂上に約50cm程度が堆積している。堆積している土層は基本的には２層で、上層に褐色シルト質極細砂、下層に淡黒褐色礫混じり極細砂が堆積している。調査面積は3,456m²である。

調査の結果、調査区の中央部で北－南に方向をとる溝（ＳＤ10）とその東側で柱穴群と溝（ＳＤ11)、西側で土坑２基を検出した。他の地区と較べると遺構の密度は疎らである。

２．遺構と遺物

ＳＫ11

検出状況　調査区の西部で検出している。遺構は全体を検出することができた。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　平面形は楕円形を呈する。規模は長軸で1.17m、短軸で0.69mである。深さは13cmを測る。

埋土　２層の堆積が認められる。下層に青灰色シルト質極細砂、上層に暗黒灰色極細砂混じりシルトが堆積している。

出土遺物　遺物は出土していない。

ＳＫ12

検出状況　調査区の西部のＳＤ09の北側で検出している。ＳＫ11の北東約10mで検出している。遺構は全体を検出することができた。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　平面形は楕円形を呈している。規模は長軸で2.11m、短軸で1.75mである。深さは11cmを測る。

埋土　１層の堆積が認められる。暗黒灰色細砂混じりシルトが堆積している。

出土遺物　土器のみが出土しているが、小片のため図化はしていない。遺物は底部と体部の２点で同一個体と考えられる。磨滅が激しいが、形態の特徴から弥生時代中期の大型の甕か壺であろう。

ＳＤ10

検出状況　調査区のほぼ中央部で検出した溝である。遺構は調査区外の南北に延びており、全体を検出することはできなかった。他の遺構との切り合い関係は認められなかった。

形状・規模　溝は北－南に方向をとっている。調査区の地形のコンターに直行しており、全体としては直線的に南下している。ただし、南端部ではその方位を西側に振っているようである。溝の幅は、狭い部分で0.96m、広い部分で4.0m程度である。深さは20～90cmとかなりの差が認められる。

埋土　溝の底部にφ３～５mm程度の礫層が堆積しており、上層はシルト質極細砂と礫層が互層で堆積している。

出土遺物　埋土のシルト質極細砂中から須恵器の甕、蓋などが出土している。そのうち蓋の１点のみを図化している。263はつまみの付いたものである。つまみはくぼむタイプのものである。

ＳＤ11

検出状況　調査区の東部の柱穴群の南側で検出した溝である。遺構は調査区内におさまっている。他の遺構との切り合い関係は認められなかった。

形状・規模　溝は北－南に方向をとっている。調査区の地形のコンターに直行しており、全体としては直線的に南下している。検出した長さは約13m、溝の幅は狭い部分で0.95m、広い部分で2.2m程度である。深さは５～15cmと浅い。

埋土　淡黒褐色の極細砂層の１層が堆積している。

出土遺物　土師質の土器片が数片出土しているが、明確な時期は不明である。弥生時代～古墳時代にかけてのものと考えられる。

柱穴群

検出状況　調査区の東側の北部で検出している。合計で25穴を検出しているが、掘建柱建物跡として復元できるものはなかった。他の遺構との切り合い関係は認められないが、ＳＤ11と近接しており関連したものの可能性がある。

形状・規模　柱穴の規模は大きいもので直径25cm、小さいもので10cm程度のものである。深さは総じて浅く、７～15cmの範囲におさまる。

出土遺物　土器のみが出土しているが、その量は少なく、小片である。中世の土器の出土している柱穴と弥生～古墳時代の土器が出土している柱穴とが混在している。

出土土器観察表

表5　出土土器観察表（1）

番号	遺構名	種別	器種	口径	器高	体部径	底径	残存率	調整				備考	番号
1	SH01	須恵器	杯身	(12.7)	残2.3	―	―	口縁部1/9残存	外面	口縁部回転ナデ	内面	回転ナデ		1
2	SH01	土師器	甕	14.3	19.9	15.9	―	口縁部1/2、底部一部欠	外面	口縁部横ナデ、体部上半縦ナデ、下半磨滅のため調整不明	内面	口縁部横ナデ、体部斜板ナデ、底部指頭圧痕	カマド内	2
3	SH02	須恵器	杯蓋	14.65	4.8	―	―	口縁部1/2、底部2/3残	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	3
4	SH02	須恵器	杯蓋	(14.5)	残4.6	―	―	口縁部1/18、底部3/4残	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ、天井部タタキ痕？	ロクロ左	4
5	SH02	須恵器	杯蓋	(13.9)	残4.8	―	―	口縁部1/4残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ右	5
6	SH02	須恵器	杯蓋	(14.8)	残4.05	―	―	口縁部1/8、底部1/2残	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	カマド　ロクロ右	6
7	SH02	須恵器	杯蓋	(14.4)	残4.6	―	―	口縁部1/4、底部1/2残	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ右	7
8	SH02	須恵器	杯蓋	(15.6)	残4.05	―	―	口縁部1/6	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	カマド内	8
9	SH02	須恵器	杯蓋	12.4	4.8	―	―	口縁部2/3残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	9
10	SH02	須恵器	杯身	13.5	4.6	―	―	ほぼ完在	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ右	10
11	SH02	須恵器	杯身	12.35	4.75	―	―	口縁部1/2残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ右	11
12	SH02	須恵器	杯身	13.0	4.3	―	―	口縁部1/5、底部1/7欠	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ右	12
13	SH02	土師器	鉢	8.5	5.2	―	5.3	ほぼ完形	外面	口縁部横ナデ、体部手づくね、底部磨滅のため調整不明	内面	口縁部横ナデ、体部～底部ナデ		13
14	SH02	土師器	甕	12.5	残11.6	14.0	―	口縁部1/9、底部欠損	外面	口縁部横ナデ、体部上半斜ハケ、下半横ハケ	内面	口縁部横ナデ、上半ナデ、下半ハケ		14
15	SH02	土師器	甕	(17.9)	残11.5	―	―	口縁部1/7残存	外面	口縁部横ナデ、体部縦ハケ	内面	口縁部横ナデ、体部粘土紐痕		15
16	SH02	土師器	甕	(13.9)	残9.1	―	―	口縁部1/7残存	外面	口縁部横ナデ、体部ハケ(5/cm)	内面	口縁部横ナデ、体部横ハケ(5/cm)		16
17	SH02	土師器	甕	(11.6)	残5.85	―	―	口縁部1/9残存	外面	口縁部横ナデ、体部縦ハケ	内面	口縁部横ナデ、頸部横ハケ(5/cm)、体部磨滅のため調整不明		17
18	SH02	土師器	甕	―	残5.95	―	―	底部のみ残存	外面	磨滅のため調整不明	内面	板ナデ、底部指頭圧痕	カマド内	18
19	SH02	土師器	甕	―	残15.4	―	―	底部～体部僅か残存	外面	縦ハケ(8/cm)	内面	体部粘土紐痕、底部板ナデ？	カマド～床	19
20	SH02	土師器	甕	―	残8.4	―	―	底部のみ残存	外面	ハケ後ナデ	内面	横ハケ(6/cm)		20
21	SH03	須恵器	杯蓋	(12.6)	残4.35	―	―	口縁部1/3残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ、天井部仕上げナデ	ロクロ左	21
22	SH03	土師器	甕	(19.2)	残31.4	(27.8)	―	3/4残存	外面	口縁部横ナデ、体部上半磨滅のため調整不明、下半縦ハケ	内面	口縁部横ナデ、体部横板ナデ	カマド	22
23	SH05	須恵器	杯蓋	(14.0)	残4.5	―	―	1/2残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ右	23
24	SH05	須恵器	杯蓋	15.2	5.1	―	―	3/4残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	カマド内・ロクロ左	24
25	SH05	土師器	甕	(14.9)	残7.0	―	―	口縁部1/4残存	外面	口縁部横ナデ、体部磨滅のため調整不明	内面	口縁部横ナデ、体部ナデ	カマド内	25
26	SH04	須恵器	杯蓋	(14.9)	残4.05	―	―	1/4残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	26
27	SH04	須恵器	杯蓋	14.6	4.0	―	―	3/4残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ右	27
28	SH04	須恵器	杯身	(12.6)	残4.6	―	―	1/2残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ右	28
29	SH04	須恵器	杯身	(13.6)	残4.8	―	―	1/2残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	29
30	SH04	須恵器	杯身	(13.0)	残4.45	―	―	1/4残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	30
31	SH04	須恵器	壺	(11.8)	残10.3	(20.7)	―	口縁部1/4、体部1/3残	外面	口縁部～体部回転ナデ、体部カキ目	内面	回転ナデ		31
32	SH04	土師器	甕	15.25	18.35	(17.8)	―	体部僅か欠損	外面	口縁部ハケ後横ナデ、体部ハケ(9/cm)	内面	口縁部ハケ(9/cm)、体部ハケ(6/cm)体部上半縦ナデ	カマド	32
33	SH04	土師器	甕	(15.1)	残13.9	―	―	口縁部1/18、体部1/6残	外面	口縁部横ハケ後横ナデ、体部ハケ(5/cm)	内面	口縁部横ナデ後横ナデ、体部ナデ		33
34	SH04	土師器	壺	(13.9)	残20.4	19.1	―	口縁部1/2残存	外面	口縁部横ナデ、体部上半縦ハケ(8/cm)、体部下半タタキ(4/cm)	内面	口縁部ハケ、体部ヘラケズリ、底部指頭圧痕		34
35	SH06	須恵器	杯蓋	(10.8)	残3.85	―	―	口縁部1/4残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	35
36	SH06	須恵器	杯蓋	(12.8)	残4.3	―	―	口縁部1/9残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	36
37	SH06	須恵器	杯蓋	(13.2)	残4.3	―	―	口縁部1/7残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ、天井部不定方向仕上げナデ	ロクロ左	37
38	SH06	須恵器	杯身	(9.2)	残5.6	―	―	口縁部1/4残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	38

表6　出土土器観察表（2）

番号	遺構名	種別	器種	口径	器高	体部径	底径	残存率	調整				備考	番号
39	SH06	土師器	杯	(11.0)	残2.85	——	——	口縁部1/4残存	外面	磨滅のため調整不明	内面	磨滅のため調整不明	カマド内	39
40	SH06	土師器	杯	(9.85)	残4.2	——	——	口縁部1/4残存	外面	手づくね	内面	ナデ		40
41	SH06	土師器	杯	9.1	3.4	——	——	ほぼ完形	外面	ナデ	内面	ナデ	カマド内	41
42	SH06	土師器	甕	(10.8)	14.9	(14.6)	——	口縁部～体部1/3残存	外面	口縁部横ナデ、体部磨滅のため調整不明	内面	口縁部横ナデ、体部強いナデ		42
43	SH06	土師器	甕	——	残25.3	——	——	口縁部、体部1/3残存	外面	横ナデ	内面	横ナデ	カマド内	43
44	SH06	土師器	製塩土器	(3.4)	残4.1	——	——	口縁部1/2残存	外面	ナデ	内面	ナデ		44
45	SH07	須恵器	高杯	(10.0)	残4.5	——	——	口縁部1/4残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	45
46	SH07	土師器	杯	(9.5)	残3.2	——	——	口縁部1/4残存	外面	磨滅のため調整不明	内面	ナデ	カマド南	46
47	SH07	土師器	杯	(11.0)	残3.0	——	——	口縁部1/4残存	外面	磨滅のため調整不明	内面	口縁部横ナデ、体部板ナデ	カマド南	47
48	SH07	土師器	杯	(10.9)	3.9	——	——	口縁部1/4残存	外面	磨滅のため調整不明、一部指頭圧痕	内面	ナデ		48
49	SH07	土師器	甕	15.8	18.4	18.5	——	口縁部、体部共僅か欠損	外面	口縁部横ナデ、体部上半縦ハケ(4/cm)、体部下半横ハケ(4/cm)	内面	口縁部横ナデ、体部ナデ		49
50	SH07	土師器	甕	(12.3)	残6.45	——	——	口縁部1/5残存	外面	口縁部横ナデ、体部ハケ後ナデ	内面	口縁部横ナデ、体部ナデ		50
51	SH07	土師器	台付鉢	(17.6)	残8.4	——	7.8	口縁部2/3残存	外面	磨滅のため調整不明	内面	口縁部横ナデ、体部ナデ		51
52	SH08	須恵器	杯蓋	(13.0)	残4.1	——	——	1/7残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	52
53	SH08	須恵器	杯身	(9.8)	残4.35	——	——	1/6残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ、底部タタキ痕？	ロクロ左	53
54	SH08	須恵器	杯身	(10.0)	残4.25	——	——	1/4残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左？	54
55	SH08	須恵器	高杯	(10.0)	残5.9	——	——	1/4残存	外面	口縁部回転ナデ、体部回転ヘラケズリ、脚部3方に方形透かし	内面	口縁部回転ナデ		55
56	SH08	須恵器	高杯	——	残6.7	——	(8.0)	1/3残存	外面	回転ナデ、脚部3方に方形透かし	内面	回転ナデ	ロクロ左	56
57	SH08	須恵器	壺	(17.2)	残5.3	——	——	口縁部1/4残存	外面	回転ナデ、10条と4条の波状文	内面	回転ナデ	カマド内	57
58	SH08	土師器	甕	(13.8)	12.3	(15.9)	——	口縁部1/3、体部1/2残	外面	口縁部横ナデ、体部ナデ	内面	口縁部横ナデ・指頭圧痕、体部ナデ、底部木葉痕	カマドの北	58
59	SH08	土師器	杯	(10.9)	残4.45	——	——	1/4残存	外面	口縁部横ナデ、体部磨滅のため調整不明	内面	口縁部～体部横ナデ、底部不定方向のナデ		59
60	SH10	須恵器	杯蓋	(14.0)	残4.65	——	——	口縁部1/4残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ、天井部一部に同心円のタタキ	ロクロ左	60
61	SH10	須恵器	杯蓋	(14.8)	残3.9	——	——	口縁部1/9残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	61
62	SH10	須恵器	杯身	(11.0)	残4.05	——	——	口縁部1/12残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	カマド内　ロクロ左	62
63	SH10	須恵器	高杯	(10.2)	残7.2	——	——	杯部1/2 、脚部僅か残存	外面	口縁部回転ナデ、底部～脚部カキ目、脚部3方に方形透かし	内面	回転ナデ	ロクロ左	63
64	SH10	須恵器	壺	——	残8.8	(13.2)	——	口縁部、体部1/2残存	外面	体部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ、底部一方向に仕上ナデ	ロクロ右	64
65	SH10	土師器	甕	(19.1)	残27.7	(22.2)	——	口縁部1/12、体部1/3残	外面	口縁部横ナデ、体部縦ハケ(3/cm)	内面	口縁部横ハケ(4/cm)、体部ナデ	カマド	65
66	SH10	土師器	甕	(9.2)	残6.5	——	——	口縁部1/2残存	外面	磨滅のため調整不明	内面	磨滅のため調整不明	カマド	66
67	SH11	須恵器	杯身	(8.6)	残3.55	——	——	口縁部2/3、底部欠損	外面	回転ナデ	内面	回転ナデ	カマド内	67
68	SH11	土師器	杯	(11.0)	残2.6	(8.7)	——	1/3残存	外面	磨滅のため調整不明	内面	磨滅のため調整不明	カマド内	68
69	SH11	土師器	杯	(9.0)	残3.6	——	——	1/6残存	外面	指オサエ後ナデ	内面	指オサエ後ナデ	カマド内	69
70	SH11	土師器	製塩土器	——	残5.0	(5.0)	(3.9)	1/2残存	外面	タタキ	内面	磨滅のため調整不明、指頭圧痕	カマド内	70
71	SH11	土師器	製塩土器	——	残3.1	4.8	——	口縁部欠損	外面	磨滅のため調整不明	内面	磨滅のため調整不明		71
72	SH11	土師器	製塩土器	——	残3.05	——	——	体部6/7残存	外面	指ナデ、指オサエ	内面	指ナデ、指オサエ、板ナデ	カマドの左	72
73	SH12	須恵器	杯蓋	14.2	4.0	——	——	口縁部1/2残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	カマド内・ロクロ左	73
74	SH12	須恵器	杯蓋	(13.8)	残4.4	——	——	口縁部1/3残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ、天井部一方向の仕上げナデ	ロクロ右	74
75	SH12	須恵器	杯蓋	(15.5)	残4.4	——	——	口縁部1/7残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ右	75
76	SH12	須恵器	杯蓋	(14.2)	4.5	——	——	口縁部1/8残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	76

表7　出土土器観察表（3）

番号	遺構名	種別	器種	口径	器高	体部径	底径	残存率	調整				備考	番号
77	SH12	須恵器	杯身	(13.5)	残4.2	—	—	口縁部1/4残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	77
78	SH12	須恵器	杯身	12.95	4.45	—	—	口縁部3/4残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ右	78
79	SH12	須恵器	杯身	(12.4)	残3.6	—	—	口縁部1/18残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	カマド内	79
80	SH12	須恵器	杯身	(12.6)	残3.95	—	—	口縁部1/8残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	カマド袖付近・ロクロ左	80
81	SH12	土師器	甕	(12.6)	12.1	12.8	—	口縁部1/4残存	外面	ハケ(5/cm)	内面	口縁部ハケ(5/cm)、体部～底部板ナデ		81
82	SH12	土師器	甕	(13.0)	残16.1	(20.0)	—	口縁部1/12残存	外面	口縁部横ナデ、体部斜ハケ(7/cm)	内面	口縁部横ナデ、体部板ナデ	カマド内	82
83	SH12	土師器	甑	(23.1)	残23.0	—	—	口縁部1/3、底部欠損	外面	口縁部横ナデ、体部ハケ	内面	口縁部横ナデ、体部ハケ	カマド内	83
84	SH14	須恵器	杯身	11.8	4.85	—	—	ほぼ完形	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ右	84
85	SH14	須恵器	器台	—	残13.6	—	—	脚部僅か残存	外面	横ナデ、波状文、凹線、4方に透かし	内面	横ナデ、指頭圧痕		85
86	SH14	土師器	鉢	(15.2)	残5.4	—	—	1/3残存	外面	口縁部横ナデ、体部指頭圧痕、底部強いナデ	内面	横板ナデ	カマド付近	86
87	SH15	須恵器	杯蓋	(11.8)	残3.9	—	—	口縁部1/6残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	カマドの北	87
88	SH15	須恵器	杯身	(11.2)	残4.95	—	—	口縁部1/12残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	88
89	SH15	土師器	甕	(12.6)	残16.5	(15.2)	—	口縁部～体部1/3残存	外面	口縁部横ナデ、体部ナデ	内面	口縁部横ナデ、体部ナデ		89
90	SH16	須恵器	杯蓋	(12.6)	残3.3	—	—	口縁部1/12残存	外面	回転ナデ	内面	回転ナデ		90
91	SH16	須恵器	杯身	12.35	5.2	—	—	口縁部3/4残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	91
92	SH16	土師器	壺	(11.8)	残3.75	—	—	口縁部1/3残存	外面	口縁部横ナデ、体部ナデ	内面	口縁部横ナデ、体部ナデ		92
93	SH18	須恵器	杯身	11.1	15.3	—	—	ほぼ完形	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	93
94	SH18	須恵器	杯身	(11.4)	残3.9	—	—	口縁部1/4残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	94
95	SH18	土師器	甕	(11.5)	14.2	17.2	—	口縁部1/4、体部3/4残	外面	口縁部横ナデ、体部縦板ナデ	内面	口縁部横ナデ、体部横板ナデ	カマド	95
96	SH18	土師器	甕	14.1	残7.5	—	—	口縁部3/4体部僅か残存	外面	口縁部横ナデ、体部磨滅のため調整不明	内面	口縁部横ナデ、体部磨滅のため調整不明	カマド横	96
97	SH18	土師器	製塩土器	(3.0)	残4.85	(5.2)	—	口縁部1/2残存	外面	ナデ	内面	ナデ	カマド横	97
98	SH20	須恵器	杯身	(10.9)	残3.75	—	—	口縁部1/4残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ右	98
99	SH20	須恵器	杯蓋	(11.9)	残3.6	—	—	口縁部1/12残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	カマド内・ロクロ右	99
100	SH20	須恵器	杯蓋	(14.1)	残3.65	—	—	口縁部僅か残存	外面	回転ナデ	内面	回転ナデ		100
101	SH20	須恵器	壺	(10.1)	残6.05	—	—	口縁部2/3残存	外面	回転ナデ、3条？の波状文	内面	回転ナデ	カマド内右	101
102	SH20	土師器	甕	(19.4)	残9.3	—	—	口縁部～肩部1/3残存	外面	口縁部横ナデ、肩部磨滅のため調整不明	内面	磨滅のため調整不明		102
103	SH20	土師器	甕	(12.5)	残9.8	—	—	口縁部～体部上半1/4残	外面	口縁部横ナデ、体部ナデ	内面	口縁部横ナデ、体部ナデかケズリ	カマド内左	103
104	SH21	須恵器	杯蓋	13.8	4.55	—	—	ほぼ完形	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ、天井部一部に同心円のタタキ	ロクロ右	104
105	SH13	須恵器	杯蓋	(14.6)	5.25	—	—	1/2残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	105
106	SH21	須恵器	杯身	(12.0)	残4.8	—	—	1/3残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	106
107	SH21	須恵器	杯身	(12.5)	残4.8	—	—	口縁部1/3残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ、底部一部に同心円のタタキ	ロクロ右	107
108	SH21	須恵器	杯身	13.6	3.6	—	—	3/4残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ、底部一部に同心円のタタキ	ロクロ右	108
109	SH13	須恵器	杯身	13.75	4.4	—	—	8/9残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ右	109
110	SH21	須恵器	杯身	(12.0)	4.85	—	—	8/9残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ、底部一方向の仕上げナデ、ごく一部に同心円のタタキ	ロクロ左	110
111	SH21	須恵器	短頸壺	(8.0)	9.05	(13.4)	—	1/2残存	外面	口縁部～体部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、体部上半カキ目	内面	回転ナデ、底部一方向の仕上げナデ	ロクロ右	111
112	SH21	土師器	甕	(22.0)	残5.2	—	—	口縁部1/9残存	外面	口縁部横ナデ、体部ハケ(7/cm)	内面	口縁部横ナデ、体部ナデ		112
113	SH21	土師器	甕	(12.9)	残8.9	—	—	口縁部～体部上半1/3残	外面	口縁部横ナデ、体部磨滅のため調整不明	内面	口縁部横ナデ、体部磨滅のため調整不明		113
114	SH21	土師器	高杯	—	残5.4	—	9.75	脚部1/2残存	外面	脚柱部ナデ、裾部横ナデ	内面	脚柱部ヘラケズリ、裾部横ナデ		114

表８　出土土器観察表（４）

番号	遺構名	種別	器種	口径	器高	体部径	底径	残存率	調整				備考	番号
115	ＳＨ21	土師器	高杯	——	残8.2	——	(10.3)	脚部1/4残存	外面	脚柱部ナデ、裾部横ナデ	内面	脚柱部体部粘土紐痕紐痕と絞り目、裾部横ナデ		115
116	ＳＨ21	土師器	ミニチュア	(4.4)	残4.2	——	——	ほぼ完形	外面	手づくね	内面	手づくね	カマド内	116
117	ＳＨ23	須恵器	杯身	(9.9)	5.15	——	——	口縁部1/3残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	117
118	ＳＨ24	須恵器	杯蓋	——	残4.0	——	——	体部僅か残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	118
119	ＳＨ24	須恵器	杯蓋	(11.8)	残2.95	——	——	口縁部～体部僅か残存	外面	回転ナデ	内面	回転ナデ		119
120	ＳＨ24	土師器	甕	(13.9)	残13.8	15.0	——	口縁部1/12残存	外面	口縁部横ナデ、体部ハケ後ナデ	内面	口縁部横ナデ、体部ナデ		120
121	ＳＨ25	須恵器	杯蓋	(14.0)	残4.35	——	——	1/6残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	カマド内・ロクロ左	121
122	ＳＨ26	須恵器	杯蓋	(10.6)	4.2	——	——	口縁部1/6残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	122
123	ＳＨ26	須恵器	杯蓋	(11.6)	残4.95	——	——	口縁部1/4残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	123
124	ＳＨ26	須恵器	杯蓋	(10.9)	残4.5	——	——	口縁部1/4残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	124
125	ＳＨ26	須恵器	杯蓋	(13.4)	4.15	——	——	口縁部1/2残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	125
126	ＳＨ26	須恵器	杯蓋	13.4	5.15	——	——	3/4残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ、天井部一方向の仕上げナデ	ロクロ左	126
127	ＳＨ26	須恵器	杯蓋	(12.8)	残3.85	——	——	口縁部1/8残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	127
128	ＳＨ26	須恵器	杯身	(9.4)	4.75	——	——	1/4残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、ヘラ記号	内面	回転ナデ	ロクロ左	128
129	ＳＨ26	須恵器	杯身	(9.35)	5.4	——	——	1/3残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、ヘラ記号「＋」	内面	回転ナデ	ロクロ左	129
130	ＳＨ26	須恵器	杯身	10.0	4.4	——	——	ほぼ完形	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ右	130
131	ＳＨ26	須恵器	杯身	9.65	5.2	——	——	口縁部2/3残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	131
132	ＳＨ26	須恵器	杯身	(12.4)	残4.6	——	——	1/7残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	132
133	ＳＨ26	須恵器	杯身	(12.8)	残4.0	——	——	口縁部僅かに残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	133
134	ＳＨ26	須恵器	杯身	(11.7)	残3.05	——	——	口縁部1/6残存	外面	回転ナデ	内面	回転ナデ		134
135	ＳＨ26	須恵器	高杯	(13.8)	残5.7	——	——	口縁部1/4残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	135
136	ＳＨ26	須恵器	壺	(10.1)	残5.3	——	——	口縁部1/4残存	外面	回転ナデ、４条の波状文	内面	回転ナデ		136
137	ＳＨ26	土師器	甕	(12.7)	残5.25	——	——	口縁部1/6残存	外面	口縁部横ナデ、肩部ハケ	内面	口縁部横ハケ(9/cm)、体部ナデ		137
138	ＳＨ26	土師器	甕	(16.9)	残8.4	——	——	口縁部1/9残存	外面	口縁部ハケ(6/cm)後横ナデ、体部ハケ	内面	口縁部ハケ(6/cm)後横ナデ、体部ナデ		138
139	ＳＨ26	土師器	甕	(14.5)	残4.6	——	——	口縁部1/3残存	外面	口縁部横ナデ、肩部ハケ	内面	口縁部ハケ後横ナデ、体部ナデ		139
140	ＳＨ26	土師器	甕	(12.0)	5.15	——	——	口縁部1/4残存	外面	口縁部横ナデ、体部磨滅のため調整不明	内面	横ナデ		140
141	ＳＨ26	土師器	甑	——	残8.6	——	——	底部1/4残存	外面	ナデ	内面	ナデ		141
142	ＳＨ26	土師器	甑	——	残7.15	——	——	底部1/4残存	外面	板ナデ	内面	ハケ後不定方向のナデ		142
143	ＳＨ26	土師器	ミニチュア	5.3	3.1	——	——	底部2/3残存	外面	手づくね	内面	手づくね		143
144	ＳＨ27	須恵器	杯身	(11.9)	残4.0	——	——	口縁部1/8残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ		144
145	ＳＨ28	須恵器	杯蓋	(12.2)	残3.85	——	——	口縁部1/8残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	145
146	ＳＨ28	須恵器	杯身	(11.9)	残3.0	——	——	口縁部1/8残存	外面	回転ナデ	内面	回転ナデ	ロクロ左？	146
147	ＳＨ30	土師器	甕	(24.0)	残10.4	——	——	口縁部～体部上半1/9残	外面	口縁部縦ハケ後横ナデ、体部縦ハケ(4/cm)	内面	口縁部ハケ後横ナデ、体部板ナデ		147
148	ＳＨ34	須恵器	杯身	(10.2)	残4.2	——	——	口縁部1/7残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、ヘラ記号	内面	回転ナデ	ロクロ左	148
149	ＳＨ34	須恵器	杯蓋	(14.1)	残4.3	——	——	口縁部1/18残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	149
150	ＳＨ34	須恵器	蓋	——	残2.9	——	——	天井部僅か残存	外面	体部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ、つまみ回転ナデ	内面	回転ナデ、天井部一方向の仕上げナデ	ロクロ右	150
151	ＳＨ34	須恵器	杯蓋	(11.3)	残4.7	——	——	口縁部1/6残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	151
152	ＳＨ34	須恵器	杯蓋	(12.1)	残3.4	——	——	口縁部1/8残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ右	152

表9　出土土器観察表（5）

番号	遺構名	種別	器種	口径	器高	体部径	底径	残存率	調整				備考	番号
153	SH34	土師器	高杯	——	残6.85	——	——	脚部のみ残存	外面	脚柱部ナデ、裾部横ナデ	内面	脚柱部横ヘラケズリ、裾部ヨコナデ		153
154	SH35	須恵器	杯身	(10.0)	4.6	——	——	口縁部1/2残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ、底部一部に同心円のタタキ	ロクロ右	154
155	SH35	須恵器	杯身	(10.8)	残3.4	——	——	口縁部1/6残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	155
156	SH35	土師器	甕	(13.2)	残7.35	(14.1)	——	口縁部1/4残存	外面	口縁部横ナデ、体部ハケ	内面	横ナデ		156
157	SH35	土師器	甕	(10.4)	残5.35	——	——	口縁部1/2残存	外面	口縁部横ナデ、体部粗いハケ	内面	口縁部横ナデ、体部縦ハケ		157
158	SH35	土師器	甕	(19.1)	36.05	——	——	口縁部1/4、体部1/2残	外面	口縁部横ナデ、体部縦ナデ	内面	口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ	側溝内カマド施設？	158
159	SH35	土師器	甑	(27.9)	残15.8	——	——	口縁部～体部2/3残存	外面	板ナデ	内面	口縁部横ナデ、体部縦ナデ		159
160	SH35	土師器	甑	26.7	残21.4	——	——	口縁部～体部3/5残存	外面	口縁部横ナデ、体部縦ハケ	内面	横ナデ	カマド内	160
161	SB01	土師器	甕	(16.2)	28.6	(22.1)	——	口縁部僅か、体部残存	外面	口縁部横ナデ、体部縦ハケ	内面	口縁部横ナデ、体部ナデ		161
162	SB01	土師器	甕	(23.0)	残9.7	——	——	口縁部1/8残存	外面	口縁部横ナデ、体部ハケ(6/cm)	内面	口縁部ハケ(5/cm)、体部ナデ		162
163	SX01	須恵器	杯身	(12.9)	残4.7	——	——	1/4残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ右	163
164	SX01	土師器	高杯	(13.7)	13.7	(10.7)	——	2/3残存	外面	口縁部横ナデ、体部ハケ(8/cm)、脚部横ナデ	内面	口縁部横ナデ、底部ナデ、脚柱部ナデ、裾部横ナデ		164
165	SX01	土師器	高杯	(15.4)	13.65	——	10.4	口縁部1/2残存	外面	口縁部横ナデ、脚柱部ハケ後ナデ、裾部横ナデ	内面	杯部磨滅のため調整不明、脚部ナデ、裾部横ナデ		165
166	SX01	土師器	高杯	——	残7.35	——	11.3	脚部のみ残存	外面	脚柱部ハケ後ナデ、裾部横ナデ	内面	ナデ		166
167	SX01	土師器	ミニチュア	(4.9)	2.7	——	——	口縁部僅か残存	外面	ナデ	内面	ナデ		167
168	SX01	土師器	ミニチュア	4.7	2.9	——	——	完形	外面	手づくね	内面	手づくね		168
169	SX01	土師器	ミニチュア	4.8	3.75	——	——	口縁部僅か欠損	外面	手づくね	内面	手づくね		169
170	SX02	須恵器	杯蓋	12.6	3.75	——	——	ほぼ完形	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ、天井部一部に同心円のタタキ	ロクロ右	170
171	SX02	須恵器	杯蓋	(12.9)	残4.1	——	——	口縁部僅か残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	171
172	SX02	須恵器	杯蓋	(13.5)	残3.3	——	——	口縁部1/6残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ		172
173	SX02	須恵器	杯蓋	(13.6)	残3.6	——	——	口縁部1/4残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	173
174	SX02	須恵器	杯蓋	14.3	5.25	——	——	口縁部3/5残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	174
175	SX02	須恵器	杯身	11.3	4.9	——	——	口縁部2/3残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ、底部わずかに同心円のタタキ	ロクロ右	175
176	SX02	土師器	杯身	(11.7)	4.0	——	——	口縁部僅か残存	外面	口縁部回転ナデ、底部調整不明	内面	回転ナデ		176
177	SX02	須恵器	杯身	(11.4)	5.1	——	——	1/3残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ右	177
178	SX02	須恵器	杯身	(12.0)	4.55	——	——	口縁部1/4残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	178
179	SX02	須恵器	杯身	11.7	4.7	——	——	口縁部2/3残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ、底部一部にタタキ跡	ロクロ左	179
180	SX02	須恵器	杯身	(12.0)	5.3	——	——	口縁部僅か残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	180
181	SX02	須恵器	杯身	(11.4)	4.45	——	——	口縁部1/2残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	181
182	SX02	須恵器	甕	——	残11.9	——	——	底部のみ残存	外面	格子状のタタキ一部ナデ	内面	同心円のタタキ		182
183	SX02	土師器	甕	(13.4)	残17.4	(16.1)	——	口縁部僅か、底部残	外面	磨滅のため調整不明	内面	口縁部横ナデ、体部ナデ		183
184	SX02	土師器	ミニチュア	(6.0)	5.75	(6.6)	——	1/2残存	外面	ケズリ後ナデ	内面	ケズリ		184
185	包含層	土師器	竈	(29.4)	残39.0	——	(49.6)	僅か残存	外面	口縁部横ナデ、体部縦ハケ	内面	口縁部横ナデ、体部横ハケ(4/cm)		185
186	包含層	須恵器	杯蓋	12.8	4.85	——	——	完形	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ右？	186
187	包含層	須恵器	杯蓋	(13.9)	残4.9	——	——	1/2残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	187
188	包含層	須恵器	杯蓋	(13.8)	4.9	——	——	1/2残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	188
189	包含層	須恵器	杯蓋	14.2	残4.75	——	——	口縁部2/3残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ右	189
190	包含層	須恵器	杯蓋	(14.0)	4.1	——	——	口縁部1/4、底部1/6残	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ、天井部ごく一部に同心円のタタキ	ロクロ右	190

表10　出土土器観察表（6）

番号	遺構名	種別	器種	口径	器高	体部径	底径	残存率	調整				備考	番号
191	包含層	須恵器	杯蓋	(14.4)	残4.4	——	——	口縁部1/3残存	外面	口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	191
192	包含層	須恵器	杯身	(9.8)	残4.2	——	——	口縁部1/10残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	192
193	包含層	須恵器	杯身	10.5	4.8	——	——	ほぼ完形	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	193
194	包含層	須恵器	杯身	(10.2)	残3.85	——	——	1/4残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ右	194
195	包含層	須恵器	高杯	(9.85)	残4.7	——	——	1/4残存	外面	口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	内面	回転ナデ	ロクロ左	195
196	包含層	須恵器	高杯	(13.0)	9.25	——	——	口縁部1/2、脚部5/6残	外面	回転ナデ、脚部３方に方形透かし	内面	回転ナデ、底部わずかに同心円のタタキ	ロクロ左	196
197	包含層	須恵器	甕	(19.4)	残11.0	——	——	口縁部1/3残存	外面	口縁部横ナデ、体部平行タタキ後カキ目	内面	口縁部横ナデ、体部同心円のタタキ後ナデ		197
198	包含層	須恵器	甕	(18.1)	残5.6	——	——	口縁部1/5残存	外面	口縁部端部横ナデ、口縁部ナデ、体部タタキ後カキ目(13/cm)	内面	口縁部端部横ナデ、口縁部ナデ、体部同心円のタタキ		198
199	包含層	土師器	鉢	(28.0)	残9.8	——	——	口縁部～体部1/4残存	外面	口縁部横ナデ、体部板ナデ	内面	口縁部横ナデ、体部ナデ		199
200	包含層	土師器	土錐	——	5.85	——	——	完形	外面	指頭圧痕	内面			200
201	包含層	土製品	土錐	——	10.6	——	——	ほぼ完形	外面	ナデ	内面			201
202	ＳＨ36	弥生	高杯	——	残5.3	——	(14.8)	底部1/14残存	外面	裾部磨滅のため調整不明、４方に円形透かし	内面	磨滅のため調整不明		202
203	ＳＨ36	弥生	壺	(13.9)	残6.1	——	——	口縁部1/3残存	外面	口縁部横ナデ、体部タタキ(4/cm)	内面	口縁部横ナデ、体部強いナデ		203
204	ＳＨ36	弥生	甕	——	残4.1	——	——	底部のみ残存	外面	タタキ(3/cm)後縦ハケ(6/cm)	内面	斜ハケ		204
205	ＳＨ36	弥生	甕	——	残3.5	——	——	底部のみ残存	外面	体部タタキ(3/cm)、底部ナデ？	内面	縦ハケ(5/cm)		205
206	ＳＨ37	弥生	壺	(8.25)	残11.2	13.9	——	口縁部僅か、底部欠損	外面	口縁部縦ハケ後ヘラミガキ、体部ヘラミガキ	内面	口縁部ナデ、体部絞り目		206
207	ＳＨ37	弥生	高杯	(15.7)	残11.5	——	——	口縁部1/2、底部一部欠	外面	杯部ハケ後ミガキ、脚部ミガキ	内面	杯部ミガキ、脚部ハケメ(5/cm)		207
208	ＳＨ37	弥生	高杯	(18.5)	残10.1	——	——	口縁部1/12残存	外面	磨滅のため調整不明	内面	磨滅のため調整不明		208
209	ＳＨ37	弥生	鉢	10.0	5.45	——	——	口縁部3/4残存	外面	口縁部ナデ、体部～底部横ヘラミガキ	内面	縦ヘラミガキ		209
210	ＳＨ37	弥生	器台	(6.8)	残4.9	——	——	口縁部1/3残存	外面	磨滅のため調整不明	内面	磨滅のため調整不明		210
211	ＳＨ37	弥生	高杯	——	残5.2	——	——	底部～脚柱部のみ残存	外面	脚柱部ヘラミガキ、その他磨滅のため調整不明	内面	底部ヘラミガキ、脚柱部磨滅のため調整不明		211
212	ＳＨ38	弥生	壺	(14.5)	残8.9	——	——	口縁部僅か残存	外面	口縁部ヘラミガキ、口縁部端部刻み目	内面	口縁部ヘラミガキ		212
213	ＳＨ38	弥生	高杯	12.9	10.3	——	(8.1)	口縁部1/2、裾部2/3欠	外面	口縁部磨滅のため調整不明、脚柱部横ヘラミガキ、裾部ヘラケズリ	内面	口縁部磨滅のため調整不明、裾部ナデ		213
214	ＳＨ38	弥生	高杯	(17.1)	残11.8	——	——	口縁部僅か、脚柱部残存	外面	口縁部横ナデ、体部ヘラミガキ、脚部磨滅のため調整不明	内面	口縁部横ナデ、体部ヘラミガキ		214
215	ＳＨ38	弥生	高杯	(14.2)	残8.2	——	——	口縁部7/8、裾部欠損	外面	口縁部横ナデ、体部ハケ後ヘラミガキ、脚柱部横ヘラミガキ	内面	口縁部横ナデ、体部ハケ後ヘラミガキ		215
216	ＳＨ38	弥生	高杯	——	残5.8	——	——	口縁端部、脚部欠損	外面	口縁部横ナデ、体部ハケ？	内面	ナデ		216
217	ＳＨ38	弥生	高杯	——	残5.4	——	——	杯底部のみ残存	外面	ナデ？	内面	口縁部ハケ後ナデ、底部ナデ		217
218	ＳＨ38	弥生	鉢	7.2	残5.95	8.5	——	鉢部、台部僅か残存	外面	口縁部横ヘラミガキ、台部ナデ	内面	横ヘラミガキ後底部に一方向ヘヘラミガキ		218
219	ＳＨ38	弥生	甕	——	残10.4	(12.0)	——	体部僅か、底部残存	外面	口縁部横ナデ、体部上半タタキ後ナデ?、体部下半タタキ(4/cm)	内面	口縁部横ナデ、体部ナデ、底部放射線条板ナデ後一方向ナデ		219
220	ＳＨ38	弥生	甕	——	残9.3	——	——	体部僅か、底部残存	外面	体部ハケ、底部平行タタキ	内面	磨滅のため調整不明		220
221	ＳＨ38	弥生	甕	——	残14.4	(20.4)	——	体部下半～底部残存	外面	平行タタキ(4/cm)	内面	ナデ		221
222	ＳＨ38	弥生	鉢	——	残6.9	——	2.1	体部僅か、底部残存	外面	体部平行タタキ(4/cm)、底部ナデ	内面	磨滅のため調整不明		222
223	ＳＨ38	弥生	鉢	——	5.0	——	3.2	底部のみ残存	外面	ナデ	内面	放射線状のハケ後縦ナデ		223
224	ＳＨ39	弥生	壺	(17.2)	残4.5	——	——	口縁部のみ1/4残存	外面	口縁部端部横ナデ、口縁部磨滅のため調整不明	内面	口縁部端部横ナデ、口縁部磨滅のため調整不明		224
225	ＳＨ39	弥生	鉢	(10.7)	5.0	——	3.1	口縁部僅か欠損	外面	口縁部磨滅のため調整不明、体部ヘラミガキ、底部ナデ	内面	口縁部磨滅のため調整不明、体部ナデ		225
226	ＳＨ39	弥生	壺	——	残5.5	5.5	——	底部のみ完存	外面	体部ヘラミガキ、底部ナデ	内面	ハケ(6/cm)		226
227	ＳＨ40	弥生	鉢	——	残5.0	——	——	底部のみ残存	外面	体部平行タタキ、底部ナデ、底部に穿孔	内面	ハケ	壺か鉢	227
228	ＳＤ02	弥生	壺	(15.8)	残8.0	——	——	口縁部3/5残存	外面	口縁部横ナデ、頸部ハケ、体部ハケ後ミガキ、口縁部端部2条の凹線	内面	口縁部ミガキ、頸部ハケ後ミガキ、体部ハケ指頭圧痕		228

表11　出土土器観察表（7）

番号	遺構名	種別	器種	口径	器高	体部径	底径	残存率	調整				備考	番号
229	SD02	弥生	甕	(18.1)	残5.95	—	—	口縁部1/4残存	外面	口縁部横ナデ、体部タタキ(3/cm)後ハケ(13/cm)	内面	口縁部横ナデ、体部ハケ(8/cm)		229
230	SD02	弥生	甕	(8.4)	残9.5	(9.8)	—	口縁部～体部僅か残存	外面	口縁部横ナデ、頸部ハケ(9/cm)、体部平行タタキ(3/cm)	内面	口縁部ハケ(6/cm)、体部ナデ		230
231	SD02	弥生	鉢	9.0	5.8	—	3.4	ほぼ完形	外面	口縁部ナデ、体部平行タタキ、底部ナデ	内面	ナデ		231
232	SD02	弥生	鉢	—	残5.9	—	3.8	底部のみ残存	外面	体部平行タタキ、底部ナデ	内面	ナデ	甕か鉢	232
233	SD02	弥生	高杯	—	残8.9	—	12.0	脚部のみ残存	外面	ハケ後ヘラミガキ、3方に円形透かし	内面	ナデ		233
234	SD02	弥生	蓋	(13.6)	6.0	—	—	口縁部僅か、つまみ残存	外面	口縁部横ナデ、体部ハケ後ナデ、摘み指押さえ	内面	口縁部横ナデ、体部ハケ、台部指押さえナデ		234
235	SD02	弥生	壺	—	残4.9	—	5.0	底部のみ残存	外面	体部ハケ(6/cm)、底部ナデ	内面	体部ハケ(6/cm)、底部ナデ		235
236	SD02	弥生	甕	—	残5.15	—	3.9	底部のみ残存	外面	体部上半平行タタキ後ハケ、体部下半平行タタキ(5/cm)、底部ナデ	内面	ハケ(5/cm)		236
237	SD02	弥生	甕	—	残4.8	—	—	底部のみ残存	外面	平行タタキ(3/cm)	内面	体部ハケ(6/cm)後ナデ、底部ナデ		237
238	SD02	弥生	鉢	—	残4.1	—	1.5	底部のみ残存	外面	体部平行タタキ、底部ナデ、底部に穿孔	内面	縦ナデ一部横ナデ		238
239	包含層	弥生	甕	(12.4)	残12.9	(4.25)	—	3/4残存	外面	口縁部横ナデ、体部上半タタキ(4/cm)、体部下半タタキ後ハケ	内面	口縁部横ナデ、体部ハケ		239
240	包含層	弥生	甕	(14.6)	残10.8	—	—	口縁部～体部1/3残存	外面	口縁部横ナデ、体部タタキ(4/cm)後ハケ(8/cm)	内面	口縁部横ナデ、体部横ハケ(6/cm)		240
241	包含層	弥生	甕	(12.7)	残5.1	—	—	口縁部1/5残存	外面	口縁部横ナデ、体部平行タタキ(4/cm)	内面	口縁部横ハケ(9/cm)、体部ケズリ		241
242	包含層	弥生	鉢	(15.4)	残6.75	—	—	口縁部1/4残存	外面	ナデ	内面	ハケ(口縁部・11/cm　底部・6/cm)		242
243	包含層	弥生	甕	—	残7.6	—	(4.1)	底部残存	外面	体部タタキ(4/cm)、底部ナデ	内面	ハケ(8/cm)		243
244	包含層	弥生	甕	—	残13.3	—	—	口縁欠損	外面	体部平行タタキ(4/cm)、底部木葉痕	内面	ナデ		244
245	包含層	弥生	甕	—	残4.2	—	3.5	底部のみ残存	外面	タタキ(4/cm)	内面	ナデ		245
246	包含層	弥生	甕	—	残4.8	—	3.2	底部のみ残存	外面	体部タタキ(3/cm)、底部ナデ	内面	ナデ		246
247	包含層	弥生	高杯	13.8	残6.45	—	—	杯部残存	外面	ナデ	内面	横ナデ後ミガキ		247
248	包含層	弥生	高杯	—	残8.8	—	(10.6)	脚部1/3残存	外面	脚柱部縦ミガキ、裾部ナデ	内面	脚柱部ケズリ、裾部ナデ		248
249	包含層	弥生	高杯	—	残9.72	—	(10.7)	脚部1/2残存	外面	脚柱部ナデ、裾部横ナデ	内面	脚柱部上半ナデ、脚柱部下半ケズリ、裾部ナデ		249
250	包含層	弥生	甕	—	残6.35	—	—	底部のみ残存	外面	体部タタキ(4/cm)、底部ナデ、底部穿孔	内面	ハケ(7/cm)		250
251	包含層	弥生	鉢	—	残5.6	—	—	底部のみ残存	外面	磨滅のため調整不明、底部穿孔	内面	ナデ		251
252	SK08	弥生	高杯	27.4	残7.5	—	—	脚部欠損	外面	口縁端部横ナデ、口縁部横ナデ後縦ミガキ、体部横ミガキ後縦ミガキ	内面	口縁部横ミガキ、体部ハケ後ミガキ		252
253	SK08	弥生	壺	(18.7)	残5.5	—	—	口縁部1/4残存	外面	口縁部横ナデ、体部ハケ	内面	口縁端部横ナデ、口縁部～体部ナデ		253
254	SD07	弥生	壺	(25.2)	残6.3	—	—	口縁部1/8残存	外面	口縁部横ナデ、口縁端部9条の波状文、体部9条の直線文と波状文	内面	口縁部横ナデ、体部ナデ		254
255	SD07	弥生	壺	(24.8)	残9.4	—	—	口縁部～体部1/7残存	外面	口縁部横ナデ、体部磨滅のため調整不明	内面	口縁部横ナデ、体部磨滅のため調整不明		255
256	SD07	弥生	鉢	17.3	残12.6	23.85	—	口縁部1/3、体部1/2残	外面	口縁部横ナデ、体部上半ハケ後横ミガキ、体部下半タタキ後縦ミガキ	内面	口縁部横ナデ、体部ハケ後ヘラミガキ		256
257	SD07	土師器	壺	(20.4)	残7.1	—	—	口縁部1/3残存	外面	横ナデ	内面	口縁部横ナデ、頸部ナデ		257
258	SD07	土師器	甕	(18.1)	残7.8	—	—	口縁部1/4残存	外面	口縁部横ナデ、体部一部ハケ	内面	口縁部横ナデ、体部横ヘラケズリ		258
259	SD07	土師器	高杯	(14.3)	残4.75	—	—	口縁部3/4、脚部欠損	外面	口縁部横ナデ、体部ナデ	内面	横ナデ		259
260	SD07	土師器	高杯	—	残8.1	—	(9.35)	脚部1/4残存	外面	脚柱部ナデ、裾部横ナデ	内面	脚柱部ヘラケズリ、裾部横ナデ		260
261	SD07	土師器	小型丸底壺	(8.6)	残7.7	(8.4)	—	口縁部～体部1/9残存	外面	口縁部ハケ後横ナデ、体部ナデ	内面	口縁部ハケ後横ナデ、体部ナデ		261
262	SD07	土師器	小型丸底壺	(8.5)	残7.95	—	—	口縁部～体部1/4残存	外面	口縁部横ナデ、体部横ハケ後ナデ	内面	口縁部横ナデ、体部ナデ		262
263	SD10	須恵器	蓋	(15.2)	3.3	—	—	口縁部僅か残存	外面	回転ナデ	内面	回転ナデ、天井部に一方向の仕上げナデ		263
264	包含層	弥生	台付鉢	—	残7.5	—	(12.0)	台部1/5残存	外面	ナデ	内面	ナデ		264

第5章　ま　と　め

西ケ原遺跡では31軒の古墳時代の竪穴住居跡が検出されているが、その全てがA地区で検出されている。古墳時代の集落はこれまでに述べたように、美嚢川の右岸に南北に細長く形成された自然堤防上に立地している。住居跡は、A地区内では調査区東端から西側へ約50mの幅のうちにおさまっているが、南北側については両方向とも調査範囲外にも展開しているものと考えられる。あわせて三木市の実施したほ場整備に伴う埋蔵文化財確認調査の結果から考えて、細長い自然堤防上に沿って集落が形成されていることが確かめられている。

竪穴住居跡は、A地区内のなかでも約1,700㎡の範囲内に31軒検出されている。これはかなり密集した状態であり、当然のことながら同時に存在していたとは考えられない。ここでは、検出状況・出土遺物などを材料として古墳時代の集落の変遷について検討を試みてみたい。

第1節　検出状況の確認

約1,700㎡のなかで31軒の住居を検出しているが、これら住居跡の同時存在の可能性が否定されることは、検出状況から明白である。その根拠として最も確実なものは、重複して検出された遺構の存在である。A地区の竪穴住居跡で、全く切り合いの認められないものは、31軒のうちで9軒に過ぎない。しかも、そのうち2軒はカマドのみの残存であり、その部分のみが重複していないだけで、本来の規模から想定すれは当然重複して検出されているものである。さらに重複はしていないが、検出位置がお互いに近接しすぎており、同時に存在することが考えられないものも多くみられる。重複して検出された遺構は、その切り合いを解明することにより先後関係を決定することができる。

以下、重複して検出された住居跡の判明した切り合い関係を述べてゆく。

〔ＳＨ01とＳＨ18〕

調査区の中央北端で検出したものである。ＳＨ01が西側、ＳＨ18が東側に位置している。両者は同一のレベルで遺構を確認している。検出した床面の標高はＳＨ01が51.95m、ＳＨ18が52.05mと約10cmの差が認められる。重複して検出されている部分は多くはなく、ＳＨ18の西コーナー部分とＳＨ01の東コーナー部分が重複しているのみである。調査の結果、ＳＨ18の埋土をＳＨ01が切っていることが判明した。したがって、ＳＨ18が古く、ＳＨ01が新しい。

〔ＳＨ02とＳＨ25〕

調査区の東側中央部で検出したものである。両者はかなりの部分が重複している。ただし、ＳＨ25はＳＨ02を完掘した後に、その床面で、ＳＨ02によって掘削破壊されたＳＨ25のカマドを確認したものである。検出した床面の標高はＳＨ02が52.50m、ＳＨ25が52.30mと約20cmの差が認められる。このような状況からＳＨ02がＳＨ25を切っており、したがってＳＨ25が古く、ＳＨ02が新しい。

〔ＳＨ03とＳＨ04〕

ＳＨ02の南西約10mで検出されている。ＳＨ03が北側、ＳＨ04が南側に位置している。両者は同一のレ

ベルで遺構を確認している。検出した床面の標高はＳＨ03が52.27m、ＳＨ25が52.40mと約13cmの差が認められる。遺構面精査の段階でＳＨ03の埋土をＳＨ04のカマドが切っているのが確認されている。したがってＳＨ03が古く、ＳＨ04が新しい。

〔ＳＨ05とＳＨ11〕

調査区の南端で両者を検出している。ＳＨ03からは西に約10mに位置する。両者とも遺構は調査区外にのびている。両者は同一のレベルで遺構を確認している。検出した床面の標高はＳＨ05が52.25m、ＳＨ11が52.10mと約15cmの差が認められる。重複して検出されている部分はごくわずかで、ＳＨ11の東コーナーとＳＨ05の北西辺の一部が重複しているのみである。調査の結果、ＳＨ11の埋土をＳＨ05が切っていることが判明したが、ごくわずかな部分の切り合いのため、若干の不安も残る。しかし、ＳＨ05のカマドの煙道がＳＨ11の南東辺に極めて近い位置で検出されたにもかかわらず、良好に残存していることを考えれば、やはりＳＨ11が古く、ＳＨ05が新しいようである。

〔ＳＨ06とＳＨ07〕

調査区の中央部の南東寄りで両者を検出している。このＳＨ06と07の重複の状況は、これまで述べてきた住居跡のものとは異なっている。たとえば、４つの辺のうち、３つの辺がまったく重なっており、このことは、残りの１辺も同じ方向をとっていることを意味している。さらにカマドを共有しており、その床面が上下２面に分かれること。などから、ＳＨ06と07は別個の遺構とは考えられない。床面の標高はＳＨ06が52.17m、ＳＨ07が52.09mと約８cmの差が認められる。カマドの床の状況からＳＨ07の方が古く、ＳＨ06の方が新しい。ＳＨ06はＳＨ07の床を上げて北東辺を拡張して造られたものである。先後関係は明らかであるが、両者の間に時期的な断絶は認められない。

〔ＳＨ13とＳＨ21〕

調査区の南東部で両者を検出している。両者とも遺構は調査区外にびている。両者は同一レベルで遺構を確認しているものの、肝心の切り合った部分がちょうど確認調査の№55グリットにあたっており、そのため平面的な先後関係を確認することができなかった。ただ、両者ともに調査区外にのびていることから、断面による観察から切り合いを確認し、先後関係を決定することができた。これによると、ＳＨ21がＳＨ13を切っておりＳＨ13のカマド部分を掘削して床面を下げている。ＳＨ21の床面上で検出した焼土面はＳＨ13のカマド焼成部の痕跡である。検出した床面の標高はＳＨ13が52.25m、ＳＨ21が52.15mと10cmの差が認められる。以上のことから、ＳＨ13が古く、ＳＨ21が新しい。

〔ＳＨ20とＳＨ22〕

調査区の北東部で両者を検出している。両者とも遺構は調査区外にのびている。両者は同一のレベルで遺構を確認している。検出した床面の標高はＳＨ20が52.25m、ＳＨ22が52.5mと約25cmの差が認められる。重複して検出されている部分は、ＳＨ20の北コーナー部分とＳＨ22の南西辺の一部である。遺構面精査の段階で、ＳＨ22の埋土をＳＨ20が切っていることが判明した。ただし、重複している範囲はごく狭く、大半の部分が調査範囲外である。以上のことからＳＨ22が古く、ＳＨ20が新しい。

〔ＳＨ26とＳＨ27〕

調査区の北東部で両者を検出している。両者とも遺構は調査区外にのびている。両者は同一のレベルで遺構を確認している。検出した床面の標高はＳＨ26が52.35m、ＳＨ27が52.25mと約10cmの差が認められる。両者はそのかなりの部分が重複しており、全体としてはＳＨ26が西側にＳＨ27が東側に位置している。遺構面精査の段階では１軒の住居跡として認識しており、掘削後に重複した２軒の住居跡であることが判明した。ＳＨ27か古く、ＳＨ26が新しい。

〔ＳＨ22とＳＨ27〕

調査区の北東部で両者を検出している。ＳＨ22はＳＨ20と、ＳＨ27はＳＨ26とそれぞれ重複して検出されているため、４軒の住居跡の切り合い関係がみられる。調査の結果、ＳＨ27はＳＨ22に切られていることが判明した。したがって、ここではＳＨ27が古く、ＳＨ22が新しい。

〔ＳＨ24とＳＨ34〕

調査区の南東部で両者を検出している。遺構はそれぞれ調査区外にのびている。検出した床面の標高はＳＨ24が52.35m、ＳＨ34が52.65mと約30cmの差が認められる。ＳＨ24がＳＨ36の中に完全に収まっているため、切り合い関係を見極めるのが困難であったが、遺構面精査の段階で、ＳＨ34の埋土に変化がみられなかったこと、ＳＨ34の床面検出時に初めてＳＨ24の埋土を確認したことなどを考えれは、ＳＨが古く、ＳＨ34が新しいと考えられる。

〔ＳＨ23とＳＨ30とＳＨ35〕

調査区の南東端でこれらを検出している。検出した位置がごく狭い範囲に限られ、３者ともに、全体のごく一部の検出にとどまっており、しかも切り合っているため、その先後関係の決定は困難な状況である。検出した床面の標高にそれぞれ違いがあり、ＳＨ23が52.55m、ＳＨ30が52.30m、ＳＨ35が52.05mである。これに加えて、断面の観察からＳＨ35が最も古く、次にＳＨ30、最も新しいものがＳＨ23であると考えている。

〔ＳＨ13とＳＨ28とＳＨ29〕

調査区の南東部でこれらを検出している。ＳＨ13はＳＨ21に切られていることは前述した。ＳＨ29はＳＨ13の北側コーナーに近接して検出された、楕円形の焼土面と炭化物である。これはカマドの焼成部の痕跡と考えている。この位置関係から両者は同時に存在していたとは考えられず、遺構として重複して検出されていると考えられるが、ＳＨ29がカマドの焼成部の痕跡のみで床面のプランを検出していないため、切り合いは認められない。両者には検出のレベルに大きな差がみられ、ＳＨ29の検出の標高が52.7m、ＳＨ13の床面の標高が52.25mと45cmの差が認められる。層位的に考えれば、ＳＨ13が古く、ＳＨ29が新しい。ＳＨ29の北西約３mに位置するＳＨ28もＳＨ29と同じ標高で検出されており、この意味ではＳＨ29と近い時期が与えられる。

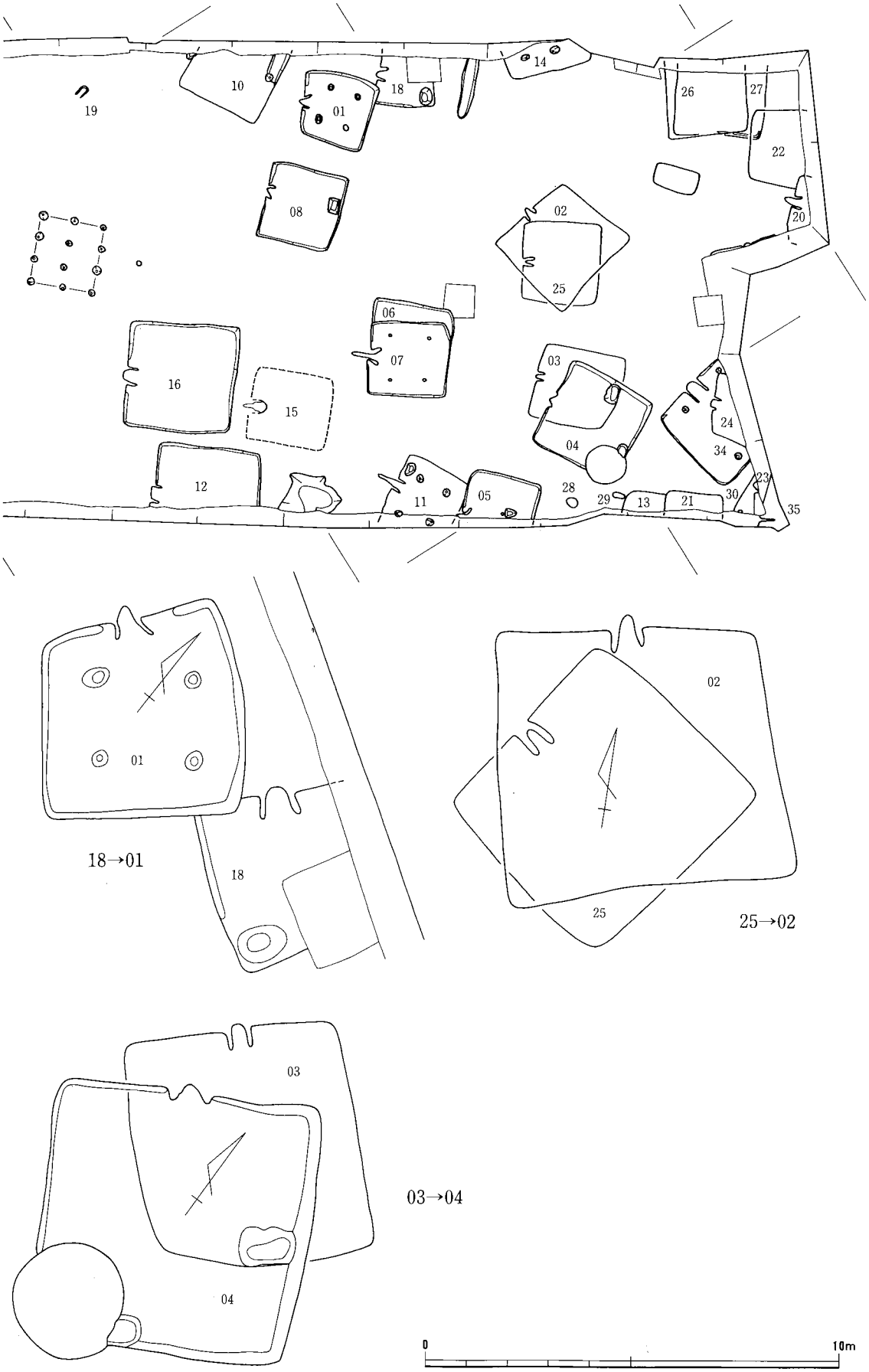
〔ＳＨ12とＳＨ15とＳＨ16〕

調査区南西部で検出した３軒の住居跡である。これらには、切り合い関係が認められない。しかし、各住居跡間が１～1.5m程度の間隔しかないため、３軒が同時に存在していたと考えることは不可能である。しかし、住居跡の各辺の方向に共通のものがみらることから、ごく近い時期の建て替えの状況を想定できる。ただし、検出状況からは先後関係は明らかではない。

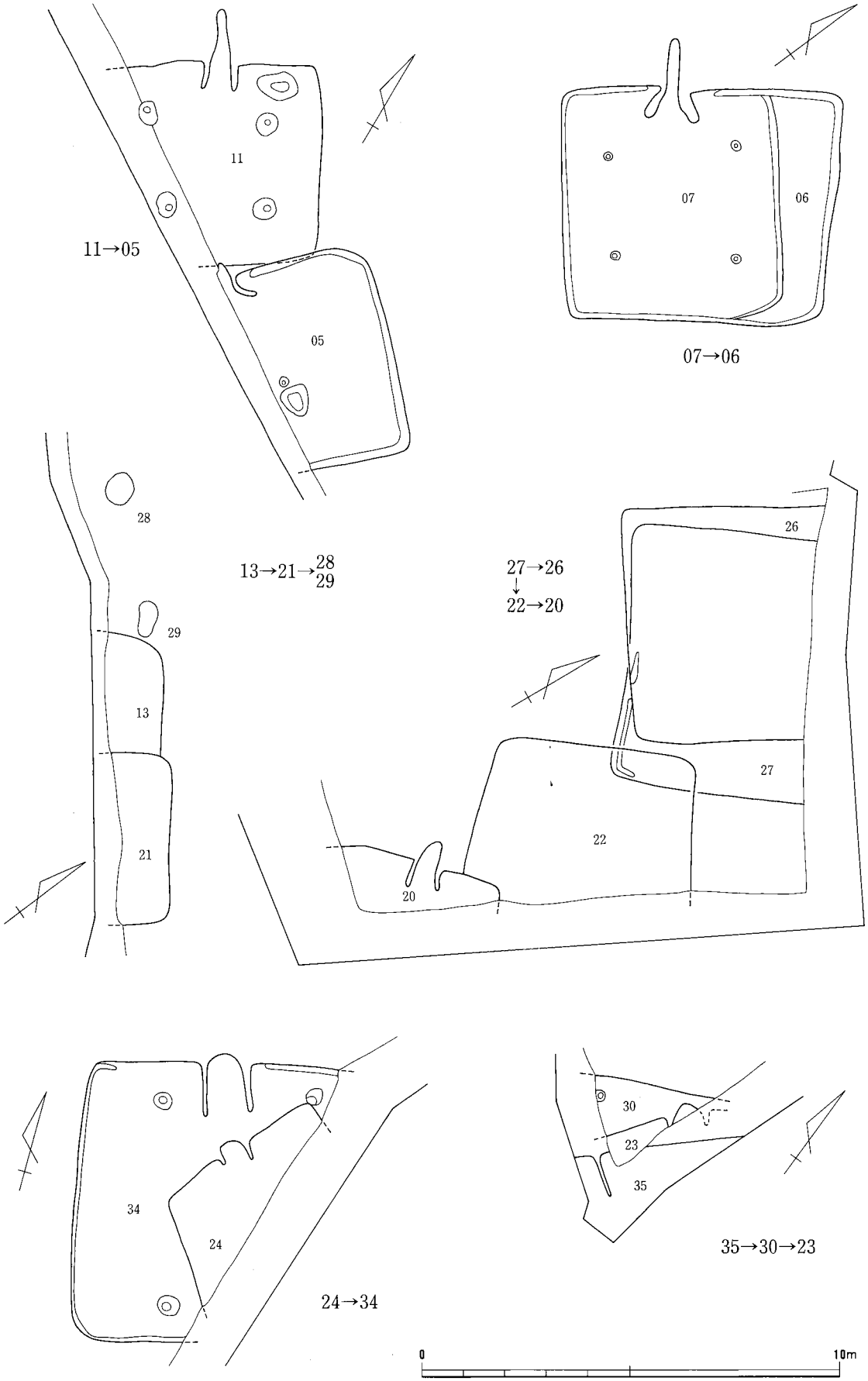
これまでの検出状況の結果を表すと以下のようになる。

ただし、これは各々のうちでの相対的な先後関係のものであって、絶対的な時期の同一性を表現しているものではない。

古 ――――――――――→ 新
ＳＨ１８――→ ＳＨ０１
ＳＨ２５――→ ＳＨ０２
ＳＨ０３――→ ＳＨ０４
ＳＨ１１――→ ＳＨ０５
ＳＨ０７――→ ＳＨ０６
ＳＨ１３――→ ＳＨ２１――→ ＳＨ２９
ＳＨ２１――→ ＳＨ２８
ＳＨ２７――→ ＳＨ２２――→ ＳＨ２０
ＳＨ２７――→ ＳＨ２６
ＳＨ２４――→ ＳＨ３４
ＳＨ３５――→ ＳＨ３０――→ ＳＨ２３



第49図　A地区　重複して検出した竪穴住居跡（1）



第50図　A地区　重複して検出した竪穴住居跡（2）

第2節　出土遺物の検討

出土した遺物の検討を行いたい。住居跡からは土器を主体とした遺物が出土している。土器には須恵器と土師器がみられるが、各住居跡で最も普遍的に出土しているものが須恵器の杯身と杯蓋である。そこで、この2つの器種の編年を行い、出土した土器の状況を考慮して住居跡の時期を決定し、各住居跡間の先後関係を明らかにしたい。

1．出土遺物の編年

ここでは、須恵器の杯身・杯蓋に限って編年を行った。その形態的特徴からⅠ期～Ⅶ期に分けた。以下、各期の特徴について述べる。

〔Ⅰ期〕

杯身　口縁部の立ち上がりは直立ぎみである。口縁部は比較的長く、口縁端部内面は内傾して面をもっている。杯部は比較的浅い。底部は平坦である。底部に施された回転ヘラケズリの範囲は他のものよりも広く1/2程度である。

杯蓋　口縁部はまっすぐ下がる。天井部と口縁部の境界には稜線がみられる。口縁端部内面は内傾して面をもっている。天井部の回転ヘラケズリの範囲は1/2程度である。天井部の形態は個体数が少なく、不明な点が多い。

〔Ⅱ期〕

杯身　2種類をここに入れている。1つは、148に代表されるⅠ期のものと共通したプロポーションをもっているものである。前段階のⅠ期のものに較べて口縁部が内傾している点、口縁端部内面の内傾した面の角度、底部の回転ヘラケズリの範囲が狭くなっている点などに退化傾向がみられるものである。次に、128に代表されるものがある。口縁部径は小さく、やや内傾して立ち上がる。底部は丸く、深い。

杯蓋　2種類をここに入れている。1つは、36に代表されるⅠ期のものと共通したプロポーションをもっているものである。前段階のⅠ期のものに較べると口縁部と天井部の境界の稜線にシャープさがなくなり、回転ヘラケズリの範囲も若干狭くなっている。次に、151に代表されるものがある。口縁部径は小さく、天井部は丸い。口縁部と天井部の境界の稜線にシャープさを失っている。

陶邑編年のＴＫ47に近い時期を考えている。

〔Ⅲ期〕

杯身　口縁部立ち上がりの内傾の度合いがさらに進んでいる。口縁端部内面は変わらずに面をもっているが、ややあまい。底部の回転ヘラケズリの範囲はさらに狭くなっている。底部内面には同心円のタタキがみられるようになる。

杯蓋　Ⅱ期と区別したのは、口縁部と天井部との境界の稜線の退化の程度である。口縁部は外側に開くようになっている。口縁端部内面には面をもっている。天井部内面には同心円のタタキが

みられるようになる。

陶邑編年のＭＴ15に近い時期を考えている。

〔Ⅳ期〕

杯身　この時期になると、口縁部はさらに内傾して、短く立ち上がる。口縁端部内面は面をもつものはなく、１条の沈線を巡らせるのみである。

杯蓋　天井部と口縁部の境界は稜線で分けることはしない。凹線を巡らせて上部を稜線状にしているのみである。口縁部はさらに外側に開いている。口縁端部内面は面をもっているが、前段階より退化傾向がみられる。

〔Ⅴ期〕

杯身　口縁部は前段階よりもさらに内傾して、短く立ち上がる。口縁端部内面はこの段階から丸くおさめるようになる。偏平なプロポーションをもち、底部の回転ヘラケズリはさらに範囲を狭める。口縁部径が10cm程度の小型のものもみられる。

杯蓋　天井部と口縁部の境界を１条の沈線で区分しているのを特徴としている。口縁端部内面の形態には面をもつものと、もたないものがある。天井部の回転ヘラケズリの範囲は1/3程度にとどまる。

陶邑編年のＴＫ10に近い時期を考えている。

〔Ⅵ期〕

杯身　口縁部は一段と内傾して、立ち上がりは短い。比較的口径が大きく杯部は浅い。口縁部が短いこともあって、全体にさらに偏平さを印象づける。口縁端部はすべてのものが丸くおさめている。大半が偏平なものであるが、一部に杯部の深いものもみられる。底部の回転ヘラケズリは、ごく一部にのみ施す。

杯蓋　天井部と口縁部の境界は浅く窪んで、凹線の痕跡を窺わせる程度のものと、天井部と口縁部の境界が不明瞭なものがある。口縁端部内面の処理は前者のものが面をもった痕跡を残すのにたいして後者は丸くおさめるものが大半である。回転ヘラケズリは天井部のごく一部に施されるのみである。

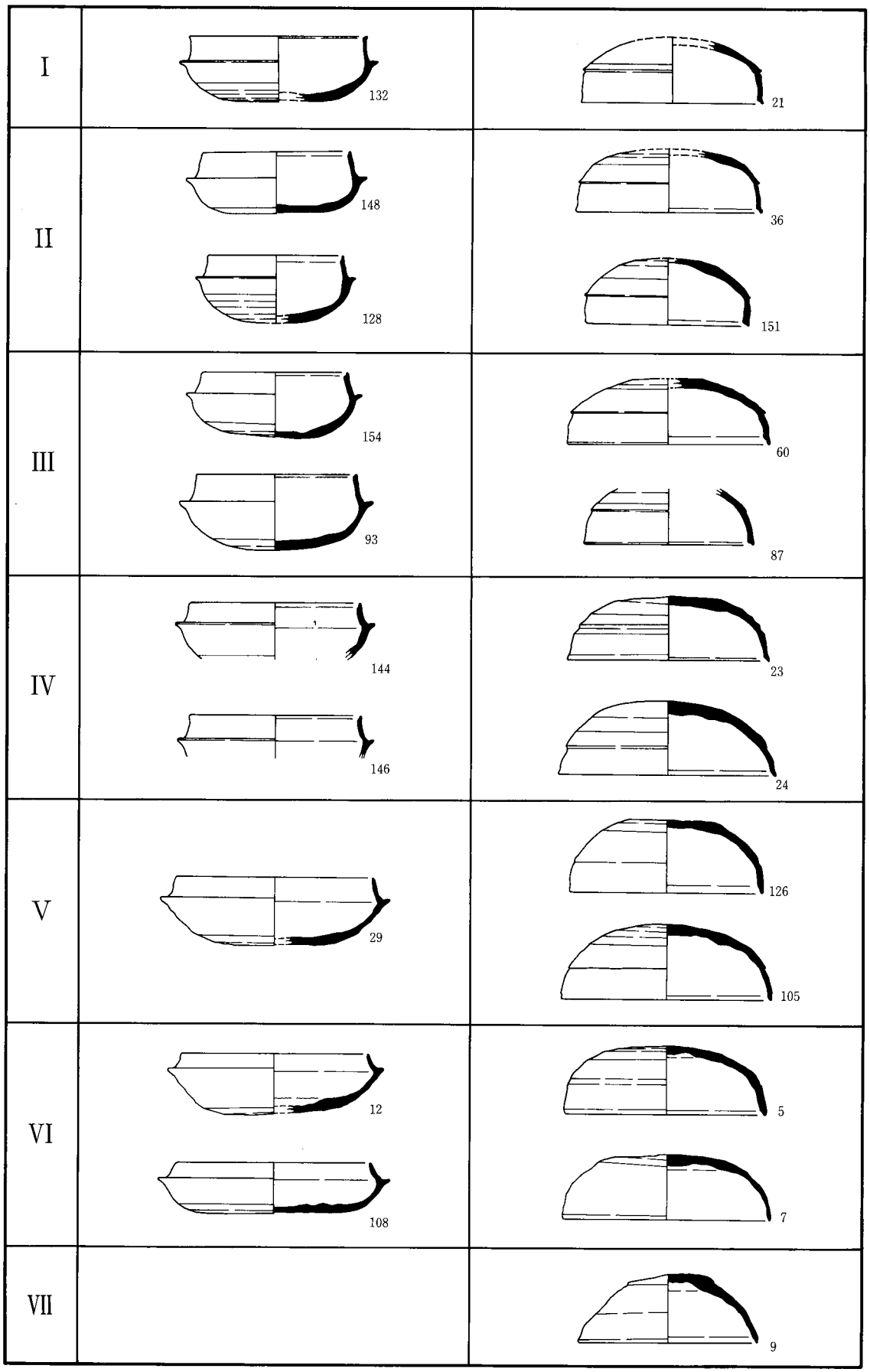
陶邑編年のＴＫ４３に近い時期を考えている。

〔Ⅶ期〕

杯身　この段階の杯身はみられなかった。

杯蓋　口縁部径が小さいタイプのもので、天井部との境界は不明瞭である。回転ヘラケズリは、ごく狭い範囲に限定され、雑である。口縁端部内面の処理は弱い段をもっている。

陶邑編年のＴＫ209～217の時期を考えている。



第51図　出土須恵器（杯身・杯蓋）の編年

2．各住居跡から出土した土器の検討

ここでは、各住居跡から出土した土器の出土状況を考慮しながら、須恵器の杯身・杯蓋を主に検討を加え、住居跡の時期をあきらかにしたい。

ＳＨ01

２点を図化している。カマドから土師器の甕が、床面上から１の須恵器の杯身が出土している。１は口縁部約1/9程度と残存率が良くないため、口径に不安が残る。口縁端部は丸くおさめており、立ち上がりは内傾して短い。杯部は失われているが、浅いタイプのものと思われる。

住居跡の時期はⅥ期のものと考えている。

ＳＨ02

18点を図化しており、当遺跡では多くの遺物が出土した住居である。図化した須恵器は杯身・杯蓋のみで、すべて床面上かカマド内の出土で、当住居跡の時期を示す遺物である。杯身の３点は口縁端部を丸くおさめるもので、立ち上がりは内傾して短い。杯蓋は７点図化しているが、口縁部と天井部の境界はいずれも不明瞭である。口縁端部は面をもつものもみられるが、全体としては、丸くおさめる方向にあるようである。ただ、９の杯蓋のみが、他の６点よりも新しい傾向を示している遺物である。３～５・７・10～12と一括して出土している。

大半の遺物はⅥ期のものであるが、９が出土していることから当住居はⅦ期と考えている。

ＳＨ03

出土した遺物は少なく、２点を図化したのみである。出土位置が明確なものは22の土師器の甕で、カマドから出土している。時期決定の基準としている須恵器は21の杯蓋を図化しているが、これは遺構掘削時の住居跡埋土中からの出土である。天井部を欠失しているが、口縁部1/3程度の残存である。天井部と口縁部の境界には稜線を巡らせ、比較的明瞭である。口縁端部内面は面をもっている。

住居跡の時期は、埋土からのものであるが、21の特徴からⅢ期を考えている。22からもやや古い印象を受ける。

ＳＨ04

比較的多くの土器が出土しているが、出土位置が明確なものは32の土師器の甕で、カマドから出土している。他のものは、遺構掘削時の埋土中から出土したものである。杯身が３点と杯蓋が２点出土している。杯身の３点は、29がやや立ち上がりが長く、Ⅴ期としている。28と30は29と較べると立ち上がりが内傾して短い。口縁端部は３点とも丸くおさめる。杯蓋は27が辛うじて天井部と口縁部との境界に稜線を残すことでⅢ期とした。26は天井部と口縁部との境界が不明瞭で、凹線や沈線で区分しているものよりも新しい傾向である。このことからⅥ期としている。

住居跡の時期は、出土土器がⅢ・Ⅴ・Ⅵ期に分かれるが、最も新しい遺物からⅥ期と考えている。

ＳＨ05

遺物の出土は少ない。須恵器の杯蓋が２点、土師器の甕が１点を図化している。須恵器の杯蓋のうち23は住居跡埋土中からの出土で、24はカマド内から出土している。両者とも、天井部と口縁部の境界は凹線で区分している特徴をもっている。プロポーション的には、23が天井部が偏平、24は丸みをおびている。口縁端部内面の処理は23が面をもつのに対して24は丸くおさめている。ともにIV期の遺物と考えているが、23の方が若干古い様相を示す。

住居跡の時期は、須恵器の杯蓋からIV期と考えている。

ＳＨ06

10点を図化している。住居跡使用時に伴う遺物と認識できるものは土師器のみである。42がカマドの左側の床面上で、39・41・43がカマド内から出土している。判断の基準としている須恵器は４点図化しているが、いずれも埋土中からの出土である。38は杯身で、杯部は丸みをおびたプロポーションで、口径は小さい。口縁部はやや内傾しながら立ち上がる。口縁端部は内面に面をもっている。II期の遺物と考えている。35～37は杯蓋である。いずれも残りが良くなく、1/4～1/9程度のものである。天井部と口縁部の境界は稜線で区分している。口縁部は外側にひらくことはなく、口縁端部内面は３点とも段あるいは面をもっている。回転ヘラケズリの範囲は天井部の半分程度である。３点のなかでは37が若干新しい様相を示しているが、いずれもII期のものである。

遺物の示す住居跡の時期はII期である。

ＳＨ07

７点を図化している。須恵器は１点のみである。45はカマドの左側の床面から出土している。1/4程度の残存のものである。口縁部は内傾して立ち上がり、口縁端部内面は面をもっているが、やや丸みをおびている。底部の回転ヘラケズリの範囲は1/2以下でII期のものよりは明らかに新しく、III期に属するものである。

遺物の示す住居跡の時期はIII期である。

ＳＨ08

８点を図化している。57の須恵器の甕と58の土師器の甕のみがカマド内から出土で、他のものは埋土からのものである。須恵器の杯身は２点図化している。タイプの違うもので、53は口縁部が比較的直立して立ち上がり、口縁端部内面は内傾して面をもっている。54は53に較べると内傾した口縁部をもち、若干短い立ち上がりである。口縁端部は丸くおさめている。底部の回転ヘラケズリの範囲はどちらも狭い。53はIII期、54はＶ期のものである。52の杯蓋は約1/7程度の残存で天井部を欠失している。天井部と口縁部の境界はシャープではないが、稜線で区分している。口縁端部内面には段が観察される。口径が比較的大きい。III期のものである。

III期とＶ期の遺物が出土しているが、住居跡自体は新しい時期をとってＶ期とする。

ＳＨ10

７点を図化している。このうちカマドから出土しているものは、62、65、66である。62は須恵器の杯

身であるが、残存が1/12と非常に悪く、口径、傾きに若干の不安が残るものである。口縁部は図化しているより内傾している可能性も残る。II期の遺物とした。60は天井部と口縁部の境界を稜線で区分しており、シャープな印象をもつが、天井部内面に同心円タタキがみられることからIII期とした。61は天井部と口縁部の境界が不明瞭なもので、新しい要素の土器であるが、これは土坑1内で検出された柱穴状の遺構から出土している。VI期の遺物であるが、時期の違う遺構で重複して検出した可能性が高いため、当住居後の時期を決定する材料には採用しない。

住居跡の時期は、III期のものと考えている。

ＳＨ11

6点を図化しており、そのうち67～69・70の4点がカマド内から、72がカマドの左側の床面上からの出土である。須恵器は67の杯身が1点のみ出土している。1/3程度のもので、口径の小さいものである。口縁部は内傾して短く立ち上がり、口縁端部内面には弱い段をもっている。IV期のものである。

住居跡の時期は、IV期のものと考えている。

ＳＨ12

比較的多くの遺物が出土ており、11点を図化している。カマド内から73・79・80の須恵器と82・83の土師器が出土している。78は床面上からの出土である。時期決定の基準としている須恵器の杯は8点図化している。杯身は4点で、いずれのものも口縁部が短く内傾して立ち上がるタイプのものである。口縁端部はすべてが丸くおさめる。全体に口径が大きい。杯蓋も4点である。73が天井部と口縁部を、ごく弱い凹線で区切っているが、それ以外のものはとくに区分をしていない。天井部の回転ヘラケズリは狭い範囲に限定される。したがって、当住居跡出土の土器のなかでは73のみが、やや古い様相を呈しておりIV期に、他の7点の須恵器はVI期のものである。

住居跡の時期は、VI期のものと考えている。

ＳＨ13

ＳＨ21に切られており、確実に当住居跡のものと認められるものは、105と109である。105は杯蓋で天井部と口縁部の境界を1条の沈線で区分しているものである。口縁端部内面は退化した面をもつ。Ｖ期のものである。109は口径の大きな杯身である。口縁部の立ち上がりは短く内傾するが、VI期のものよりは若干長いようである。Ｖ期のものと考えている。

住居跡の時期は、2点の須恵器からＶ期と考えている。

ＳＨ14

3点図化しているが、須恵器の杯身は1点のみである。84は埋土中からの出土である。ほぼ完形のもので、口縁部の立ち上がりは短く内傾する。回転ヘラケズリは底部の一部にのみ施されている。

住居跡の時期は、出土した土器からVI期と考えている。

ＳＨ15

当住居跡はカマドのみの検出であるため、出土した遺物には信頼性にやや欠ける。須恵器は杯身と杯

蓋が1点ずつ出土している。87は1/6の残存で、天井部は失われている。天井部と口縁部の境界は弱い稜線で区分している。口縁端部内面は内傾して面をもつ。III期のものである。88は杯身である。杯部がやや深いものである。立ち上がりは短く内傾する。V期のものである。

住居跡の時期は、88の土器からV期のものと考えている。

SH16

出土した遺物の量は少ない。住居跡使用時の遺物としては、カマド内から出土した92の土師器の甕のみである。須恵器は杯身と杯蓋が1点ずつ出土しており、いずれも埋土からの出土である。90は杯蓋である。天井部と口縁部部の境界をごく弱い凹線で区分しており、口縁端部内面に面をもつことからIII期の物と考える。91は杯部の深い杯身である。口縁部は短く、内傾して立ち上がっており、VI期の特徴を備えている。

住居跡の時期は、91の土器からVI期のものと考えている。

SH18

5点を図化している。94を除いたものがカマド内あるいは周辺の床面上からのものである。93と94は須恵器の杯身である。93はカマドの左側床面上から出土している。両者ともやや内傾して立ち上がる口縁部をもち、口縁端部は93が面を、94が段をもっている。II期のものよりも全体に口径が大きく、ここではIII期とした。

住居跡の時期は、93と94の土器からIII期のものと考えている。

SH20

6点を図化しており、そのうち須恵器は4点、杯身が1点、杯蓋が2点である。98はカマドの左側から出土したものである。器壁は薄く、口縁端部内面は辛うじて面をもっている。口縁部は内傾して立ち上がる。IV期のものとする。99はカマド内から出土した杯蓋である。口径は小さく、天井部と口縁部の境界は稜線で区分している。口縁端部内面には面をもつ。II期のものと考えている。100の杯蓋は天井部と口縁部の境界に1条の沈線を巡らすものである。口縁端部内面は、かなりしっかりした面をもつ。V期の遺物である。

出土した須恵器にはII・IV・V期の遺物があるが、住居跡の時期はV期と考えている。

SH21

11点の土器を図化している。そのうち、須恵器は杯身が4点、杯蓋が1点、壺が1点である。SH21はちょうど確認調査のNo.55グリッドにあたり、そこから出土した遺物もここに含んでいる。106は確認調査で出土したもので、口径が当住居跡出土の他のものよりも小さく、口縁部は垂直ぎみに立ち上がる。口縁端部内面には段をもつ。III期のものと考えている。107～110は全面調査時に出土したものである。いずれも、口縁部は内傾して短く立ち上がる形態のものである。口縁端部は丸くおさめる。107は杯部がやや深く、108は口径が大きく、杯部が浅い。3点ともVI期のものである。104は、確認調査で出土したもので、天井部と口縁部の境界を凹線で区分しているものである。口縁部は短く垂下し、端部は丸くおさめている。IV期の遺物である。

出土した遺物にはⅢ・Ⅳ・Ⅵの時期のものがあるが、全面調査で出土したもののみで判断すれば、Ⅵ期である。確認調査での遺物は、ＳＨ13のカマドとしている焼土付近で出土しているため、ＳＨ13に伴う遺物の可能性も考えられるなど、不明な点も多い。

ＳＨ23

ＳＨ23・30・35の３軒が重複して検出されたなかで最も新しい住居跡である。遺物は１点のみ図化している。調査区境の壁面から出土したものである。須恵器の杯身で、口縁部は若干内傾して立ち上がり、口縁端部内面は面をもっている。丸い底部をもち、底部の回転ヘラケズリの範囲は1/2程度である。　土器そのものはⅡ期の遺物であるが、切り合いから当住居跡より古いＳＨ35からⅢ期の遺物が出土しているため、少なくともⅢ期より古くなることはなく、Ⅳ期以降の遺構と考えている。

ＳＨ24

３点の土器を図化している。須恵器の杯蓋が２点出土している。118・119ともに口径の小さいものである。119の口縁部はやや外側にひらいている。天井部と口縁部の境界は、118は稜線が巡っているタイプ、119はかろうじて残存しているタイプである。118がⅡ期、119がⅢ期と考えている。

住居跡の時期は、119からⅢ期のものと考えている。

ＳＨ25

ＳＨ02に切られて検出された住居跡であるため、出土した遺物の量は非常に少ない。須恵器の杯蓋の１点のみを図化している。121は天井部を欠失した1/6程度の残存のものである。カマド内から出土している。天井部と口縁部は稜線で区分しているが、シャープさはみられない。口縁端部内面には段をもっている。Ⅲ期のものである。

出土した遺物が非常に少ないが、121からⅢ期としている。

ＳＨ26

当遺跡内の住居跡のうちでは、かなり多くの土器を出土しているが、確認調査の際に出土したものが多い。基準としている須恵器の杯は、杯身が７点、杯蓋が６点出土している。出土した土器の間にはかなりの時期幅が認められ、Ⅰ期～Ⅴ期のものが出土している。そのうち、126の杯蓋は、遺構検出中に出土しているものでⅤ期の特徴をもち出土したもののなかでは最も新しいものである。

126の時期をとってⅤ期とした。

ＳＨ27

ＳＨ26・22と重複しており、両者に大半の部分が切られているためか、出土した遺物は非常に少ない。１点のみを図化している。須恵器の杯蓋である。底部を欠失し、約1/8程度の残存である。口縁部はやや内傾して立ち上がり、短い。口縁端部内面には段が認められるが、丸くおさめる方向にある。底部の回転ヘラケズリの範囲は1/3程度のものと思われる。

144の土器からⅣ期とした。

ＳＨ28

カマドのみ検出の住居跡である。須恵器の２点を図化しているが、正確にはカマドの周辺から出土したものである。145は天井部を欠失しているが、偏平なものであったと考えられる。天井部と口縁部は稜線によって区分している。口縁端部内面は内傾して面をもっている。II期の遺物である。146は、底部を欠失した約1/8の残存のものである。短く内傾して立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部内面には段を有する。IV期のものである。

II期とIV期の遺物が出土しているが、いずれも当住居の時期を表しているとは言えない。検出レベルが他の住居跡よりもかなり上にあり、この意味ではVII期以降のものである可能性が高い。

ＳＨ34

６点の土器を図化しており、そのうち須恵器の杯身が１点、杯蓋が３点である。148は杯身で、若干内傾して立ち上がる口縁部に偏平な底部をもつ。口縁端部内面には段を有する。底部の回転ヘラケズリの範囲は1/3以下と狭い。II期の遺物である。149・151・152は杯蓋である。いずれも、天井部と口縁部は稜線で区分している。151・152は口径が小さく、149は大きい。稜線は149がシャープさに欠けている。口縁端部内面は３点とも、内傾して面をもっている。以上のことから、149はIII期、151・152はII期の遺物としている。

II期とIII期の遺物が出土しているが、149から当住居跡はIII期としている。

ＳＨ35

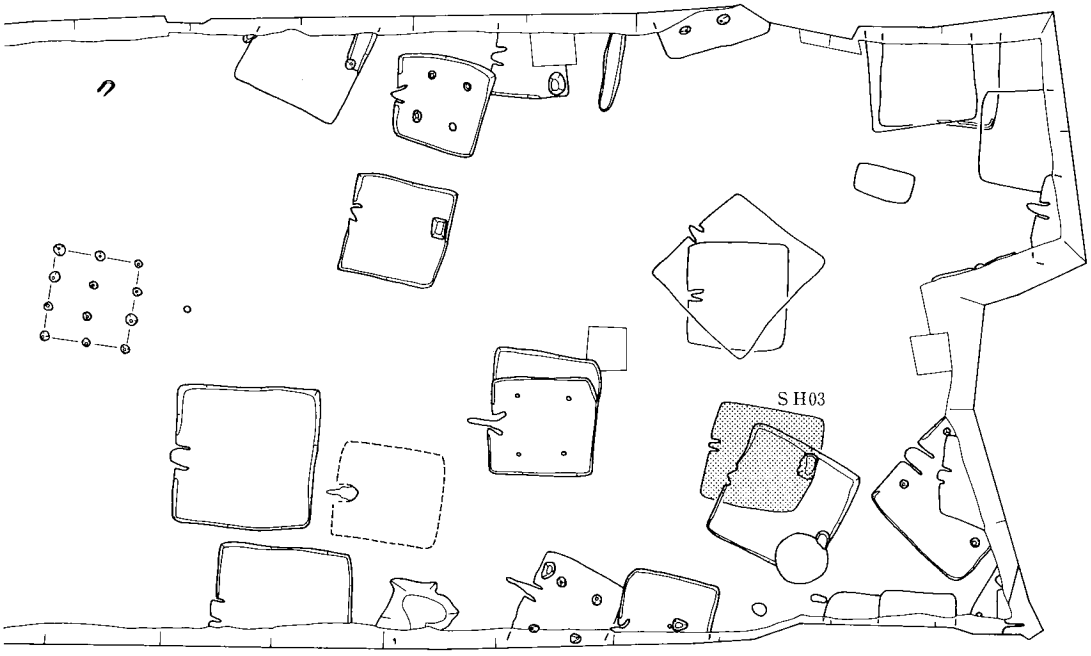
ＳＨ23・30と重複して検出されているもので、これらのなかではっとも古い住居跡である。検出したカマド周辺から遺物が出土しており、７点を図化している。そのうち、須恵器は２点が出土しており、２点とも杯身である。154は口縁部の約1/2を欠失している。口縁部の立ち上がりの角度、口縁端部の処理、プロポーション、底部内面の同心円タタキなどからIII期としている。155は残存率が1/6程度で、底部を欠失しているが、154と同時期の遺物であると考えている。

出土した須恵器からIII期の時期を考えている。

表12　A地区　竪穴住居跡出土土器の時期

	I	II	III	IV	V	VI	VII
SH01						■	
SH02						■	■
SH03	■						
SH04			■		■	■	
SH05				■			
SH06		■					
SH07			■				
SH08			■		■		
SH10		■	■				
SH11				■			
SH12				■		■	
SH13					■		
SH14						■	
SH15			■		■		
SH16			■			■	
SH18			■				
SH20		■		■	■		
SH21			■	■		■	
SH23		■					
SH24		■	■				
SH25			■				
SH26	■	■	■	■	■		
SH27				■			
SH28		■		■			
SH34		■	■				
SH35			■				

第3節　各期ごとの住居跡の変遷



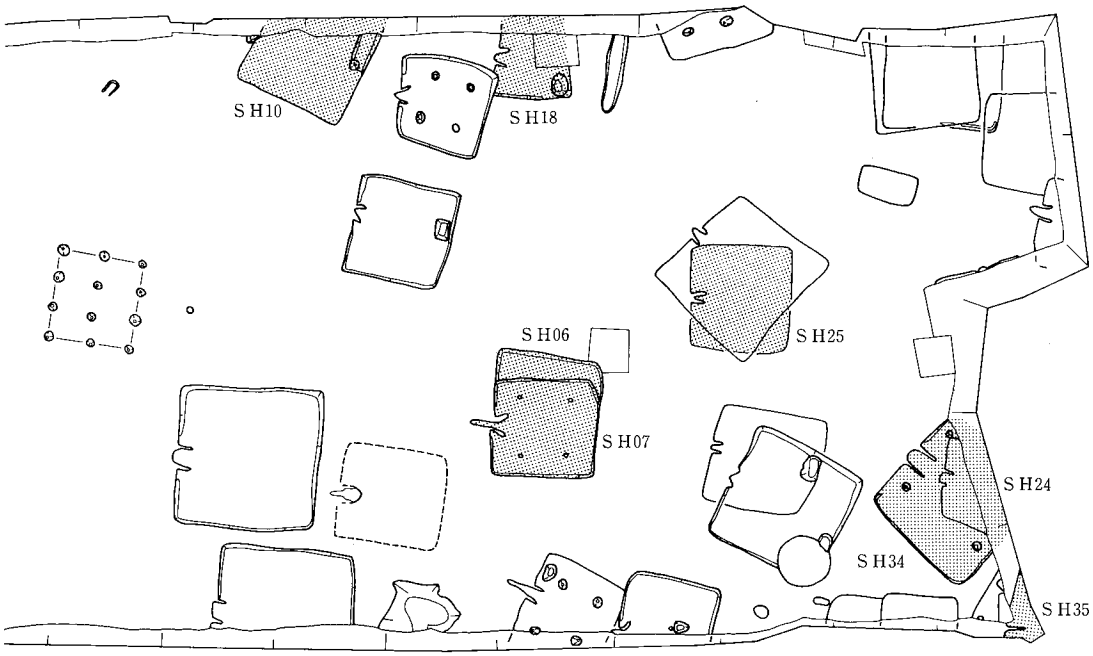
第52図　Ⅰ期の住居跡

Ⅰ期

この時期は、出土した遺物が非常に少ない。SH26から出土している杯身2点とSH03から出土している杯蓋1点のみである。SH26からは、この時期よりも新しい遺物が同時に出土しているため、Ⅰ期の住居跡とは認められない。SH03はSH04に切られていることもあって出土した遺物が少なく、21の須恵器の杯蓋と22の土師器の甕のみである。SH03をⅠ期としたのは21の須恵器を根拠としている。しかし、すでに述べたように非常に少ない遺物量からの判断であること、他にⅠ期にあたる住居跡がないこと、さらに次の時期であるⅡ期にあたる住居跡を想定していないことなどから、SH03がⅠ期にあたるとするのは疑問が残るところではある。ただし、SH03がⅠ期よりも新しい時期の住居跡であったとしても、切り合い関係SH04より新しくなることはない。したがって、SH03は時期が下ったとしても、SH04の時期であるⅥ期よりも新しくないということは確かである。

Ⅱ期

この時期では住居跡を想定していない。Ⅱ期の土器を出土している住居跡としてはSH06・10・20・21・23・24・26・28があり遺物の量としては少なくはない。しかし、Ⅱ期の遺物だけを単独で出土しているものは少なく、大半のものがそれよりも新しい時期の遺物を同時に出土している。このため、住居跡の時期としては、新しいほうにしている。SH06はⅡ期の遺物のみが出土しているが、切り合いからこの住居よりも古いSH07からⅢ期の遺物が出土しているため、Ⅱ期には該当しないとした。SH23もⅡ期の遺物が1点だけ出土しているが、この住居跡が切っているSH35からはⅢ期の遺物が出土している。このため、SH23はⅢ期よりも古い時期のものである可能性はない。したがって、Ⅱ期にあたる住居跡は存在しない。



第53図 III期の住居跡

III期

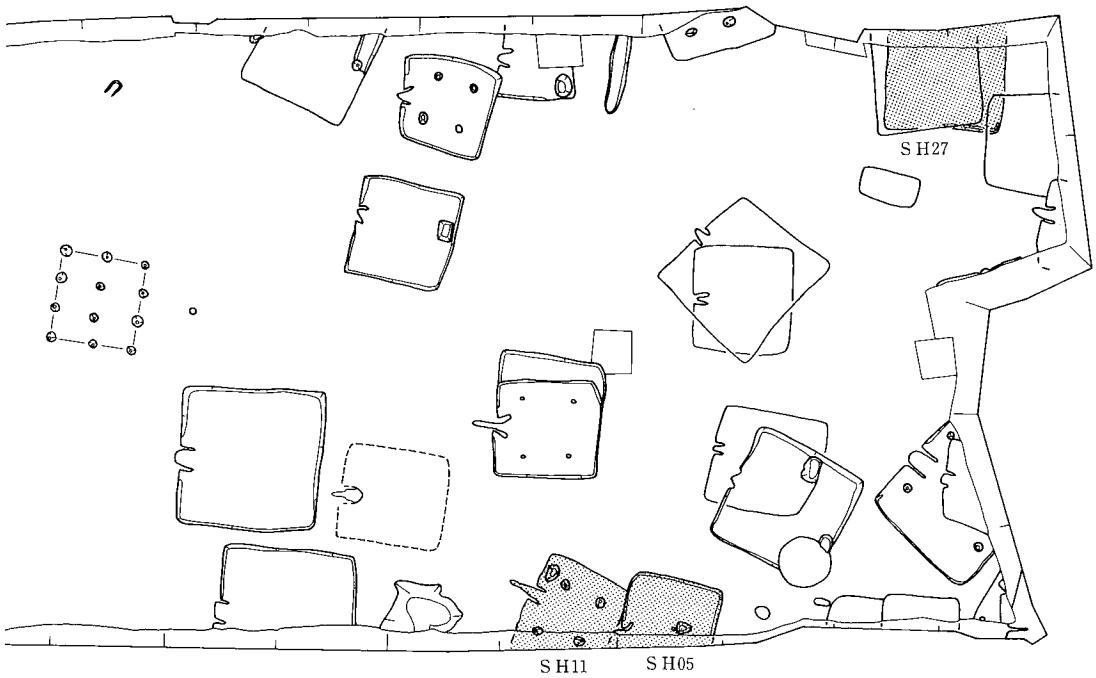
出土した遺物を検討した結果、Ⅰ～II期の期間に該当する住居跡はＳＨ03の１軒のみである。しかも、この住居は時期が下がる可能性がある。これらのことを考えれば、西ケ原遺跡ではⅠ～II期の間は集落活動が極めて低調であったといえる。

III期になると住居跡の数は増大する。８軒の住居跡がこの時期に該当すると考えている。調査区の北西部に位置するＳＨ10、それから約10m南東に位置するＳＨ18、中央部に位置するＳＨ06と07、そこから約10m東に位置するＳＨ25、調査区の南東隅で検出されたＳＨ35、その北側約６ｍに位置するＳＨ24と34らがそれである。

これらの住居跡のうちＳＨ06と07は重複して検出されている。ただ、この両者は、３辺を共有し、さらにカマドの位置も同じ位置に設定している。違いは残りの１辺と床面の深さである。検出状況の記述でのべたように、これらは別の住居跡と言うよりは、ＳＨ07を拡張したものがＳＨ06であると理解すべきで時期的には連続している。ＳＨ06から出土した土器はII期のものであるが、切り合い関係からＳＨ07より古いということはありえないため、ＳＨ07と同じ時期であるIII期のものとしている。

同じようにＳＨ24と34も重複して検出されている。ＳＨ24がＳＨ34のなかに完全におさまっていることや、両方の遺構が調査区外にのびているため、切り合い関係が明確でない部分があるが、ＳＨ34の検出中にＳＨ24の埋土と区別がつかなかったことから、ＳＨ34のほうが新しいものと判断した。

ＳＨ34とＳＨ35は比較的近い位置で検出されていることから、両者が同時に存在していたと考えるには無理があり、同時期に３～５軒の住居跡が存在していたものと思われる。



第54図 IV期の住居跡

IV期

この時期の遺物が出土している住居跡はSH05・11・12・20・21・26・27・28の8軒が認められる。これらの住居跡のうち、IV期の住居跡と認められるものは、SH05・11・27の3軒のみである。この3軒以外の住居は以下の理由により、当時期のものとはしていない。

SH12は調査区の南西部で検出したもので、SH15・16と近接している。ここからは、須恵器の杯身が4点と杯蓋が4点出土している。杯蓋の73の1点を、天井部と口縁部の凹線を根拠としてIV期の遺物としている。他の7点の須恵器はすべてVI期の特徴をもつ遺物である。

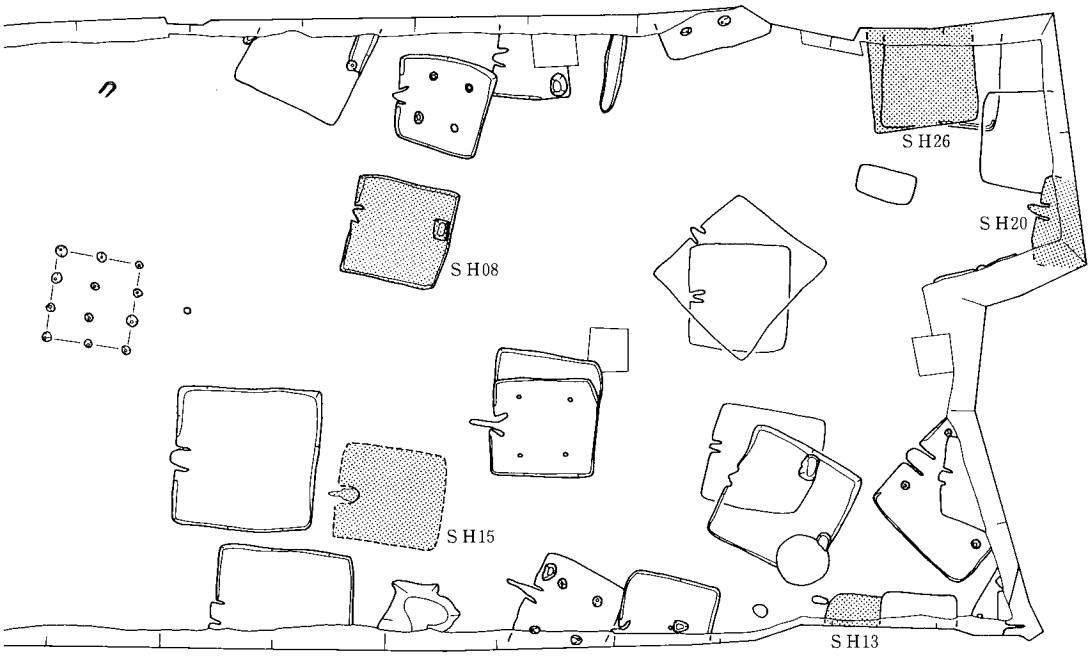
SH20は杯身1点、杯蓋2点の計3点の須恵器が出土している。この3点の時期はそれぞれ違い、99はII期、98はIV期、100はV期のものである。

SH21は5点の杯が出土しており、106がIII期、104がIV期、107～110がVI期にあたる。しかも、当住居はV期のSH13を切っていることから、IV期にはあたらない。

SH26はI期からV期にあたる時期の遺物が出土しており、 125の杯蓋のみがIV期にあたるものであるが、V期にあたる遺物も出土しており125はSH26の時期を表してはいない。

SH28はカマドのみが検出されたもので II期にあたる145の杯蓋、そしてIV期の146の杯身が検出されているが、検出面が他の住居より約45cm高い位置で検出されているため、明らかに新しい。

このような、検討を経た結果、IV期に当てはまる住居跡は調査区北東部で検出されたSH27と南部で検出されたSH05とSH11の3軒であることが明らかになった。ただし、これら3軒は同時に存在していない。SH05とSH11の間に切り合い関係が認められるためである。この場合、SH05がSH11を切っており、IV期のなかでも、SH05が新しく、SH11が古いという時期差が認められる。



第55図　V期の住居跡

V期

この時期の遺物が出土している住居跡はSH04・08・13・15・20・26の6軒が認められる。これらの住居跡のうち、IV期の住居跡と認められるものは、SH08・13・15・20・26の5軒である。SH04はV期の遺物を出土しているが以下の理由で、当時期のものとはしていない。

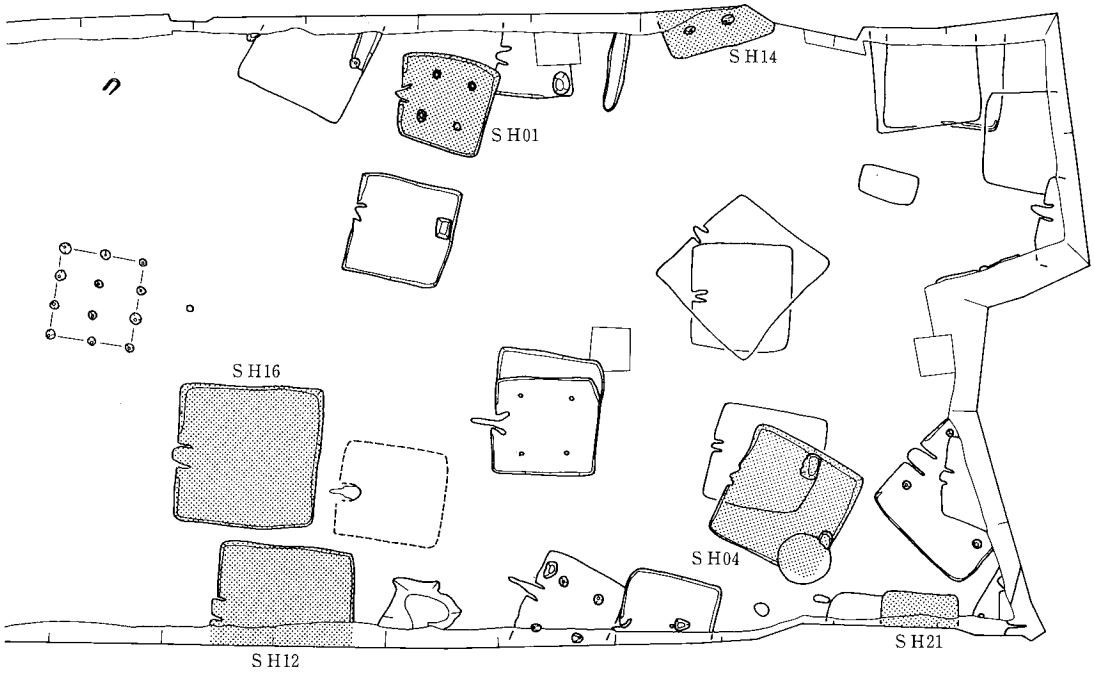
SH04はSH03と重複して検出され、これを切っている住居跡である。須恵器の杯身3点と杯蓋2点が出土している。29の杯身がV期のものであるが、26の杯蓋と28・30の杯身がVI期、27の杯蓋がIII期のものである。より新しい遺物の時期をとる。

V期とした住居跡は調査区内にかぎっていえば縁辺部で検出されており、比較的散らばっている。

SH20に切られているSH22は、遺物が出土していないため時期は明らかではない。しかし、SH27を切っており、SH27をIV期としていることから、SH22はIV期のSH27より新しく、V期のSH20よりは古い時期のものである。

SH26は多くの須恵器が出土しているが、時期にばらつきがみられる。古いものは132でI期のもの、新しいものでは、126・127・133などでV期のものがみられる。確認調査から出土したものも含まれており、SH27と重複していることもあるが、最も新しい遺物の時期をここではとっている。

SH13も切り合いのある住居跡である。SH21に切られている。SH13から出土した土器とSH21から出土したものを検討したところ、SH21のものはかなりの時期差がみられるが、そのうちの最も新しいものと較べて、SH13に若干古い様相を認めた。



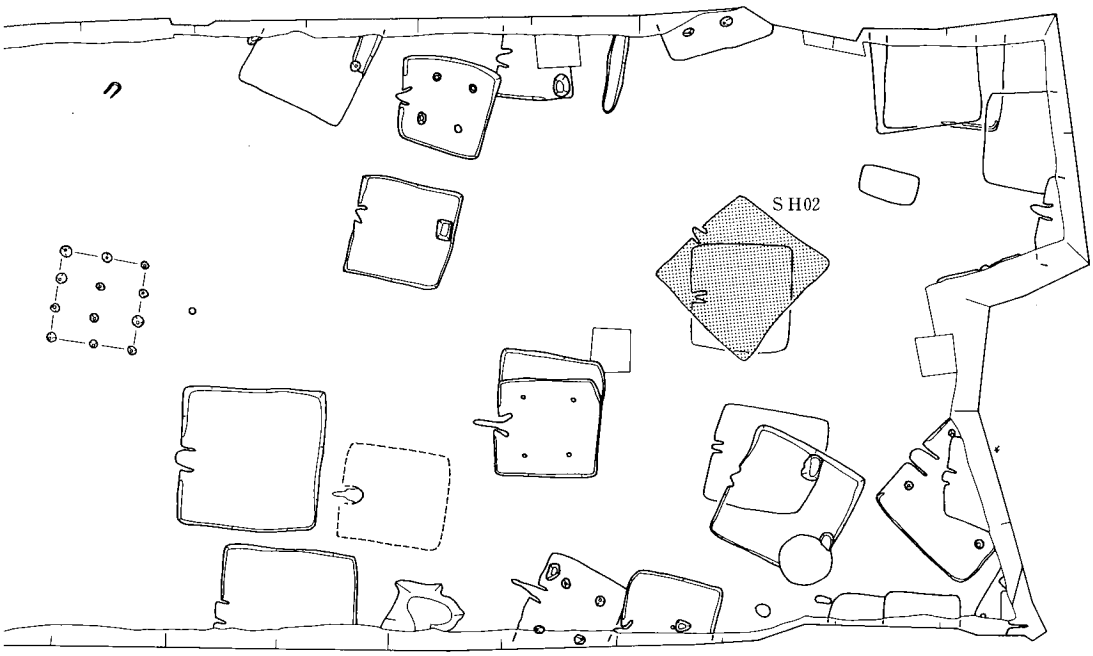
第56図　VI期の住居跡

VI期

この時期の遺物が出土している住居跡はSH01・02・04・12・14・16・21の7軒が認められる。これらの住居跡のうち、IV期の住居跡と認められるものは、SH02以外の6軒である。SH02から出土した遺物はVI期のものが大半であったが、1点だけVI期よりも新しい遺物が出土していたため、この時期のものとしていない。

この時期としている6軒の住居跡は、それぞれに切り合い関係は認められない。ただし、SH12の北東辺とSH16の南西辺は約1m程度しか離れていない。時期区分はVI期としているが、同時に存在していたことは考えられない。両者には時間差があると考えられる。SH16から出土している遺物は少なく、須恵器が2点のみである。91は杯身で、杯部が深いタイプのもので、SH12から出土している杯部の浅いタイプのものとは単純には比較できない。しかし、口縁部の立ち上がりが、SH12から出土したものよりも短く、内傾していることからこれらより新しい時期のものと考えている。したがって、SH12のほうが古く、SH16のほうが新しいものであろう。SH12は全体を検出していないが、両者には、規模、主軸の方向、カマドの形状などに共通点がみられる。おそらく、SH16はSH12を建て替えたものと思われる。この意味では両者は連続性をもっている。

他の住居跡はそれぞれ適度に離れて検出されているため、これらの存在の同時性を積極的に否定する要素は特に見られない。VI期は最大で5軒の住居が存在していた可能性がある。



第57図　Ⅶ期の住居跡

Ⅶ期以降

この時期になると住居跡は非常に少なくなり、1軒のみがみとめられるに過ぎない。

SH02がそれである。この住居跡をⅦ期にした理由を以下に述べる。

SH02は調査区の中央部やや東よりで検出した住居跡である。SH25と重複しており、これを切っている。遺物は比較的多く出土している。基準としている須恵器は杯身が3点、杯蓋が7点である。杯身は3点とも口縁部の立ち上がりが内傾して短く、Ⅵ期の特徴をもつものである。底部に施された回転ヘラケズリの範囲はいずれも狭く1/4以下である。杯蓋も9をのぞいてほぼ同じ時期のものである。天井部と口縁部の境界は不明瞭でわずかに凹線の痕跡を残すのみである。そのなかでは、5が若干古いものと思われる。このように、SH02から出土した須恵器の杯はほとんどのものがⅥ期の特徴をもっているものである。しかし、9の杯蓋の1点が他のものと違う特徴を有している。この土器はカマドの右側の床面上に5・7・10・11・12などの土器と一括で出土したものである。したがって、出土状況からは疑問な点は見いだせない。9は口径が小さく、それに比較して器高が高い。天井部と口縁部との境界はほとんど区別かつかず、一部でやや屈曲しているのみである。ヘラケズリは天井部の頂点にのみごく狭い範囲で施されているにすぎない。これらの特徴は、他の土器よりも明らか新しい様相を呈している。したがってSH07の時期としては、出土したもののなかで最も新しい時期の遺物を採用するため、これまでのⅥ期よりもさらに新しいⅦ期のものとしている。

西ケ原遺跡では、このSH02より新しい住居跡は検出されていない。しかし、検出面の標高を考慮すれば、SH28・29が最も高い位置にある。この両者は削平されておりカマドのみの検出であるが、その推定の床面は最も新しいとしているSH02よりもさらに20cm程度高く、これよりも新しい遺構であった可能性がある。A地区に営まれた古墳時代の集落は、美囊川右岸の自然堤防上に立地しており、調査区内での短期間の遺構の密集と重複は度重なる河川の氾濫を想定させる。

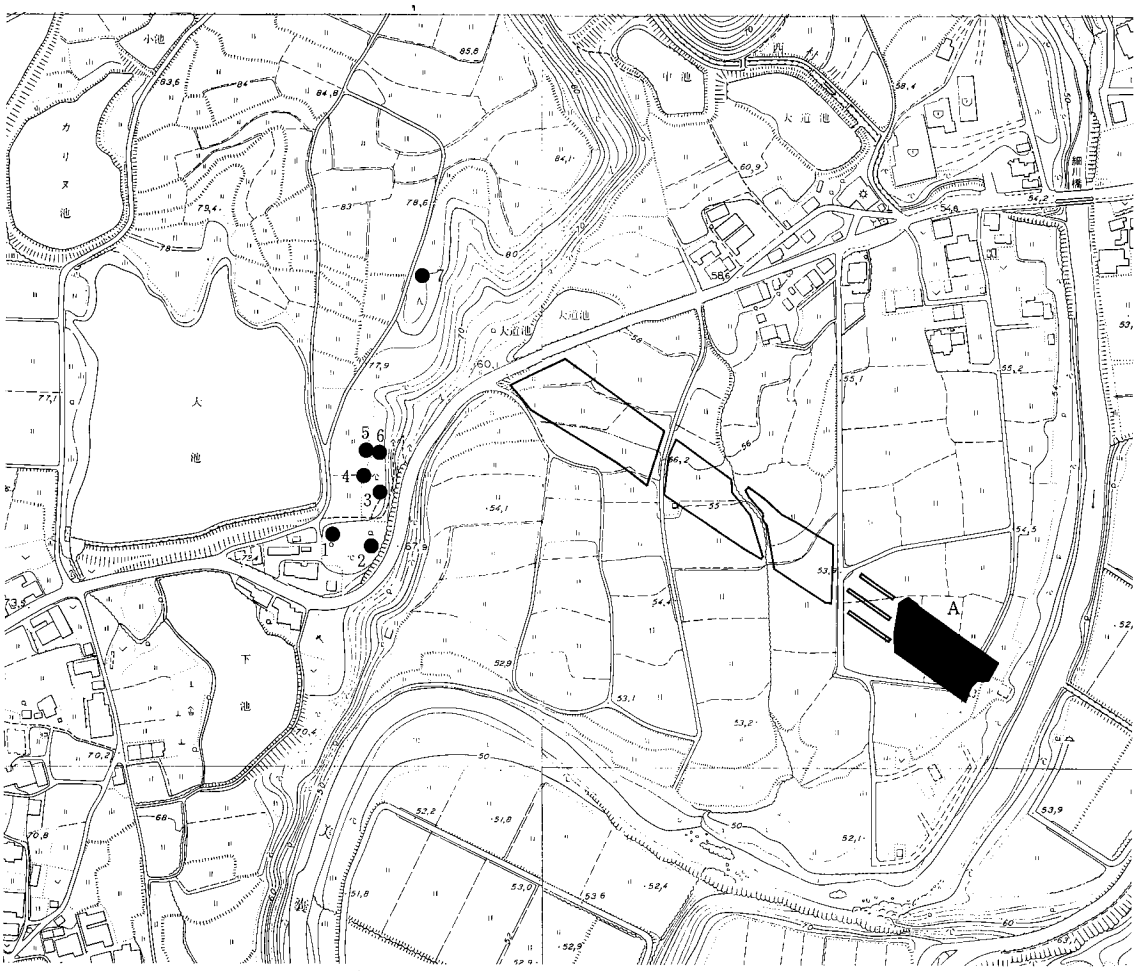
第4節　大池古墳群との関係について

西ケ原遺跡のA地区から北西方向に約450m離れた段丘上に位置するのが大池古墳群である。西ケ原遺跡から大池古墳群は見通しが効き、出土した土器から両者は同時期のものであると思われる。ここでは、平成4年度に発掘調査を実施した大池7号墳から出土した土器と3号墳から採集された土器を検討してみることとする。

1．位置

大池古墳群は、三木市久留美字田井野に所在する。現在の三木市街の中心部から北東方向に約2.5kmに位置している。北側の山並みからつづく段丘上の東側先端部に立地している。この古墳群は合計7つの円墳からなる古墳群で、古墳時代後半の時期に築造されたものと考えられている。標高は76～82mを測る。

東側の眼下には加古川の支流である美嚢川が形成した沖積地と、開析谷である毛谷から供給を受けた土砂で形成された扇状地形を見渡すことができる。古墳群の立地する段丘上の地区が久留美字田井野であり、段丘下の地区が久留美字西ケ原と細川町字細川西である。段丘下に位置する西ケ原遺跡との比高差は20～25mを測る。



第58図　西ケ原遺跡と大池古墳群の位置関係

2．概要

当初は7基の古墳群として認知されていたが、現状は水田開発に代表される後世の地形の改変によって壊滅的な破壊を受け、4号墳・5号墳・6号墳はすでに消滅し、正確な位置も明らかではない。

残された1号墳・3号墳・7号墳のうち1号墳は墳丘の大半が削平され、基底部のみが残存しているに過ぎない。古墳中央部にわずかに窪みが認められる。その形状から片袖の横穴式石室であったと考えられる。他の古墳は木棺直葬の形態をとるものと思われるため、この古墳群のなかでは唯一の横穴式石室墳である。この主体部と思われる窪みからは耳環が1点出土したと伝えられている。

3号墳は墳丘を墓地として利用しているために大規模な破壊を免れているが、中央部は溝状の削平を受けている。この削平部の断面から須恵器が出土しており八雲神社に保管されている。杯身が3点と杯蓋が3点である。遺物の出土状況から推測すると主体部は木棺直葬の形態をとるものと思われる。

7号墳は大池古墳群のなかでは最も北側に位置しており、やや離れて存在している。墳頂部に天明8年銘の供養塔が設置されていることもあり、保存状態は他のものと比べると良好である。ただし、北側は水田に、西側は農道に南側の一部は畑によって削平を受けており、円墳としての形状は損なわれている。7号墳は山陽自動車道建設に伴って平成4年度に兵庫県教育委員会が発掘調査を実施している。

調査の結果、直径16mの円墳で、下層で3主体部、上層で3主体部の合計6基主体部をもつ古墳であることが判明した。主体部の形態はいずれも木棺直葬である。出土した遺物は、すべての主体部から鉄鏃・刀・刀子などを主体とする鉄器が、第5主体部を除く5つの主体部からは、須恵器の蓋杯を主体とする土器が出土している。下層で検出した3つの主体部からはこの他に水晶の切子玉・ガラス小玉などが出土している。

3．出土土器

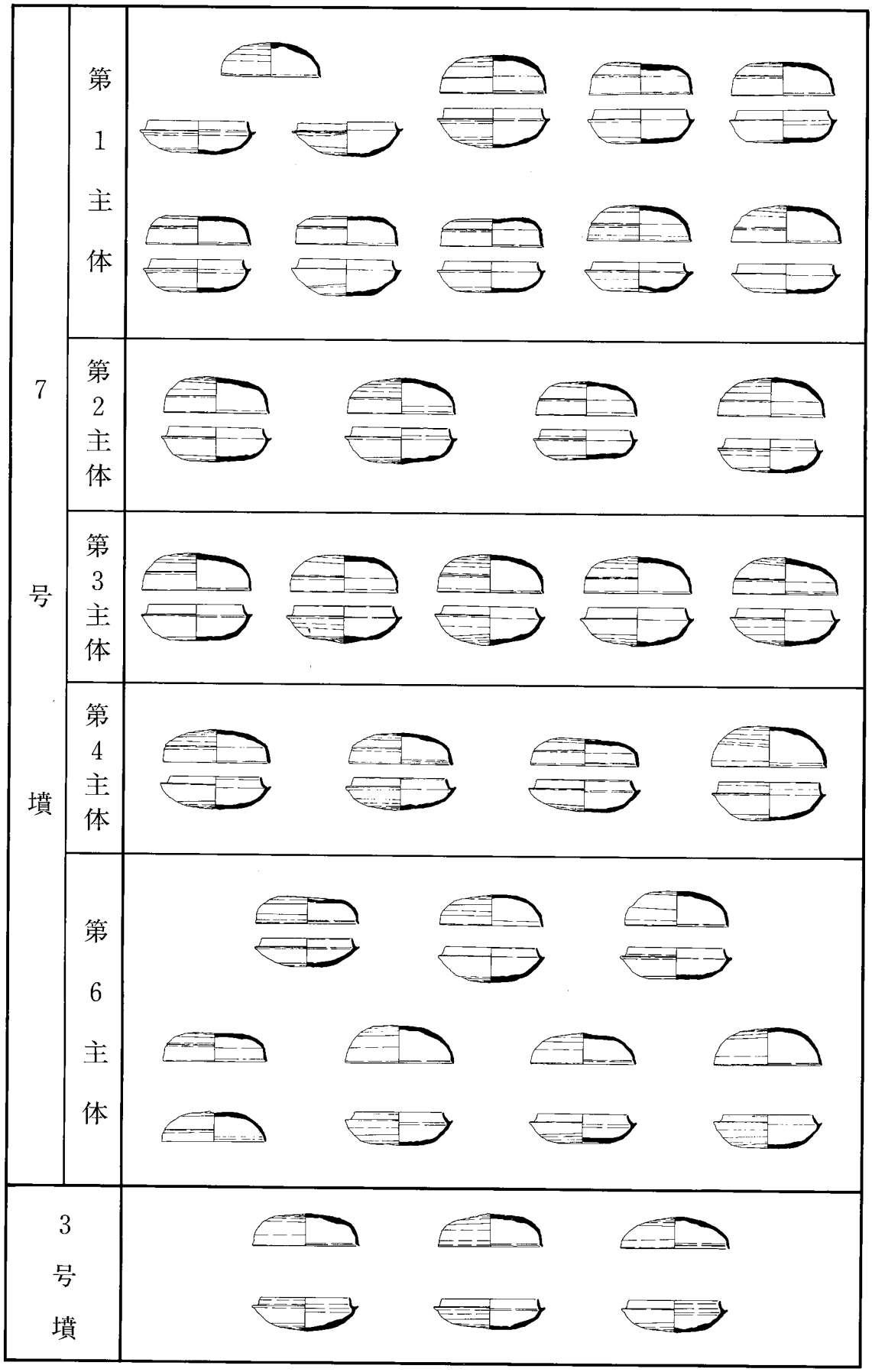
検討する土器は大池7号墳から発掘調査に際して出土した土器と、3号墳から採集されたとされる土器のうち須恵器の杯身と杯蓋にかぎって行う。

〔7号墳出土土器〕

6つの主体部をもつ古墳であるが、5主体から土器が出土している。第1～3主体部と命名したものは下層で検出したものであり、第4～5主体部と命名したものは上層で検出したものである。

〔第1主体部出土の土器〕

23点の土器が出土している。内訳は須恵器の杯身が10点、杯蓋が9点、壺1点、有蓋壺1組、土師器の杯1点である。出土した位置は1～3が棺外西側木口から出土したもので、それ以外のものは、棺外東側木口からまとまって出土している。須恵器の杯身と杯蓋のうち、1～3、16～19以外の12点は6つのセット関係で出土している。杯身は、口縁部が内傾してたちあがり、口縁端部の処理で内面に面あるいは段をもつものは1点もなく、すべてのものが丸くおさめている。杯部は4・13のものがやや深いが、他のものは全体に浅い。杯蓋については、口縁端部を丸くおさめているものはみられない。すべてのものが内面に面をもっている。天井部と口縁部との境界は凹線を巡らしているが、1のものは、ほとんど退化しておりかろうじて痕跡をとどめるにすぎない。逆に12・14はかなり明瞭に凹線が観察される。時期としては古いものではⅢ期のものが、新しいものではⅤ期のものが出土している。



第59図　大池古墳群出土土器（杯身・杯蓋）

〔第2主体部出土の土器〕

9点の土器が出土している。内訳は須恵器の杯身が4点、杯蓋が4点、土師器の杯1点である。出土した位置はすべてのものが棺外東側木口からまとまって出土している。須恵器の杯身と杯蓋のうち30と31を除いた6点は24と25、26と27、28と29の3組がセット関係で出土している。杯身は、口縁部が内傾してたちあがり、口縁端部の処理で内面に面あるいは段をもつものは1点もなく、すべてのものが丸くおさめている。杯部は4・13のものがやや深いが、他のものは全体に浅い。杯蓋は、口縁端部を丸くおさめているものは見当たらず、すべてのものが内面に段をもつか、内傾して面をもっている。ただし、28のものは丸くおさめる方向にある。天井部と口縁部の境界は凹線で区分しているが、その程度は弱い。30は境界をごく弱いながら稜線で区分している。天井部の回転ヘラケズリの範囲も他のものよりも広範囲である。時期としては古いものではIII期のものが、新しいものではIV期のものが出土している。

〔第3主体部出土の土器〕

11点の土器が出土している。内訳は須恵器の杯身が5点、杯蓋が5点、壺が1点である。出土した位置は杯身と杯蓋が棺外棺側東部から、壺が棺外東木口から出土している。杯身と杯蓋はすべて5組のセット関係で出土している。杯身は口縁部が内傾して立ち上がり、口縁端部の処理で内面に面あるいは段をもつものはなく、5点とも丸くおさめている。杯部の深さは比較的そろっており、深いものが多い。杯蓋は口縁端部をまるくおさめるものはみられず、5点とも段をもっているものである。天井部と口縁部の境界は弱い凹線で区分している。時期としてはIV期からV期にかけてのものである。

〔第4主体部出土の土器〕

10点の土器が出土している。内訳は須恵器の杯身が4点、杯蓋が4点、壺が1点、高杯が1点である。出土した位置は棺外東木口から出土している。杯身と杯蓋のうち3組がセット関係で出土している。杯身は内傾した口縁部をもつが、51以外は下層出土の主体部のものと較べると内傾の度合いが急になり、立ち上がりも短い。杯蓋は、50は天井部と口縁部との境界が不明瞭なもので、他の3点はかろうじて凹線で区分する。口縁端部内面は段が不明瞭である。時期としてはV期からVI期のものであろう。

〔第6主体部出土の土器〕

確認調査を含めて16点の土器が出土している。内訳は須恵器の杯身が6点、杯蓋が8点、提瓶が1点、壺が1点である。土器はすべて棺外東木口から出土している。杯身は口縁部の内傾の度合いが下層の主体部のものより急で短く立ち上がる。杯蓋は天井部と口縁部の境界が不明瞭で61のものだけが凹線を巡らせている。口縁端部は丸くおさめる傾向にある。時期としては、V期からVI期のものであろう。

〔3号墳出土の土器〕

須恵器の杯身が3点、杯蓋が3点採集されている。杯身は内傾して短く立ち上がる口縁部をもち、口縁端部は丸くおさめる。杯蓋は天井部と口縁部の境界が不明瞭なタイプのものであるが、口縁端部はいずれも段をもつものである。時期としてはV期からVI期にかけてのものであろう。

4．関連性について

出土した遺物の検討の結果、西ケ原遺跡の古墳時代の集落と大池古墳群は時期的に重なっていることが明らかとなった。周辺の久留美地区ではほ場整備に伴って発掘調査が行われているが、いまのところ西ケ原遺跡のような大規模な集落は確認されていない。両者が東に美嚢川、西にカリ又池、大池、下池とつらなる谷筋にはさまれた狭い範囲にあり、両者は互いに眺望が効くことなどから、現時点では西ケ原遺跡は大池古墳群を築造した母集落であると考えている。

第5節　調査の成果

平成2年度に発掘調査を実施した西ケ原遺跡について、明らかとなった点は以下のことである。

1．西ケ原遺跡は加古川の支流である美囊川の右岸に展開する集落遺跡である。遺跡は美囊川の氾濫によって形成された、自然堤防とその西側の土石流タイプの扇状地上に立地している。

2．自然堤防上には、古墳時代の集落が営まれており、カマドをもつ方形の竪穴住居31軒、掘建柱建物跡1棟などを検出した。これらの住居跡は、6世紀前半から7世紀前半にかけての概ね1世紀の期間のものと考えられる。

3．土石流タイプの扇状地上にはその末端で竪穴住居跡がを主体とする集落が営まれている。住居跡の形態は掘建柱建物跡が1棟、方形の竪穴住居跡が4軒、円形の竪穴住居跡が1軒である。竪穴住居跡の時期は弥生時代後期末のものである。

4．扇状地は西側にしたがって、遺構の密度は減少する。原因としては後世の水田開発等に伴う土地の改変と、開析谷である毛谷からの大量の土石流による削平の影響と考えられる。

5．自然堤防上に営まれた古墳時代の集落は、その西側の段丘上に立地している7基からなる、大池古墳群とほぼ同時期の集落である。両者はお互いに眺望が効き、現在明らかになっている最も近い古墳と集落である。これらのことから、西ケ原遺跡は大池古墳群を築造した母集落であったと考えられる。

西ケ原遺跡出土の木製品の樹種について

京都大学木質科学研究所教授　伊東隆夫
兵庫県教育委員会
埋蔵文化財調査事務所　藤田　淳

三木市に所在する西ケ原遺跡は加古川の支流である美嚢川右岸の自然堤防から扇状地上に広がる弥生時代後期から古墳時代にかけての集落遺跡である。遺跡内からはC地区の弥生時代後期末の竪穴住居跡であるＳＨ38内の土坑から木製品が出土している。木製品は長さ100cm、幅38cm、厚さ２cmで材を刳り抜いて縦に半裁したような形状を呈している。製品としての性格は不明であるが、この木製品上には高杯・鉢・甕が置かれた状態で出土している。(写真図版38参照)

樹種同定の方法は、一般に用いられている方法にしたがった。すなわち、安全カミソリで三断面（木口面、柾目面、板目面）の顕微鏡用切片を切り出し、剝片をスライドガラスに載せ、ガムクロラールで封入してプレパラートを作成した。作成したプレパラートを顕微鏡で観察し、できる限りもとの形を損なわないように心がけた。なお、以下に樹種同定の根拠を簡単に述べる。樹種の分類ならびに学名の記述は北村四郎・村田　源の原色日本植物図鑑，木本編（Ｉ・II）[1]によった。

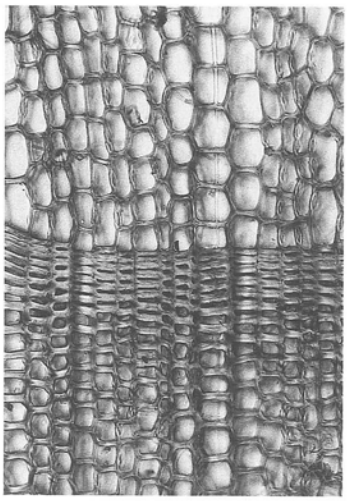
観察の結果、樹種はコウヤマキであると判明した。

樹種同定の拠点

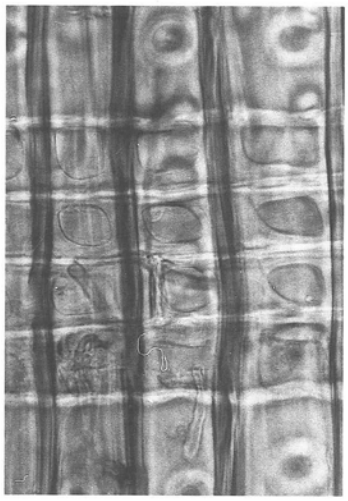
コウヤマキ（*Sciadopitys verticillata* S. et Z.）：垂直および水平樹脂道、放射仮道管ならびに樹脂細胞を欠く。分野壁孔はやや小型の窓状壁孔。

参考文献

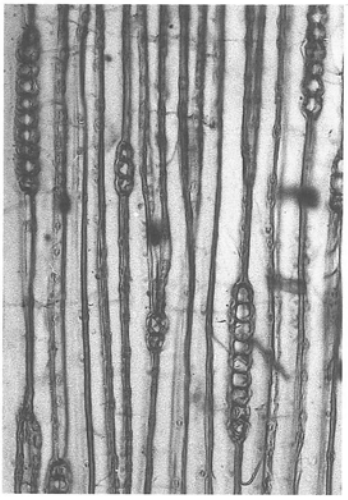
1）北村四郎・村田　源：原色日本植物図鑑，木本編（Ｉ・II）　保育社　1971



1．コウヤマキ（木口）×100



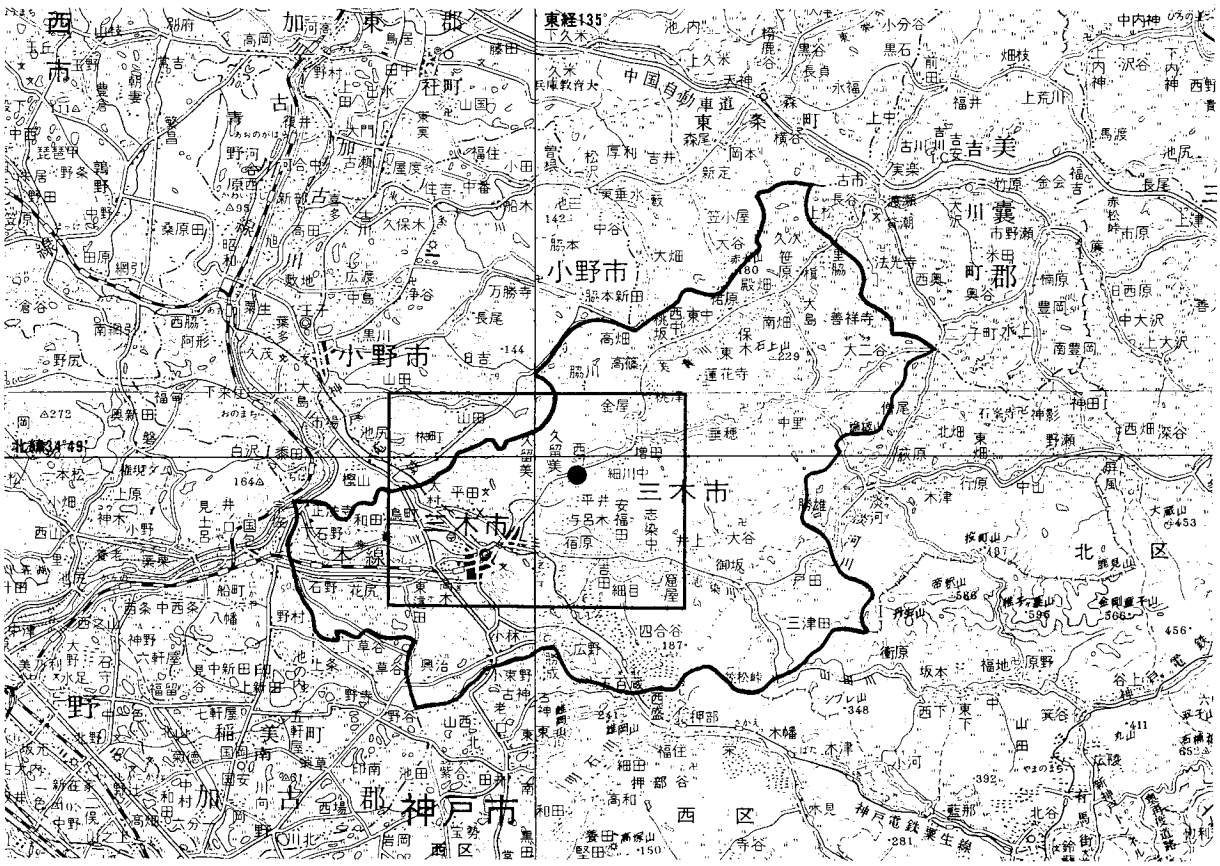
2．コウヤマキ（柾目）×400



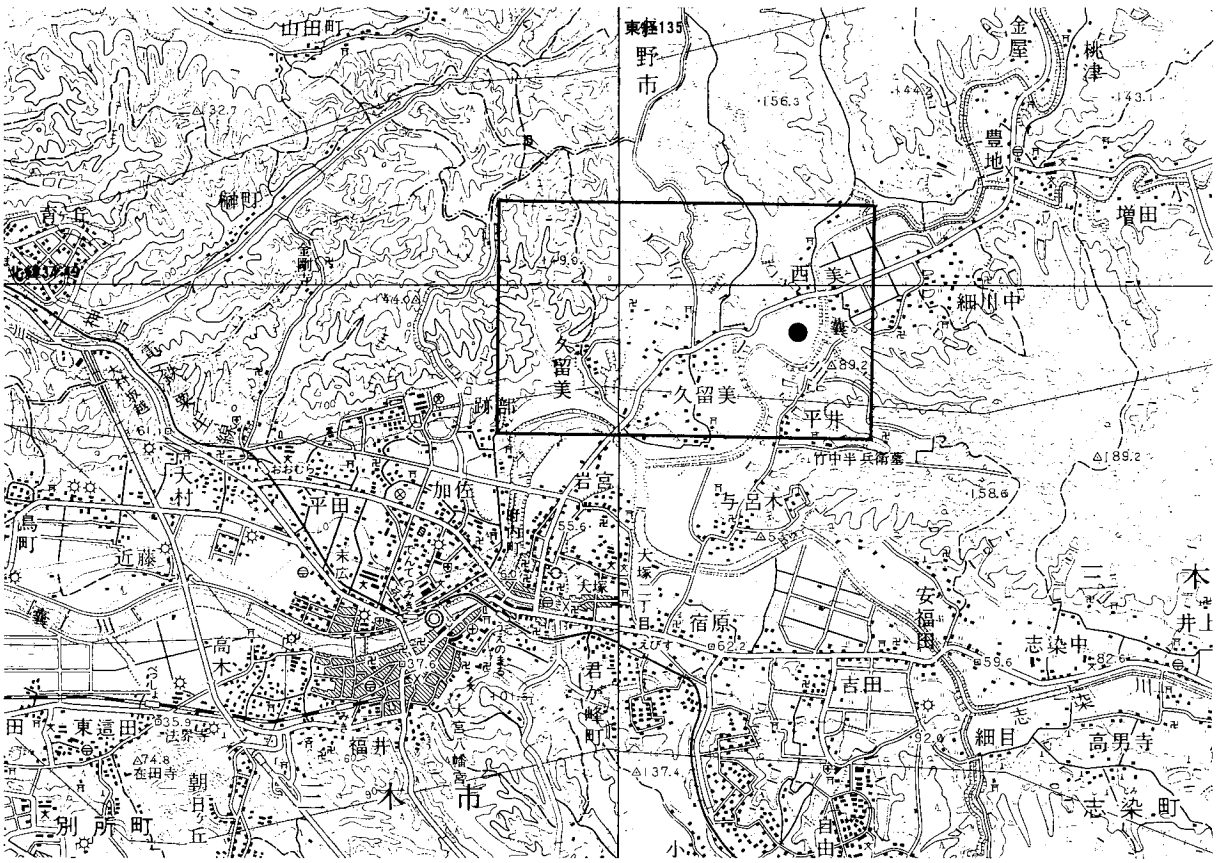
3．コウヤマキ（板目）×100

図　　版

図版 1



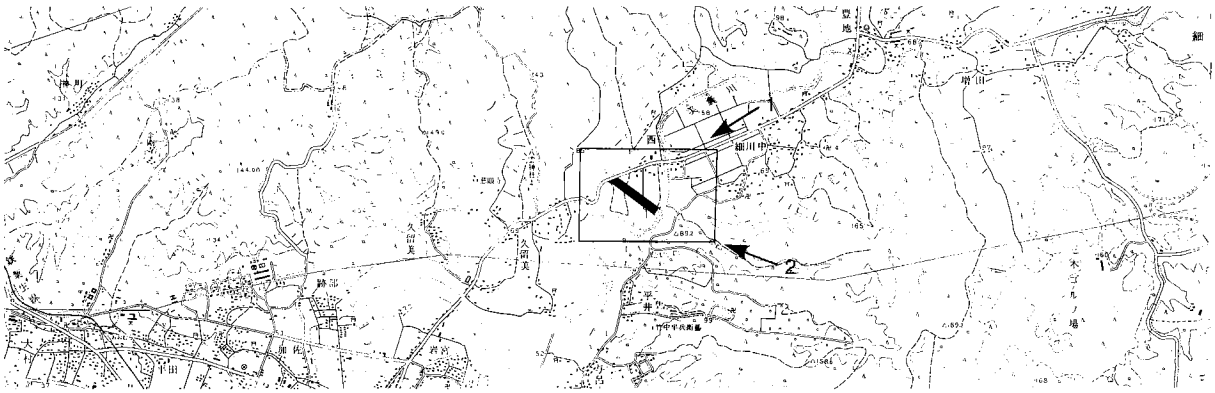
1/200,000

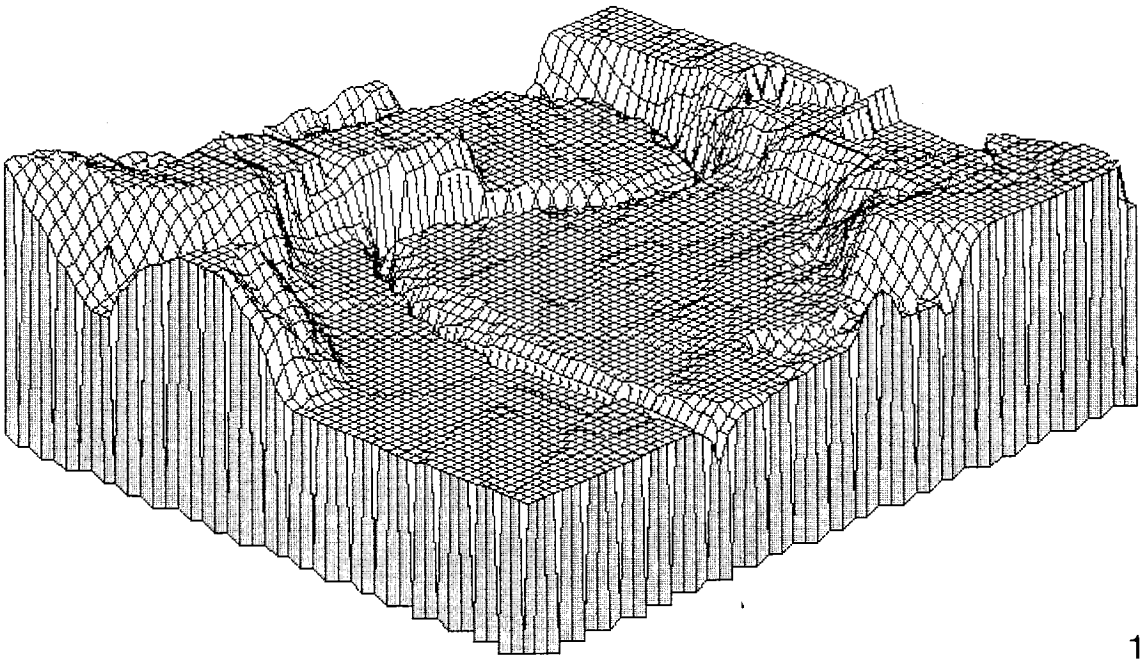


遺跡の位置

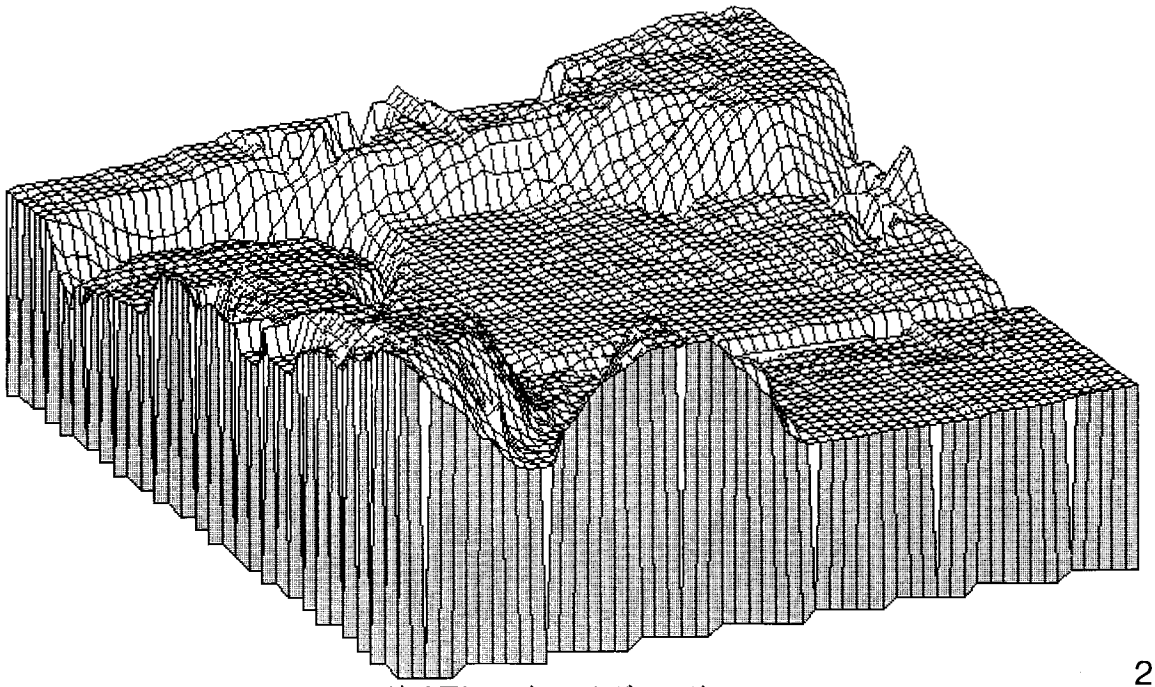
1/50,000

図版 2



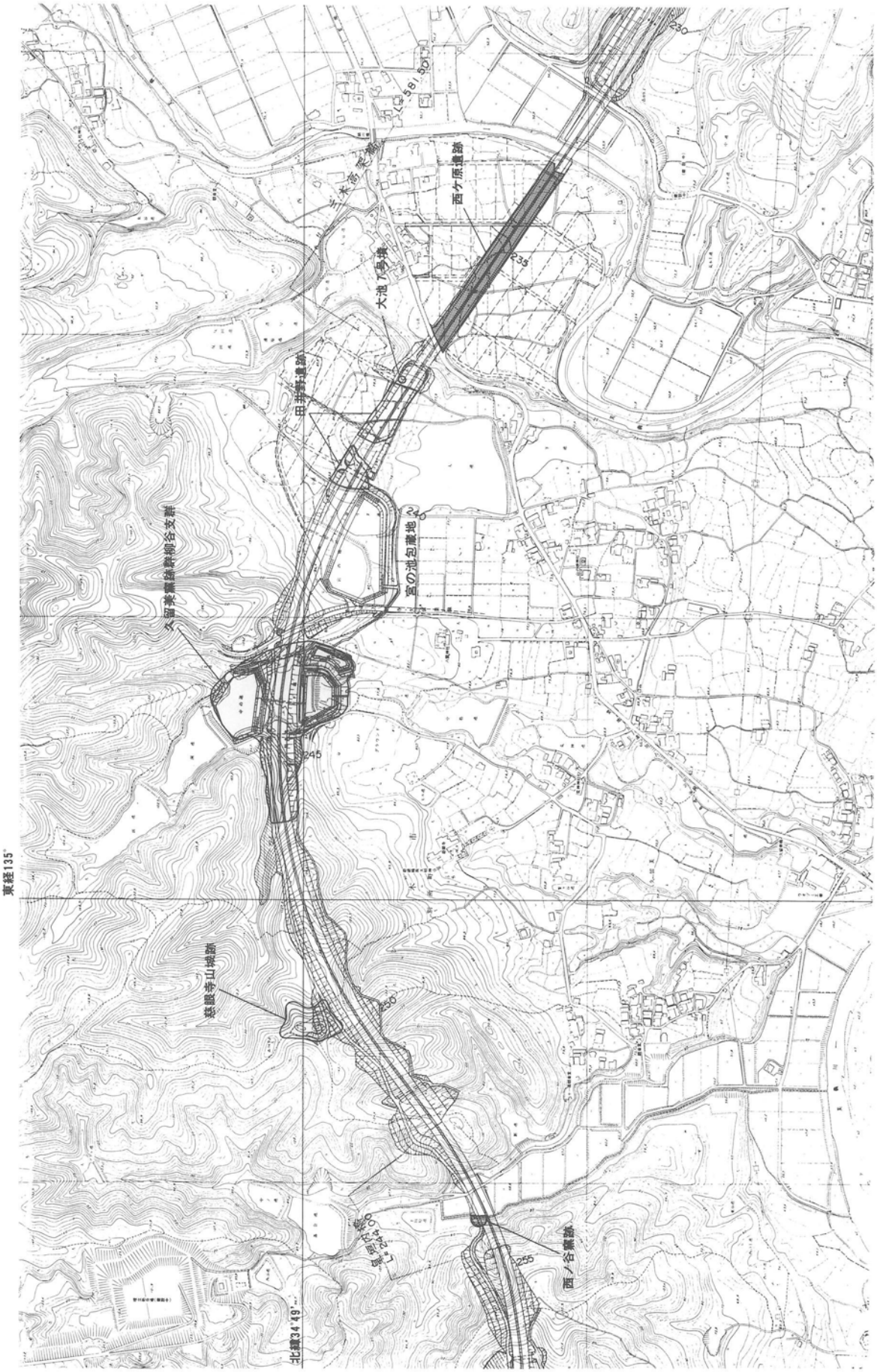


1



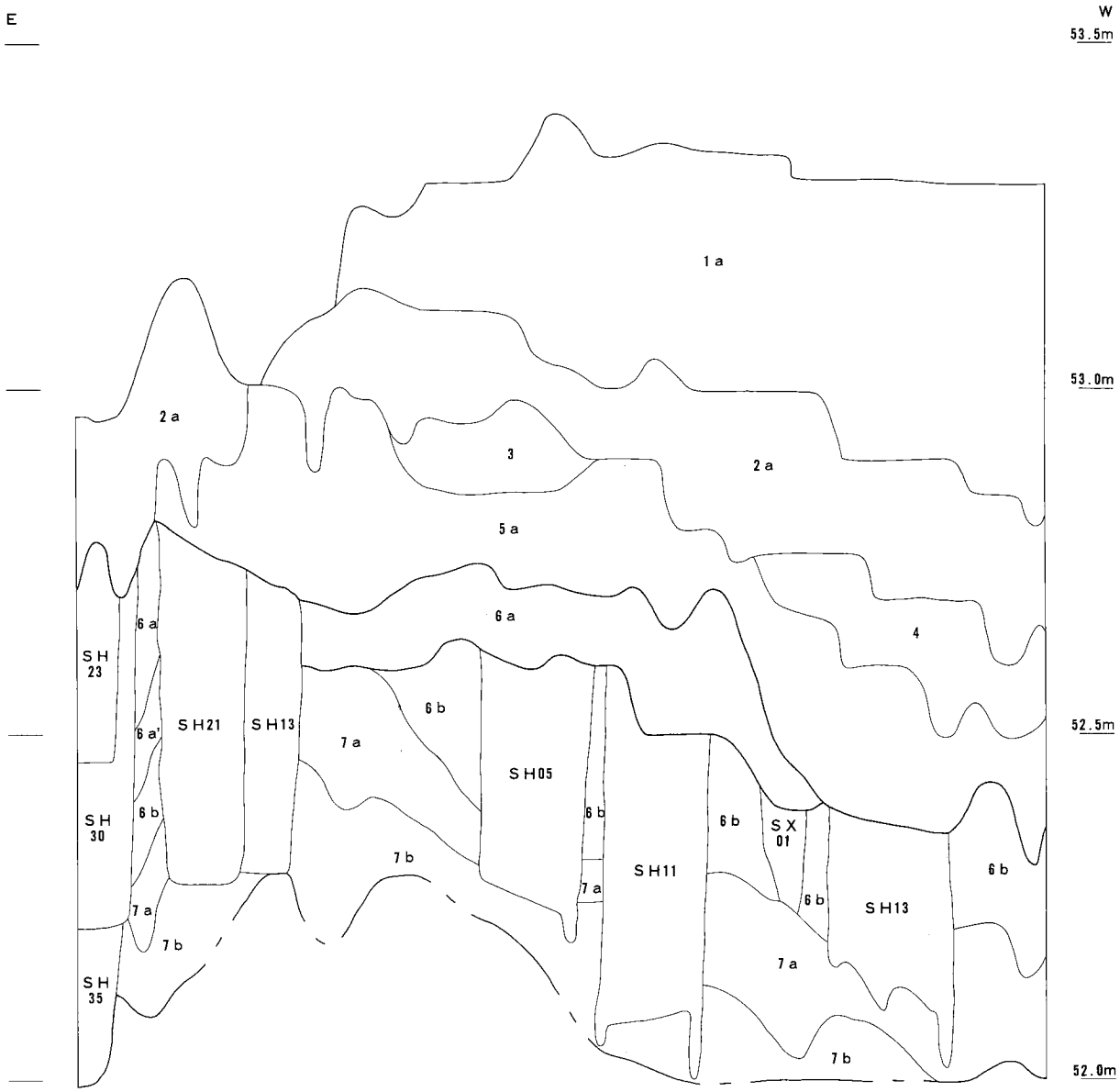
2

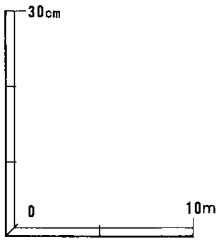
遺跡周辺のブロックダイヤグラム



西ケ原遺跡周辺の山陽自動車道関連の遺跡（1/10,000）

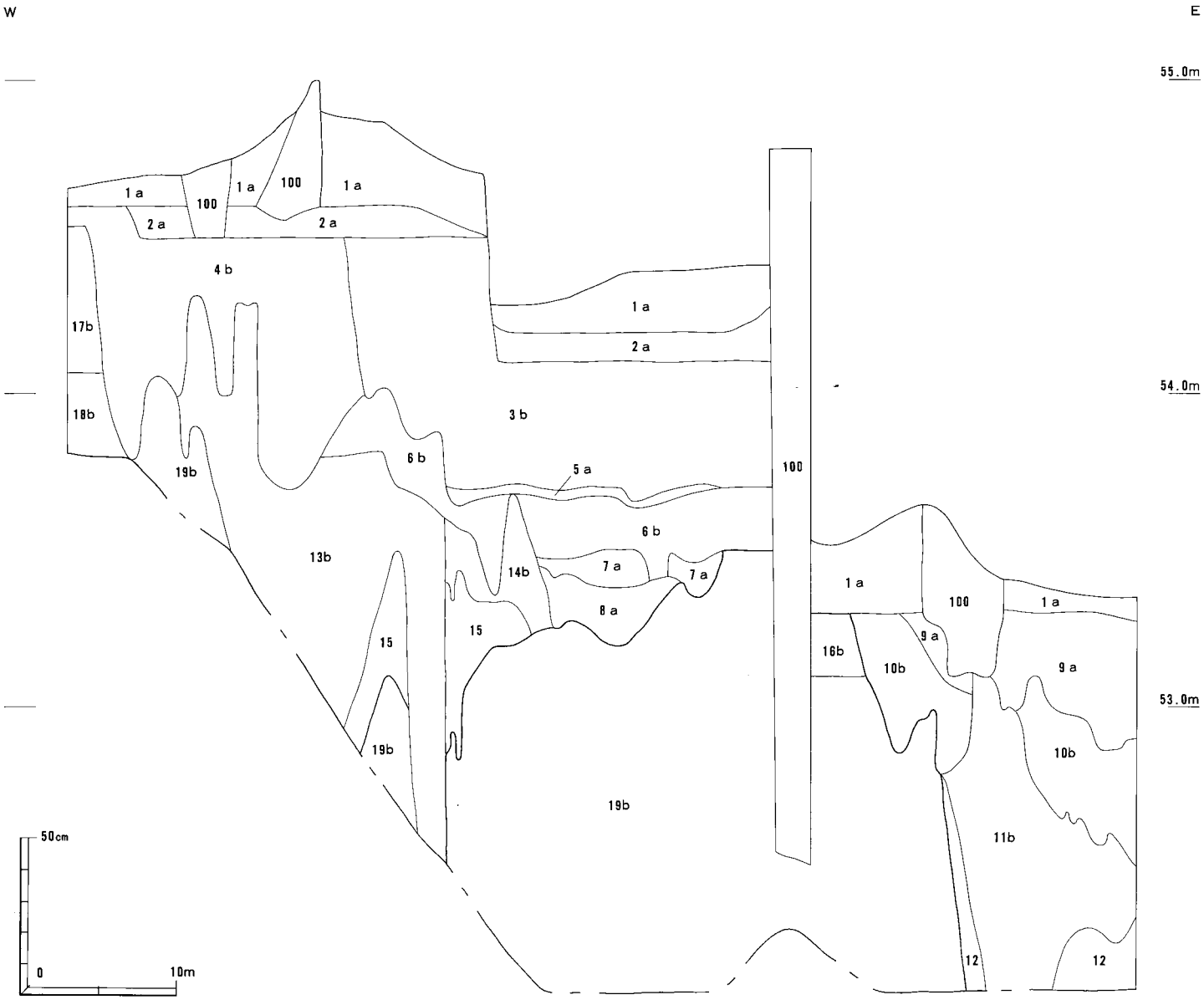
図版 4





1a　耕作土＋旧耕土
2a　灰白色　シルト質極細砂
3　灰白色　シルト質極細砂
4　灰黄色　シルト質極細砂
5a　褐色　極細砂（Mn・土器）
6a　褐色　極細砂（西方向　シルト質極細砂→極細砂質シルト）
6a'　灰黄色　シルト質極細砂
6b　灰黄色　シルト質極細砂
7a　灰白　極細砂質シルト（西方向　シルトが強くなる）
7b　灰黄色　極細砂（西方向　シルトが強くなる）

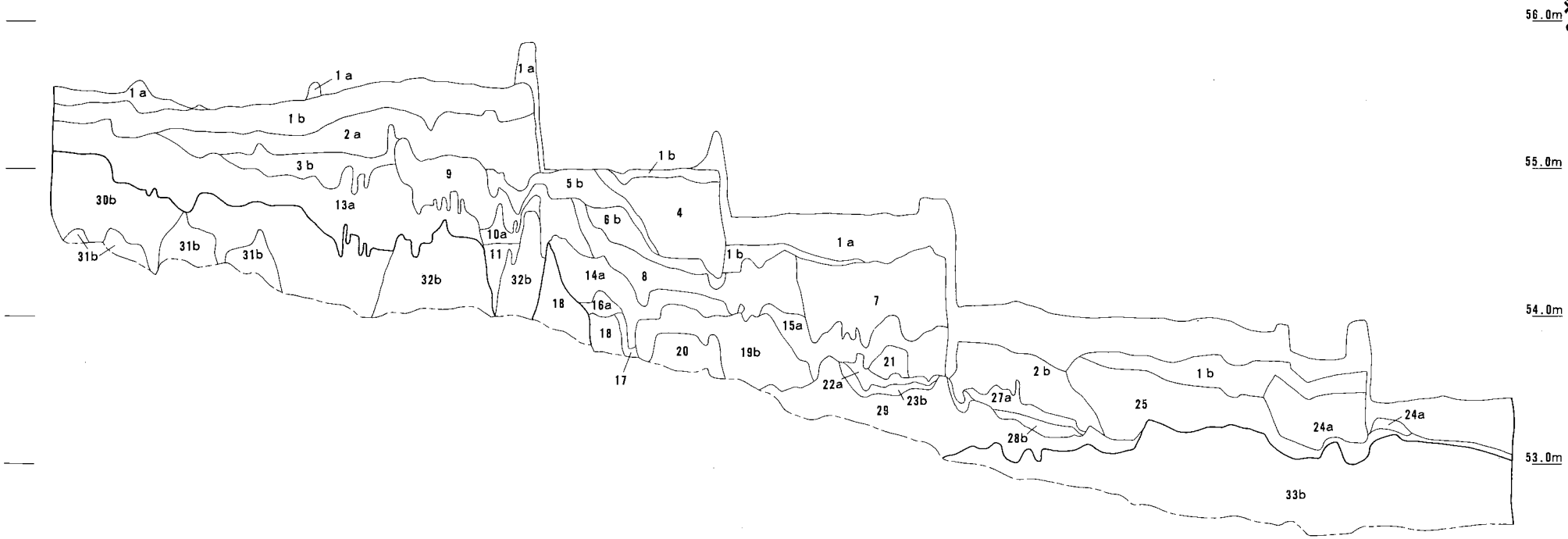
A地区基本層序（南壁）

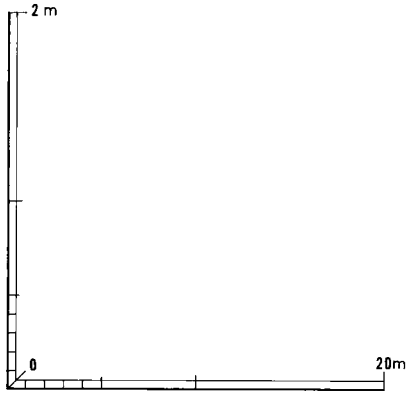


C地区基本層序（北壁）

1a　耕作土
2a　黄褐色　シルト質極細砂
3b　暗茶灰色　礫混じり粗砂～細砂
4b　灰白色　礫
5a　淡黒灰色　極細砂質シルト
6b　灰白色　小礫混じりシルト質極細砂
7a　灰白色　極細砂
8a　黒色　極細砂質シルト（土器包含）
9a　灰色　細砂～シルト質細砂
10b　黒灰色　礫
11b　礫層
12　黒色シルト質粘土
13b　礫層
14b　白黄色礫混じり細砂（東→粒子細かい）
15　黒色　砂質シルト～シルト質粘土
16b　灰色　細砂～極細砂
17b　淡褐色　極細砂
18b　淡褐灰色　粗砂～細砂
19b　青灰色　シルト
100　撹乱・畦畔

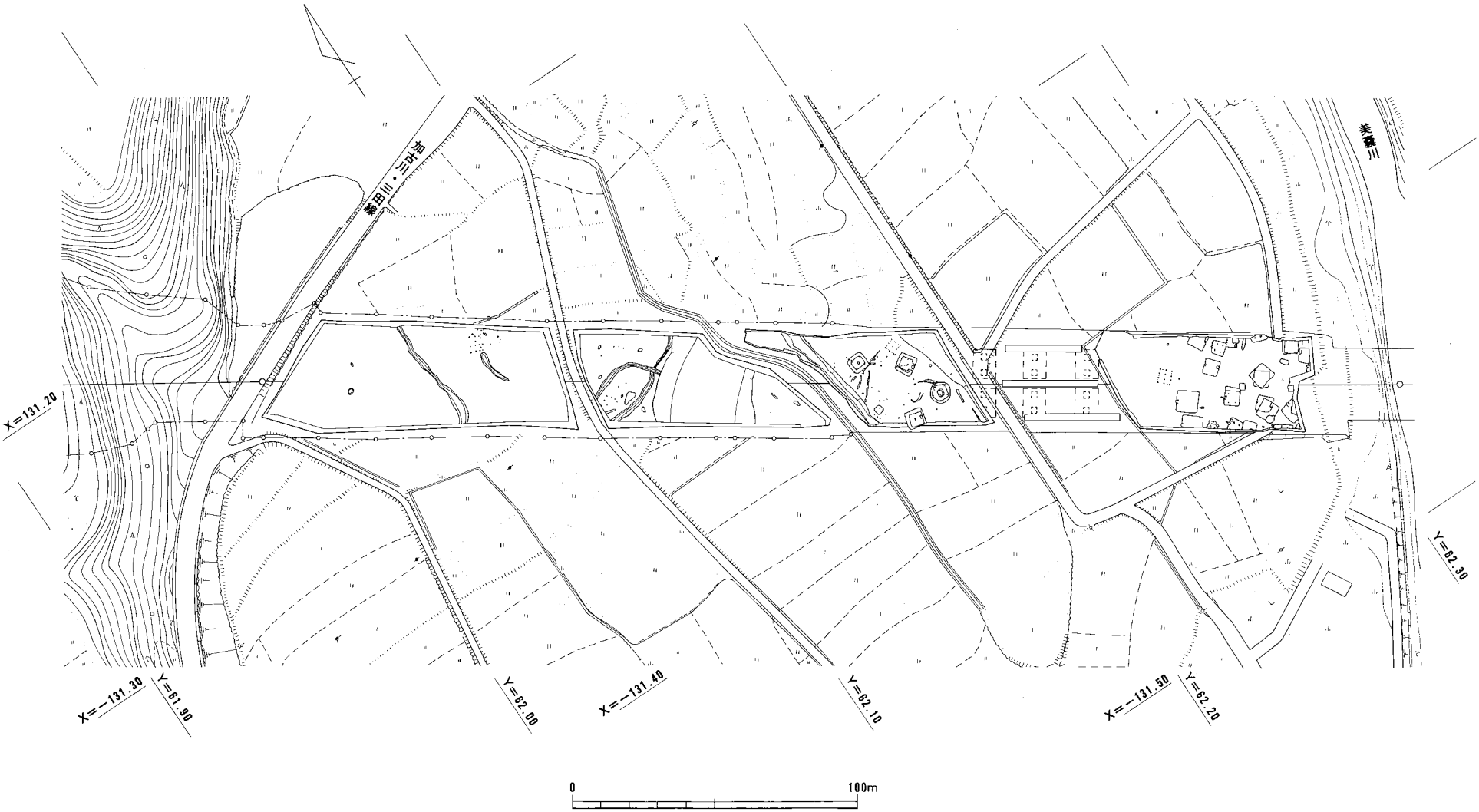
図版5





1a　耕作土
1b　褐灰色　シルト質極細砂（床土）
3b　灰白色　粗砂→大礫
4　礫層
5b　灰色　中砂
6b　褐灰色　細砂～粗砂
7　礫層
8　礫層
9　礫層
10a　黒灰色　シルト質細砂
11　礫層
12　礫層
13a　褐灰色　シルト質細砂＋礫
14a　黒灰色　細砂質シルト（土器混入）
15a　暗灰色　極細砂
16a　暗灰色　細砂～極細砂
17　礫層
18　粗砂～礫
19b　灰色　中砂～粗砂
20　礫層
21　礫層
22a　暗灰色　シルト質極細砂
23b　灰色　細砂～中砂
24a　黒灰色　シルト質極細砂
25　礫層
26　礫層
27a　黒灰色　シルト質極細砂
28b　青灰色　中砂～粗砂
29　粗砂～礫
30b　黄褐色　シルト質細砂＋礫
31b　黄褐色　シルト質極細砂
32b　青灰色　シルト質細砂
33b　黄灰色　シルト質細砂

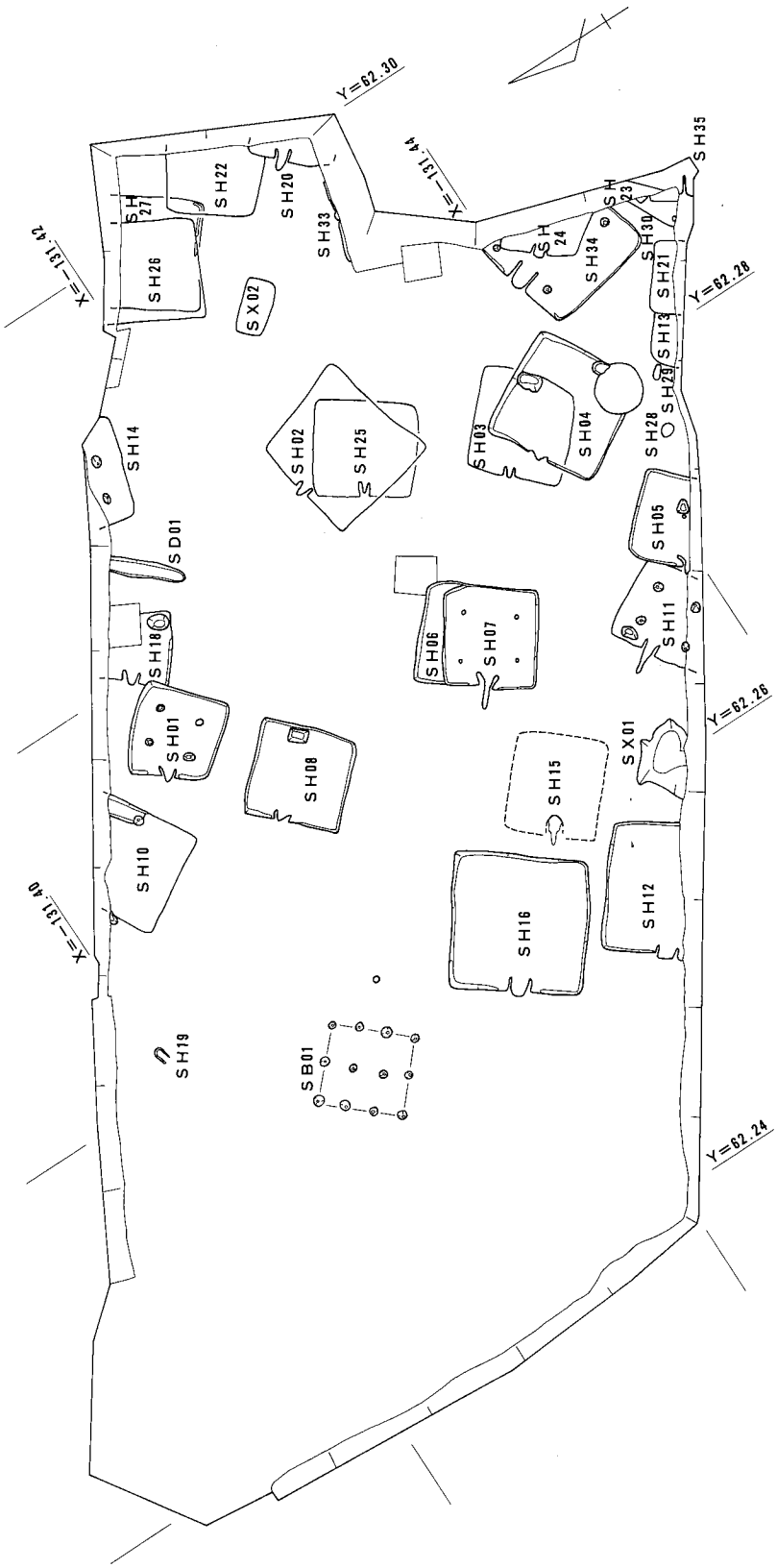
D地区基本層序（北～東壁）



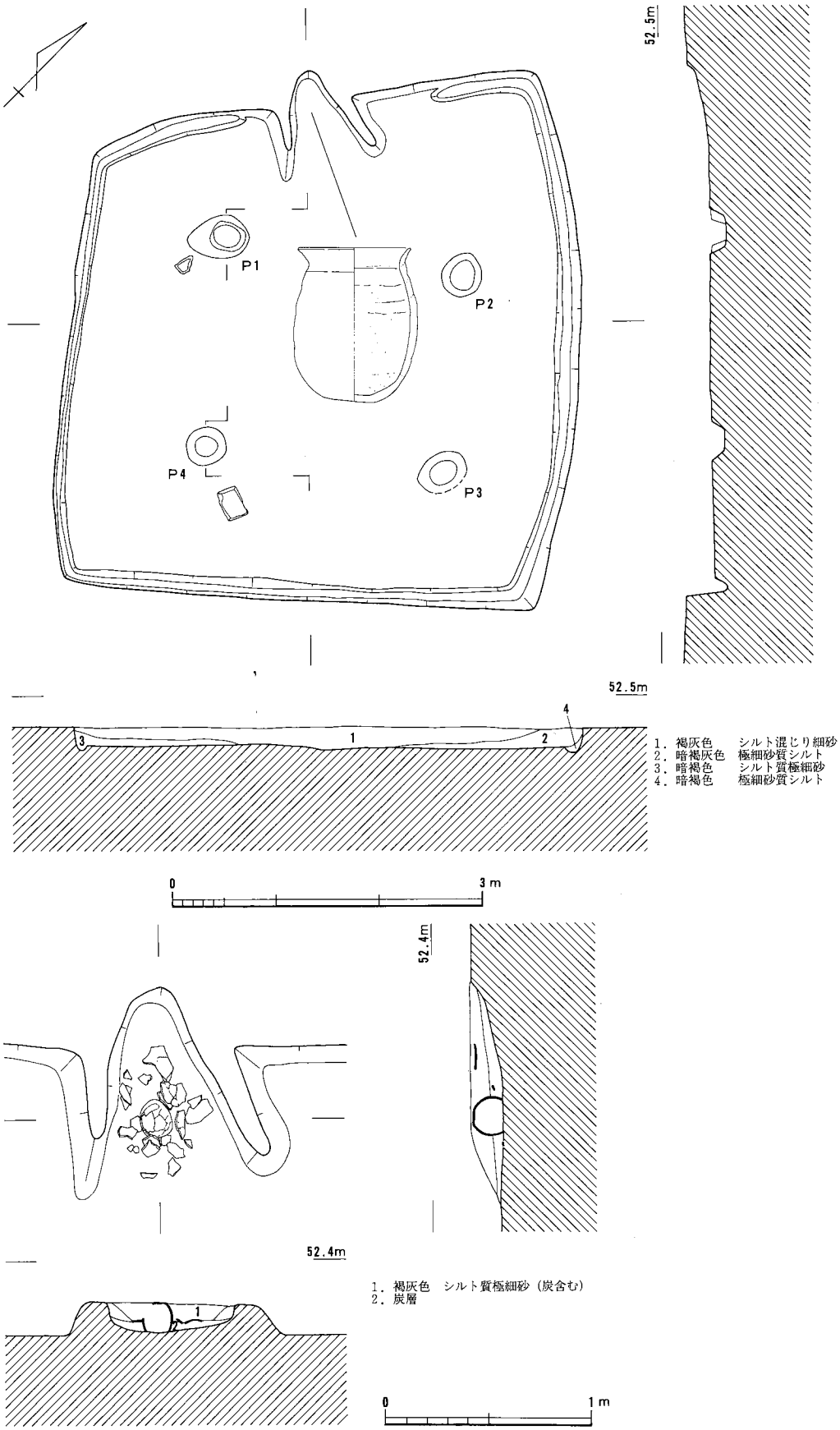
西ケ原遺跡構全体図（1/2,000）

図版 7

図版 8

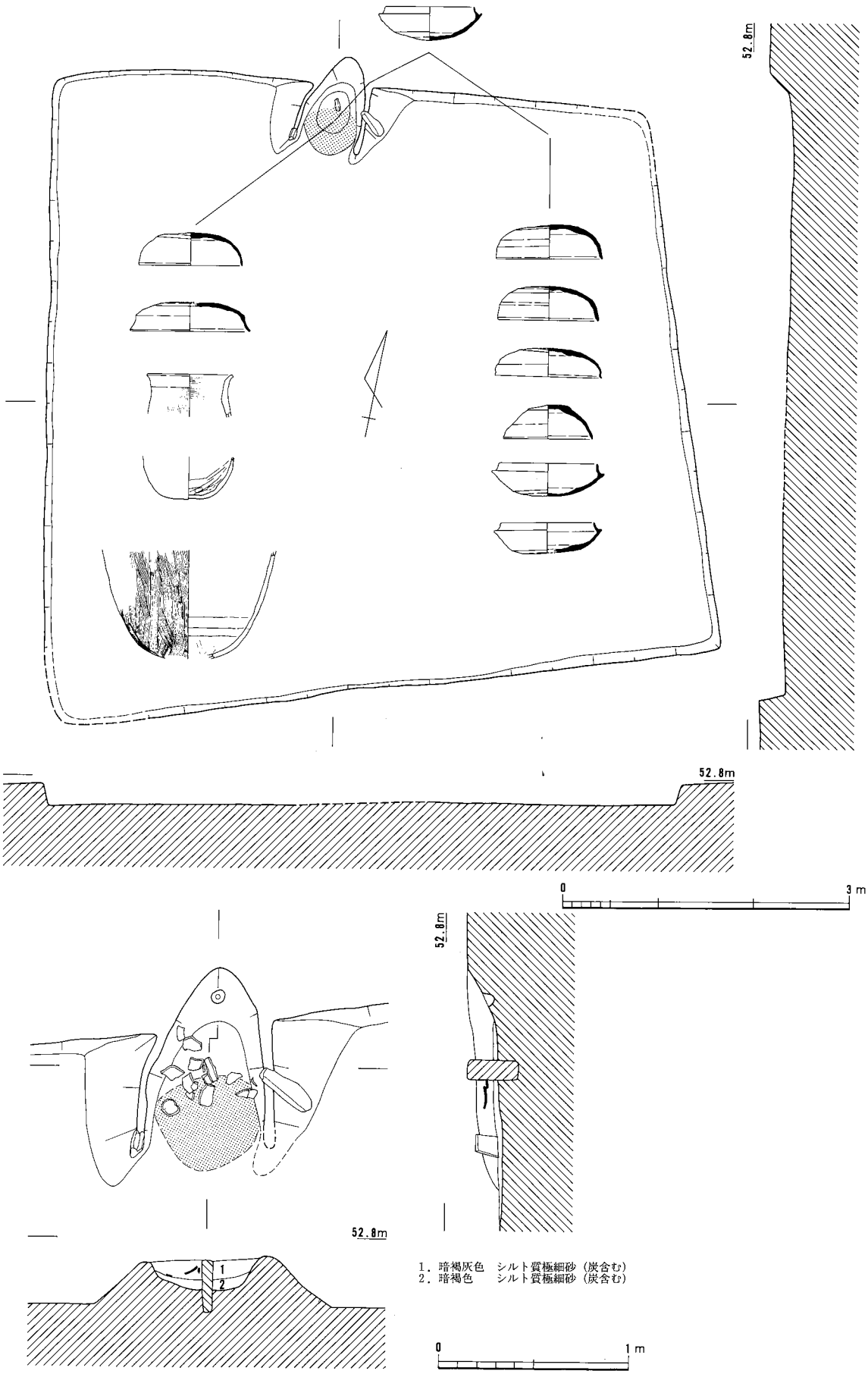


A地区全体図（1/400）

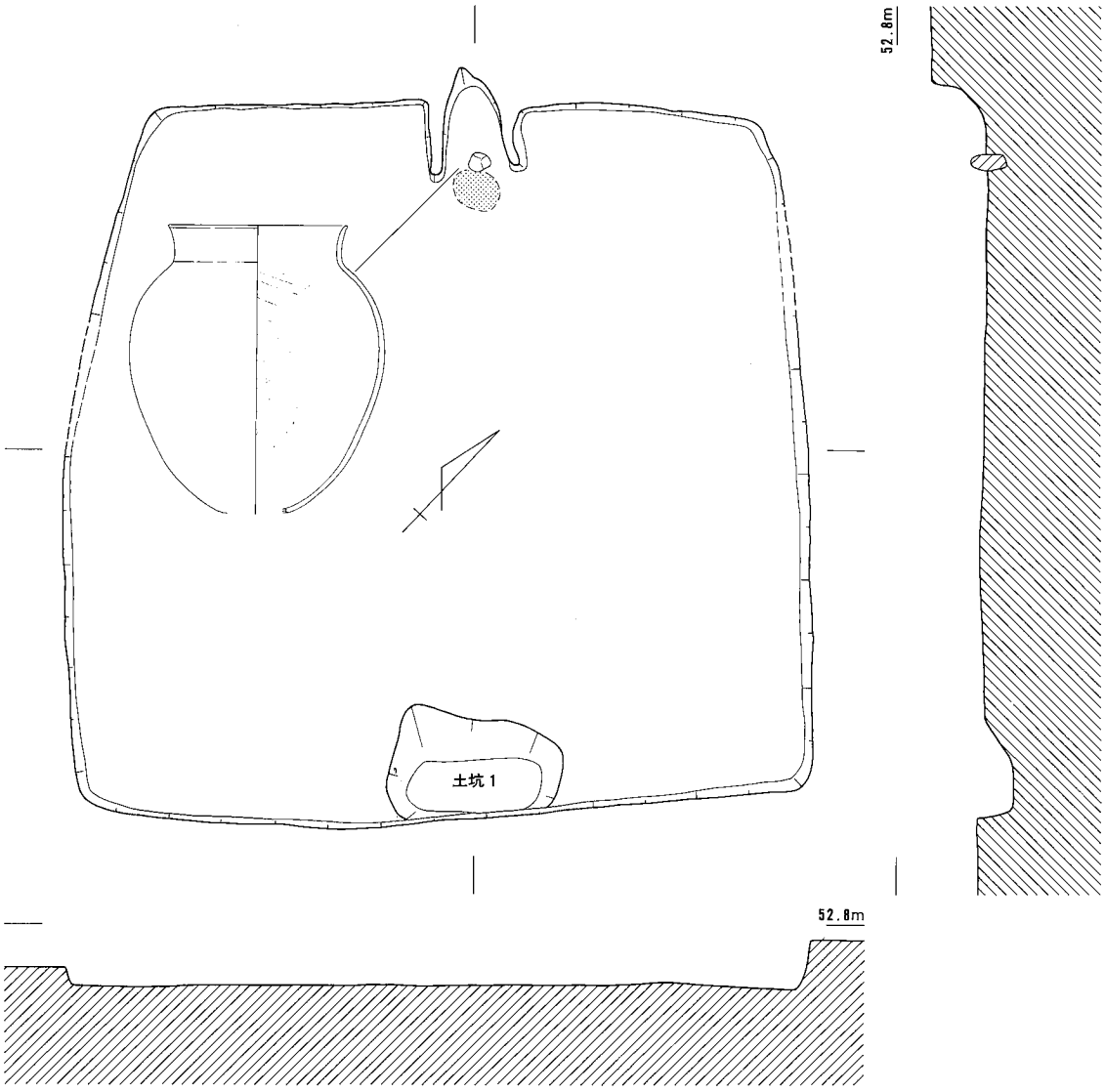

52.5m
P1
P2
P3
P4
52.5m
1. 褐灰色　シルト混じり細砂
2. 暗褐灰色　極細砂質シルト
3. 暗褐色　シルト質極細砂
4. 暗褐色　極細砂質シルト
0
3 m
52.4m
52.4m
1. 褐灰色　シルト質極細砂（炭含む）
2. 炭層
0
1 m

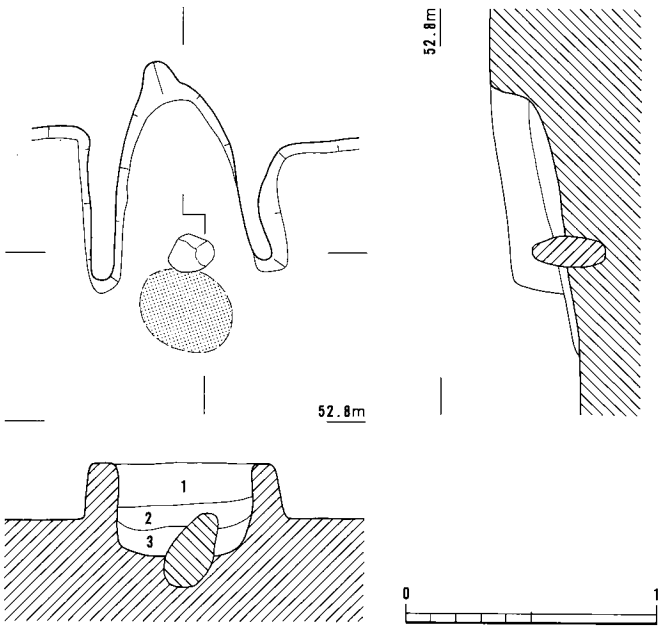
SH01

図版10


52.8m
52.8m
0
3 m
52.8m
52.8m
1
2
1．暗褐灰色　シルト質極細砂（炭含む）
2．暗褐色　シルト質極細砂（炭含む）
0
1 m

SH02

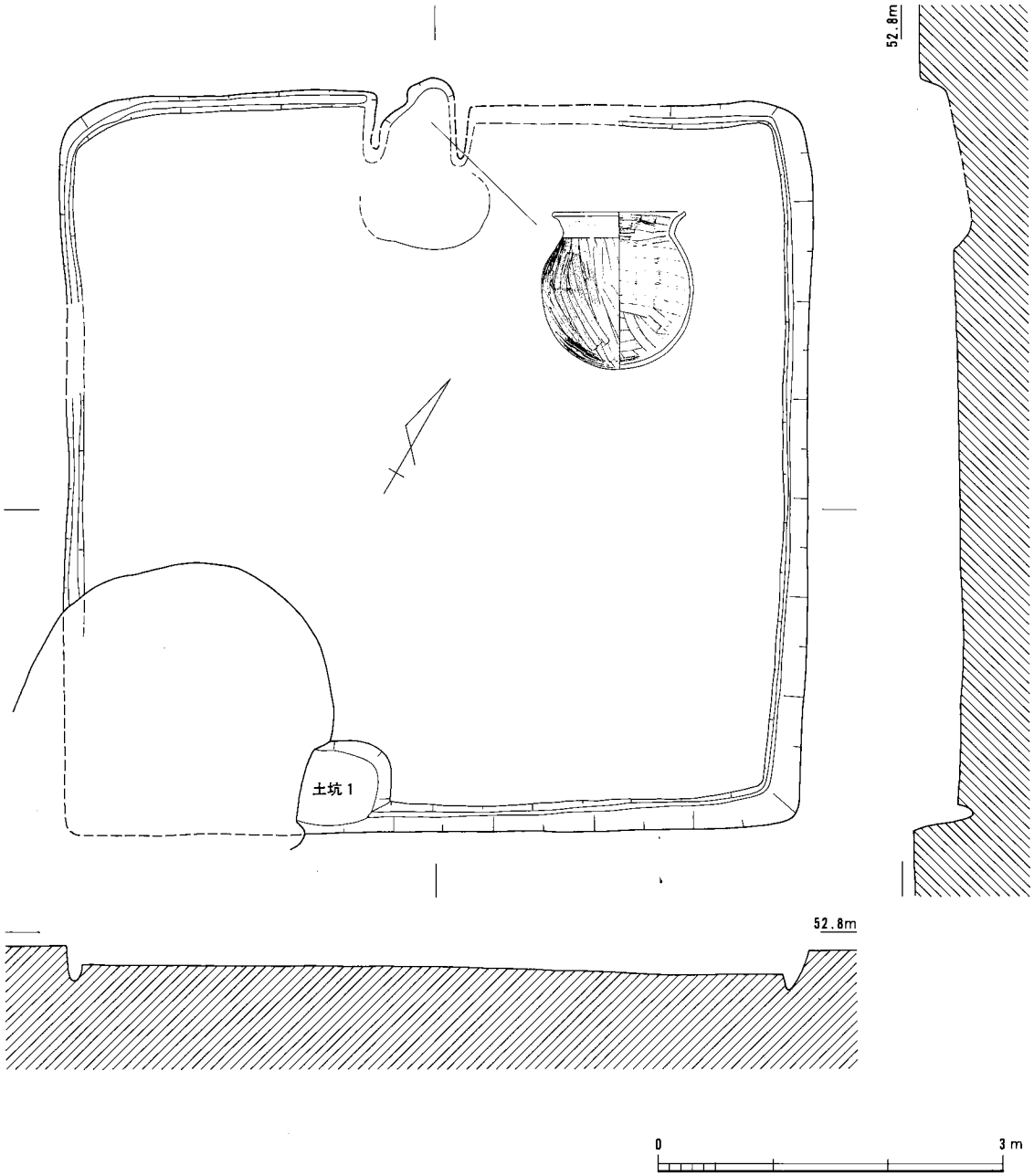




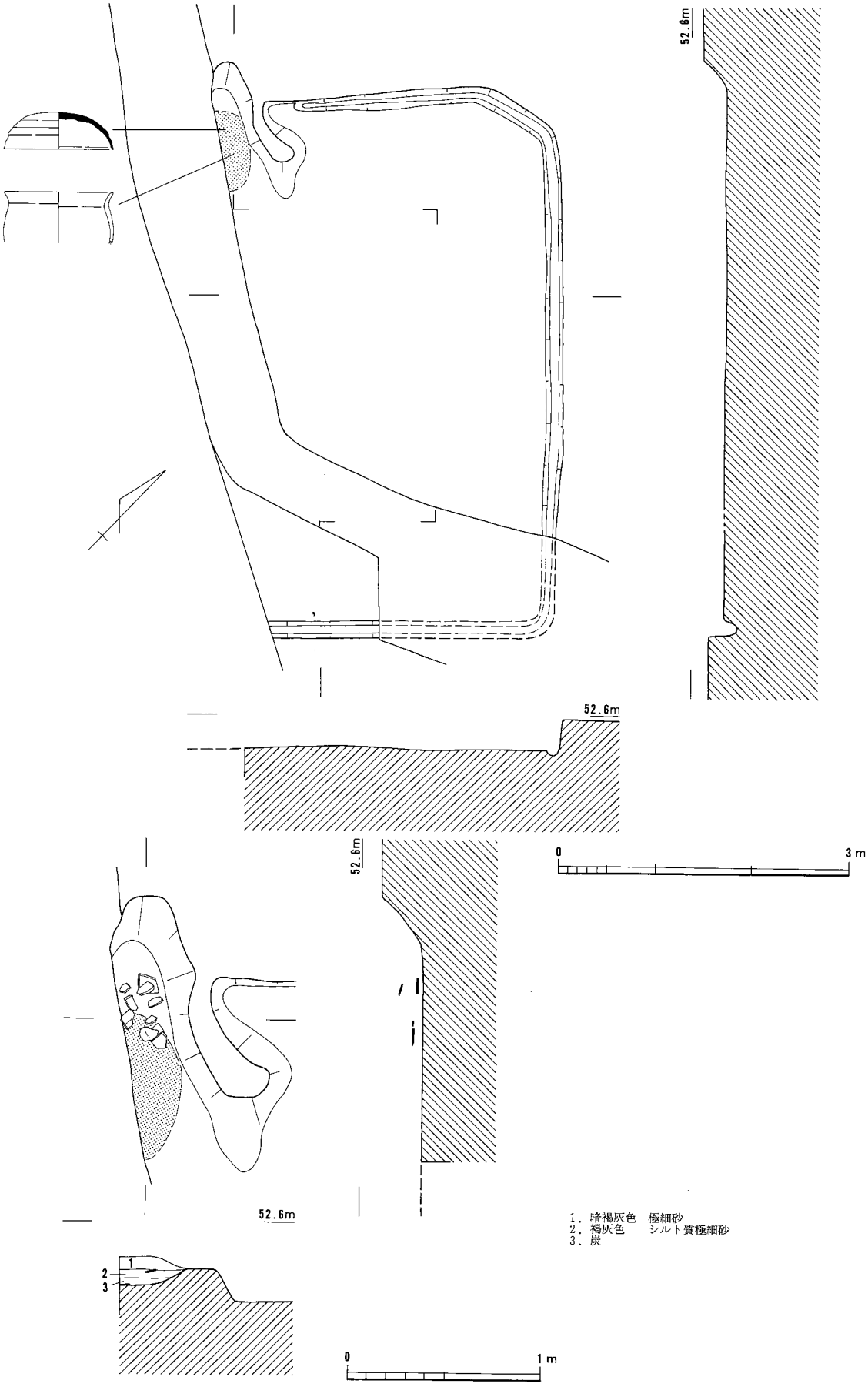
1．褐灰色　シルト質極細砂
2．暗褐灰色　極細砂
3．炭

SH03

図版12

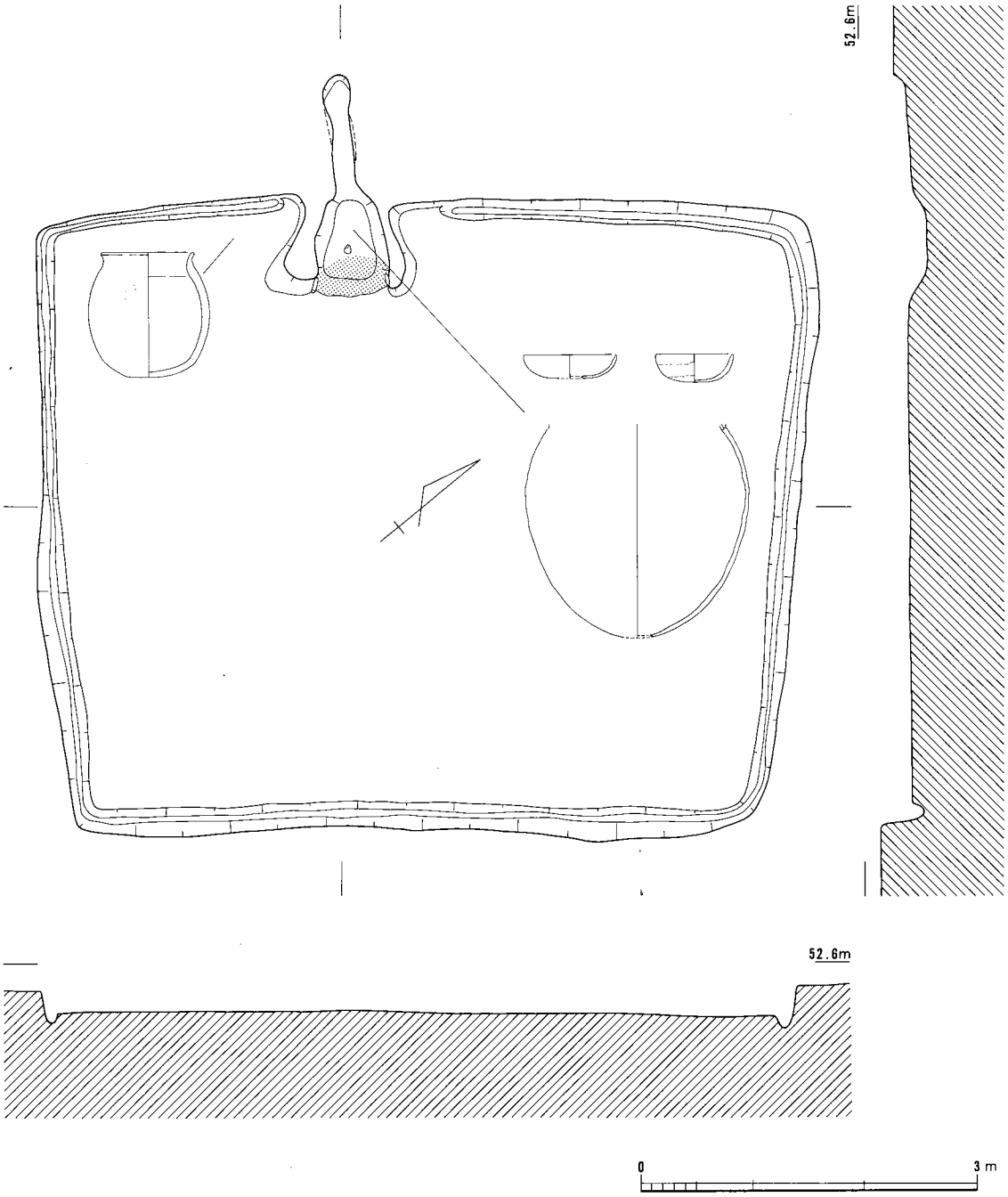


SH04

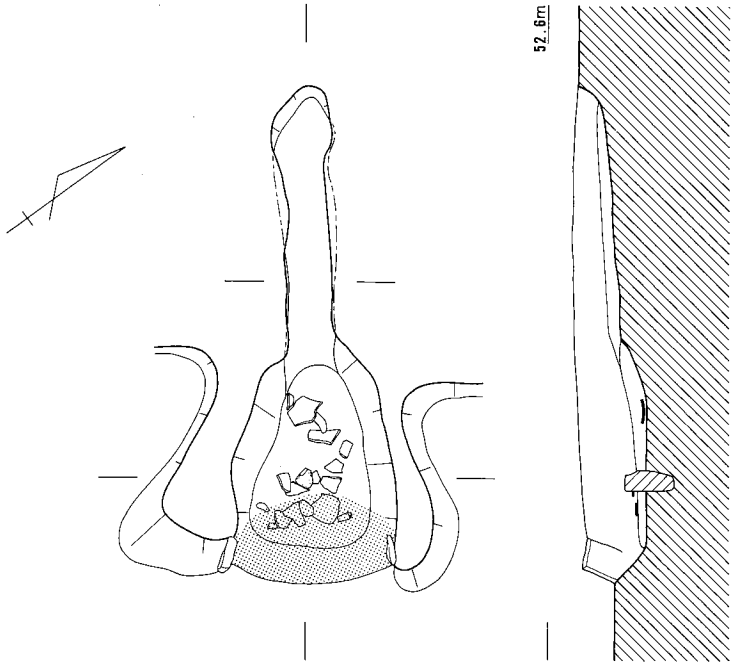


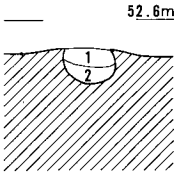
SH05

図版14

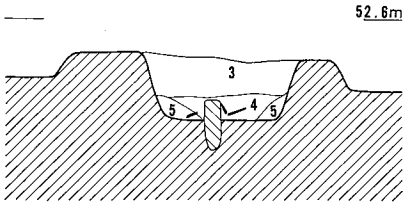


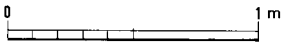
SH06





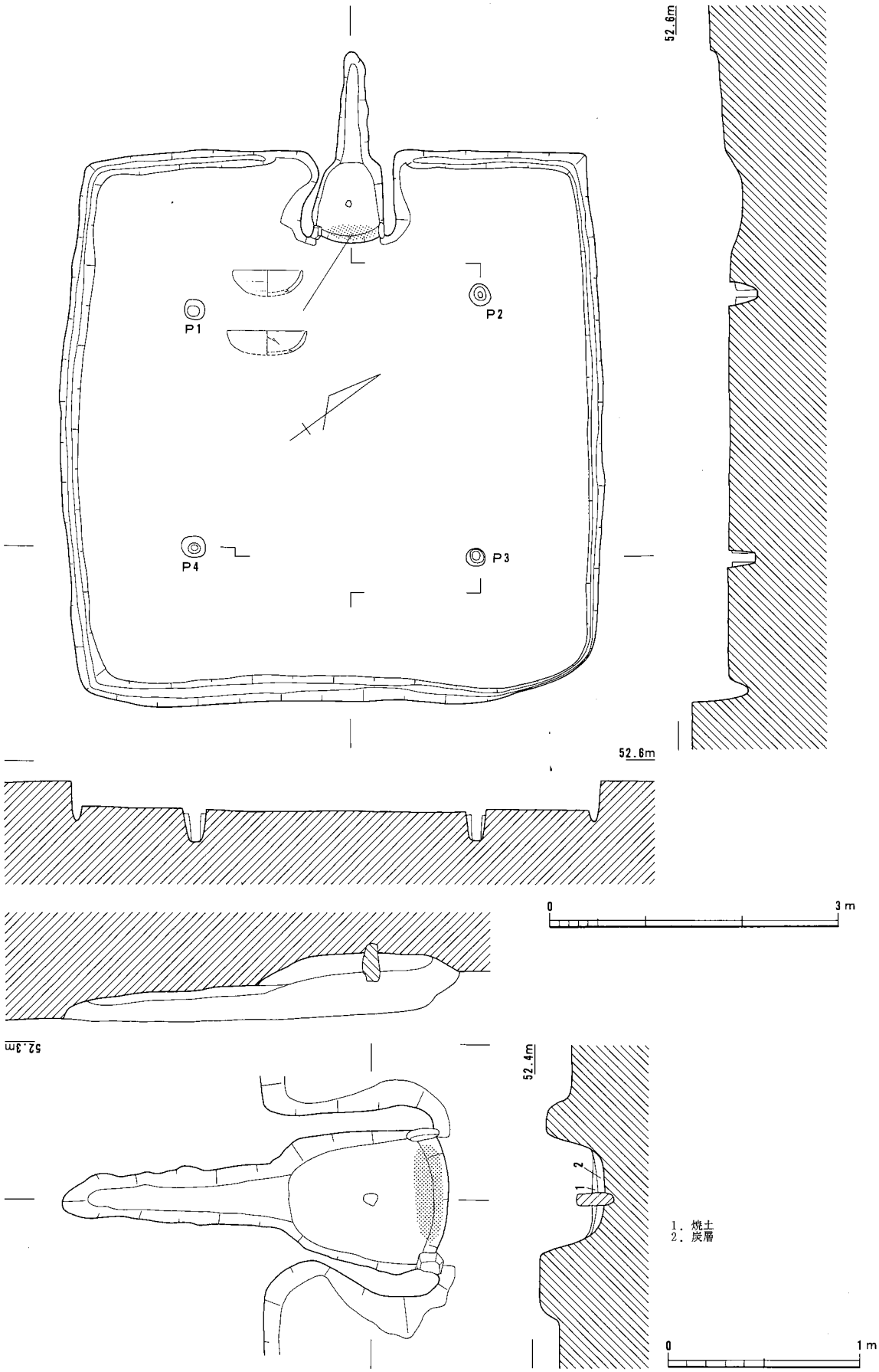
1．暗褐灰色　極細砂（炭含む）
2．淡黄褐色　極細砂質シルト（炭含む）
3．黄褐色　　細砂まじりシルト
4．暗褐灰色　極細砂（炭含む）
5．焼土ブロック
6．炭



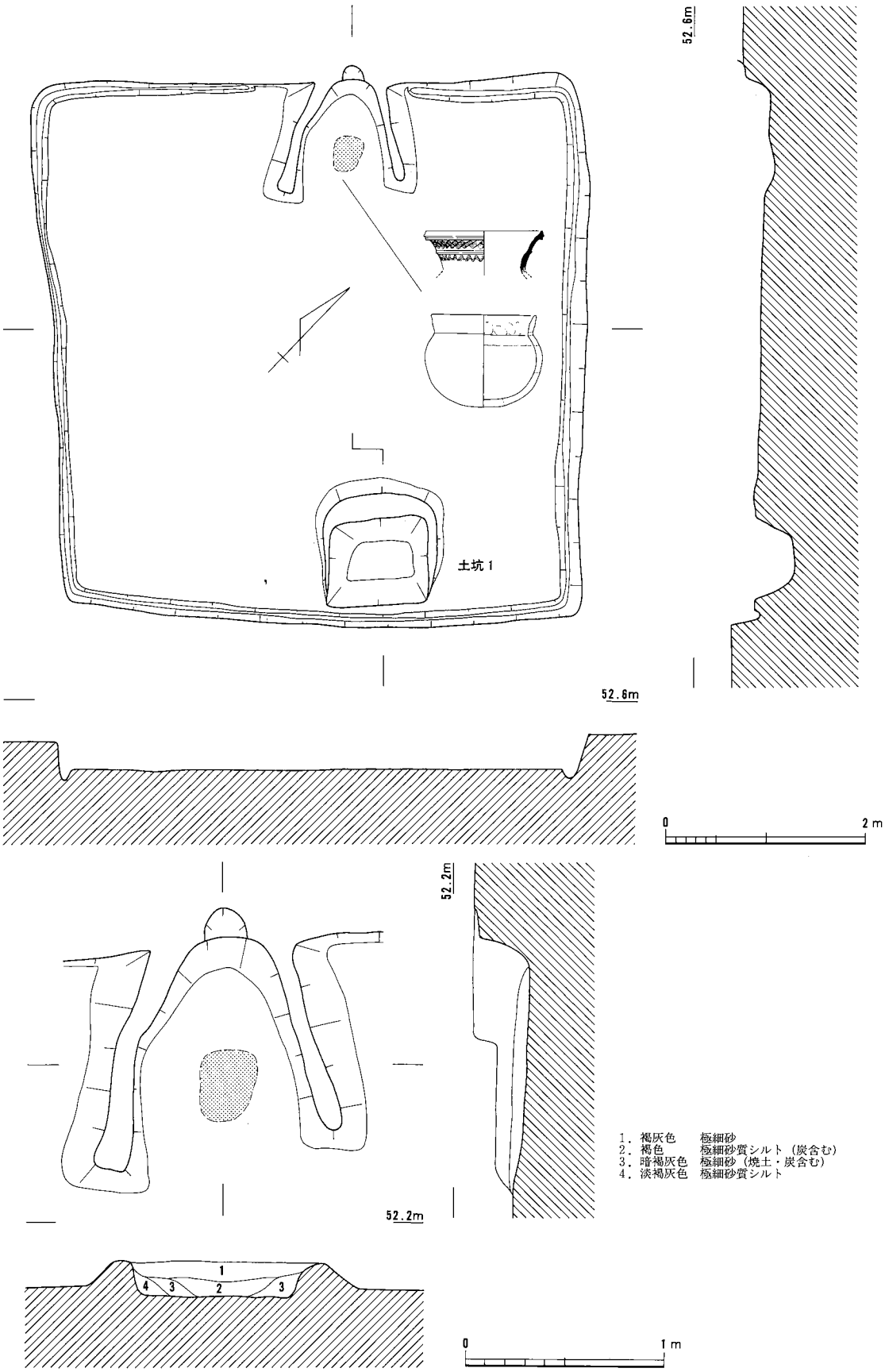


ＳＨ06カマド

図版16

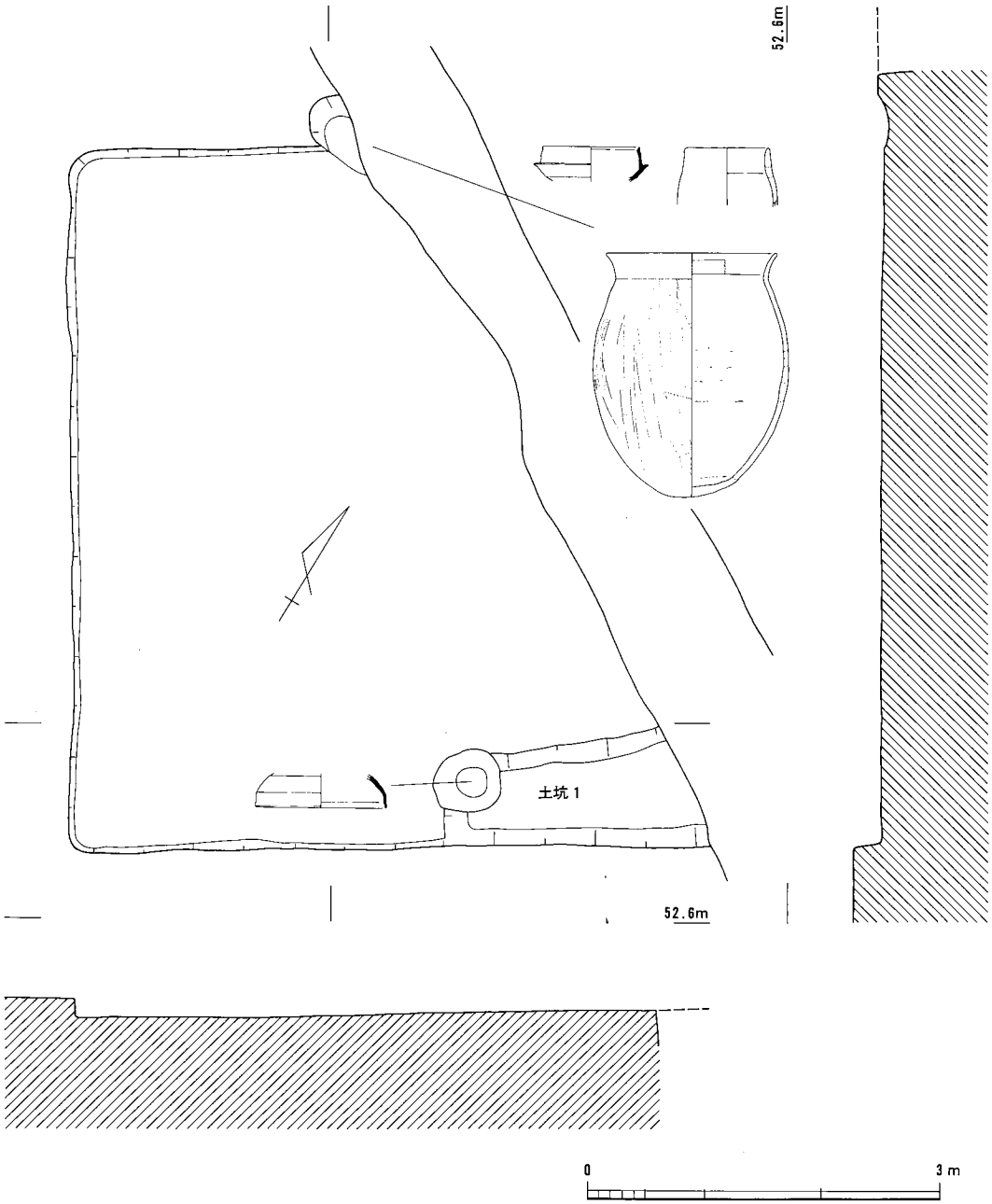


SH07

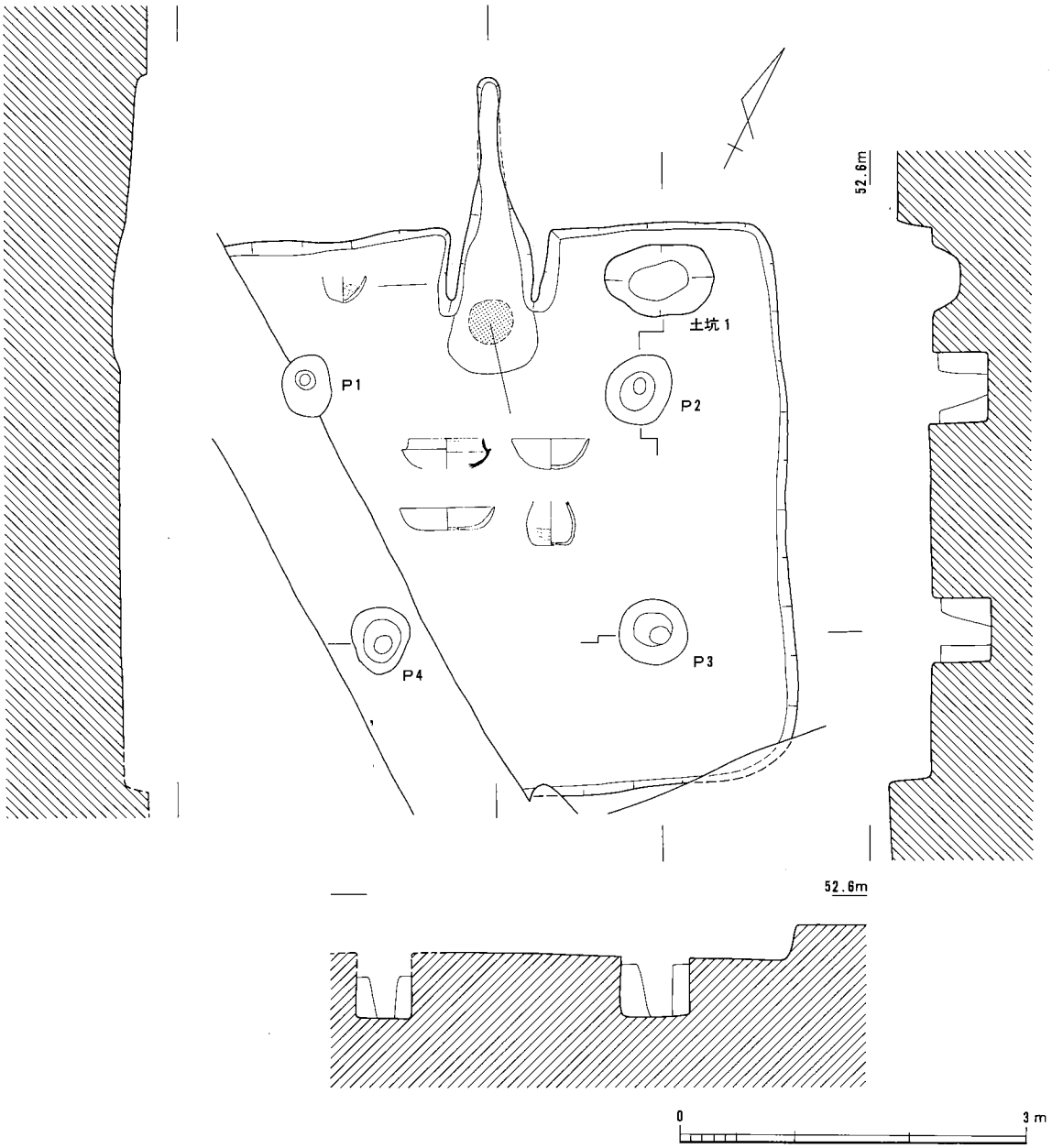

52.6m
土坑1
52.6m
0
2m
52.2m
52.2m
1. 褐灰色　極細砂
2. 褐色　極細砂質シルト（炭含む）
3. 暗褐灰色　極細砂（焼土・炭含む）
4. 淡褐灰色　極細砂質シルト
1
4
3
2
3
0
1m

SH08

図版18

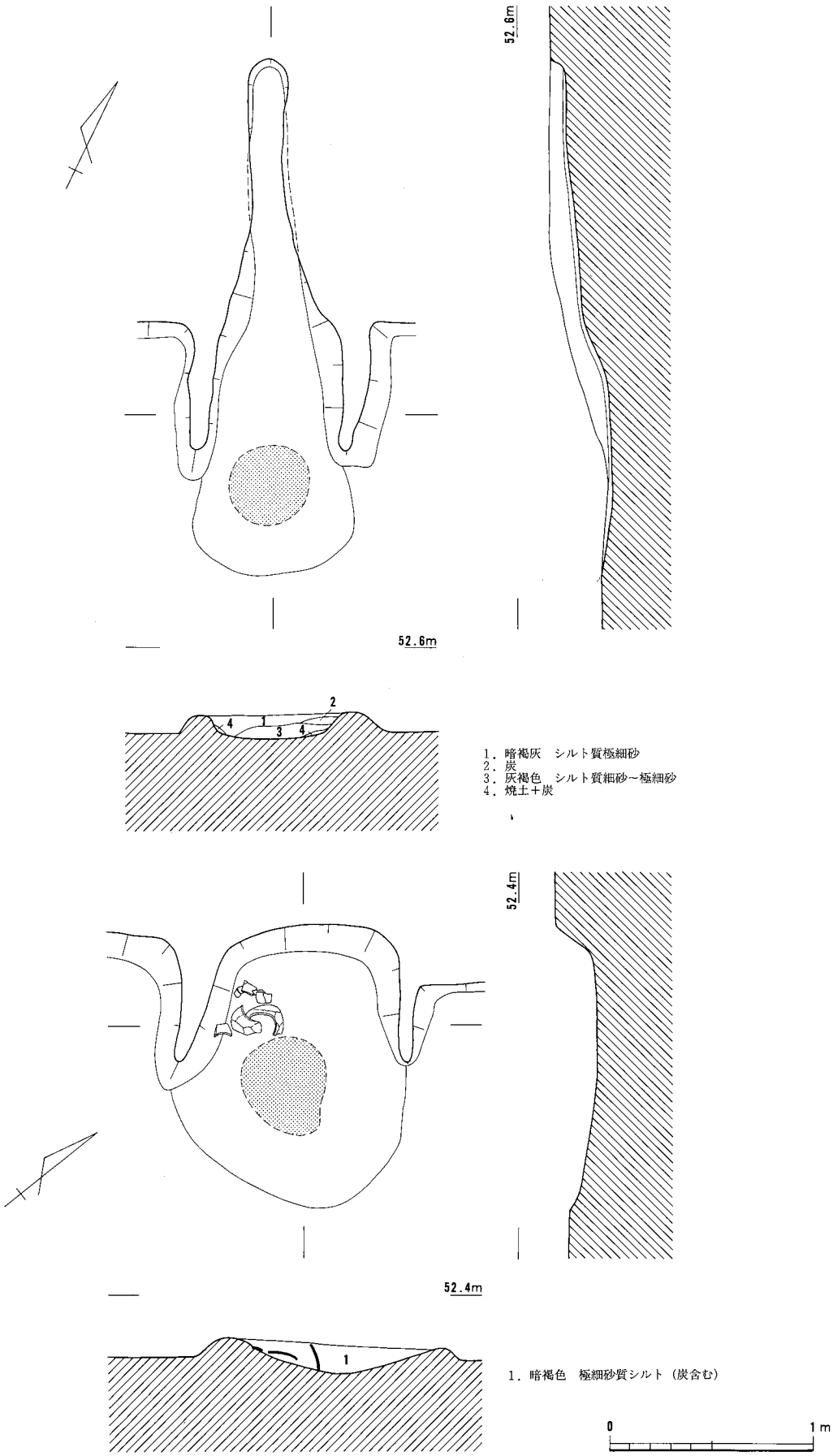


SH10

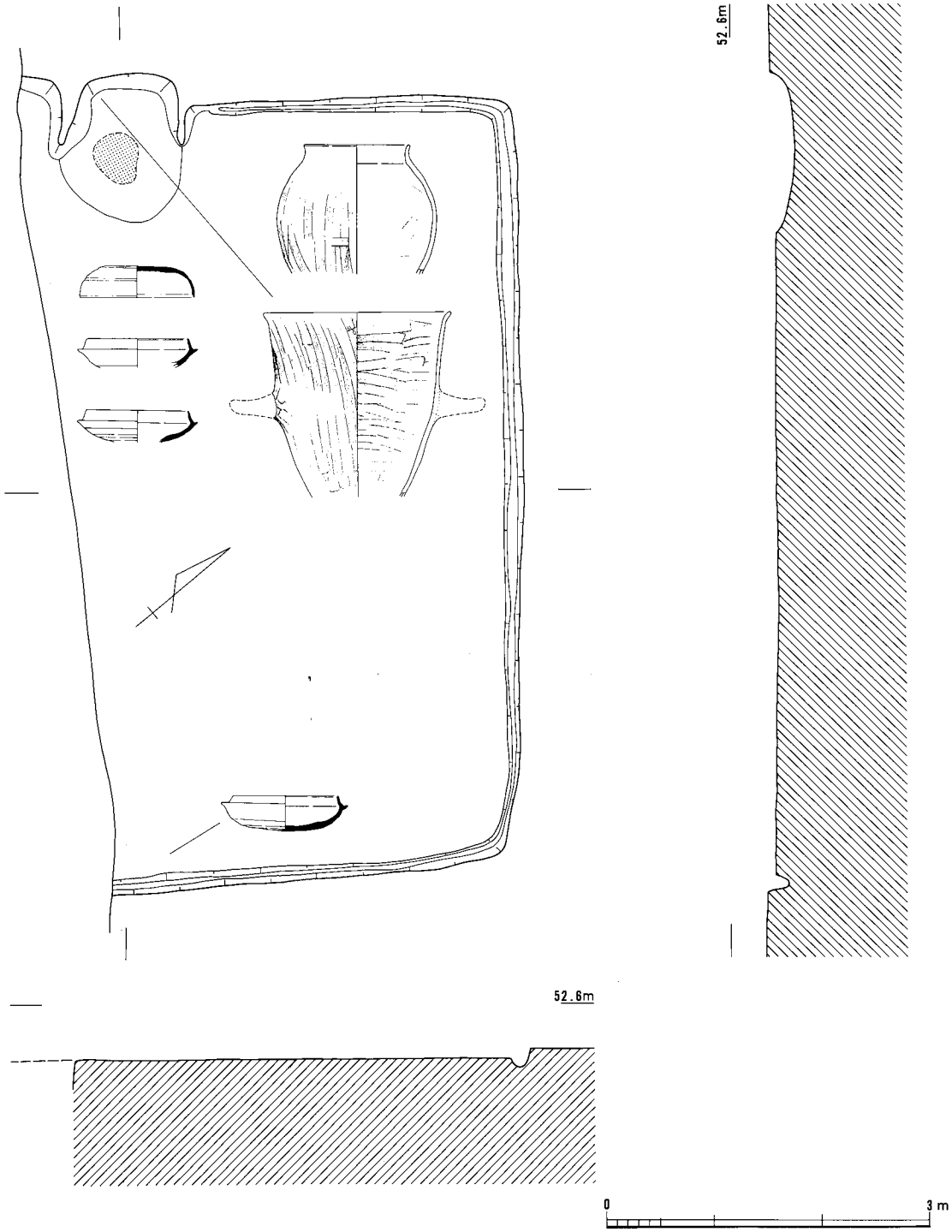


SH11

図版20

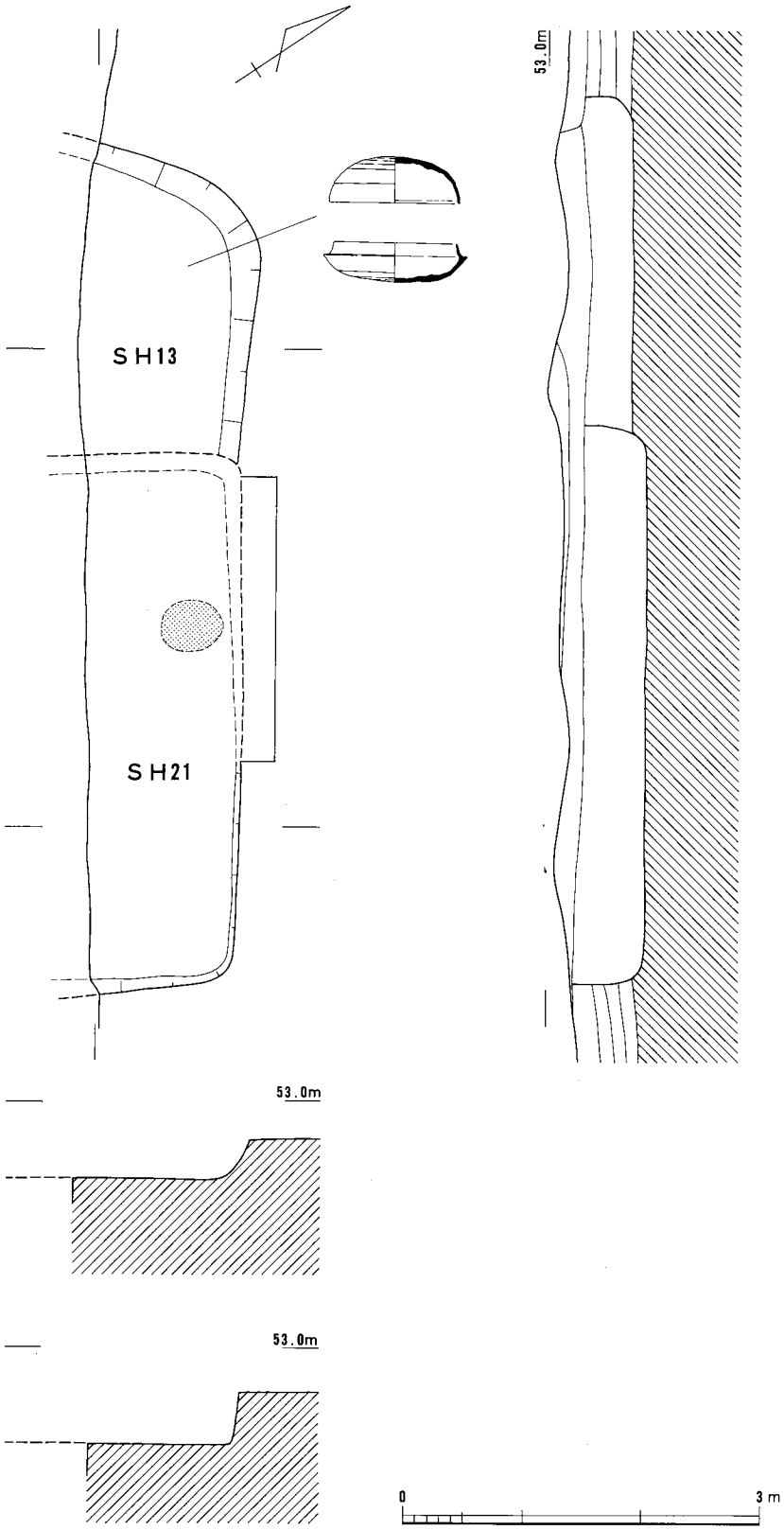


(上)ＳＨ11カマド　(下)ＳＨ12カマド

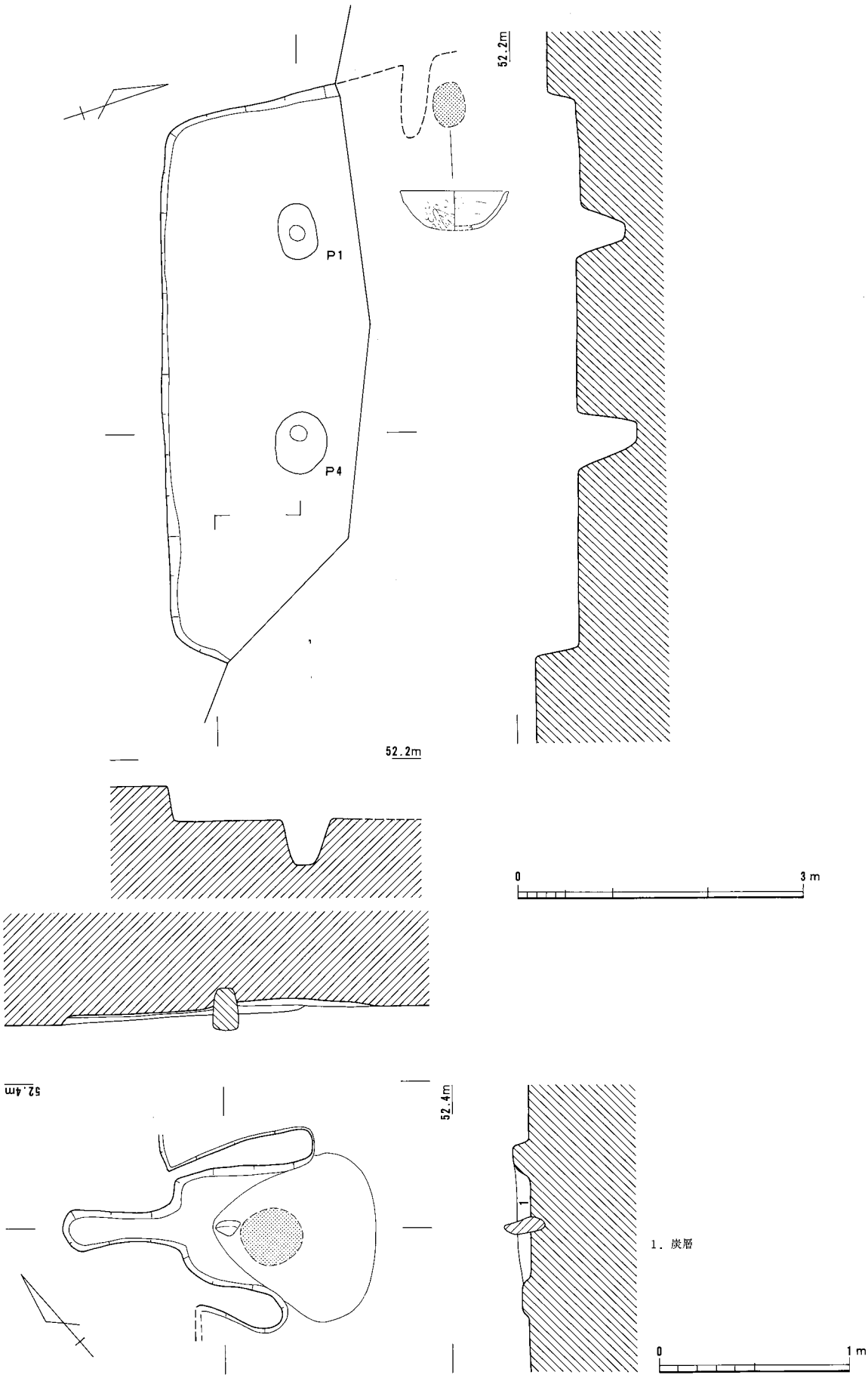


SH12

図版22

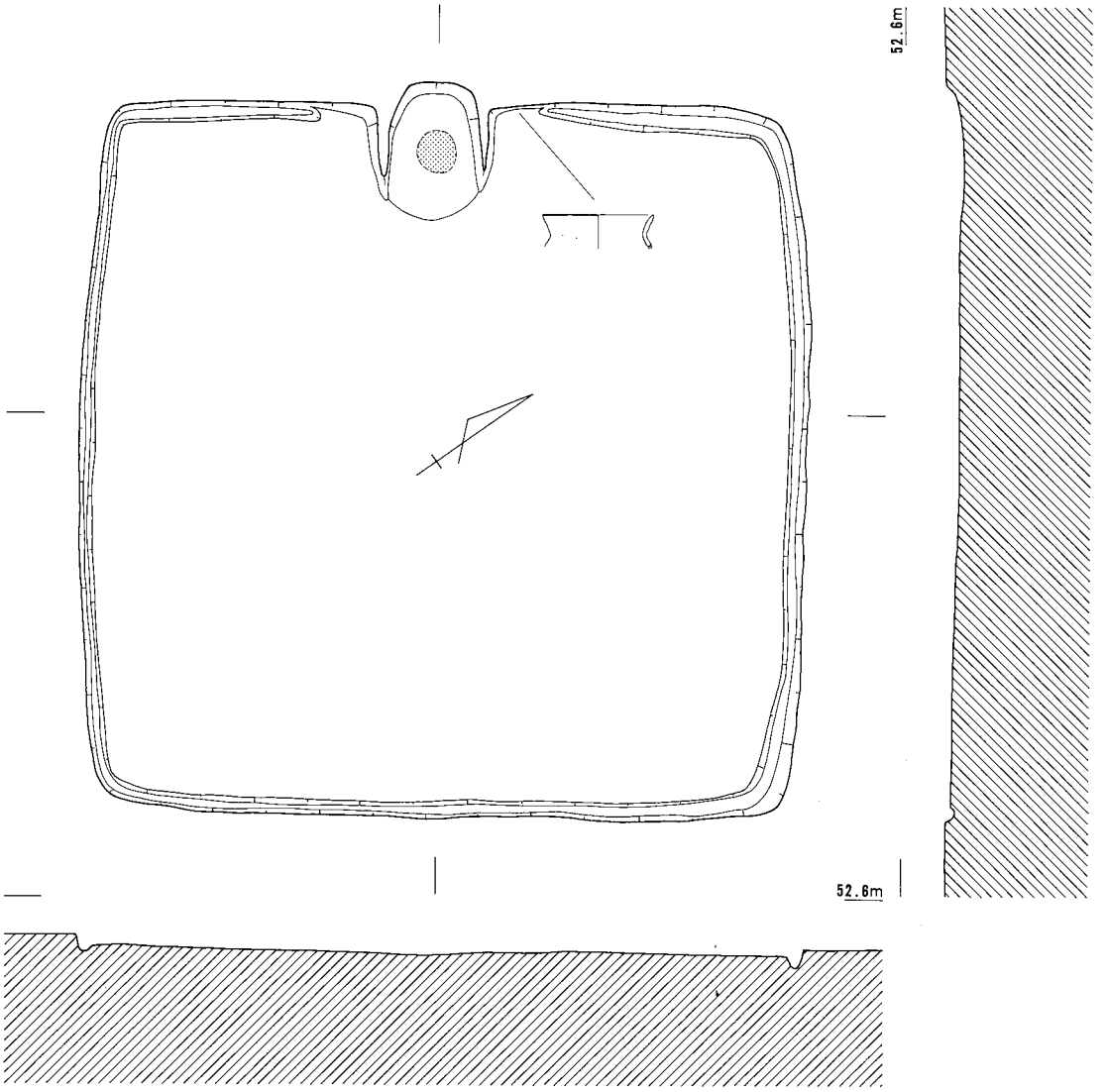


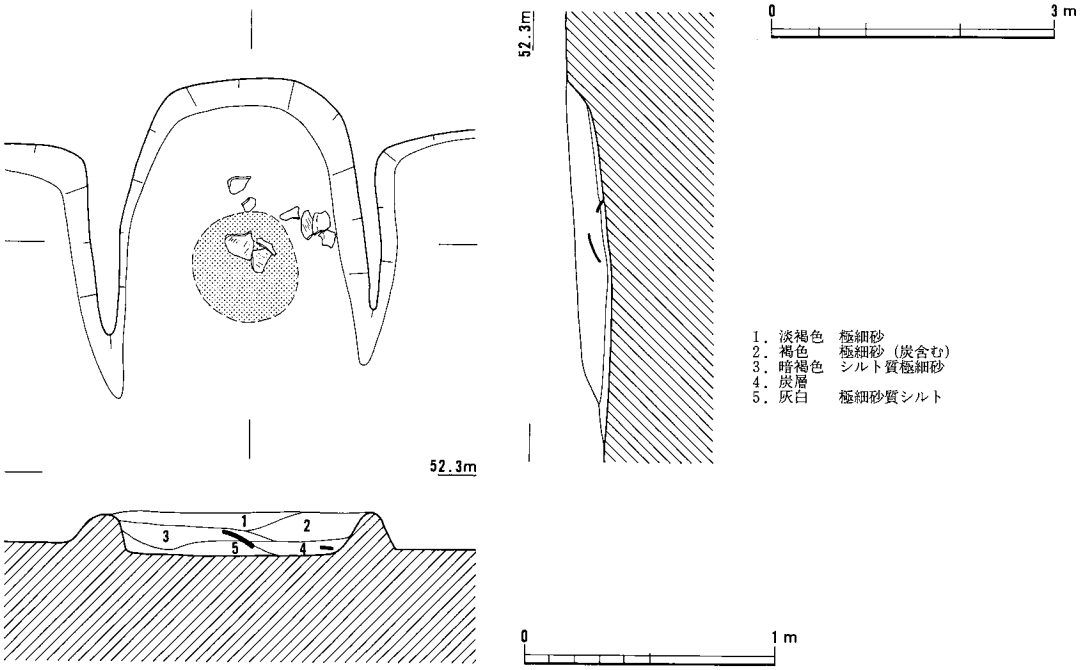
SH13・21



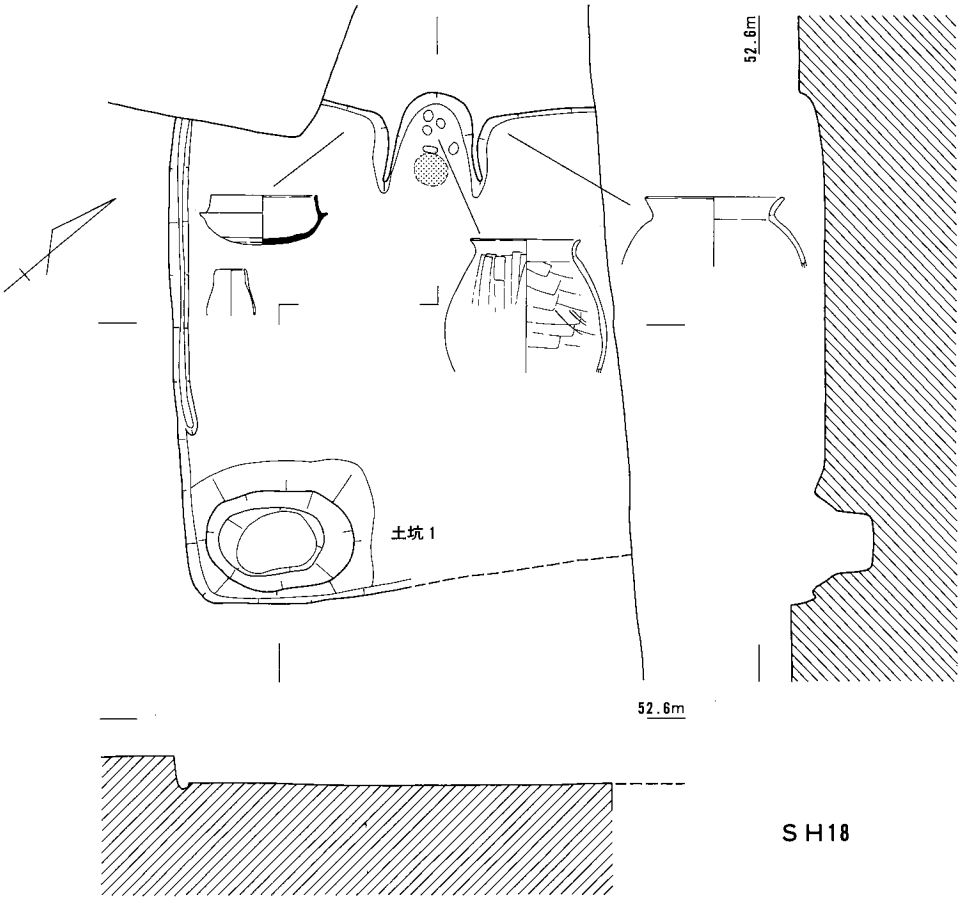
(上)SH14　(下)SH15

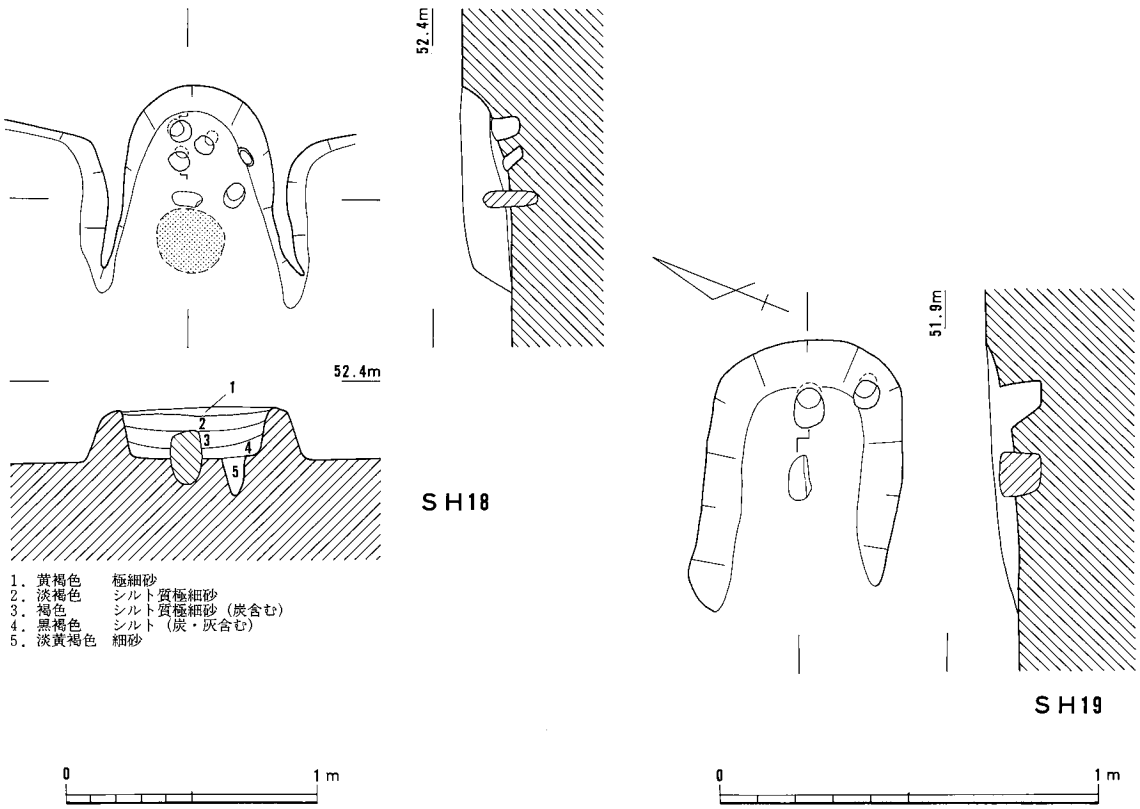
図版24


52.6m
52.6m


52.3m
52.3m
0
3 m
1. 淡褐色　極細砂
2. 褐色　極細砂（炭含む）
3. 暗褐色　シルト質極細砂
4. 炭層
5. 灰白　極細砂質シルト
1
2
3
4
5
0
1 m

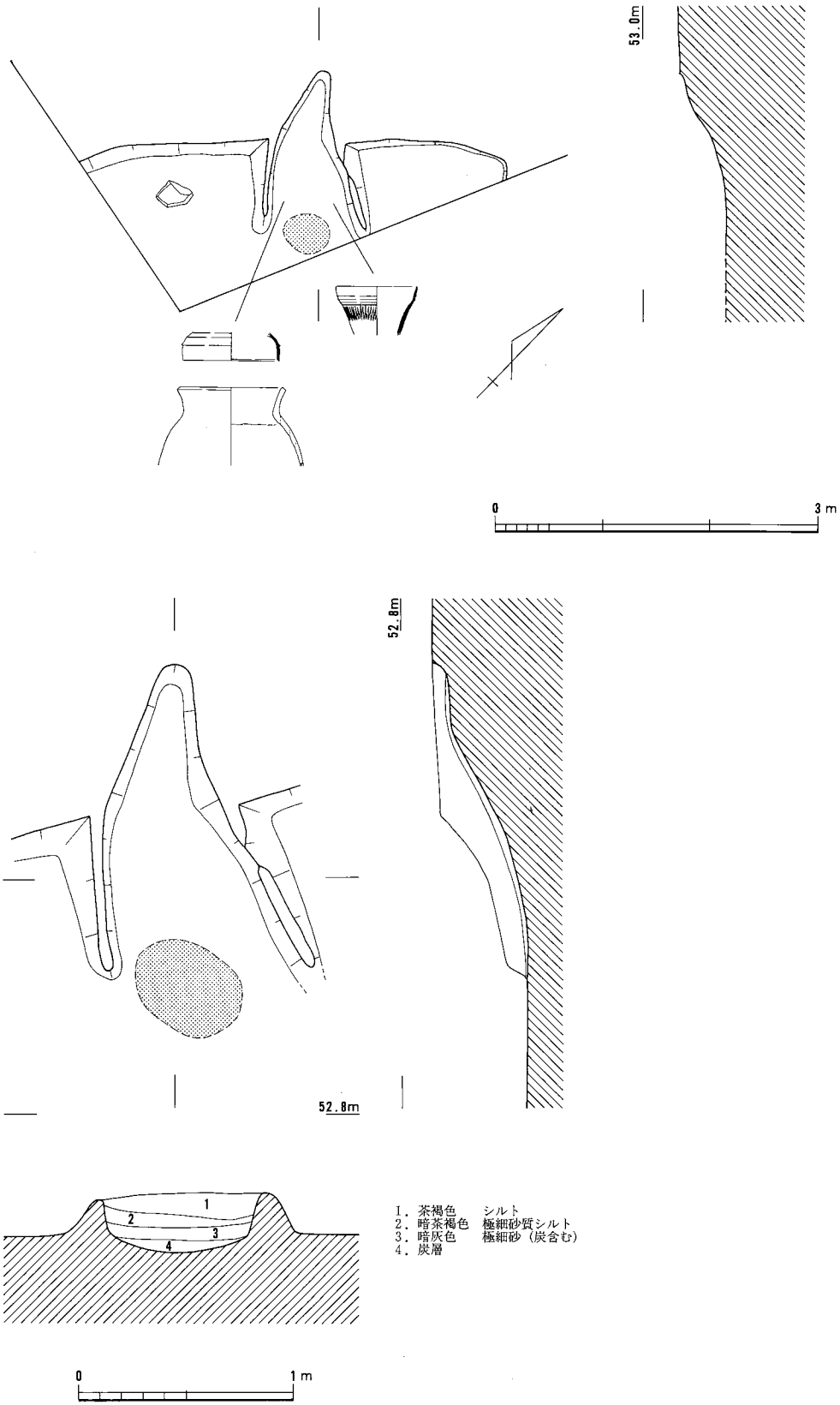
SH16


52.6m
土坑1
52.6m
SH18
0
3m


52.4m
52.4m
1
2
3
4
5
SH18
1. 黄褐色　極細砂
2. 淡褐色　シルト質極細砂
3. 褐色　シルト質極細砂（炭含む）
4. 黒褐色　シルト（炭・灰含む）
5. 淡黄褐色　細砂
51.9m
SH19
0
1m
0
1m

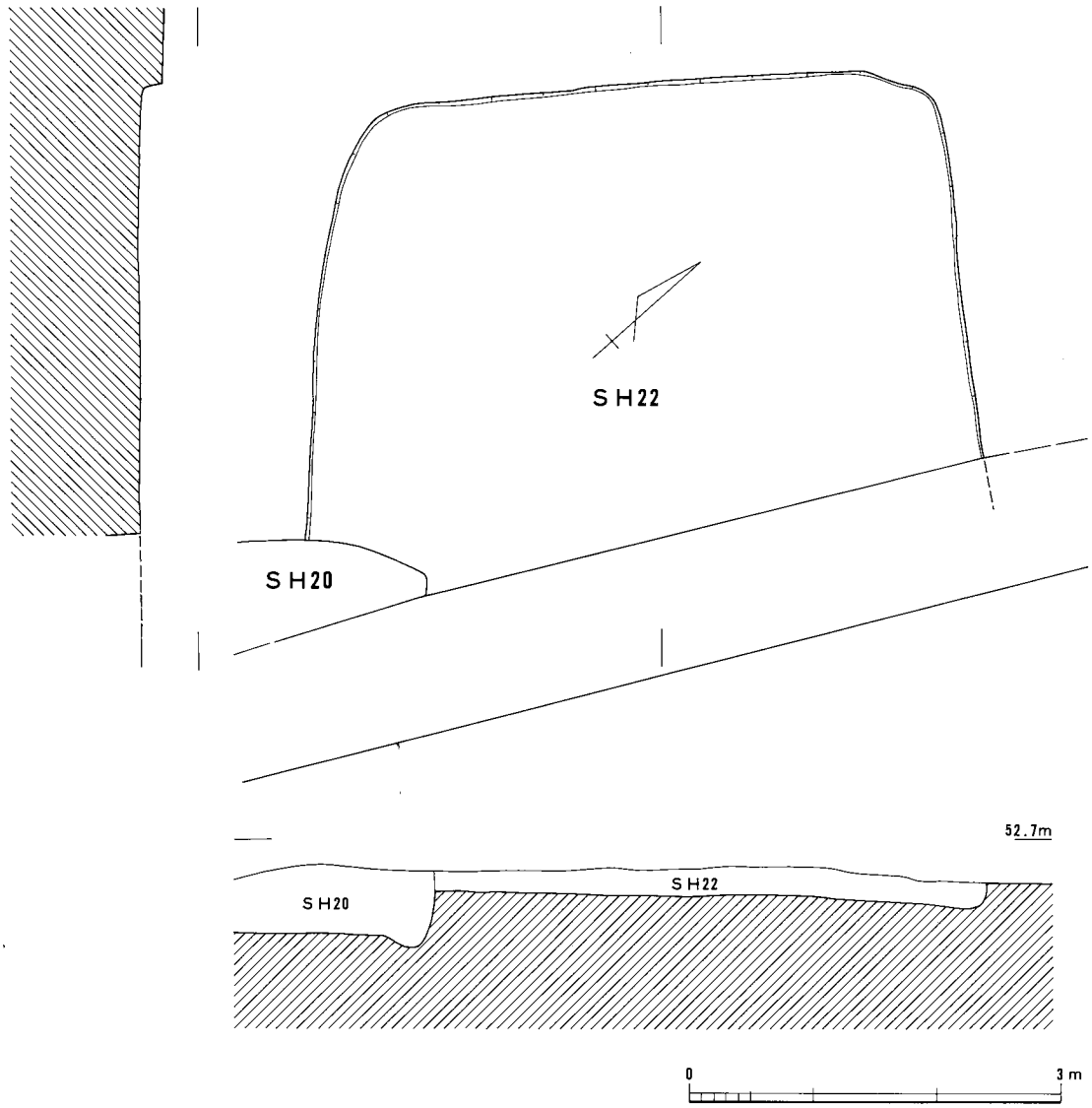
SH18・SH19

図版26



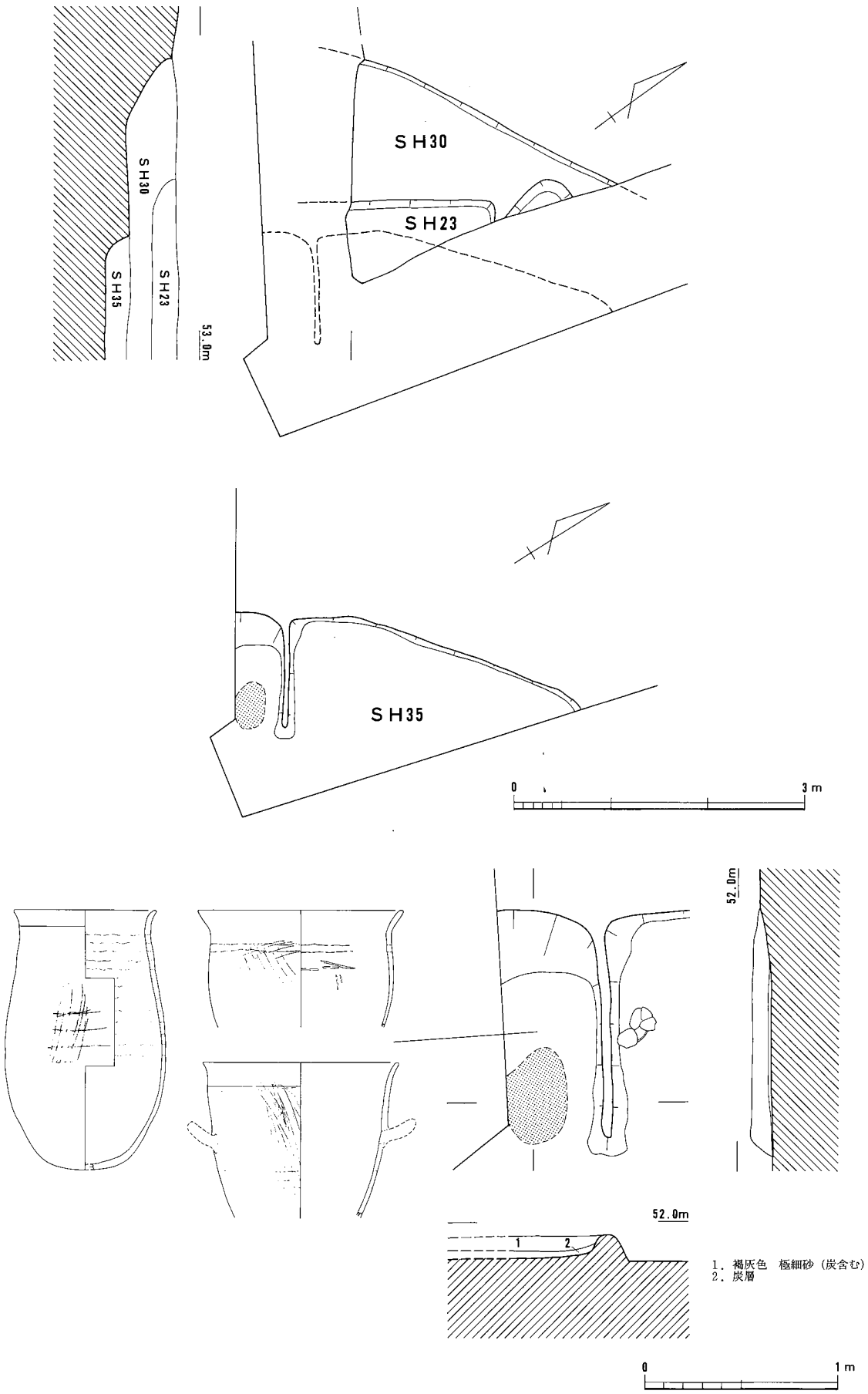
1．茶褐色　シルト
2．暗茶褐色　極細砂質シルト
3．暗灰色　極細砂（炭含む）
4．炭層

SH20

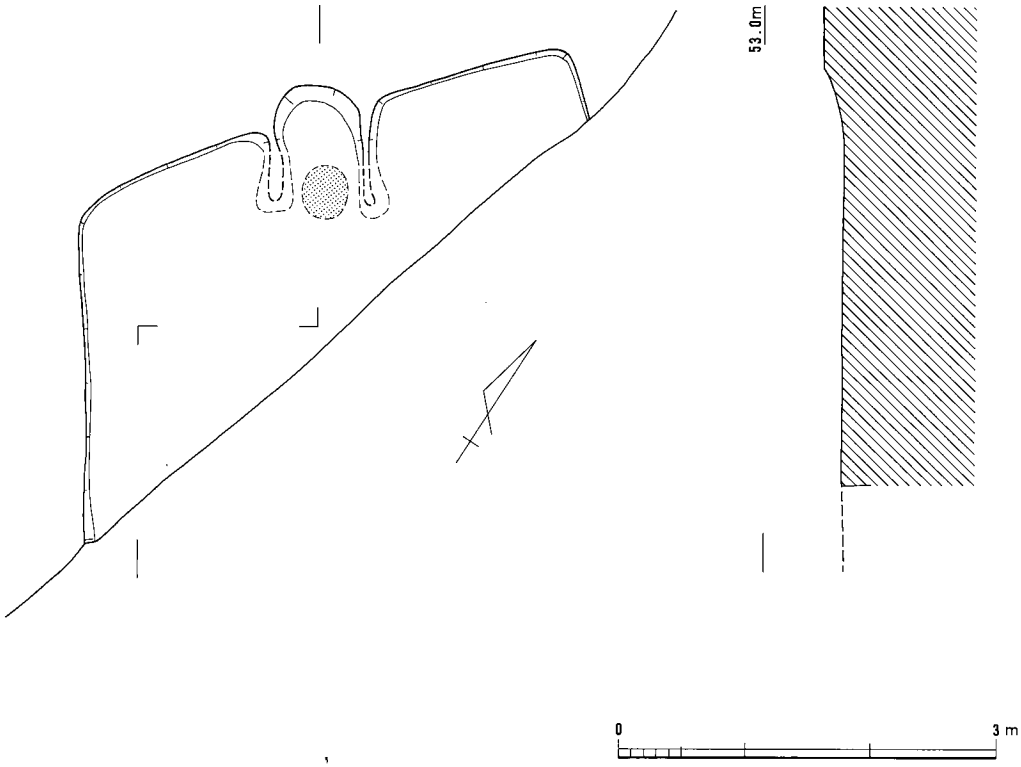


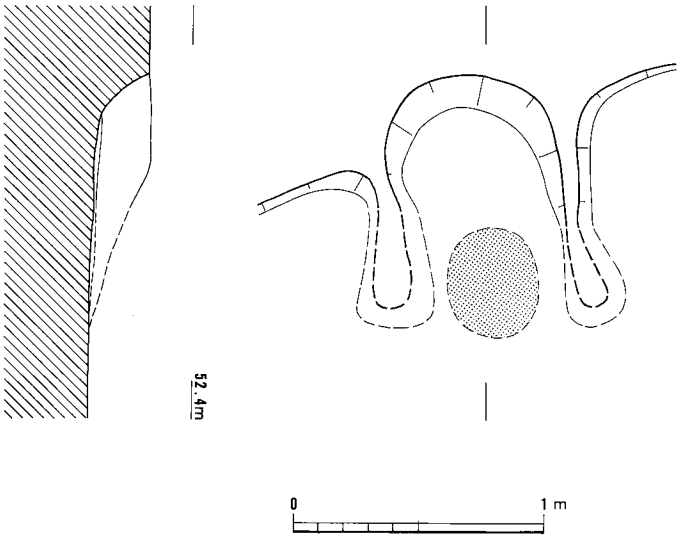
SH22

図版28



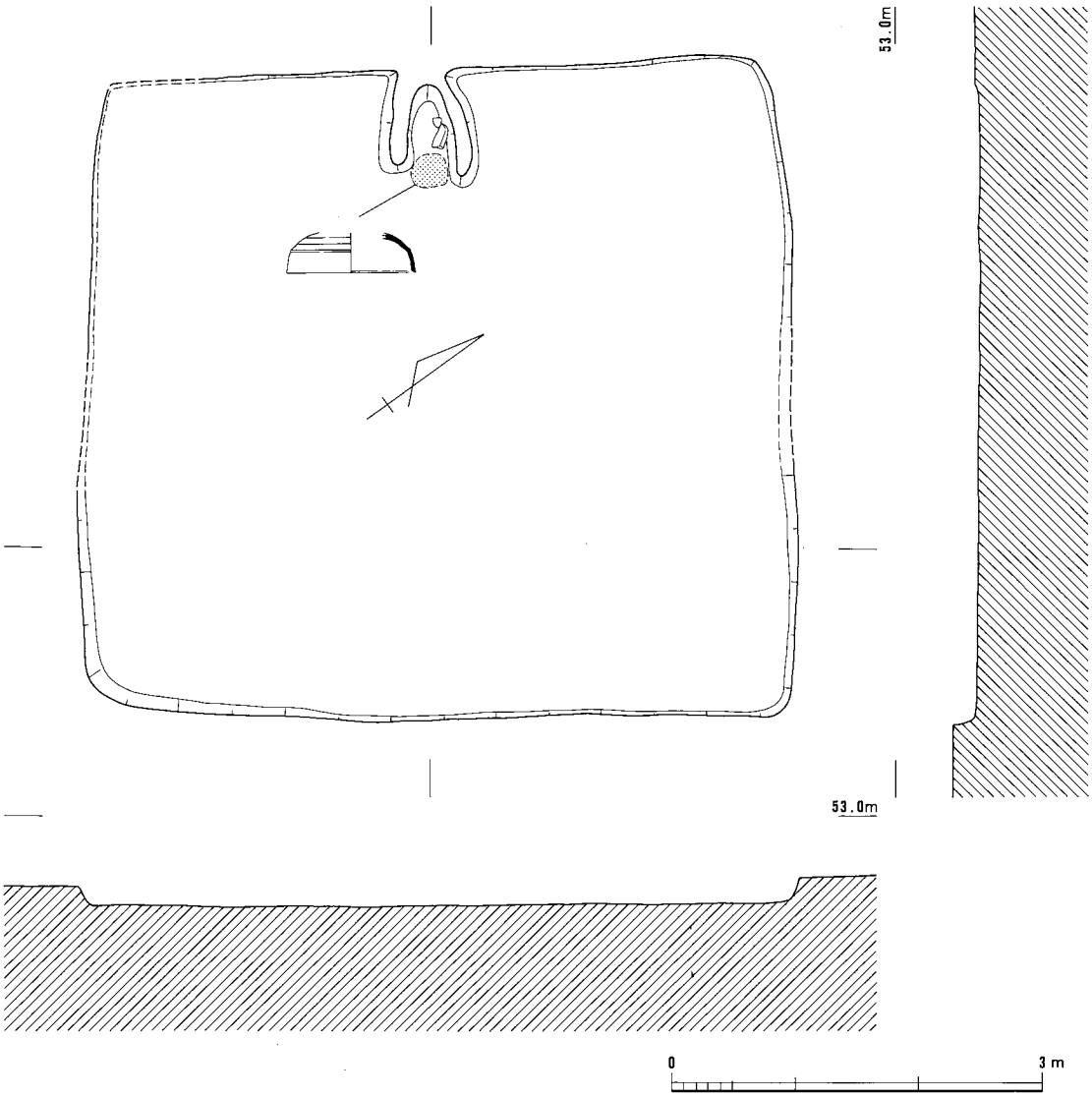
SH23・30・SH35

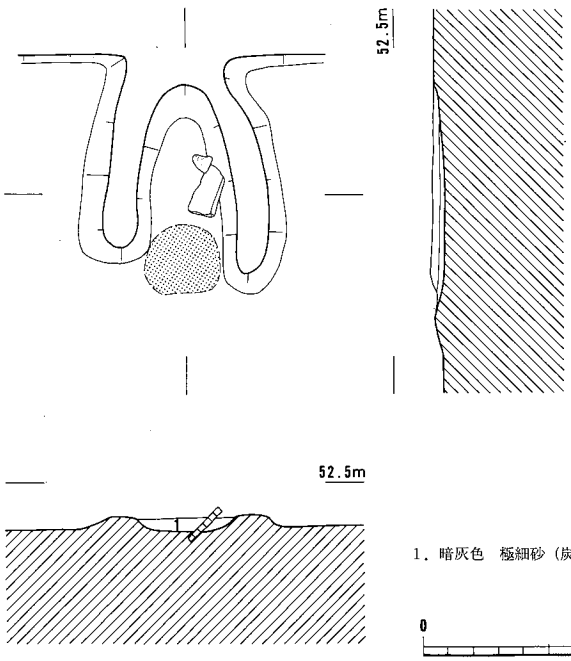




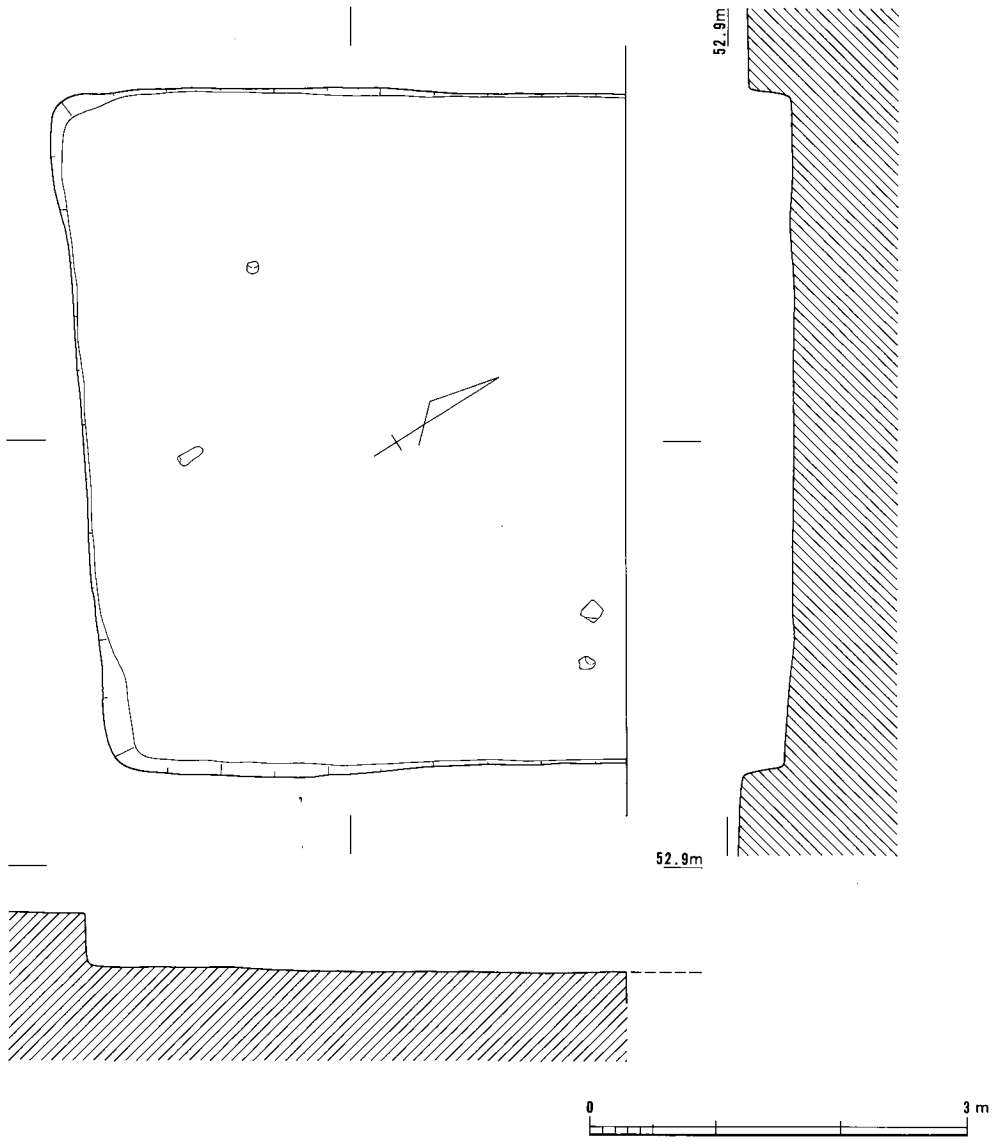
SH24

図版30



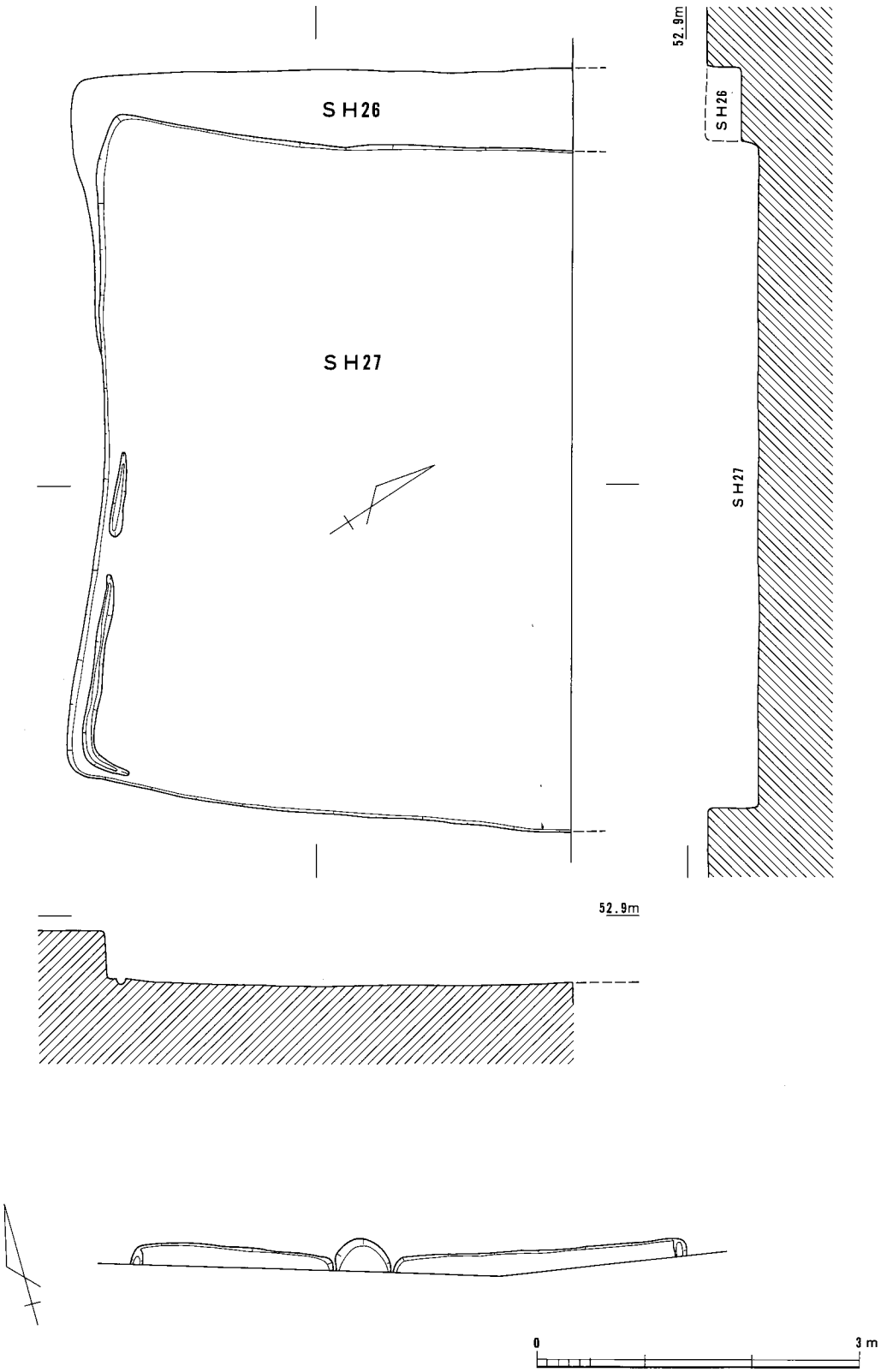


SH25

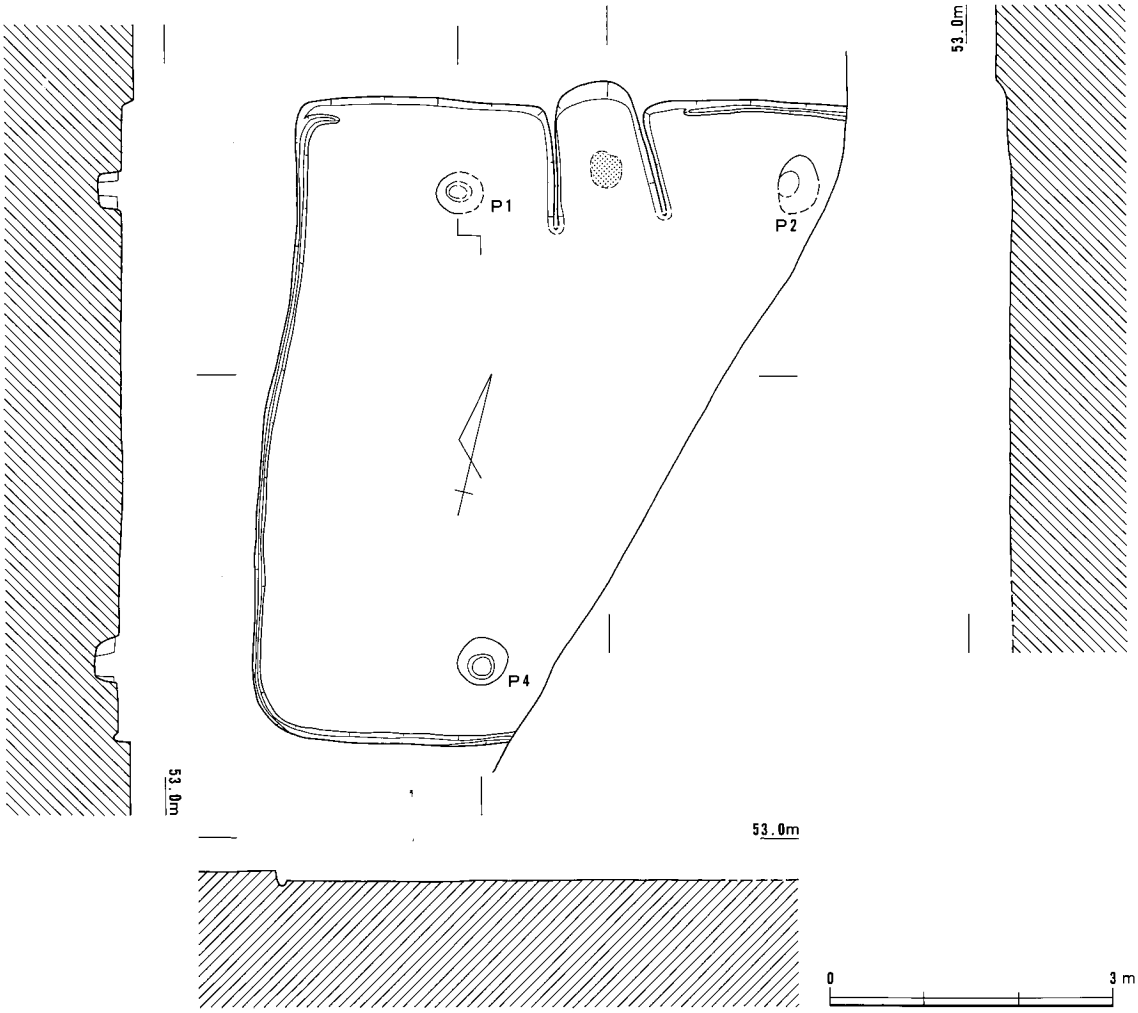


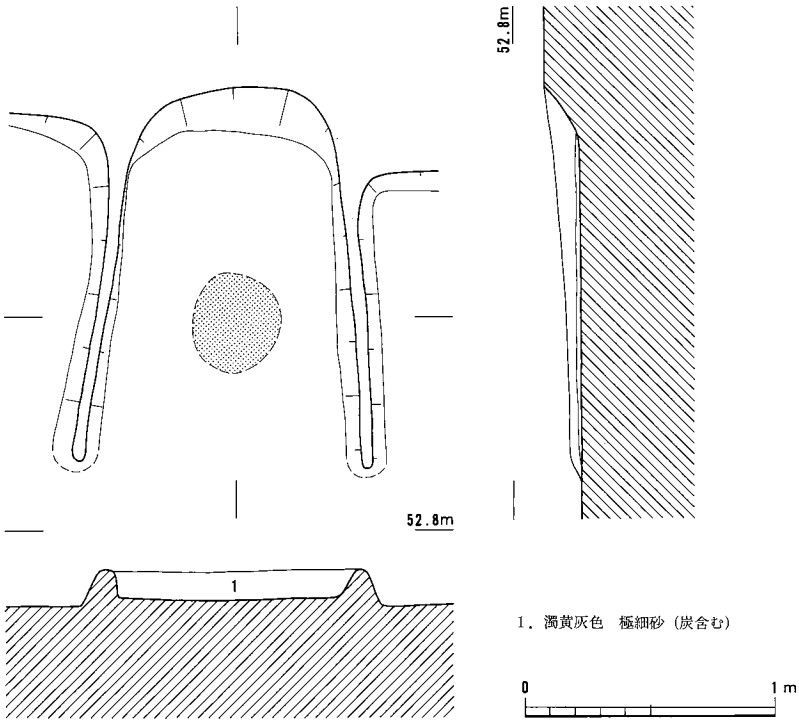
SH26

図版32



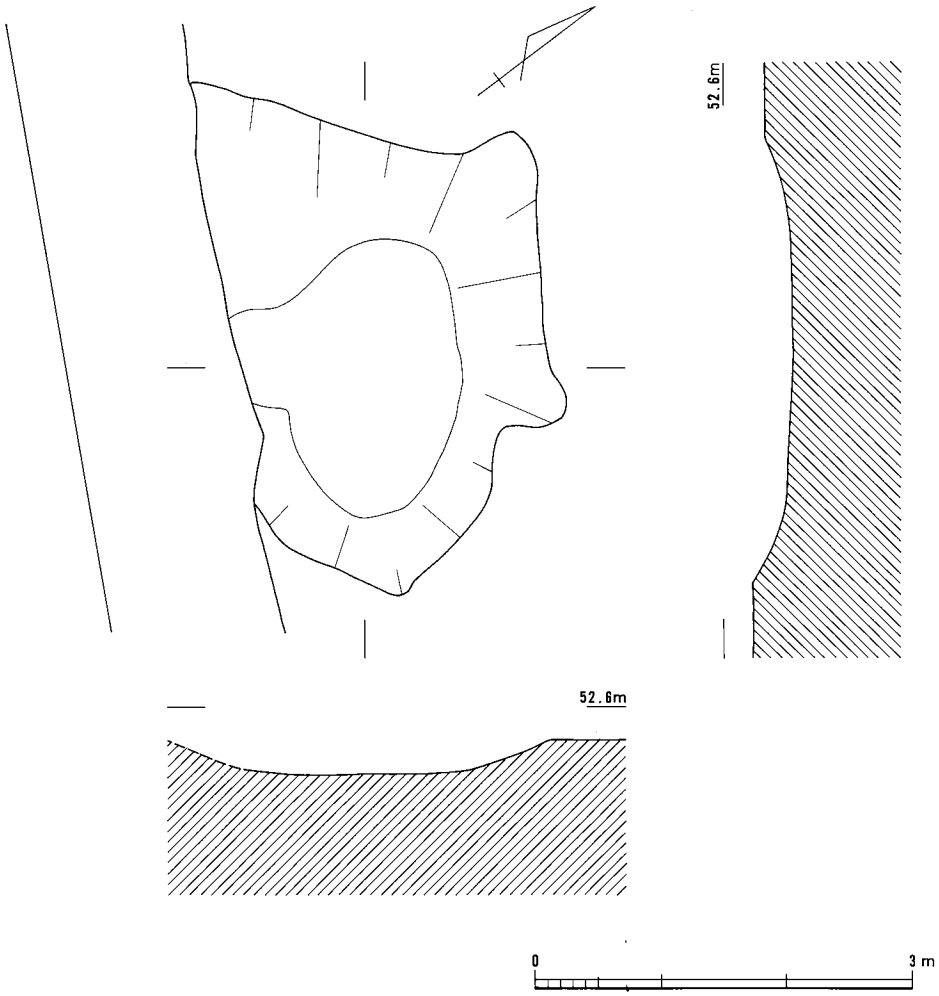
(上)SH27　(下)SH33



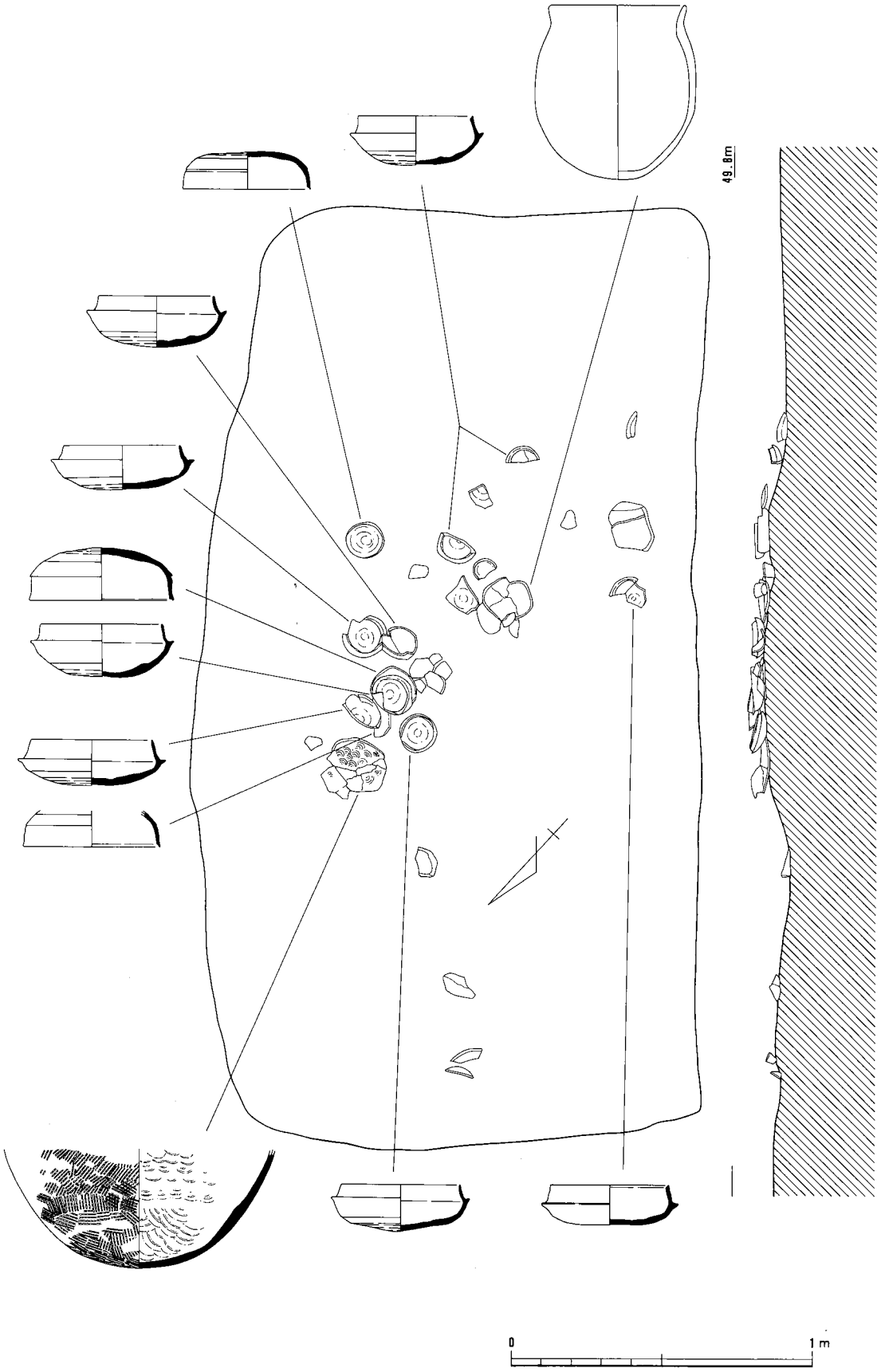


SH34

図版34

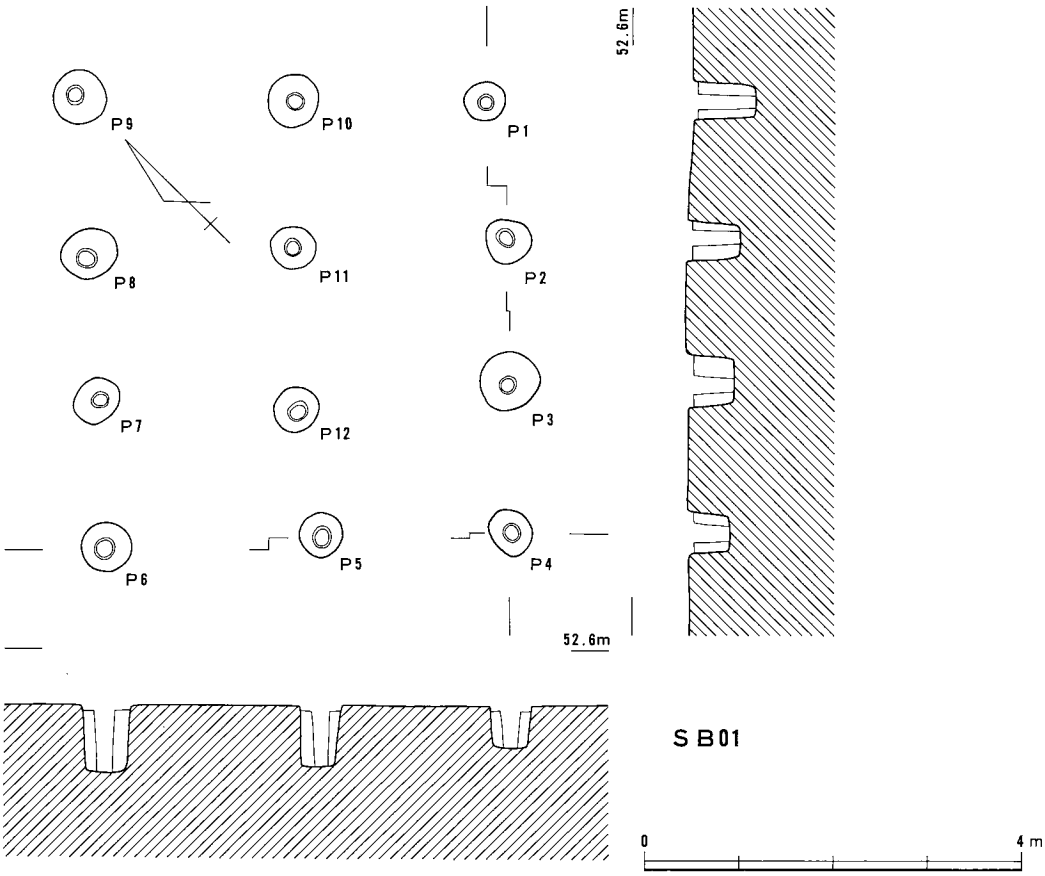


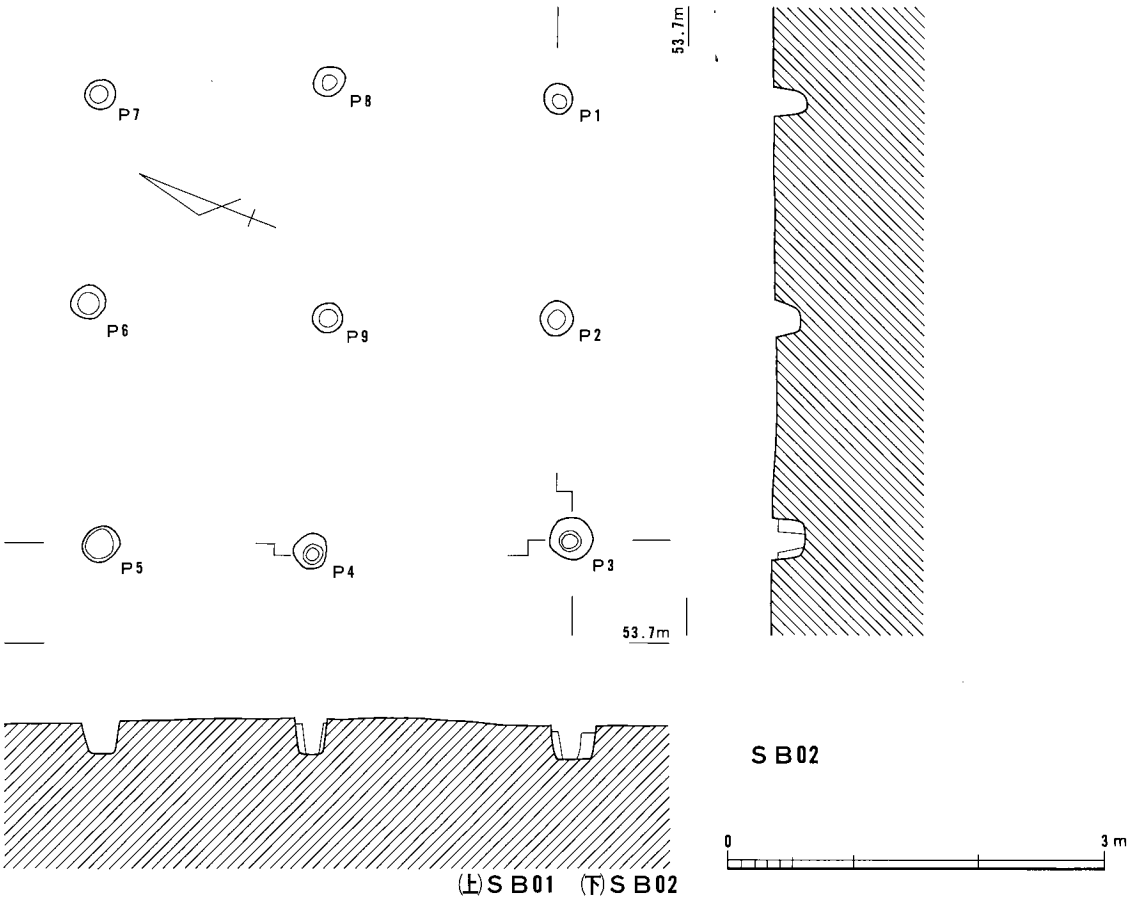
SX01



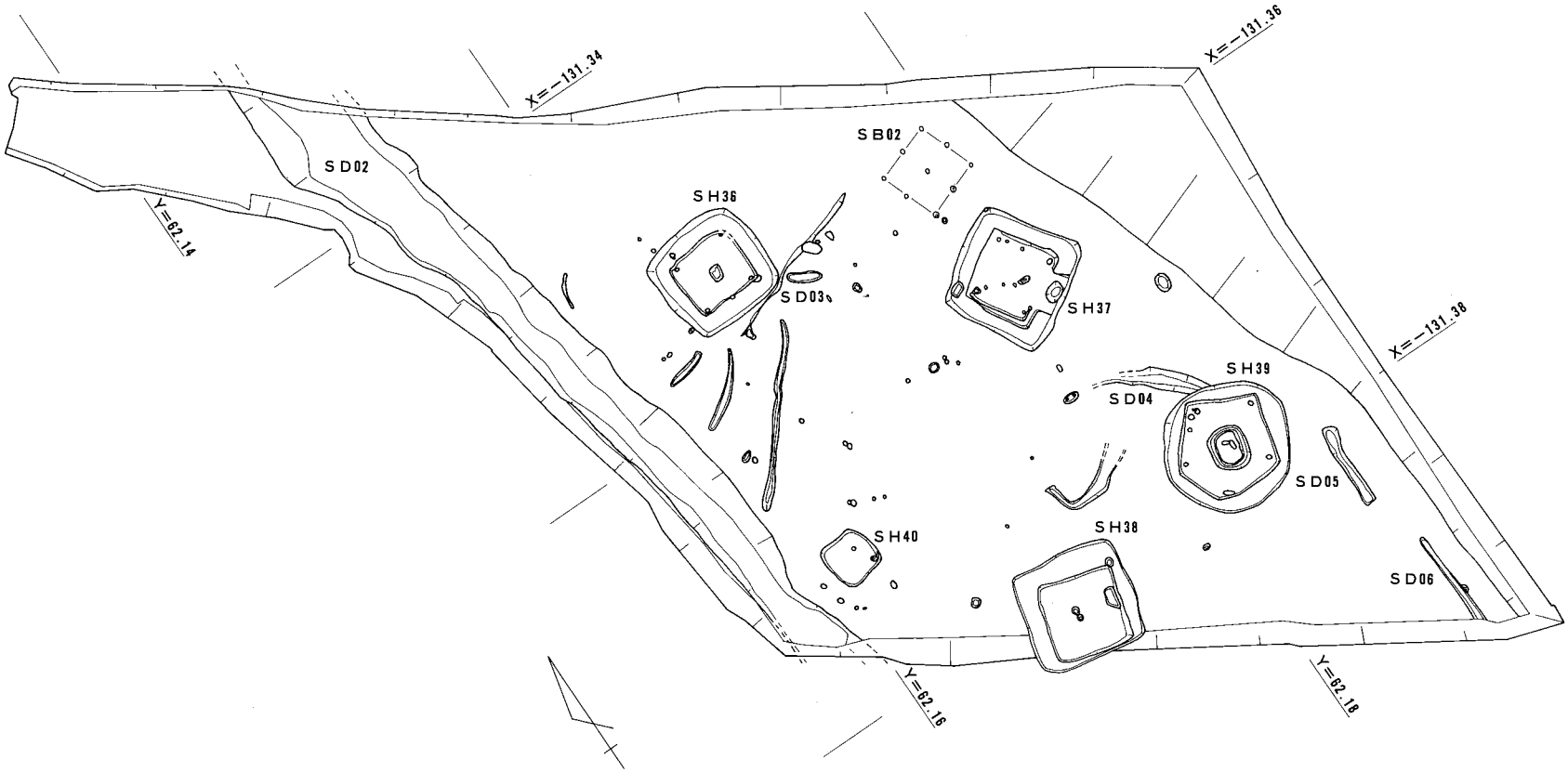
SX02

図版36





(上)SB01　(下)SB02

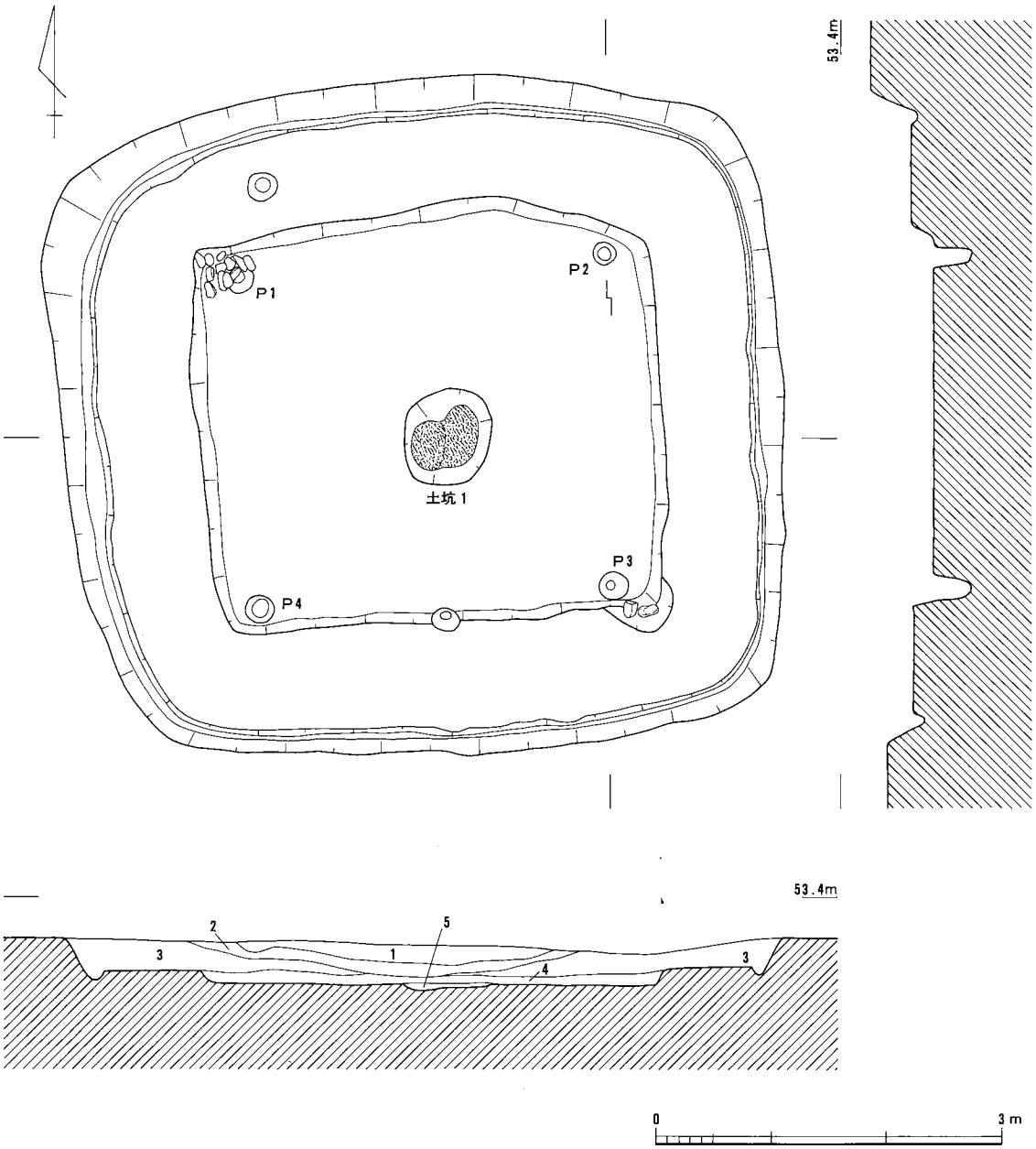


0 20m

C地区全体図（1/400）

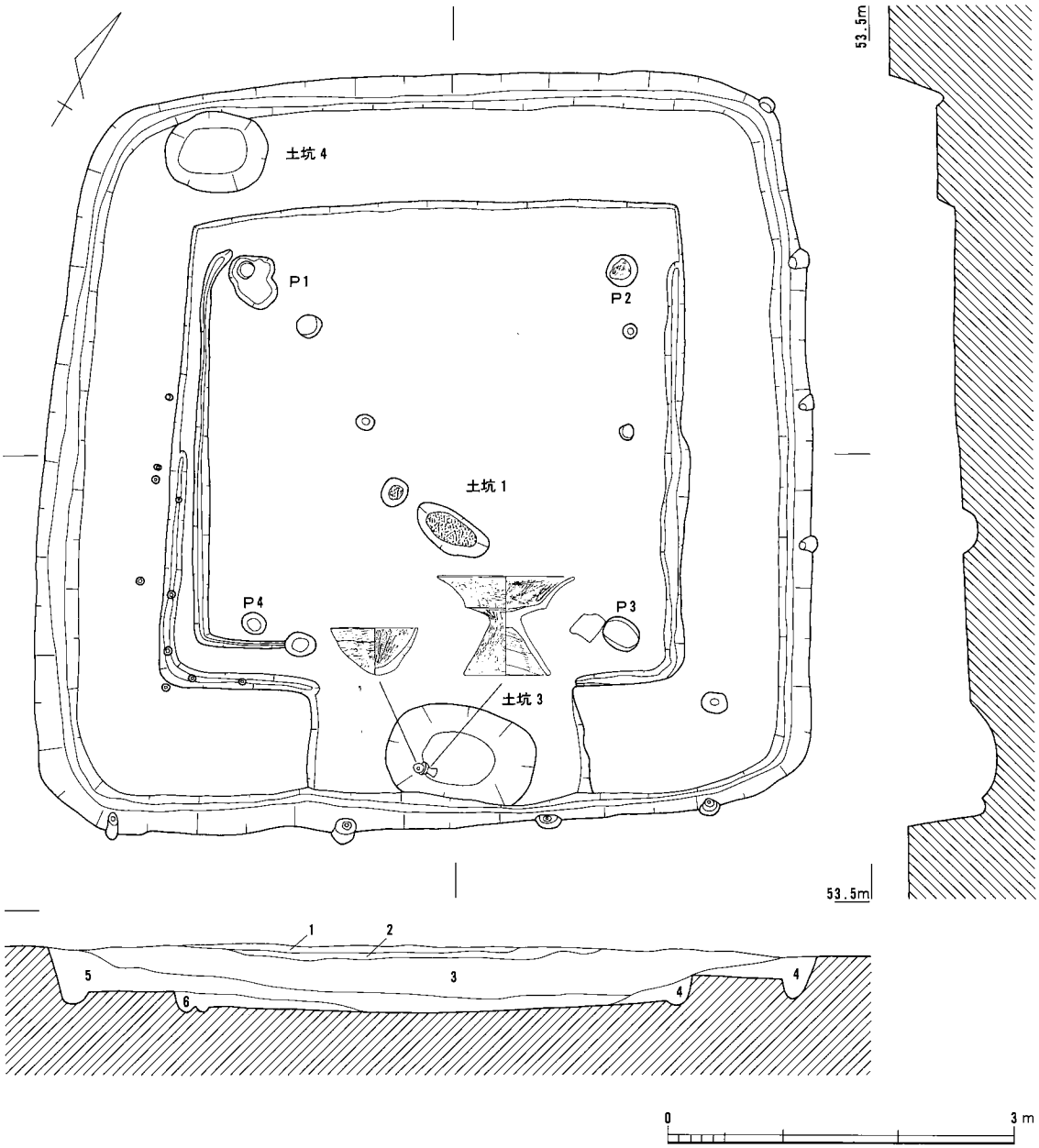
図版37

図版38



1．淡灰色　砂質シルト（炭化物含）
2．白黄色　極細砂混じりシルト（地山ブロック混じる）
3．黄灰色　シルト質極細砂
4．灰色　シルト混じり極細砂～細砂
5．土坑内埋土　炭層

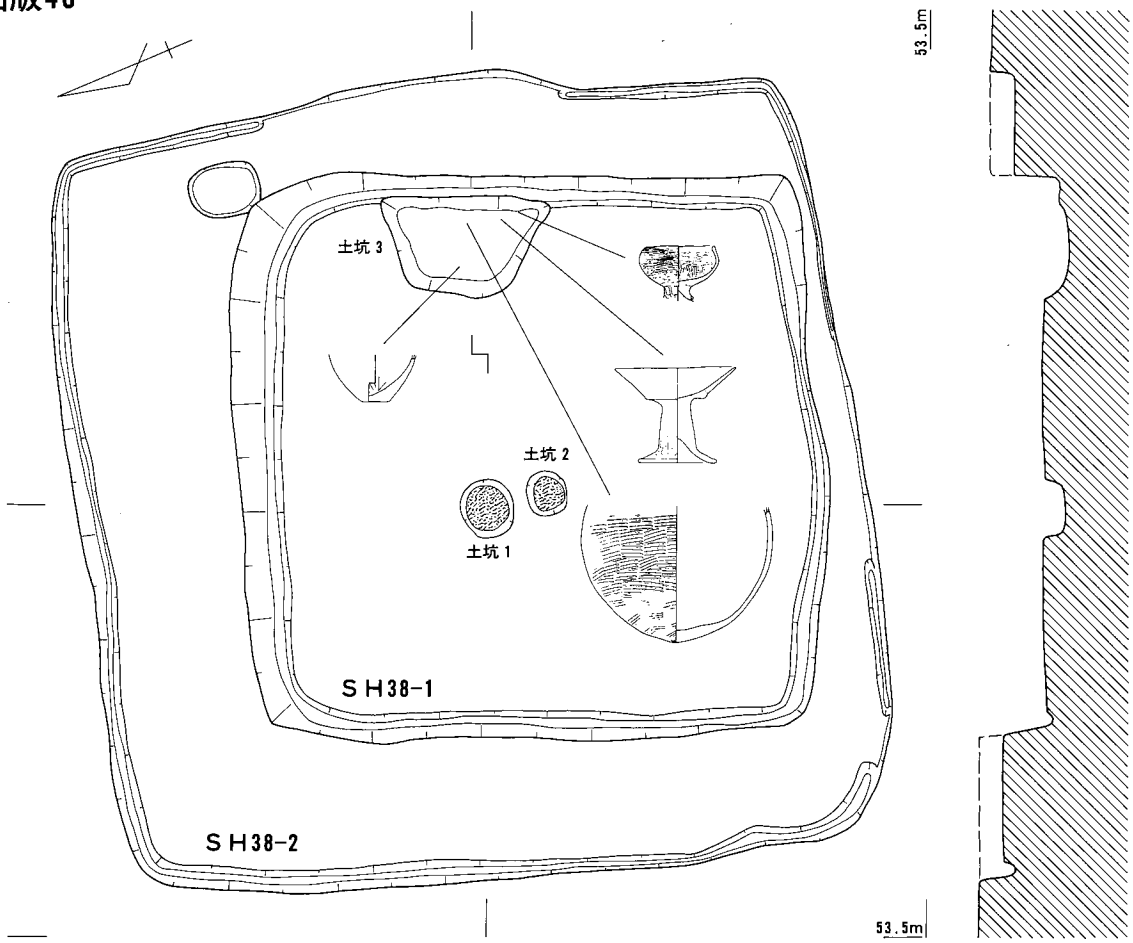
SH36

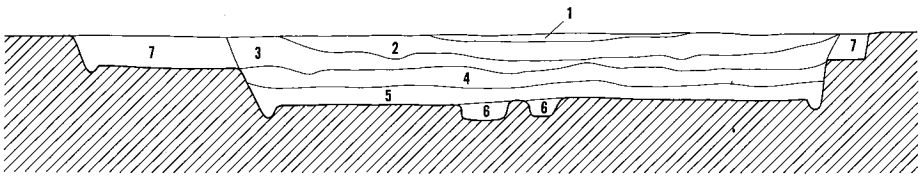


1．黄褐色　シルト混じり細砂～極細砂
2．暗灰色　極細砂混じりシルト
3．灰色　シルト質極細砂（土器片多く含む）
4．暗灰色　極細砂（少量の炭含む）
5．淡灰色　シルト混じり細砂（ベースの白黄色シルト塊混じる）
6．黒灰色　シルト（炭多く含む）

SH37

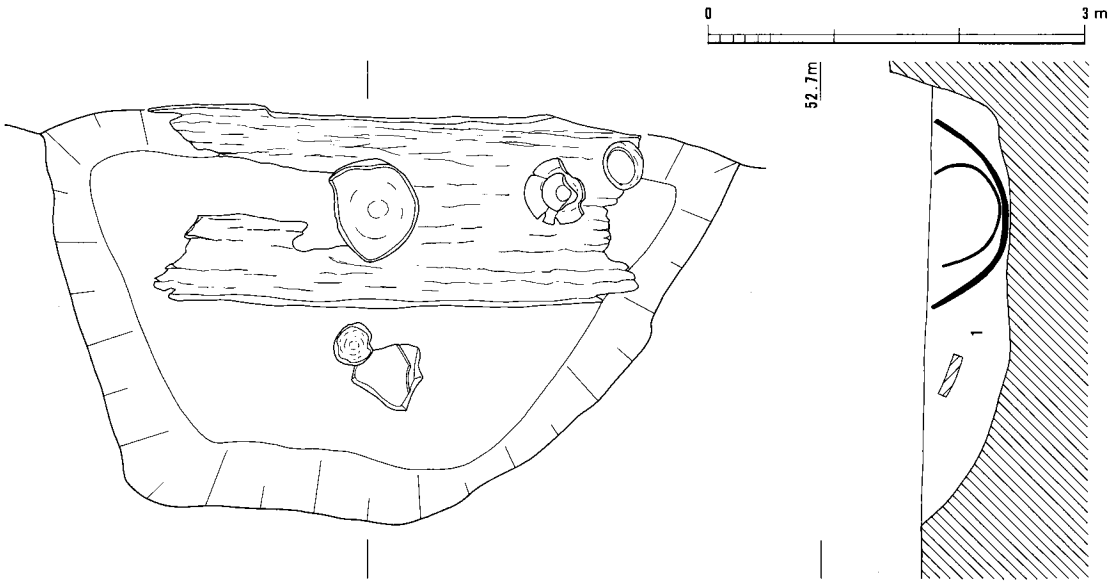
図版40





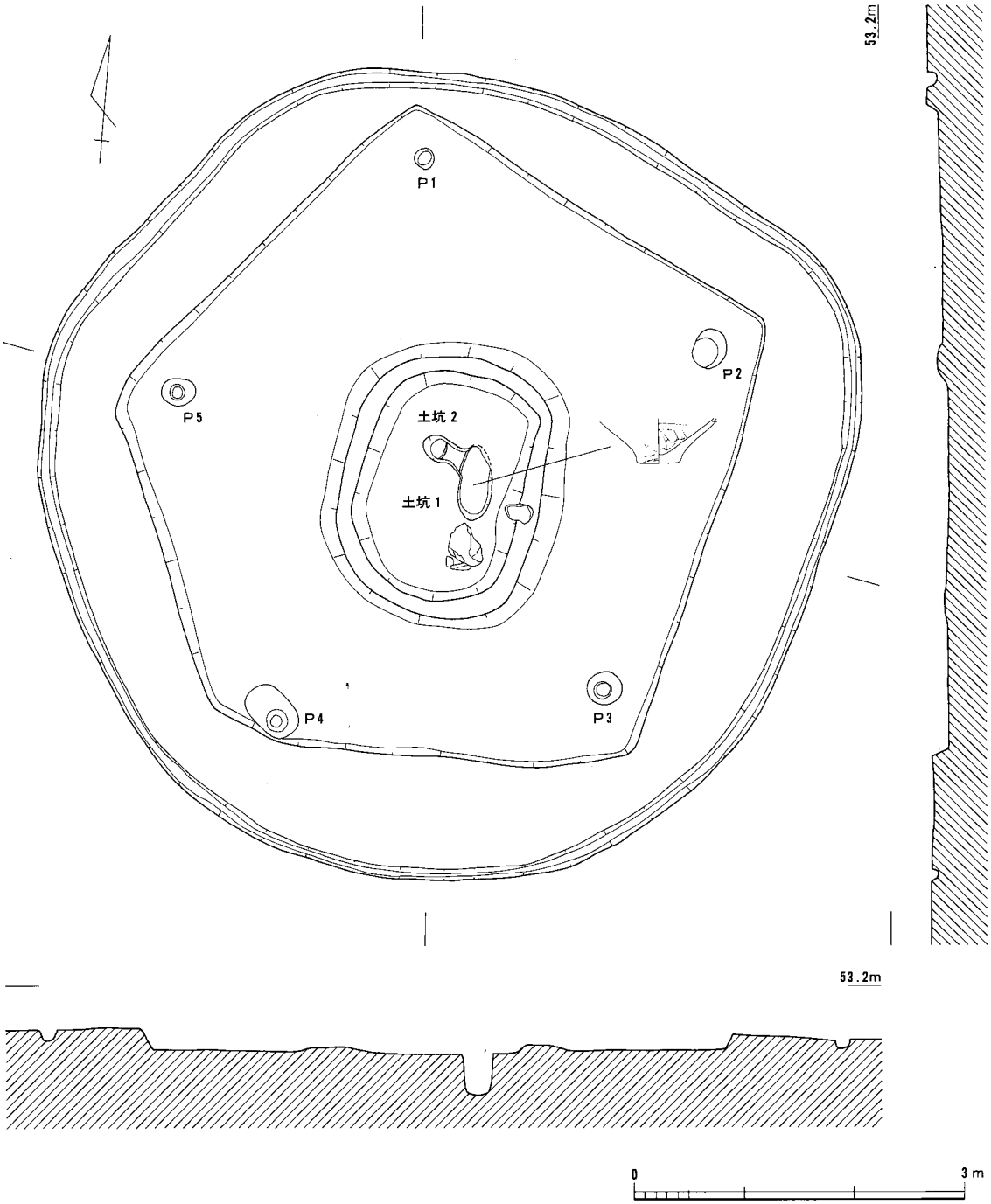
1．暗灰色　シルト混じり細砂
2．暗褐灰色　細砂混じりシルト
3．褐灰色　細砂質シルト
4．灰色　極細砂質シルト
（ベースの白黄色シルト塊混じる）
5．暗灰色　シルト（炭含む）
6．炭層
土器片多く含む
SH38-1埋土

7．淡褐色　極細砂質シルト
（SH38-2埋土）



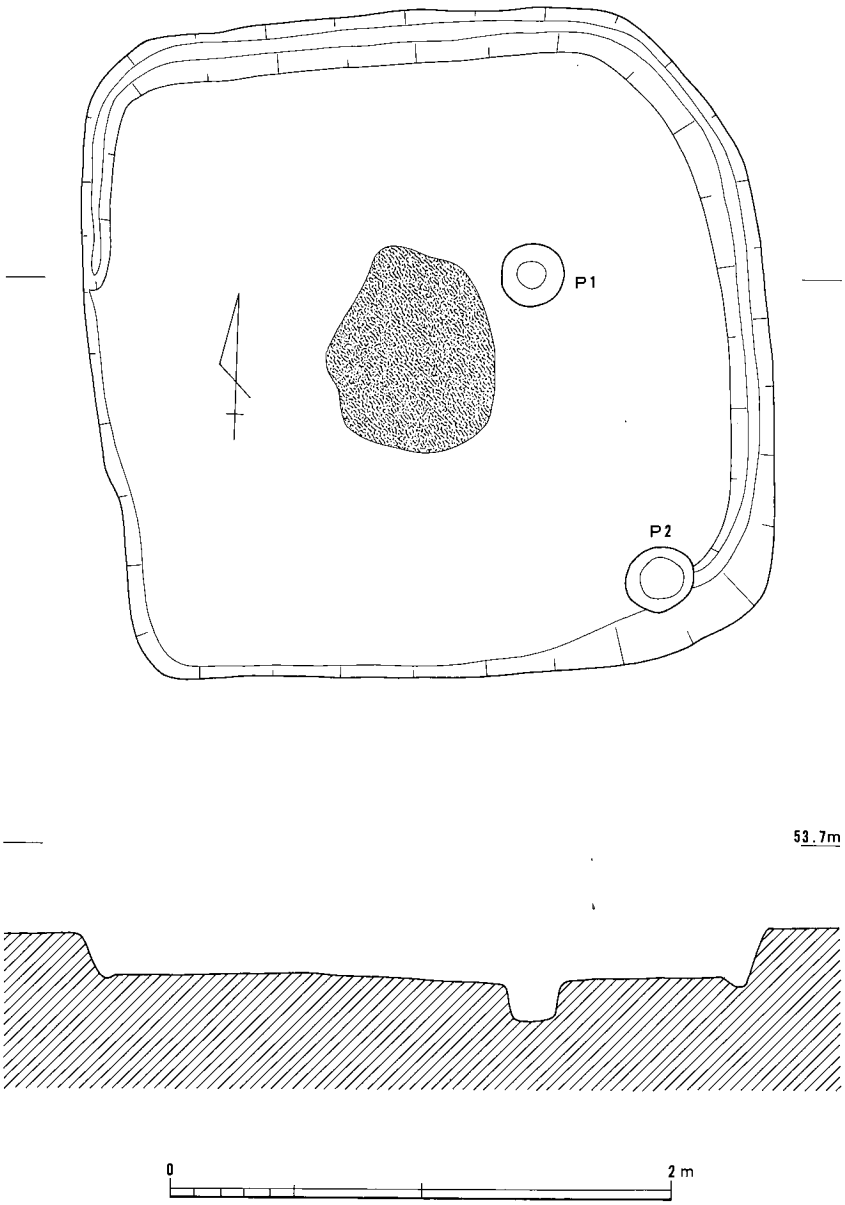
SH38

1．黒灰色　シルト（炭多く含む）

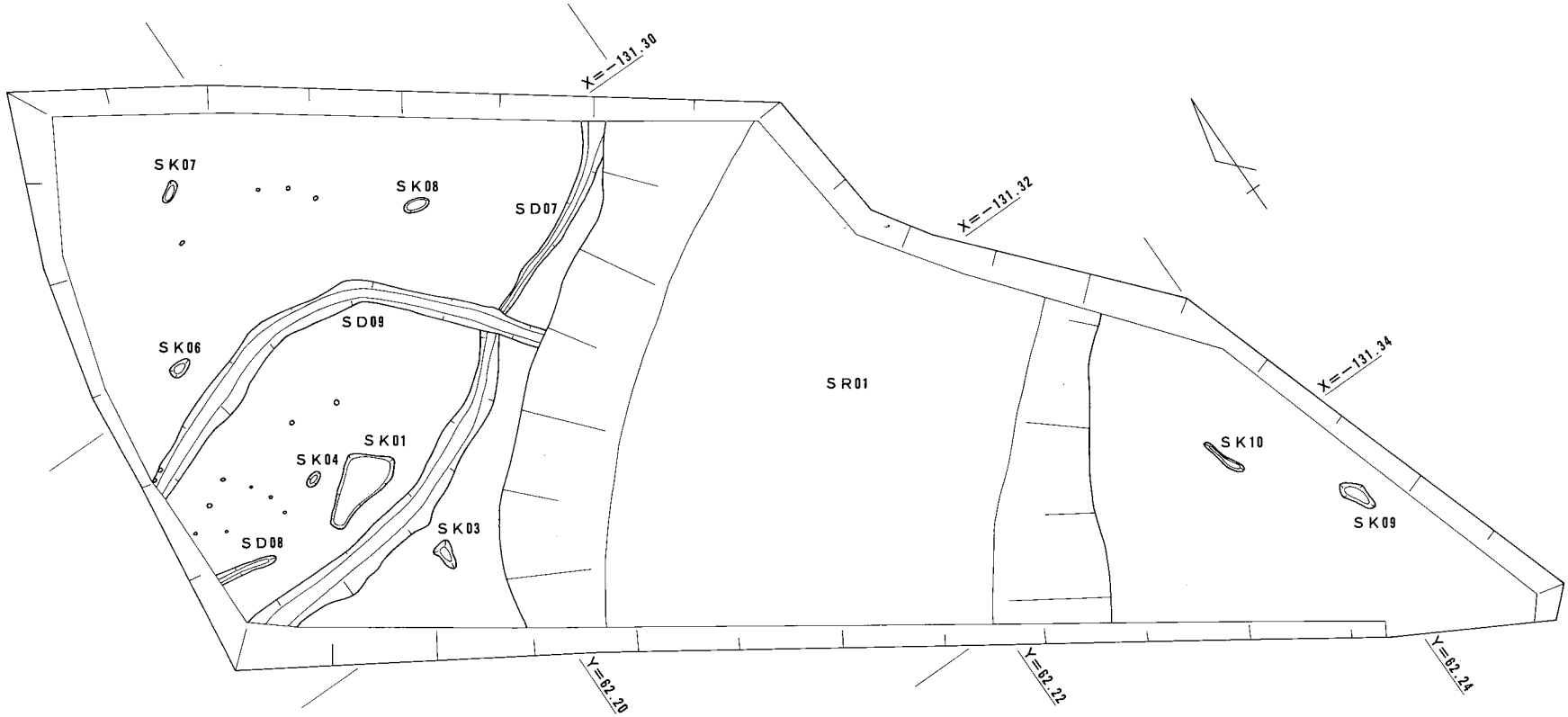


SH39

図版42



SH40

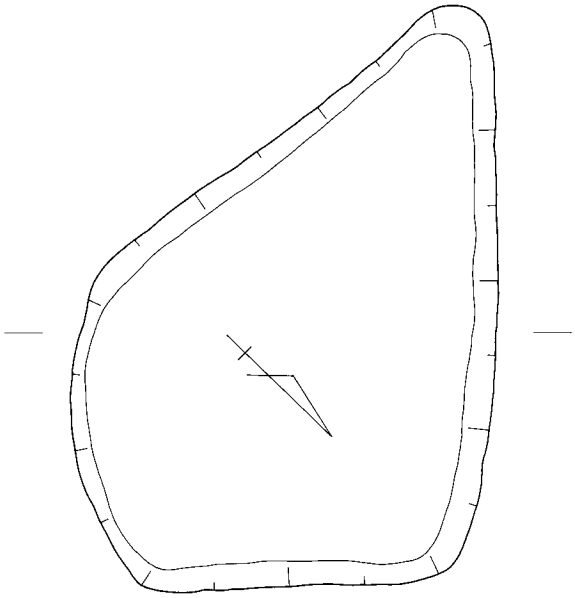


0 20m

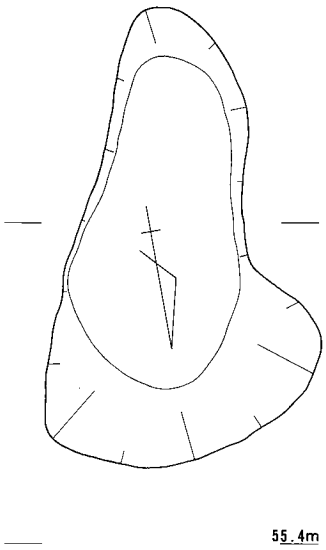
D地区全体図（1/400）

図版43

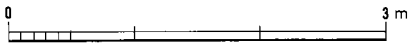
図版44

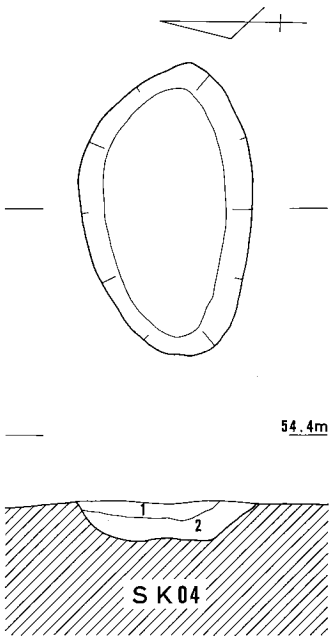


1．暗黒灰色　細砂混じりシルト
2．青灰色　　シルト質極細砂（ブロックで1層含む）

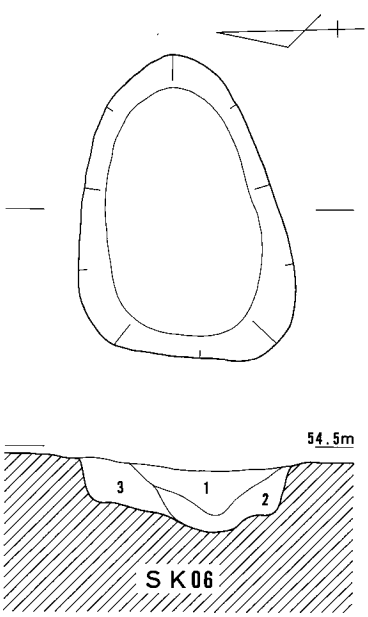


1．暗黒灰色　シルト質極細砂

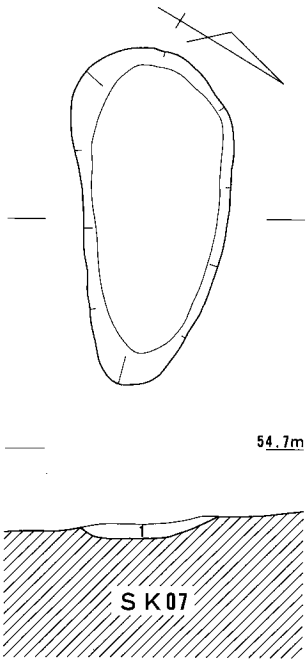




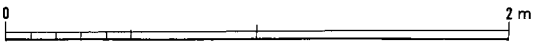
1．暗黒灰色　極細砂混じりシルト
2．青灰色　　シルト質極細砂



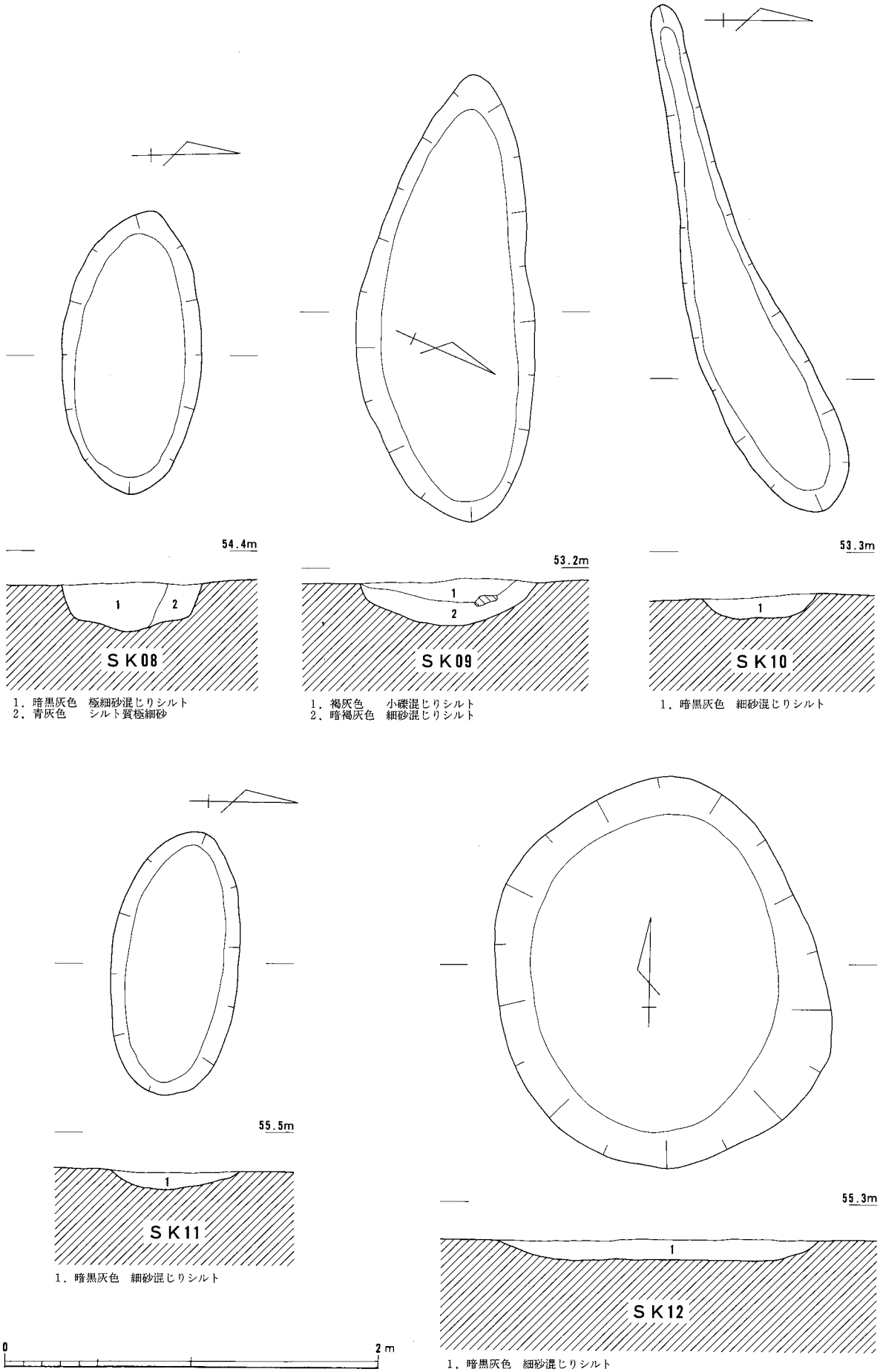
1．黒色　　シルト質極細砂（炭化物多い）
2．灰褐色　　極細砂混じりシルト
3．暗黒灰色　細砂混じりシルト



1．暗黒灰色　シルト質極細砂

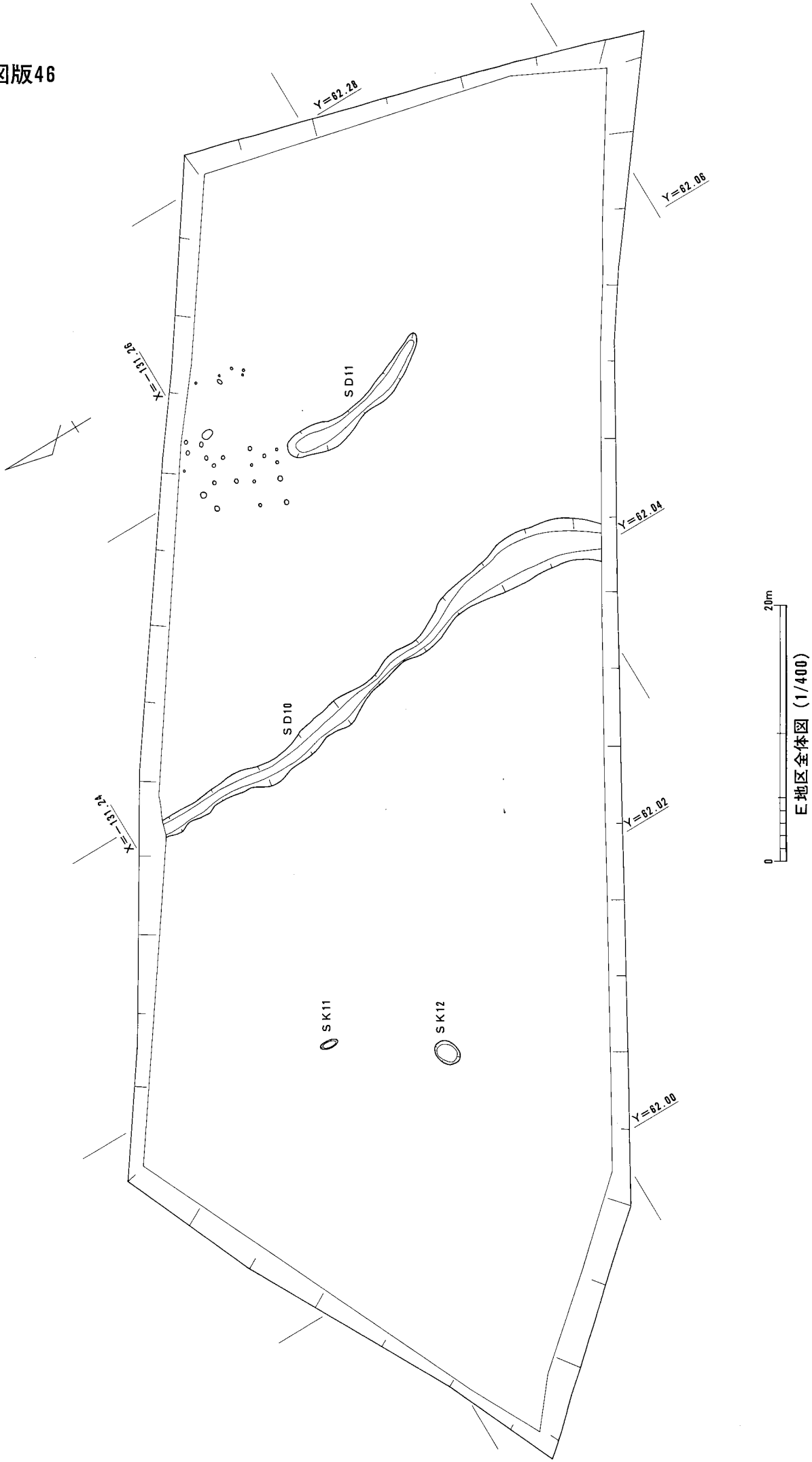


SK01・03・04・05・06

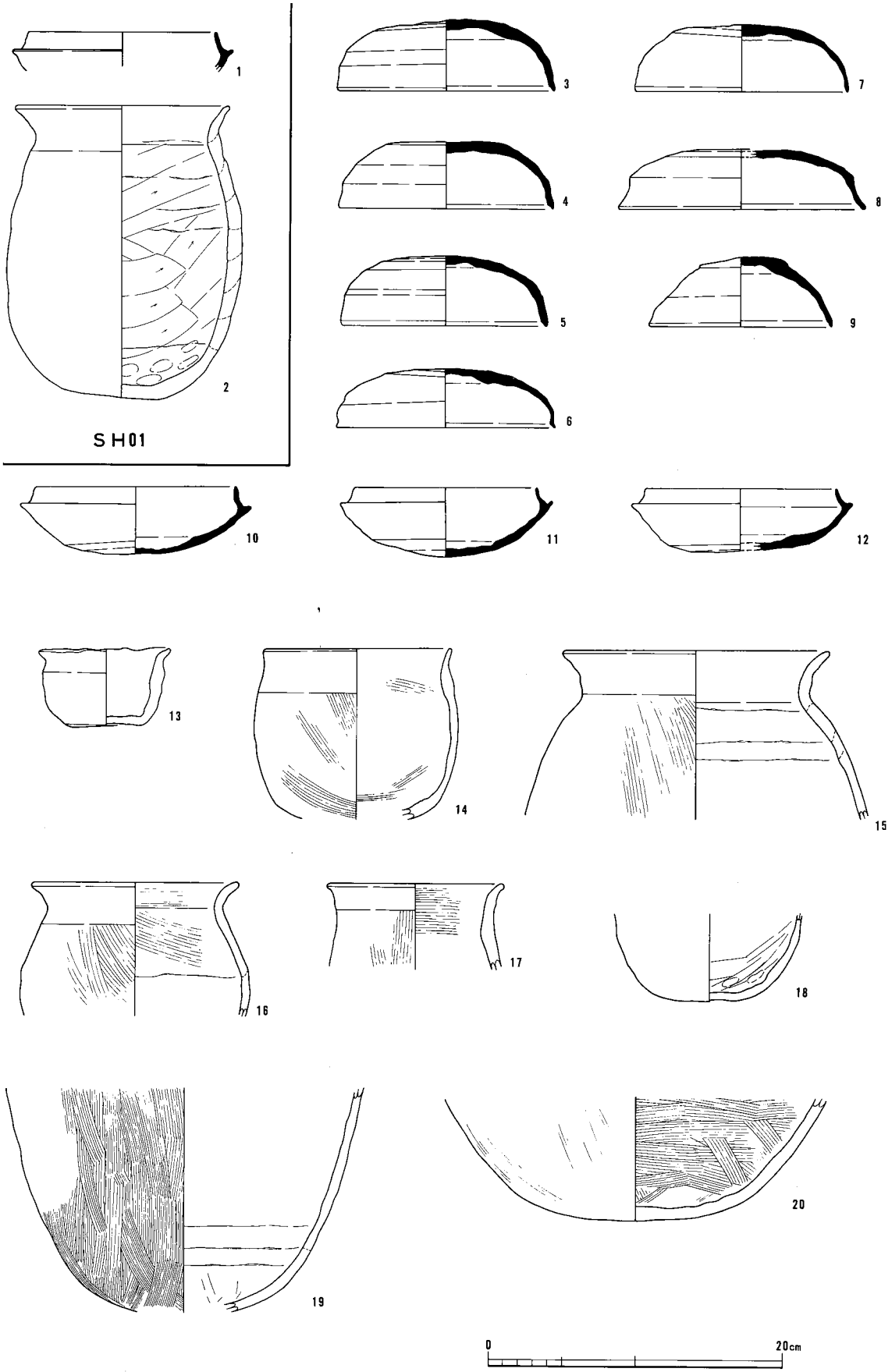


SK08・09・10・11・12

図版46

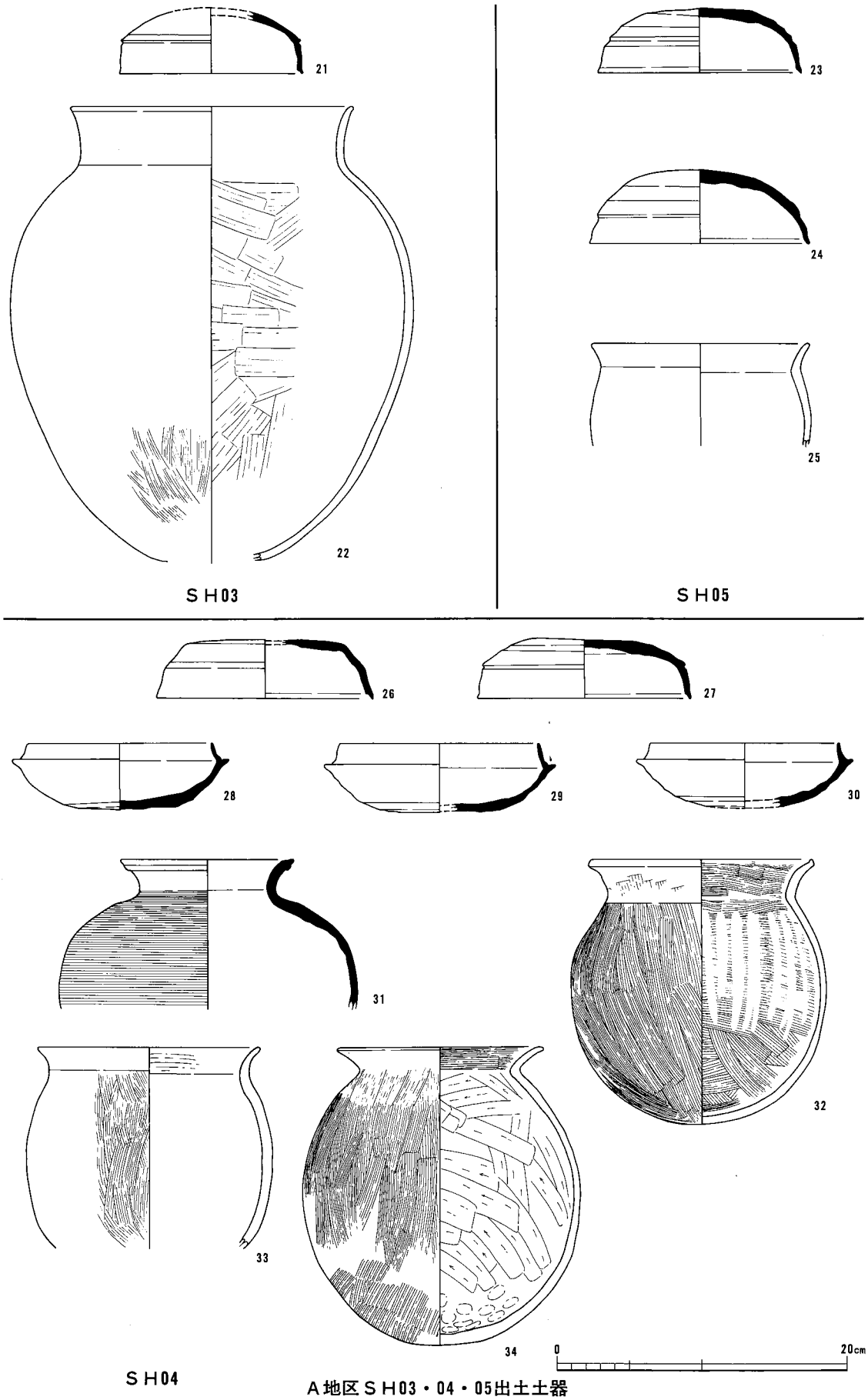


E地区全体図（1/400）

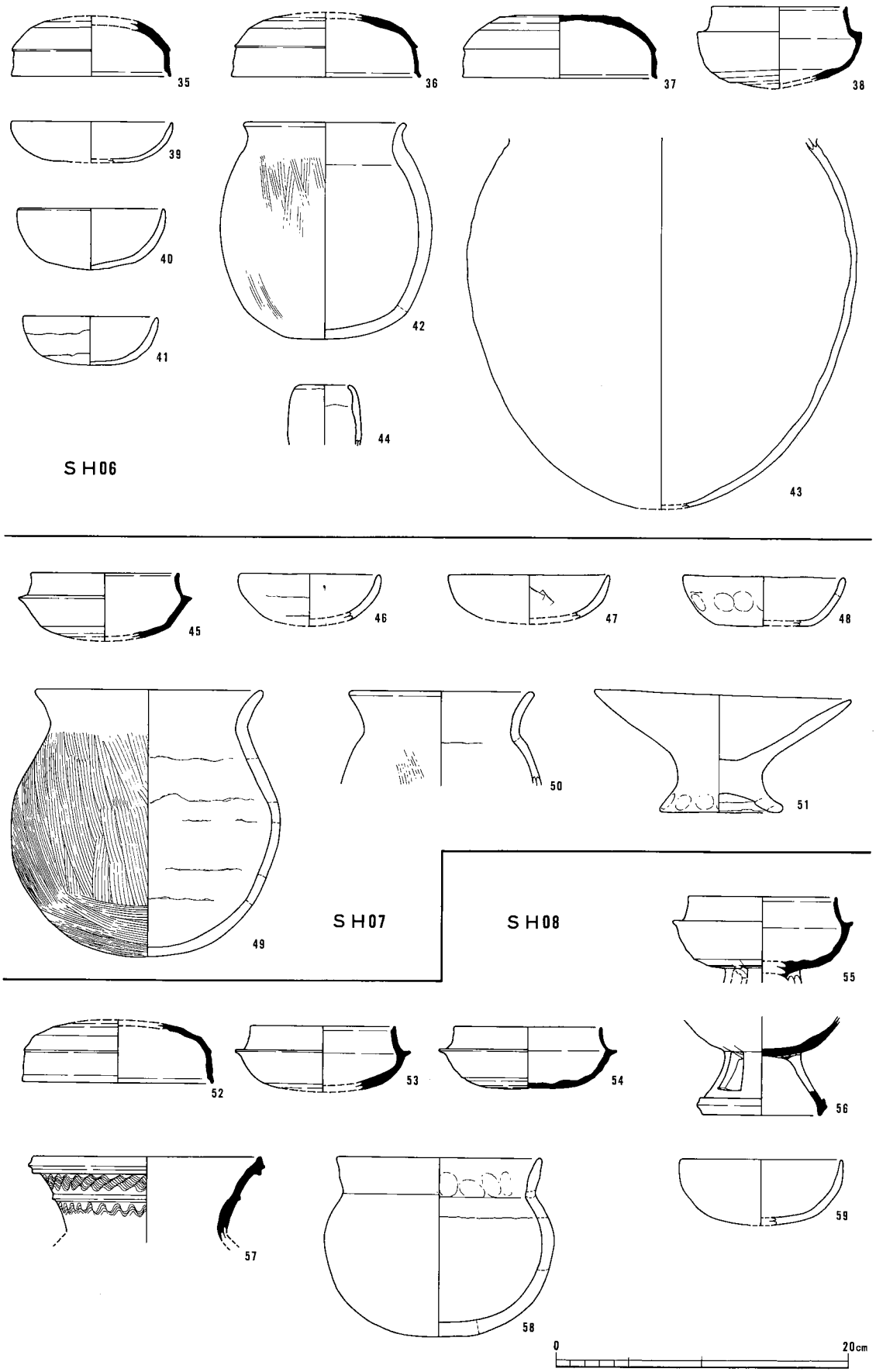


A地区SH01・02出土土器

図版48

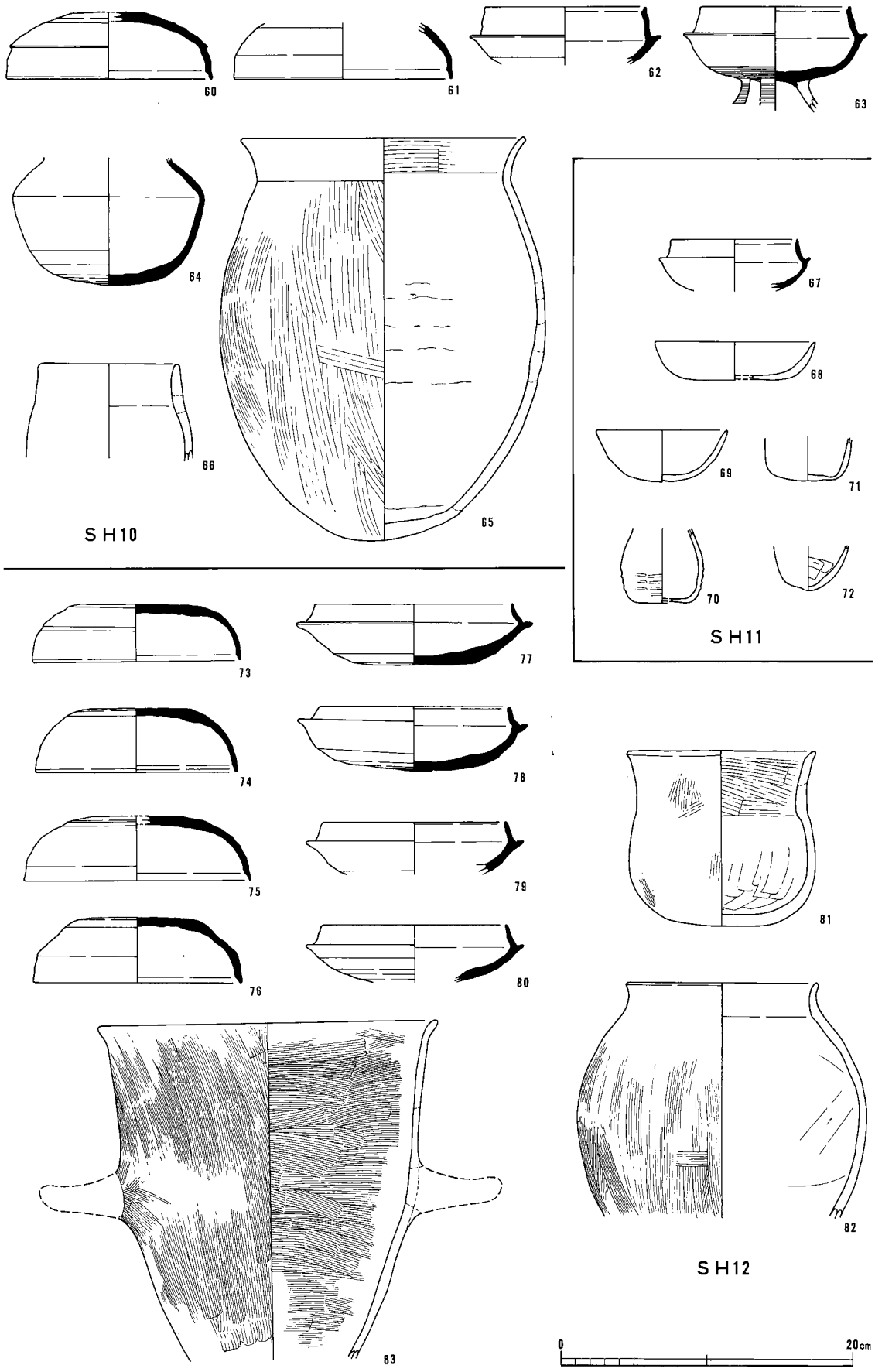


A地区SH03・04・05出土土器

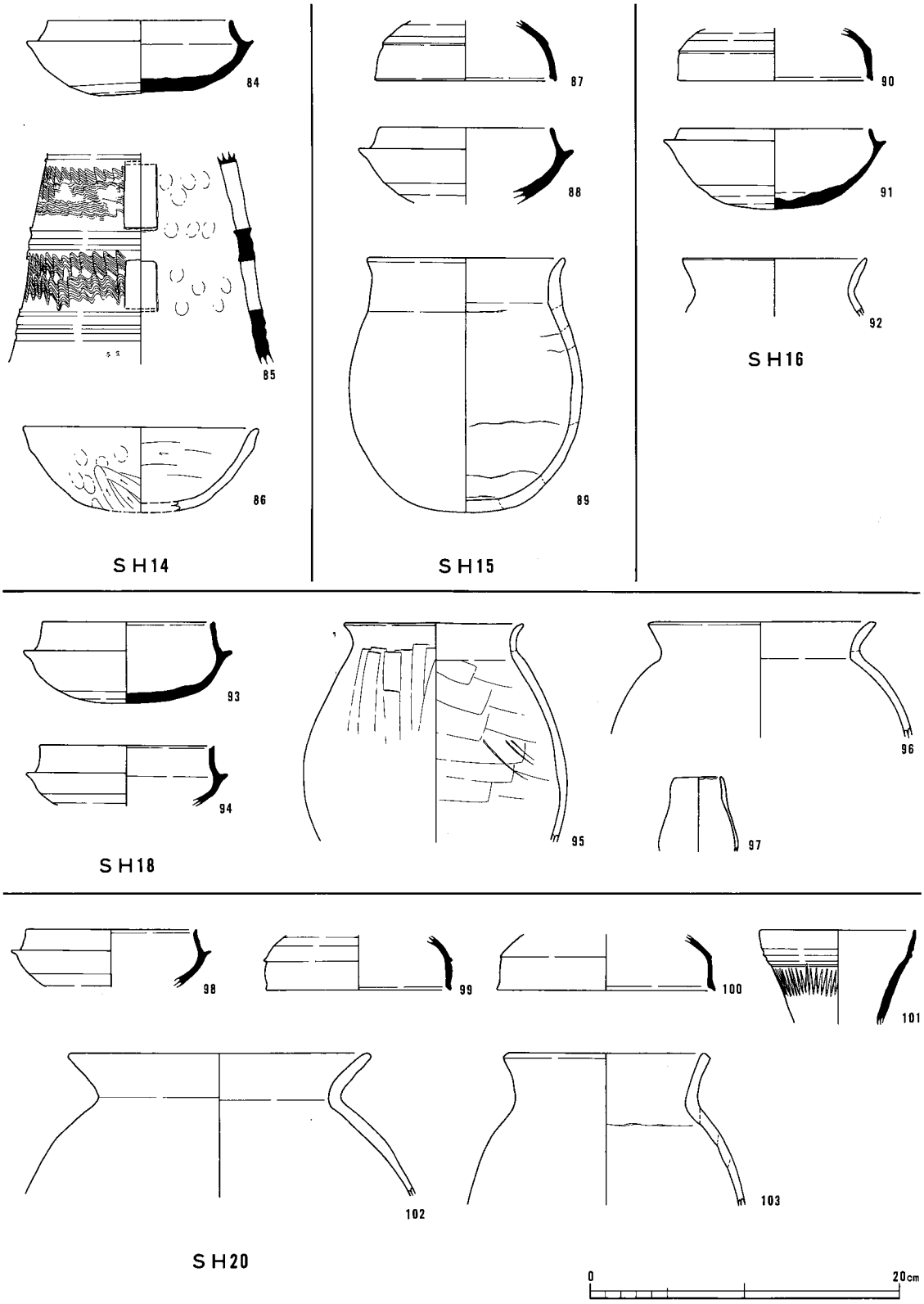


A地区SH06・07・08出土土器

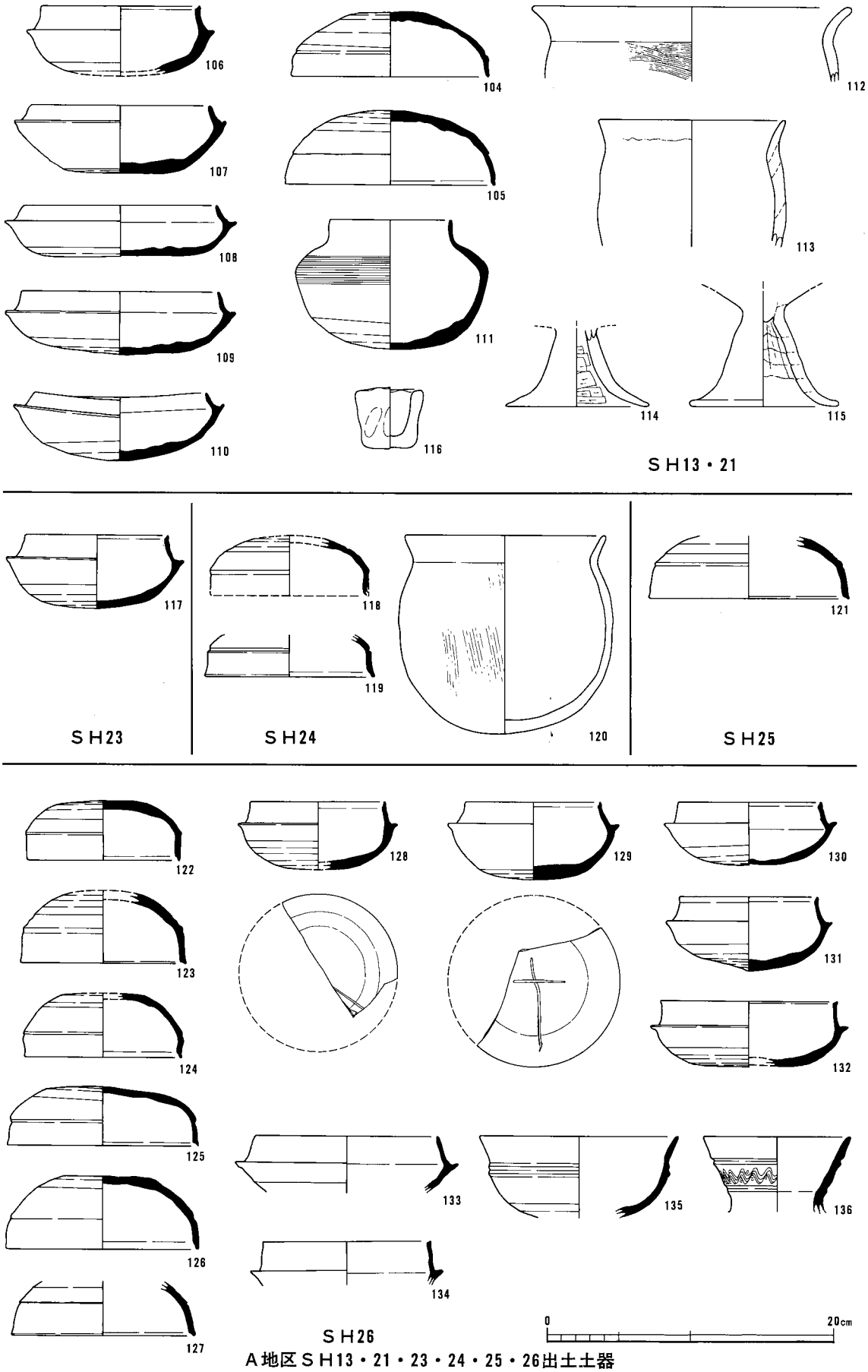
図版50



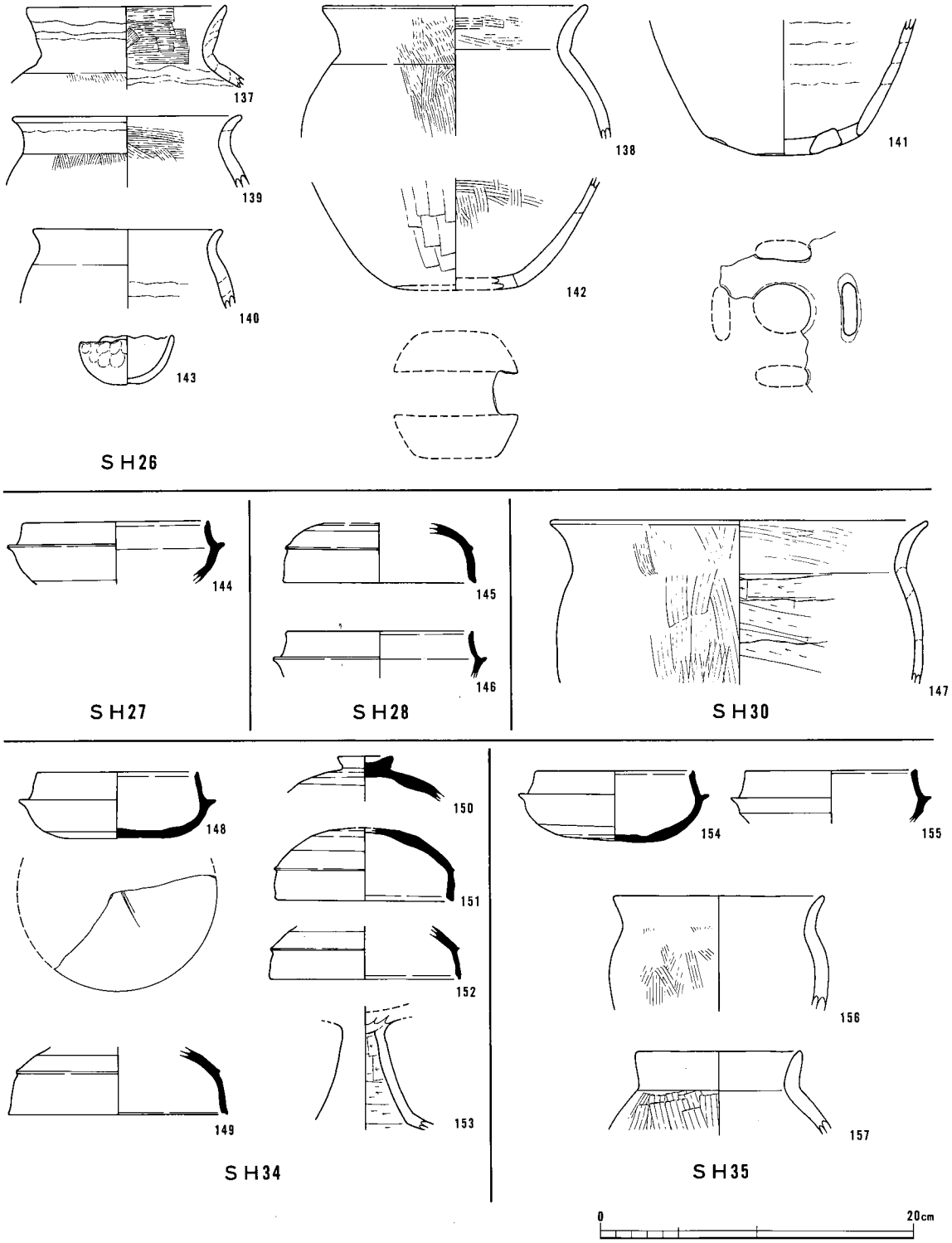
A地区SH10・11・12出土土器



A地区SH14・15・16・18・20出土土器

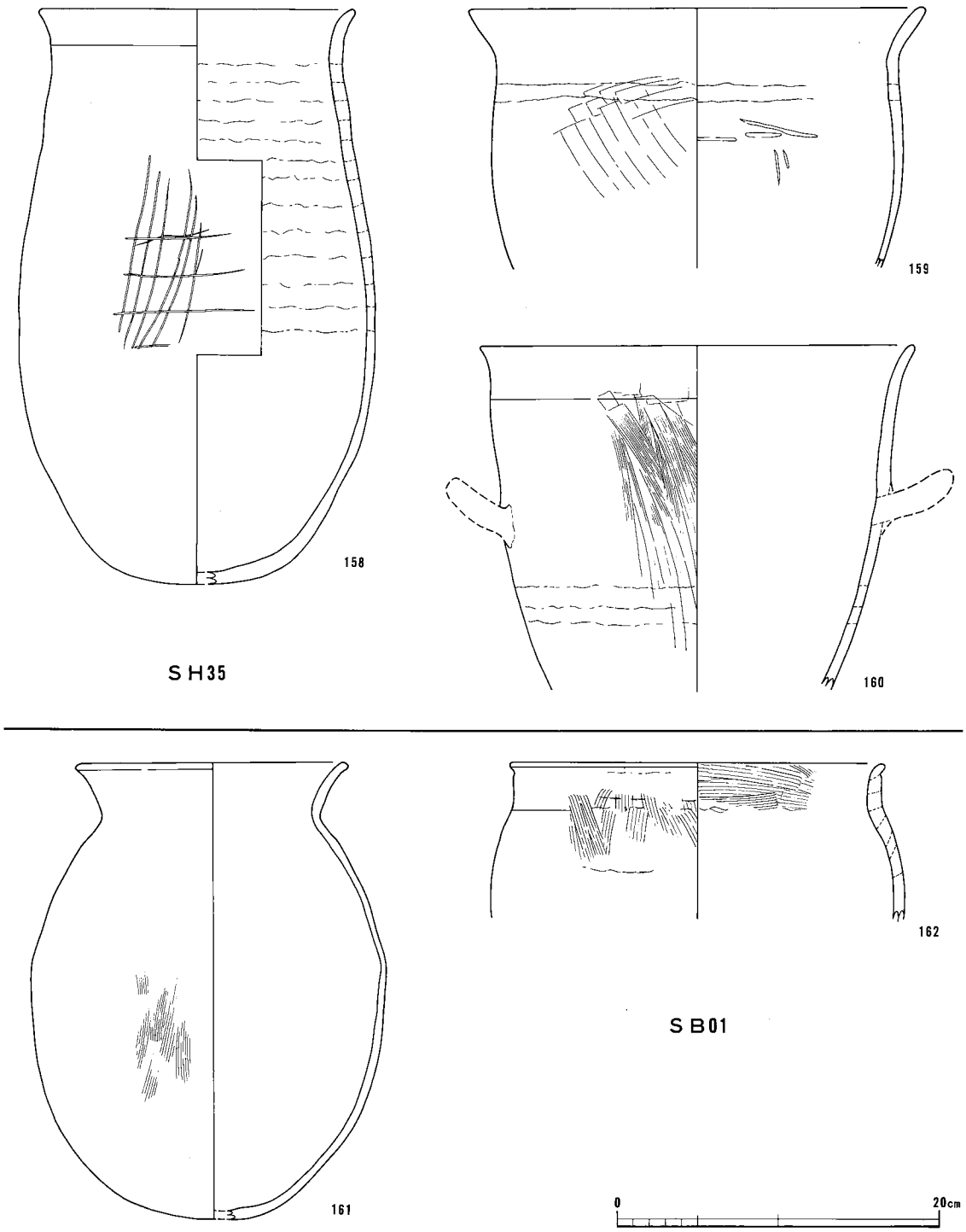


A地区SH13・21・23・24・25・26出土土器

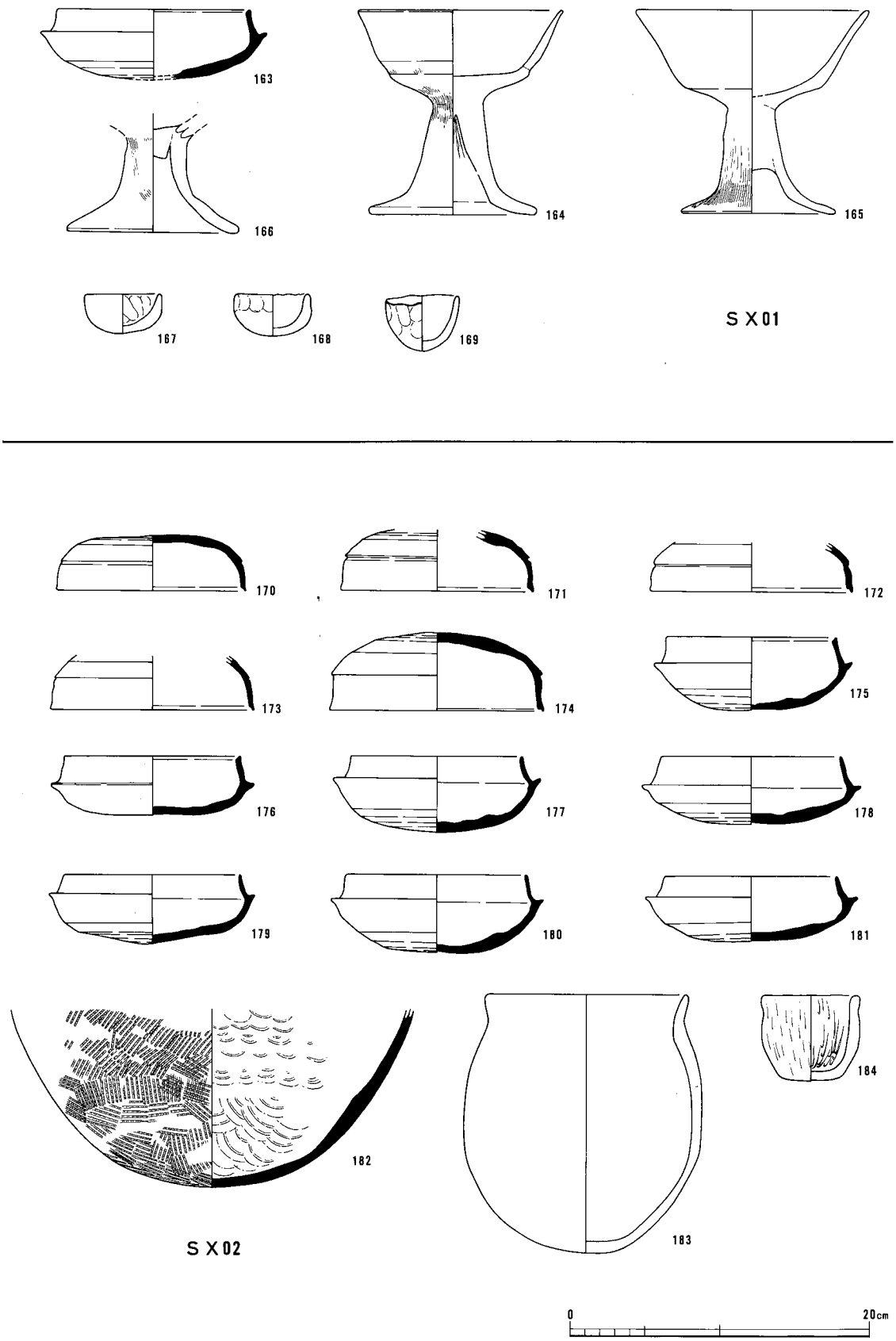


A地区SH26・27・28・30・34・35出土土器

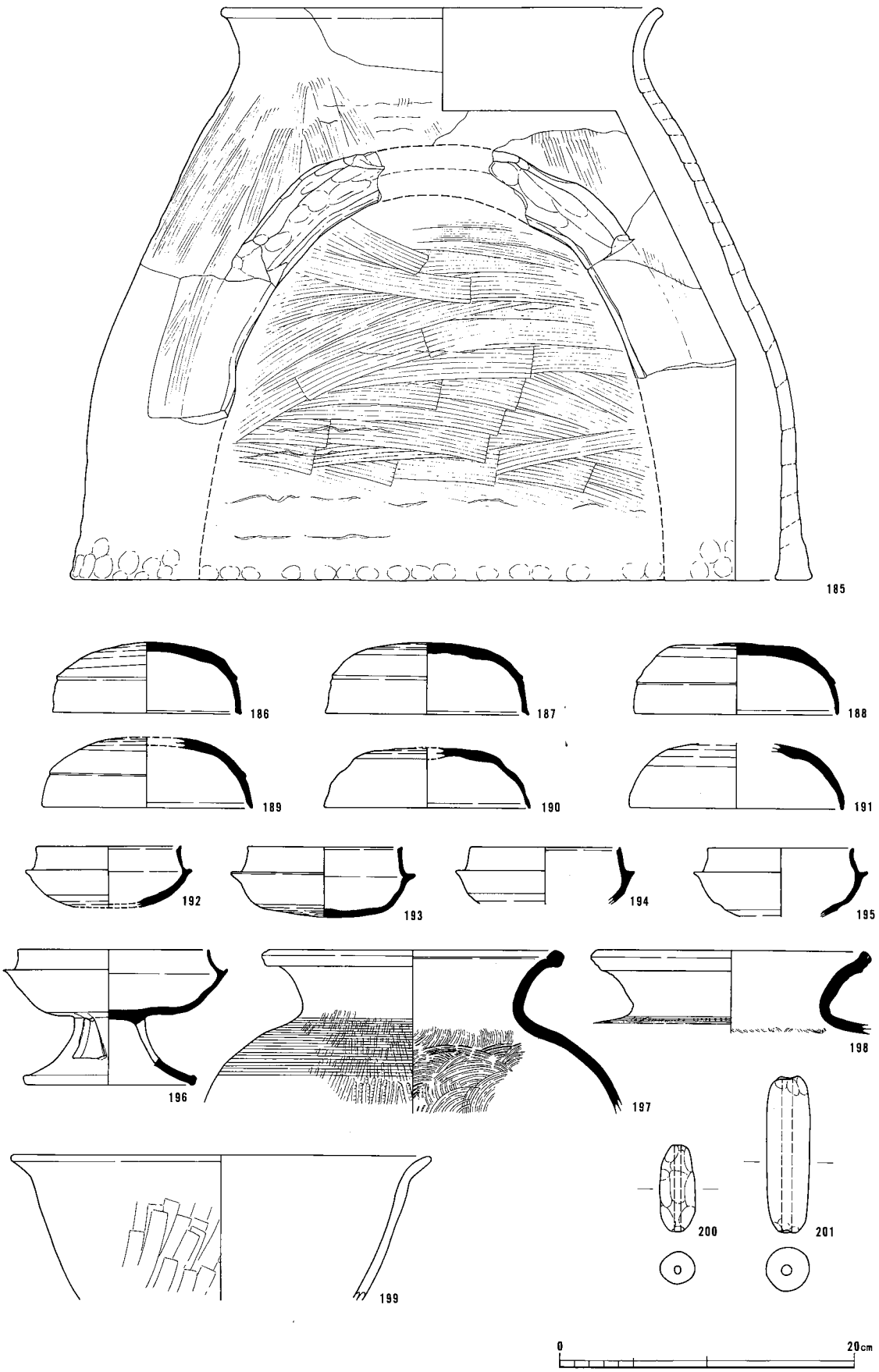
図版54



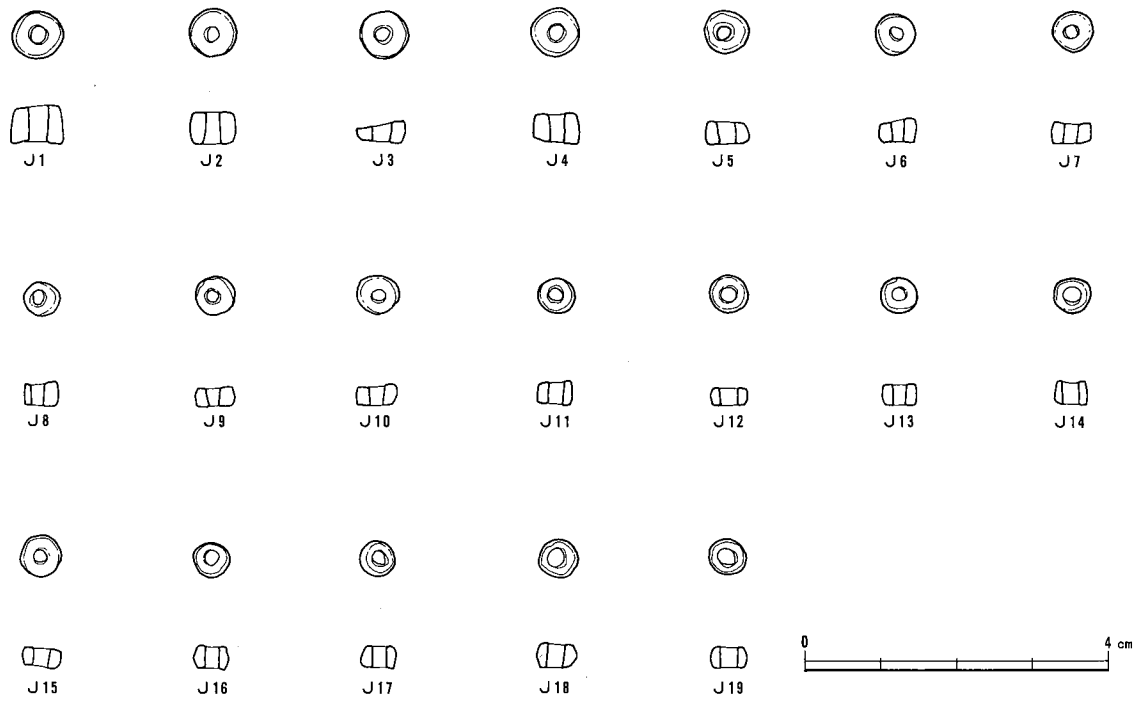
A地区SH35・SB01出土土器

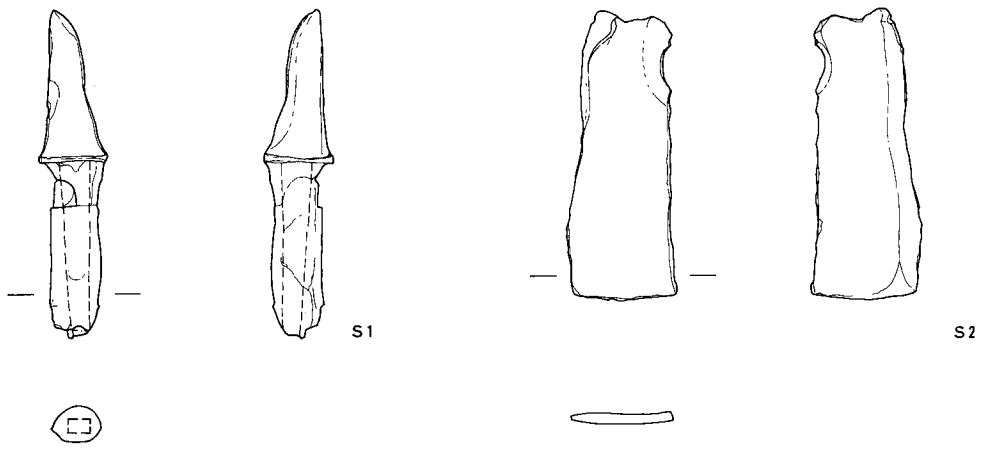


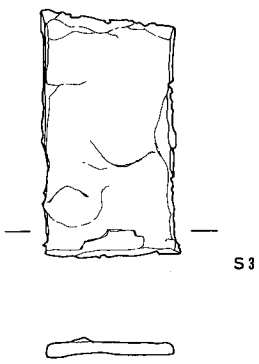
A地区SX01・SX02出土土器

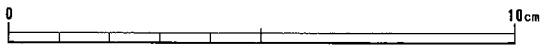

185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
0
20cm

A地区包合層出土土器



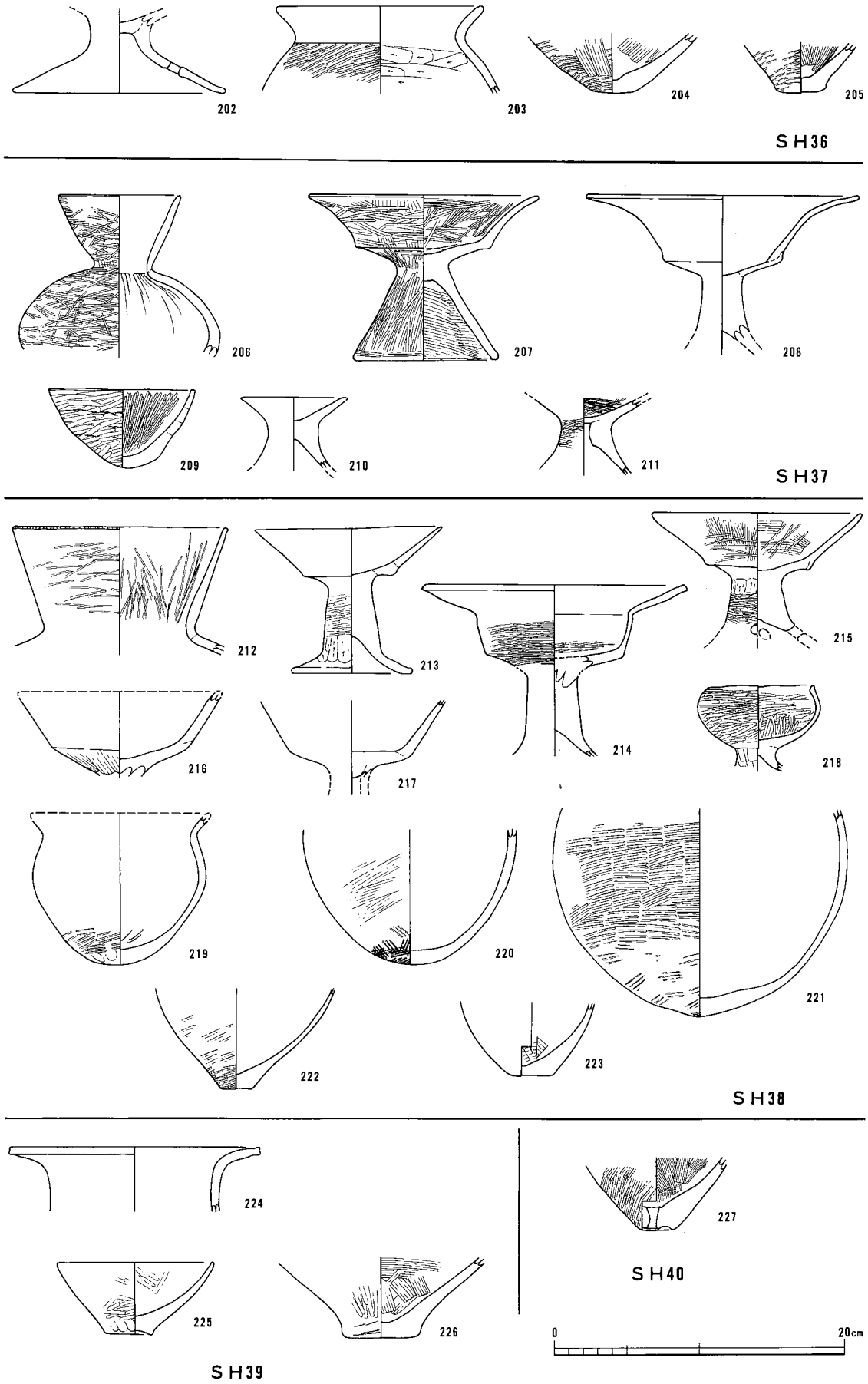




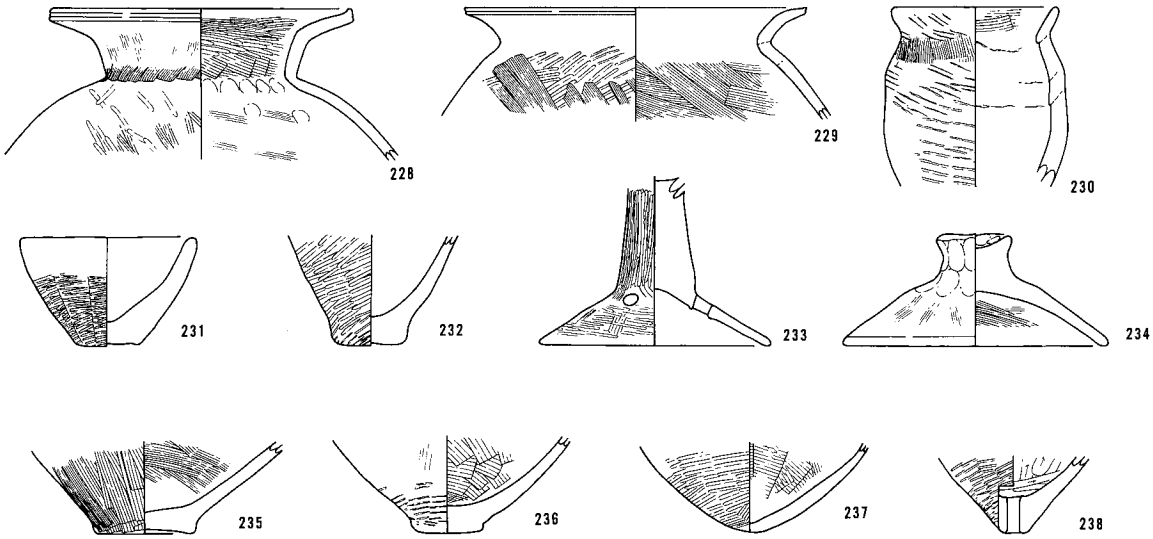


A地区出土玉類・出土鉄器

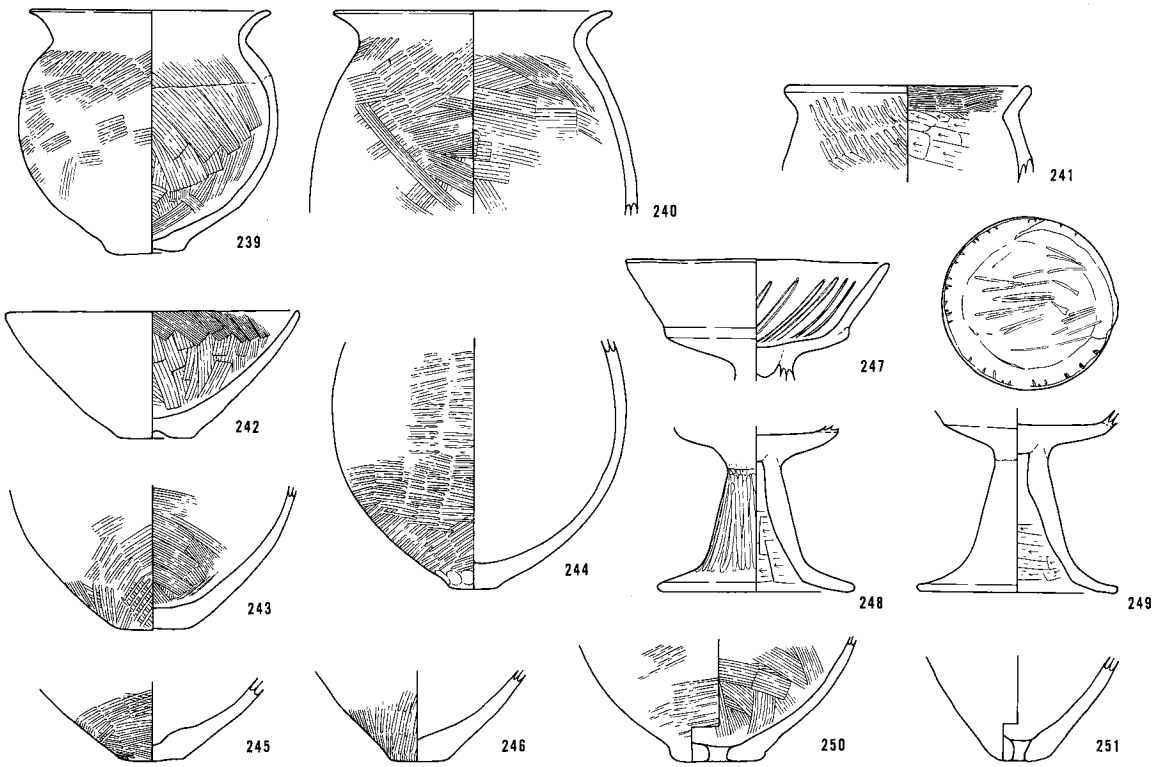
図版58



C地区SH36・37・38・39・40出土土器



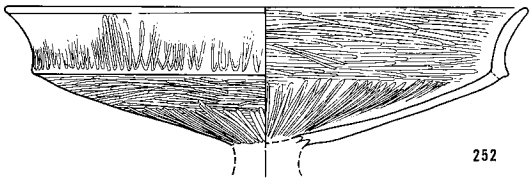
SD02

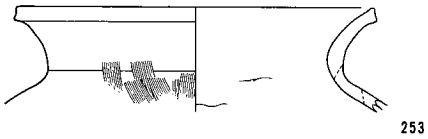


C地区包含層

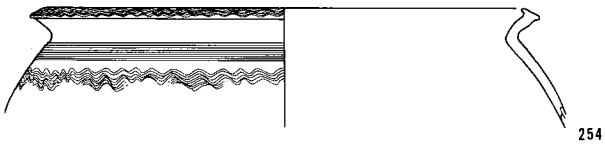
0 20cm

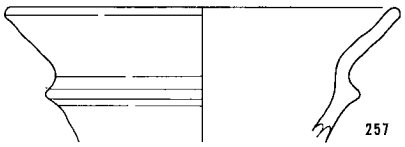
C地区SD02・包合層出土土器

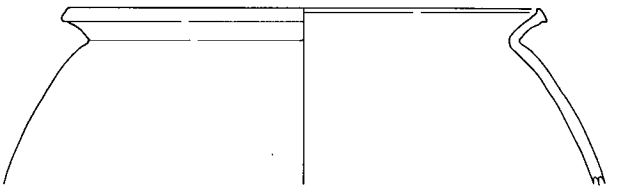


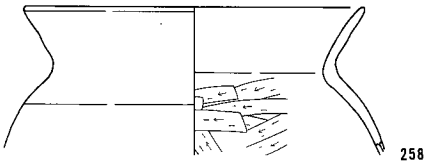


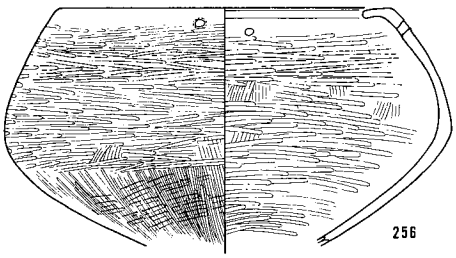
SK08

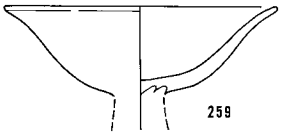


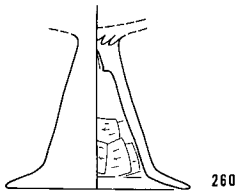


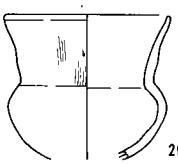


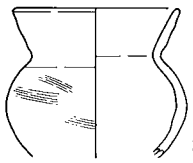




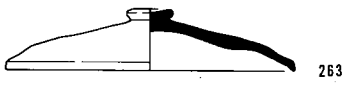




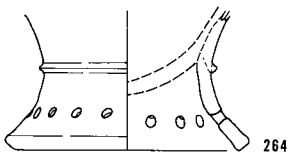




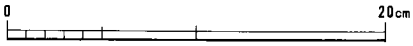
SD07



SD10



D地区包含層

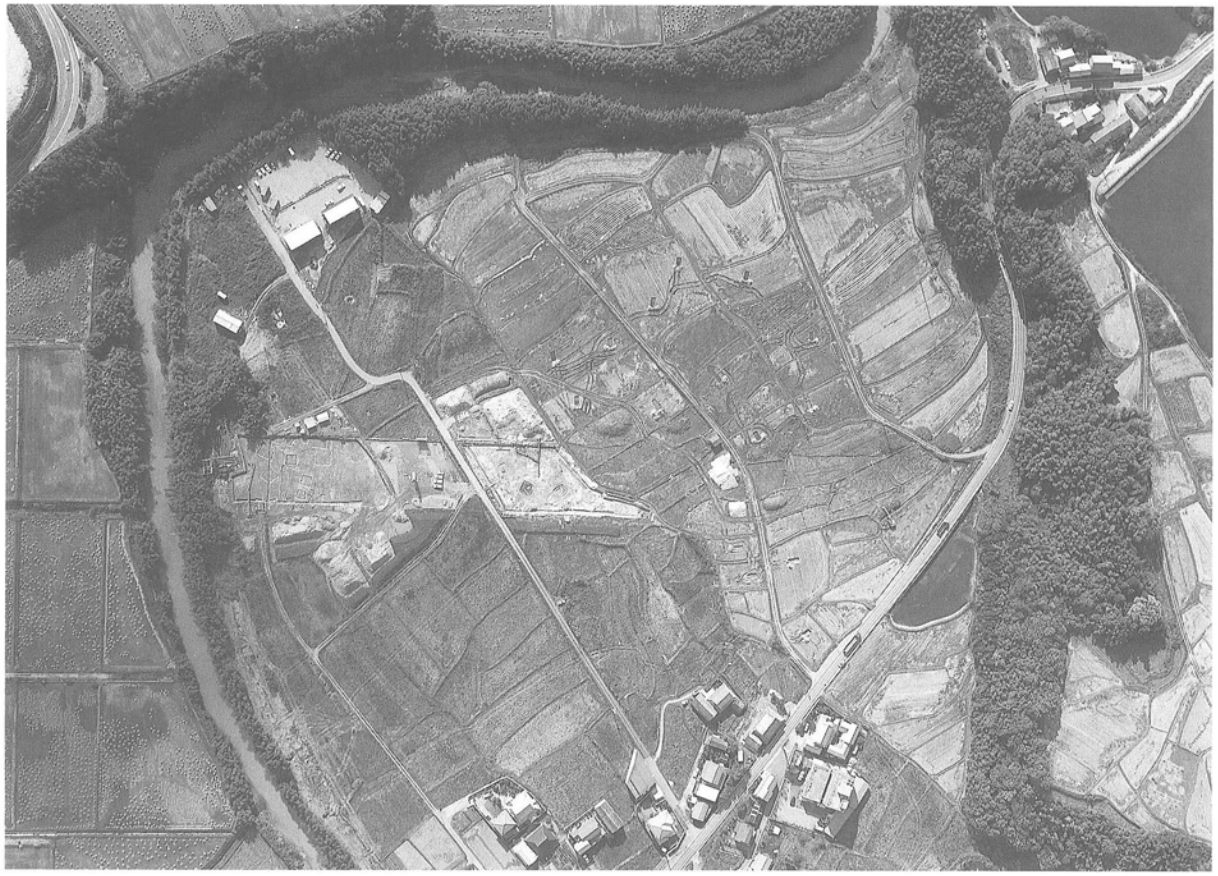


D地区SK08・SD07・SD10・包合層出土土器

写真図版

西ケ原遺跡の位置（国土地理院撮影）

遺跡の遠景（南から）



遺跡上空から

A地区東部遺構検出状況（上空から）

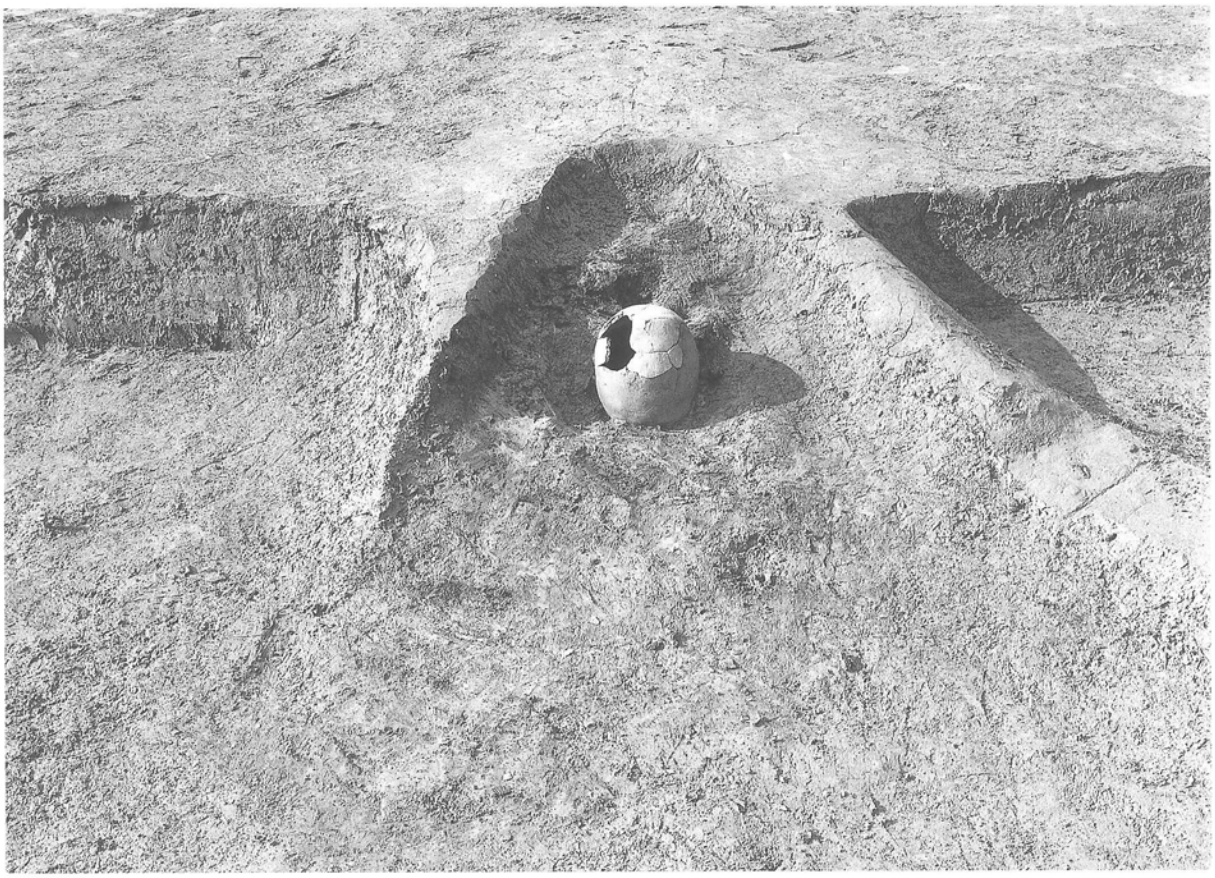
A地区中央部遺構検出状況（上空から）

A地区東部遺構検出状況（北西から）

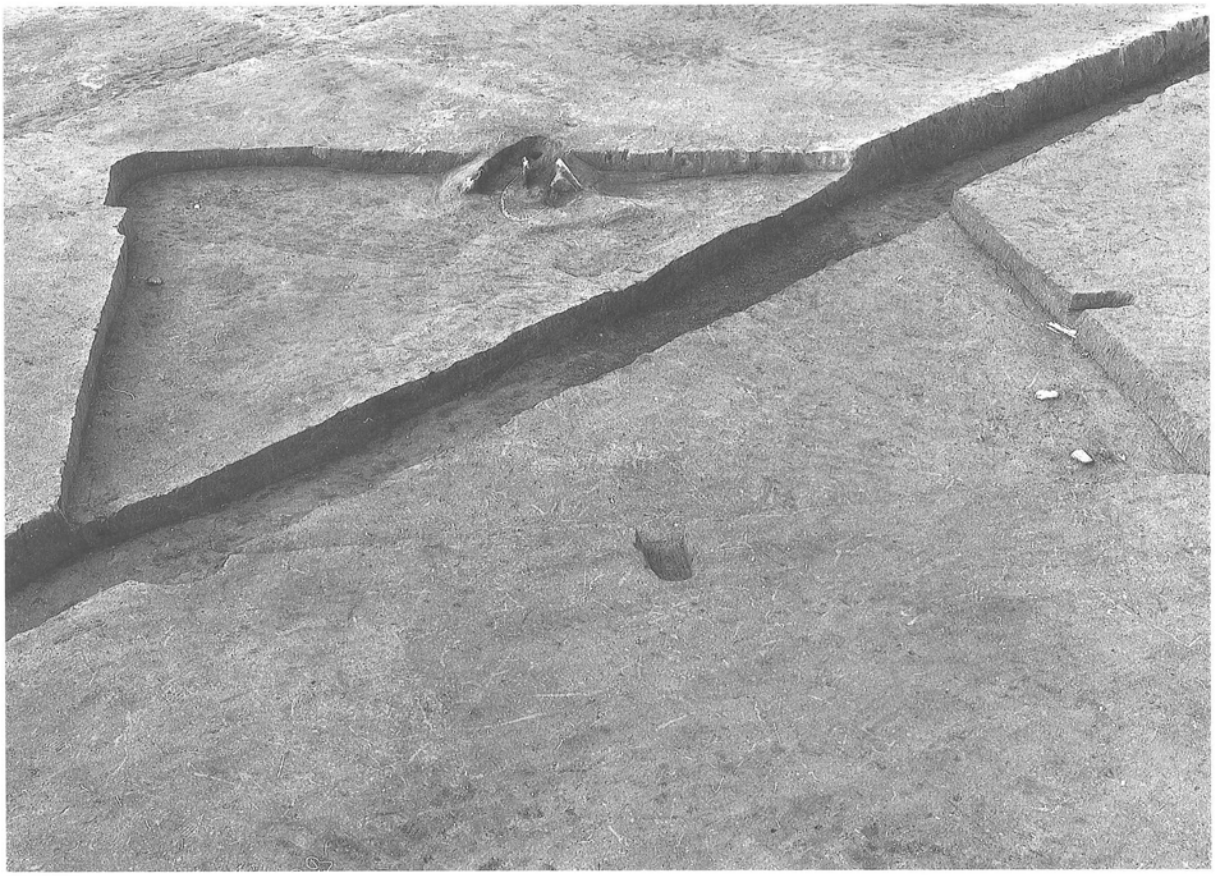
A地区中央部遺構検出状況（北西から）

SH01　全景（南東から）

SH01　カマド（南東から）



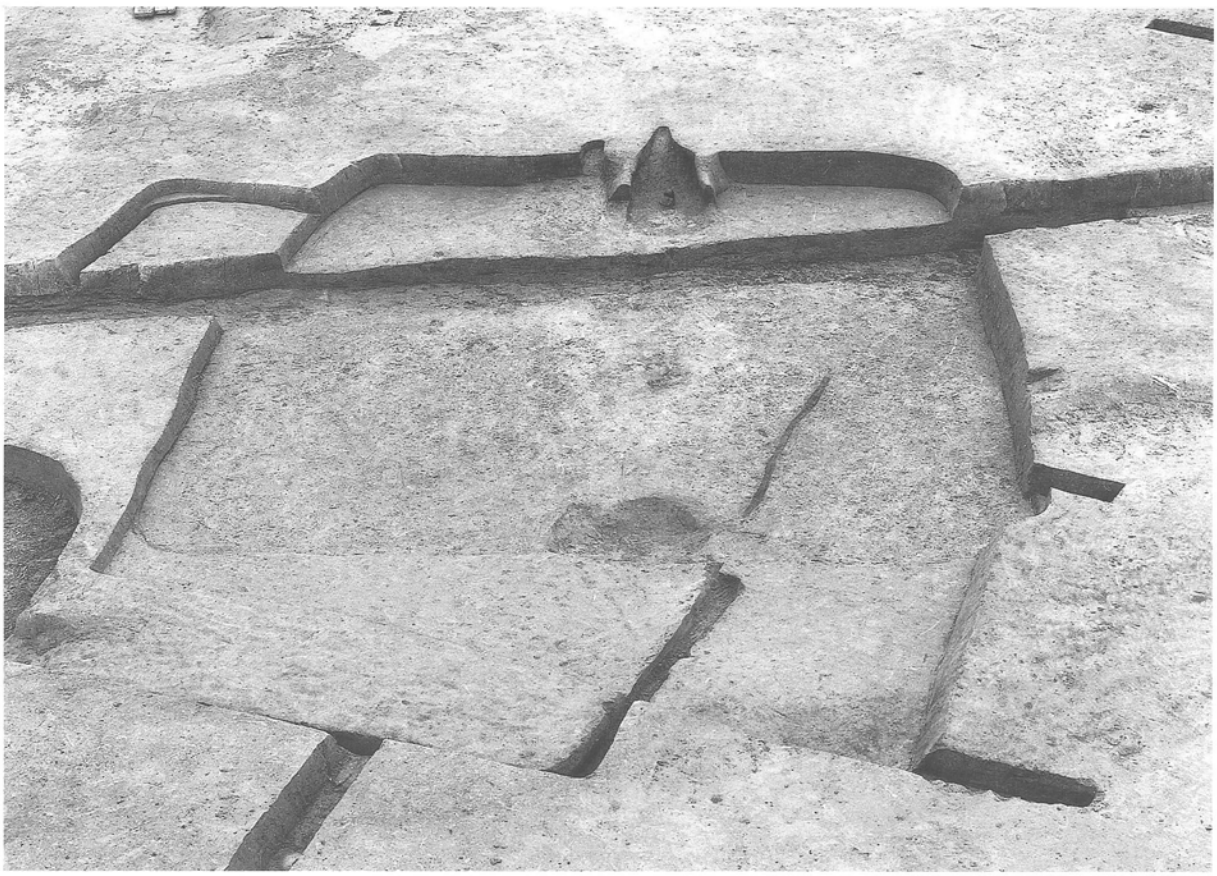
SH01　カマド（南東から）



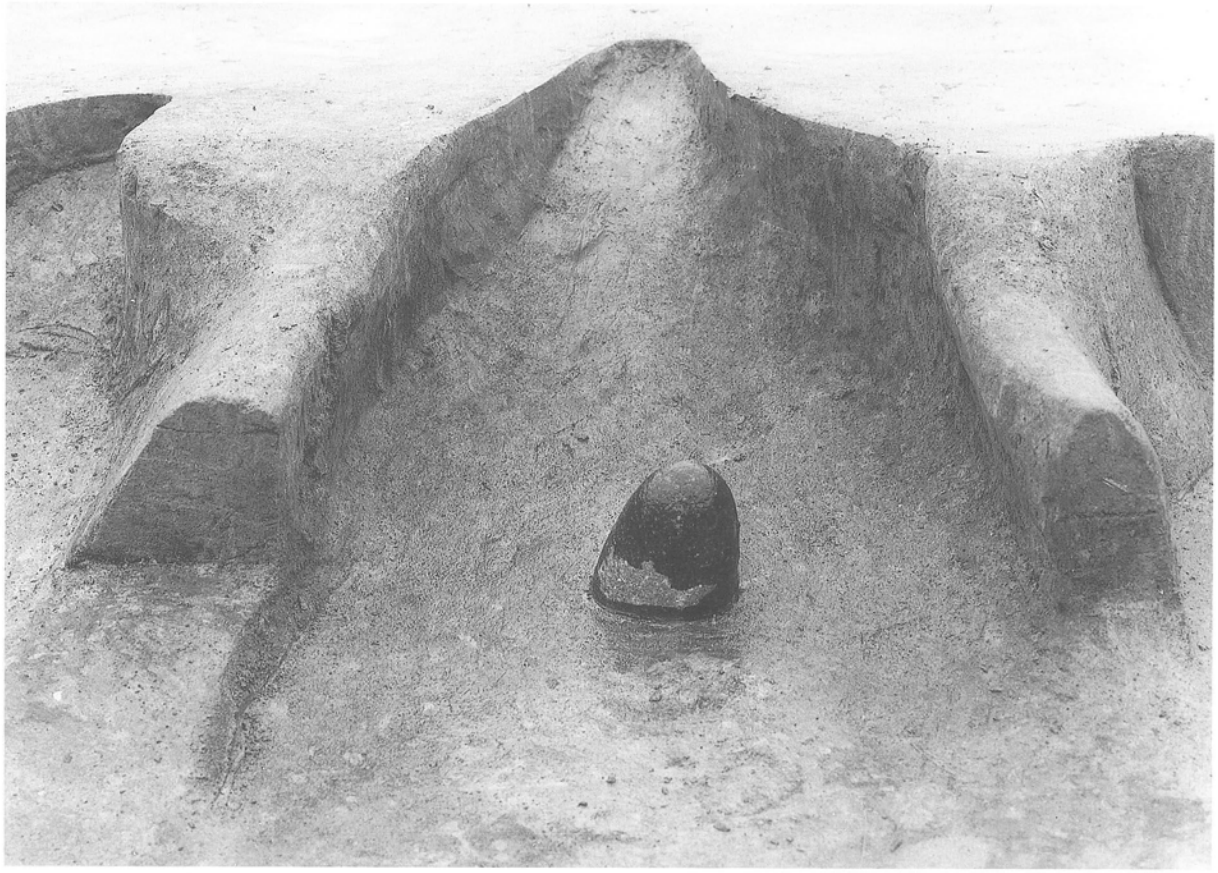
SH02　全景（南から）

SH02　カマド（南から）

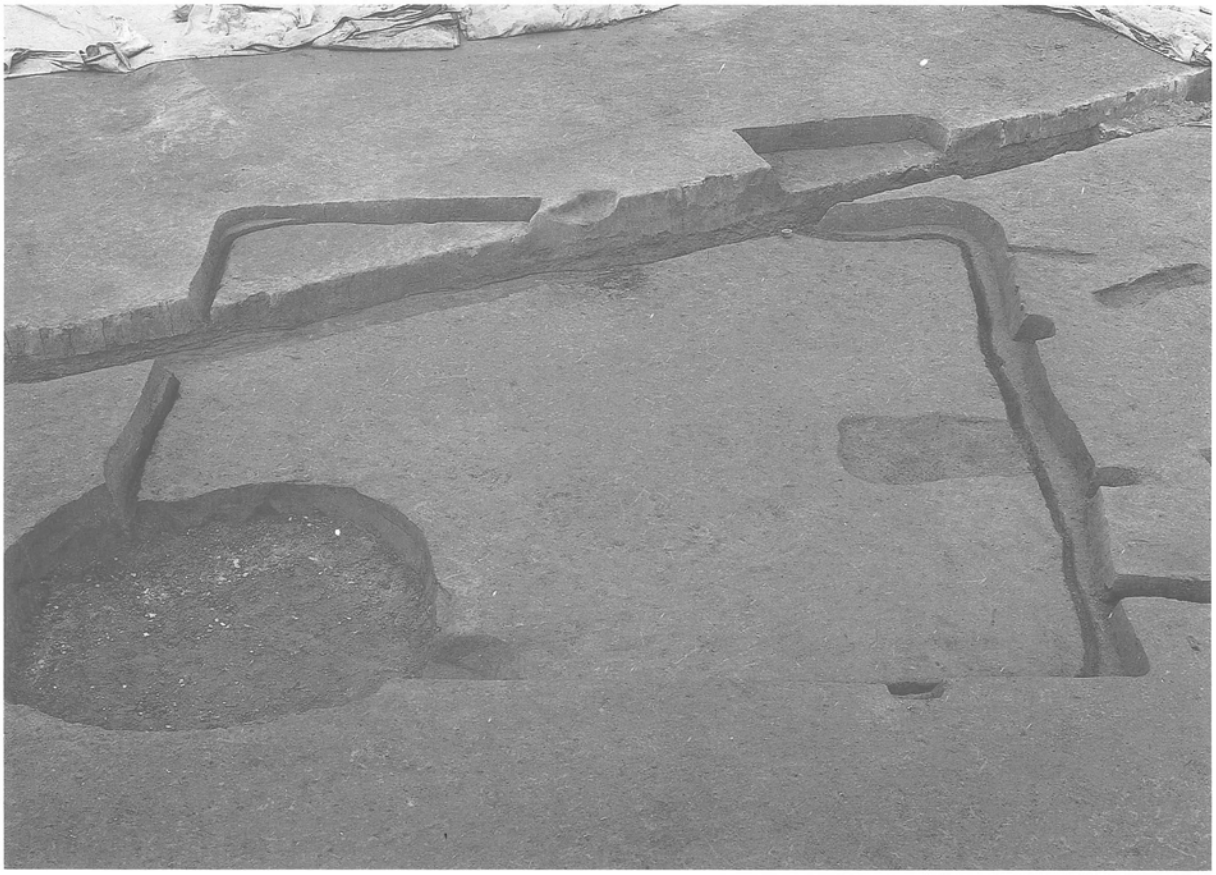
SH02　土器出土状況（南から）



SH03　全景（南から）



SH03　カマド（南から）

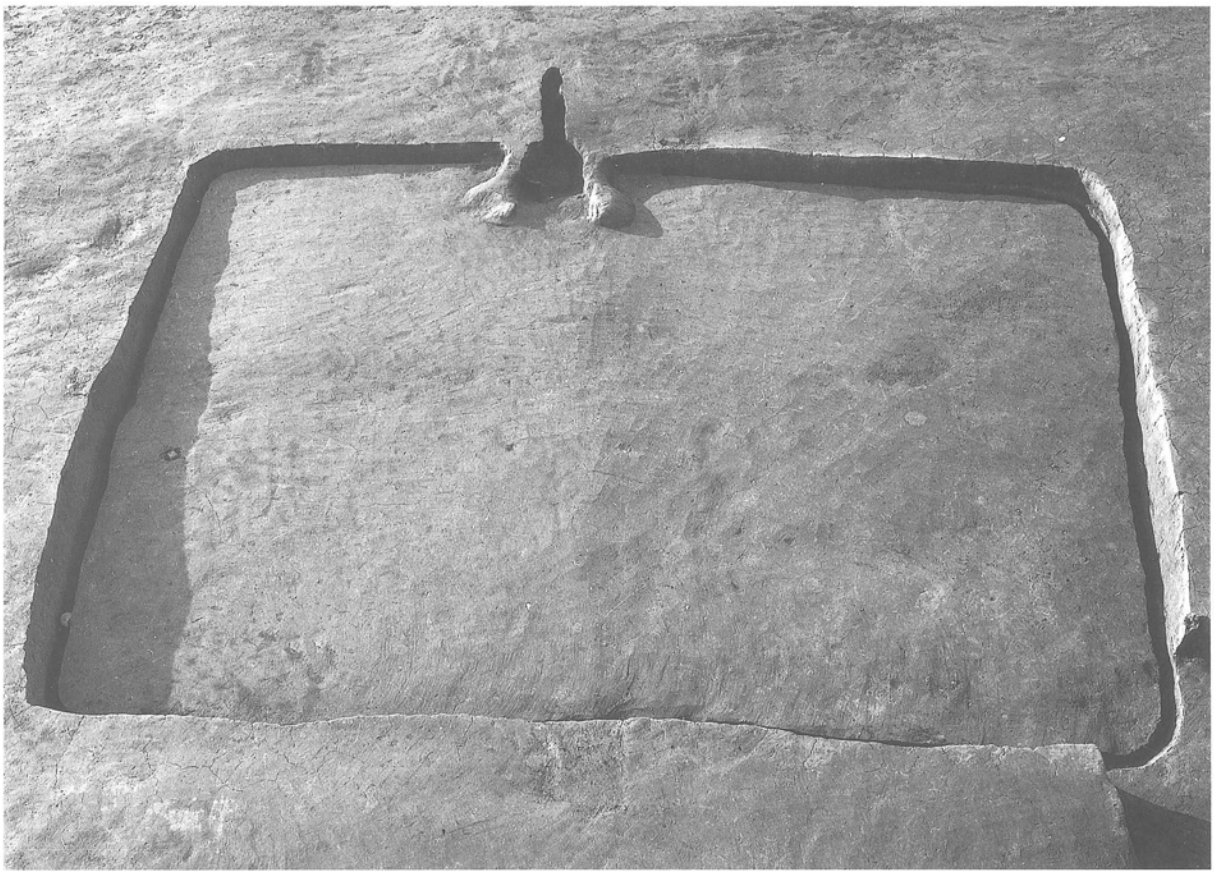


SH04　全景（南東から）

SH04（南から）

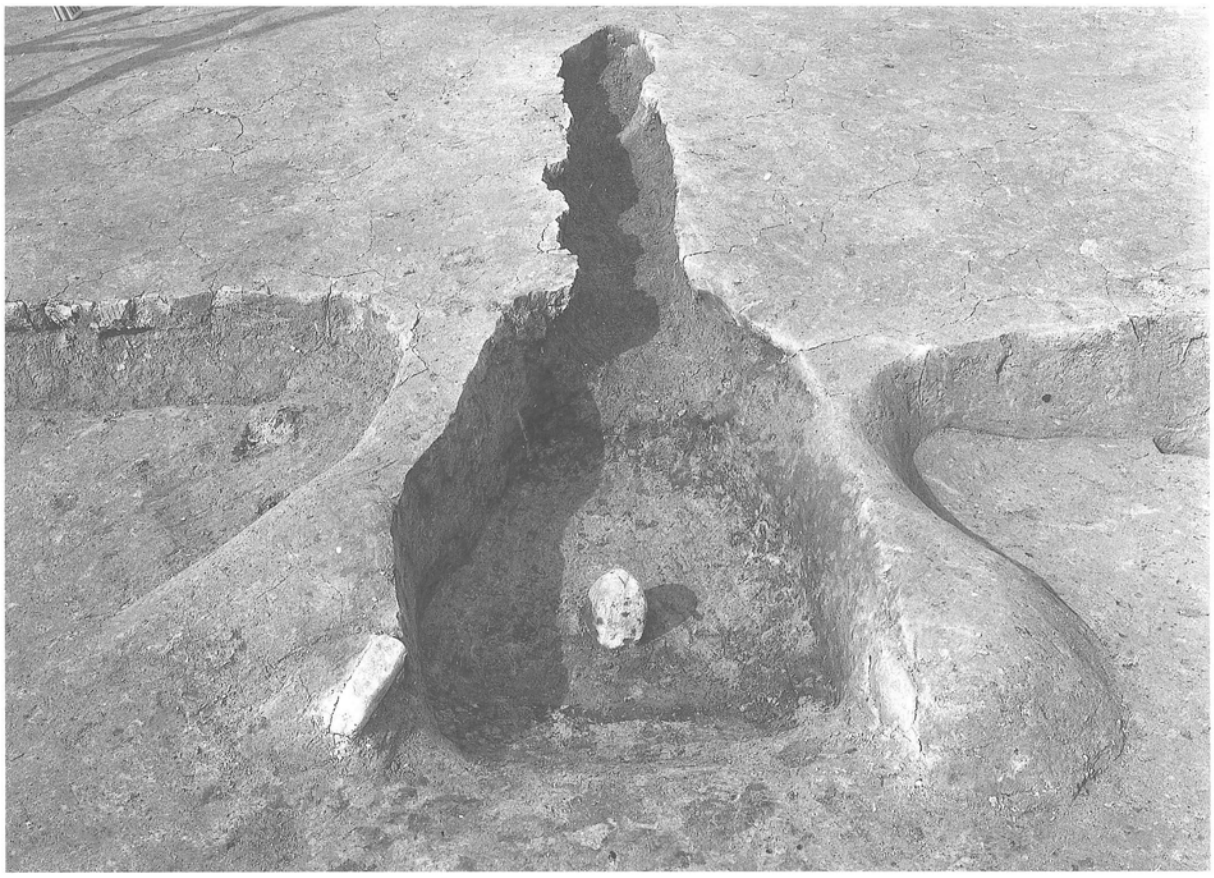
SH05　全景（南東から）

SH05　カマド（東から）



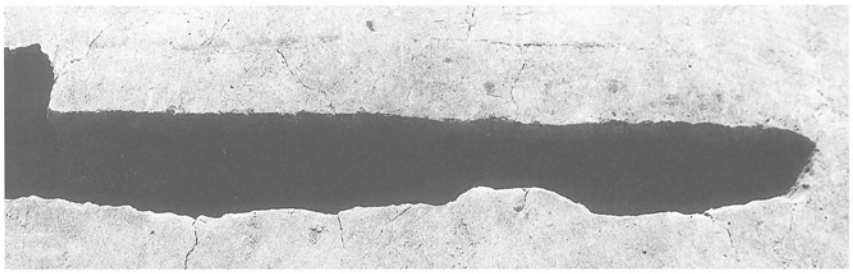
SH06　全景（南東から）

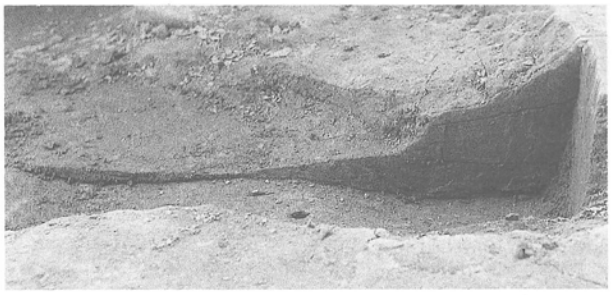
SH06　カマド（南東から）



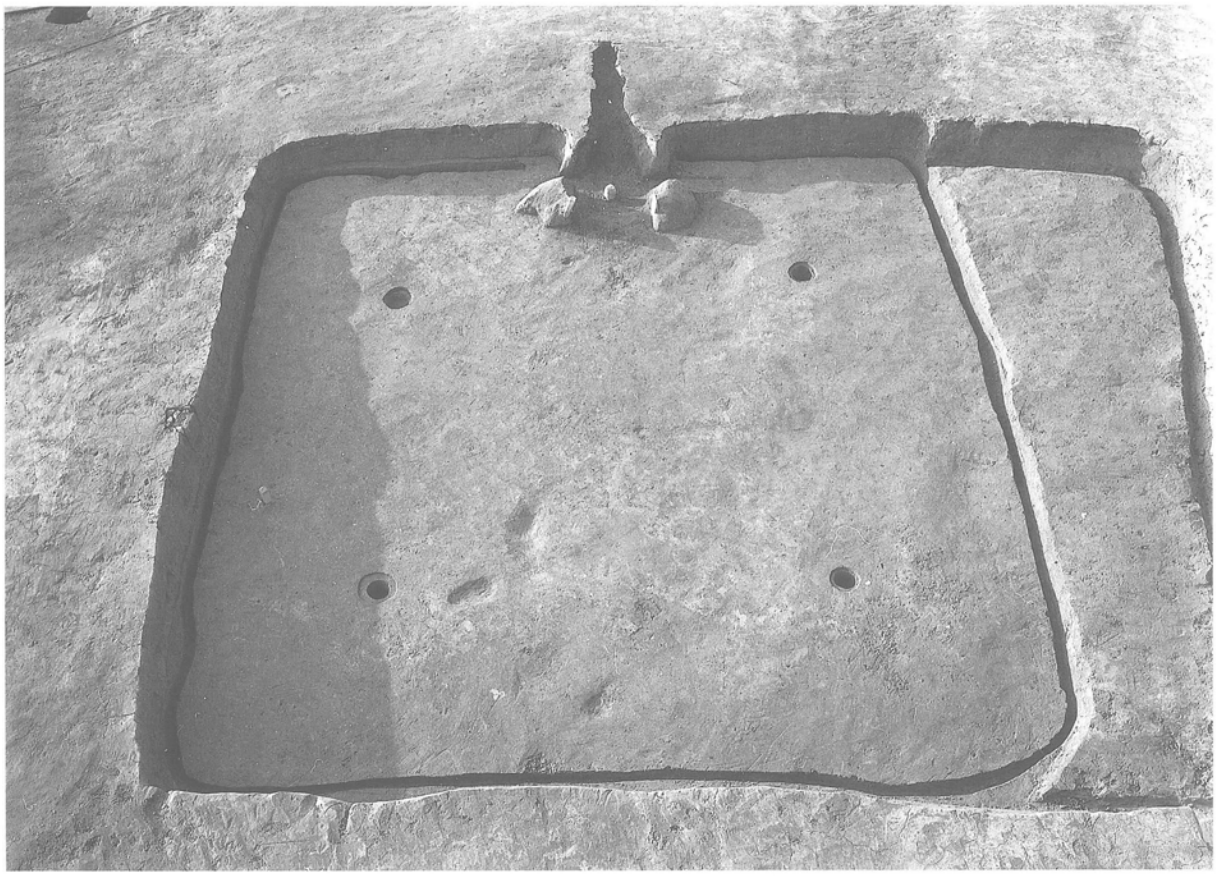
SH06　カマド（南東から）

SH06　炭化物検出状況

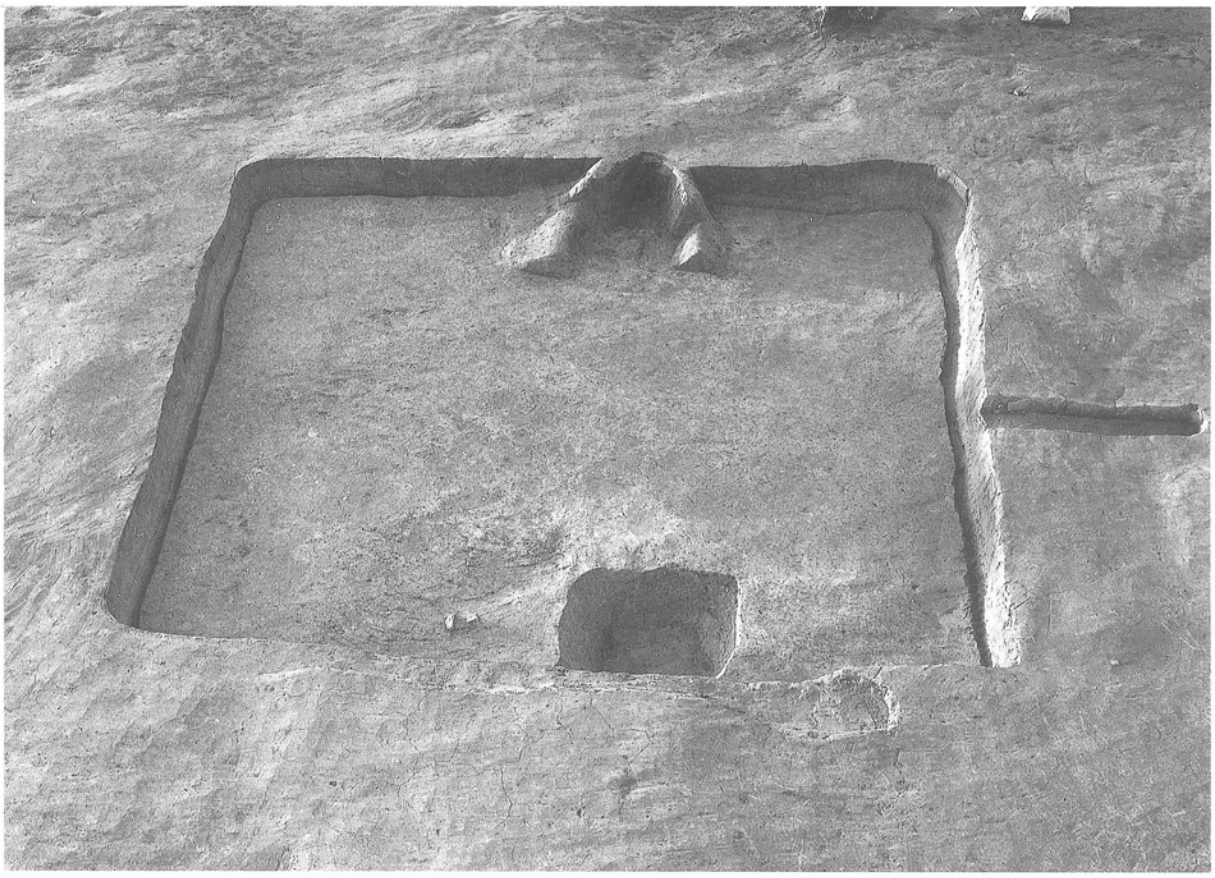




SH06　カマド縦断面



SH07　全景（南東から）



SH08　全景（南東から）

SH08　カマド（南東から）

SH08　土坑1（南西から）

SH10　全景（南西から）

SH11　全景（南から）

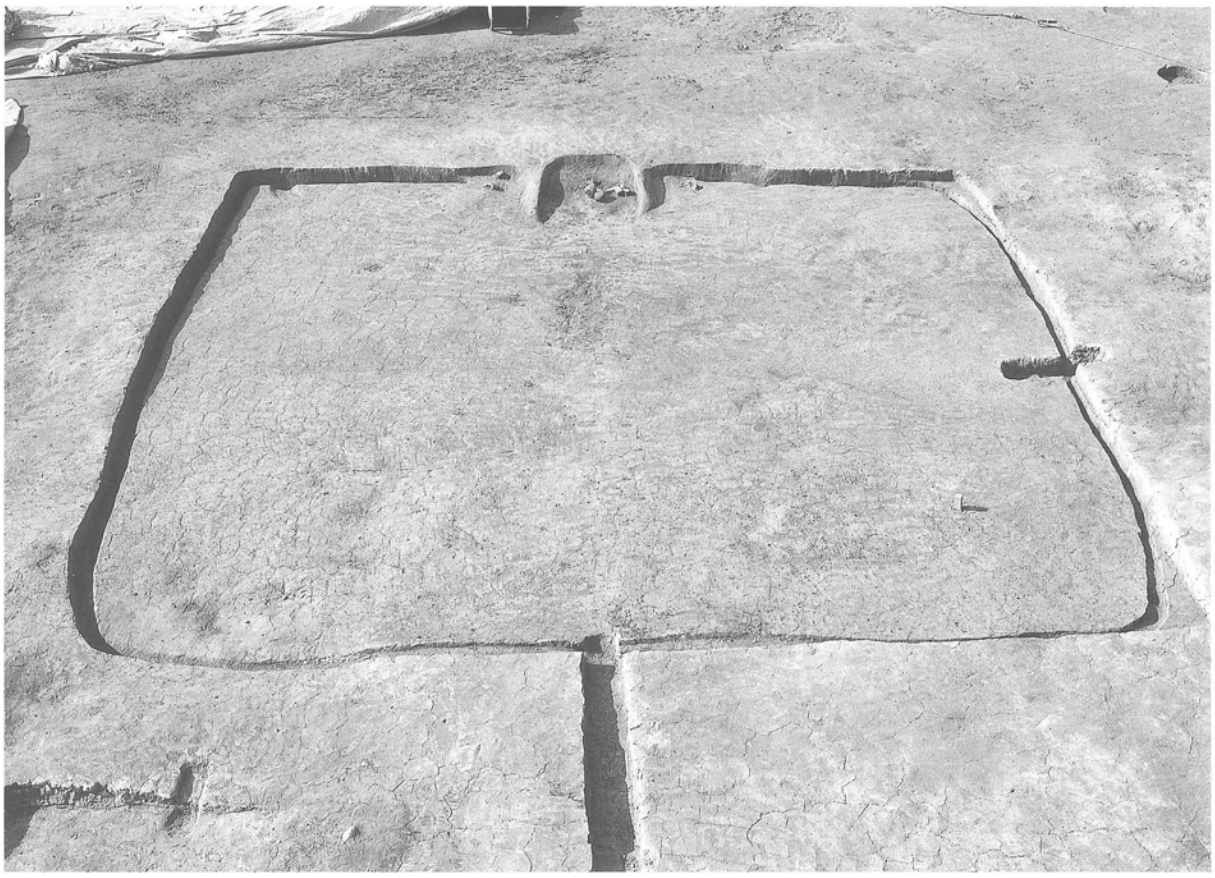
SH11　カマド（南から）

SH12　全景（南東から）

SH12　カマド（南東から）

SH14　全景（南から）

SH15　カマド（南東から）



SH16　全景（南東から）

SH16　カマド（南東から）

SH18　全景（南東から）

SH18　カマド（南東から）

SH18　カマド（南から）

SH18　土坑1（北西から）

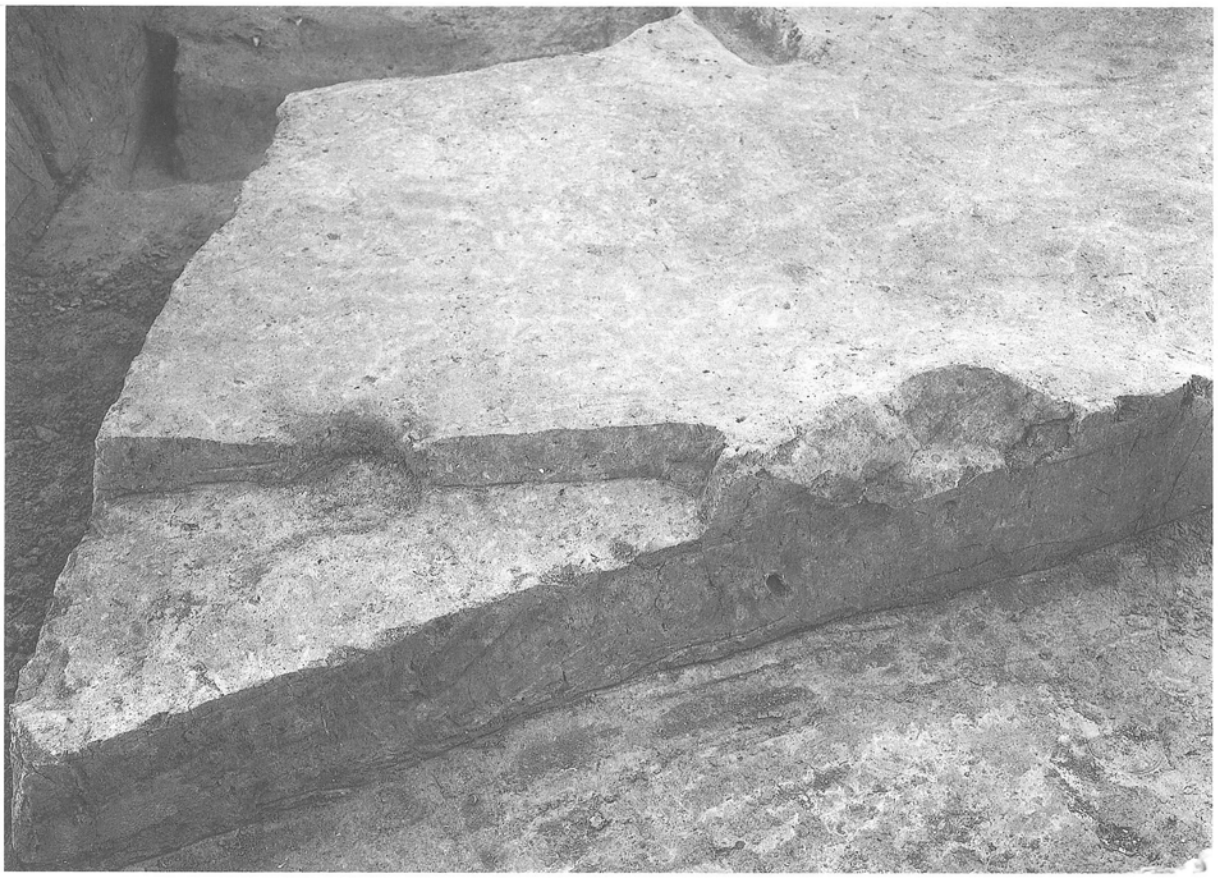
SH20　全景（南から）

SH20　カマド（南東から）

SH13・21（北東から）

SH13　土器出土状況（北東から）

SH22　全景（東から）

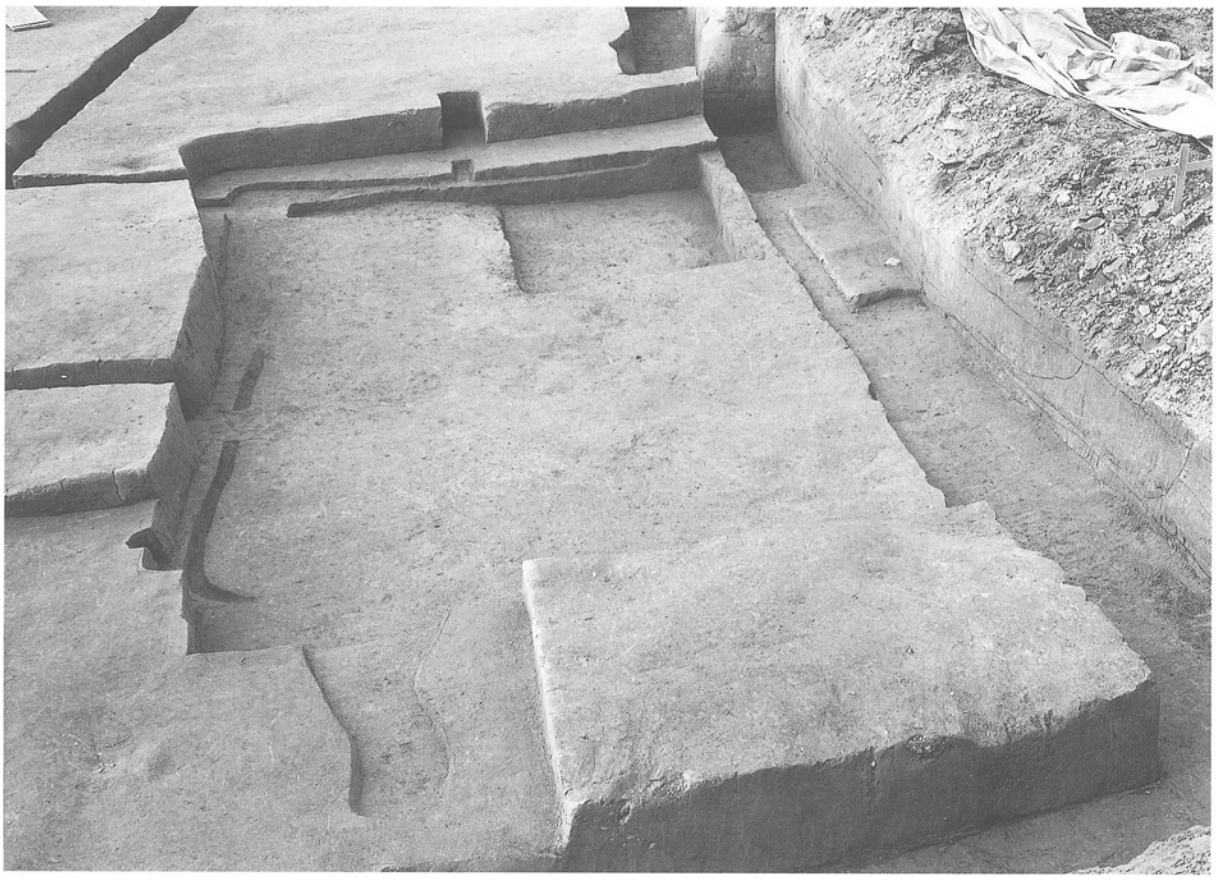


SH23　全景（東から）

SH25　全景（南東から）

SH25　カマド（南東から）

SH26　全景（南西から）

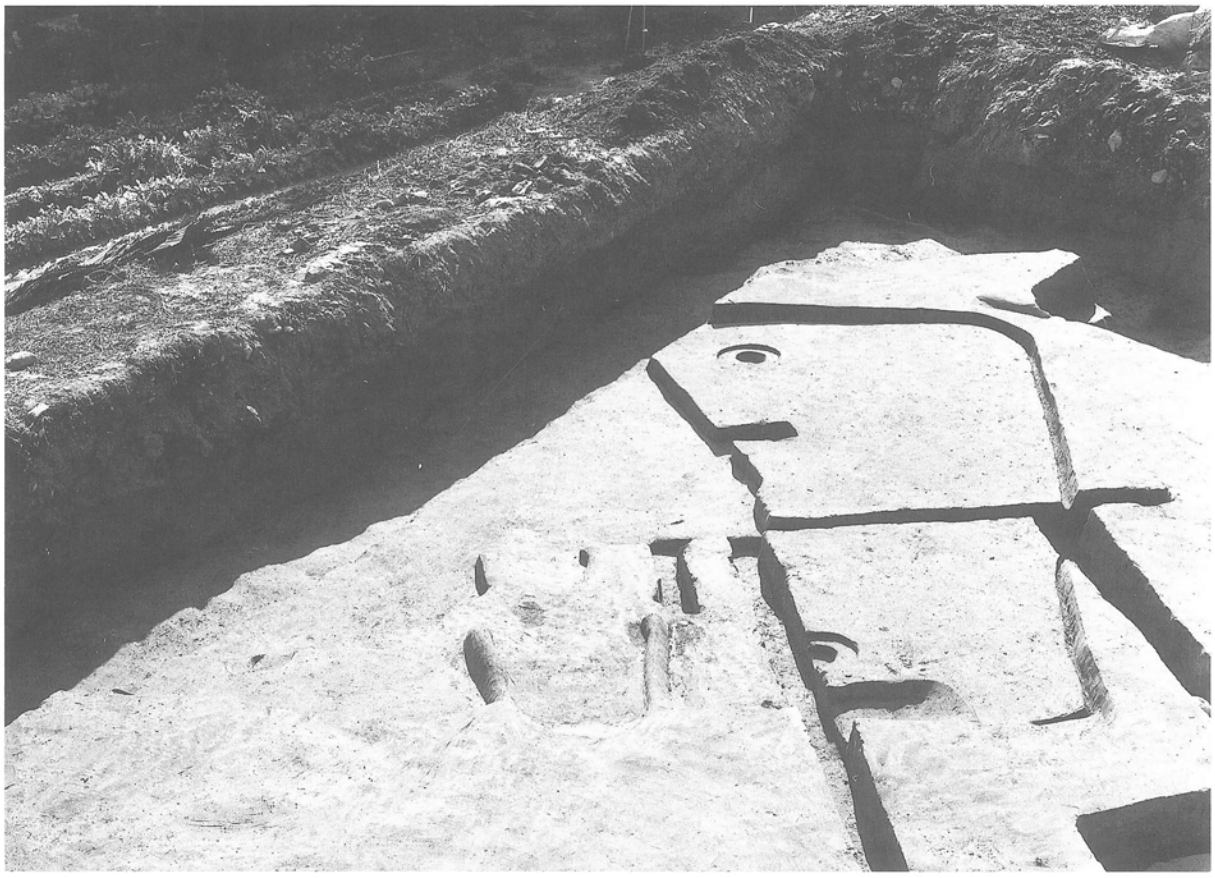


SH27　全景（東から）

SH28　カマド（南東から）

SH30　全景（北西から）

SH33　全景（北から）



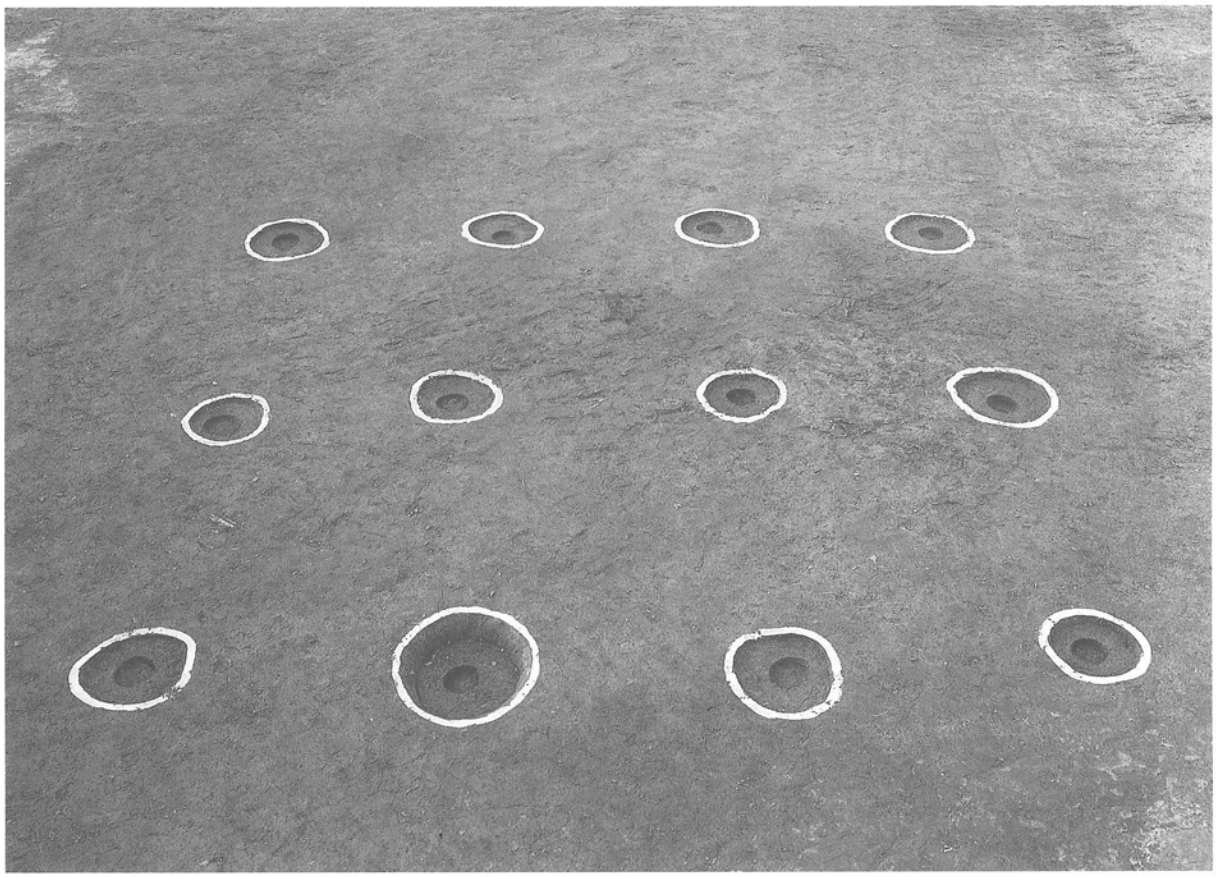
SH34　全景（北から）

SH34　カマド（南から）

SH24（手前）・SH34（奥）　カマド（南から）

SH35　全景（北から）

SH35　カマド（北から）

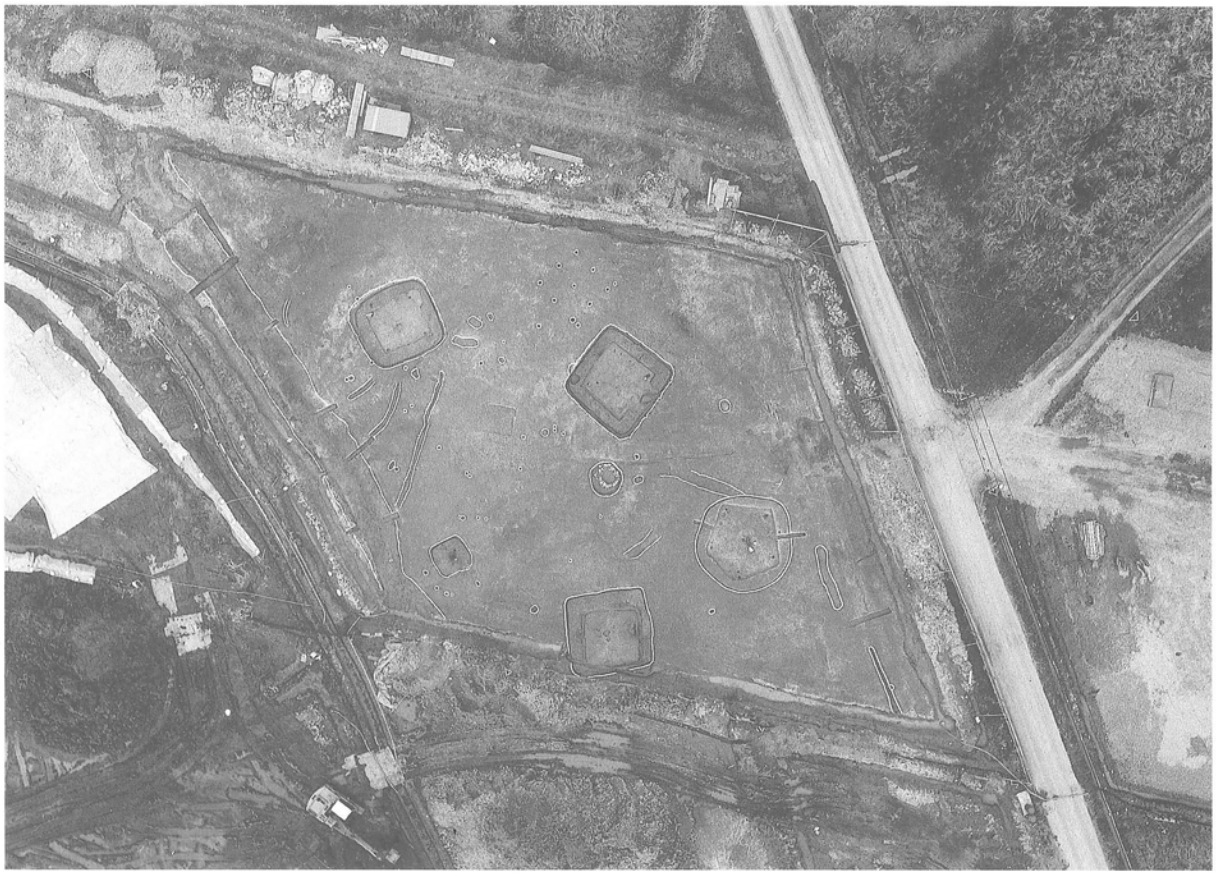


SB01　全景（南東から）

SX01　全景（南から）

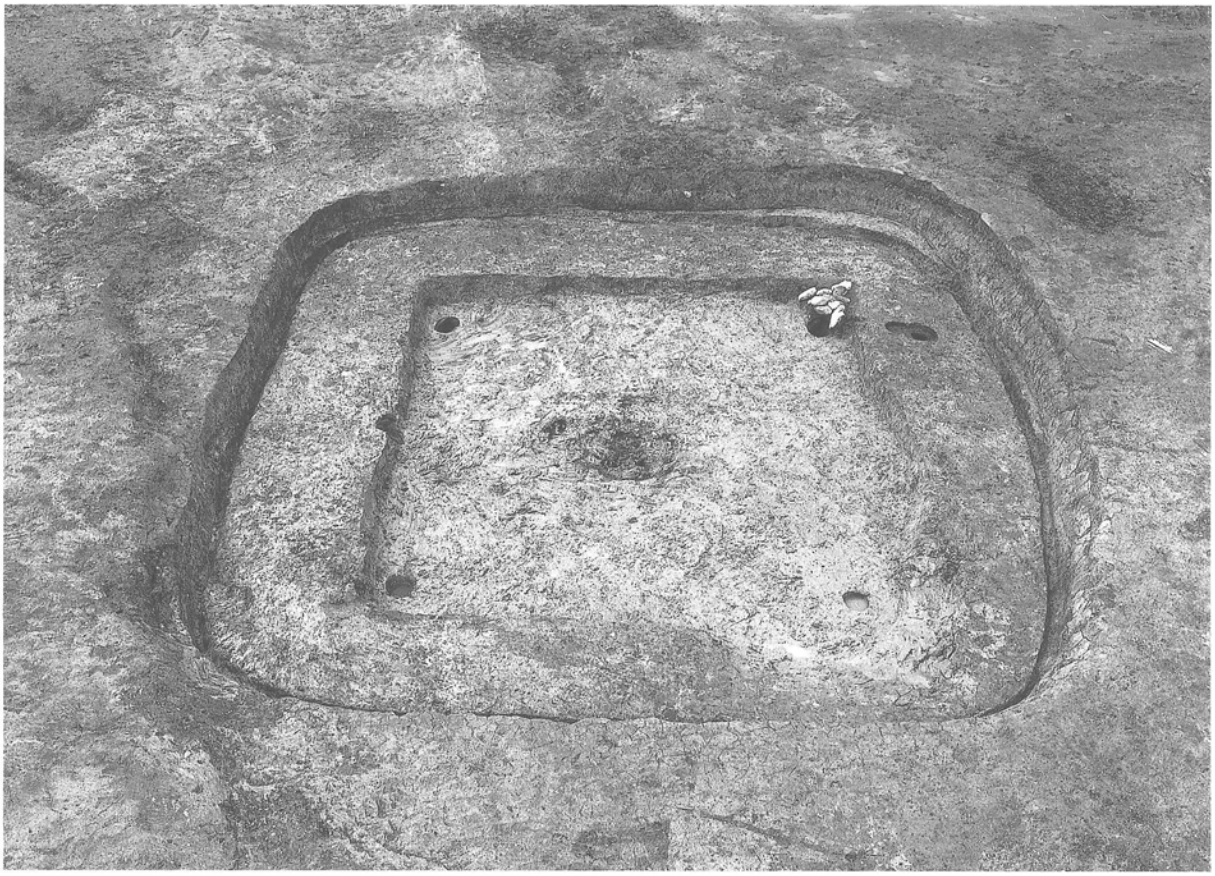
SX02　遺物出土状況（東から）

SX02　遺物出土状況（南から）

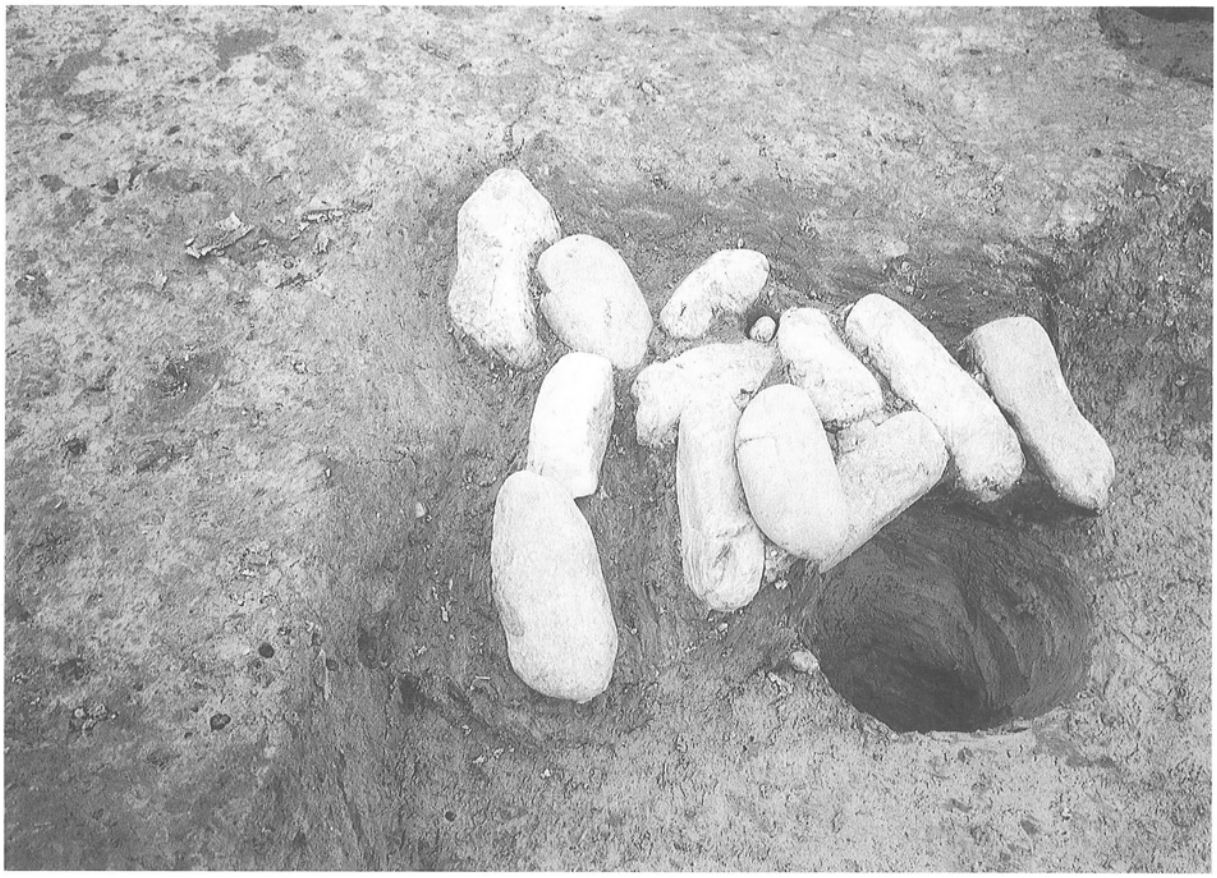


C地区　全景（上空から）

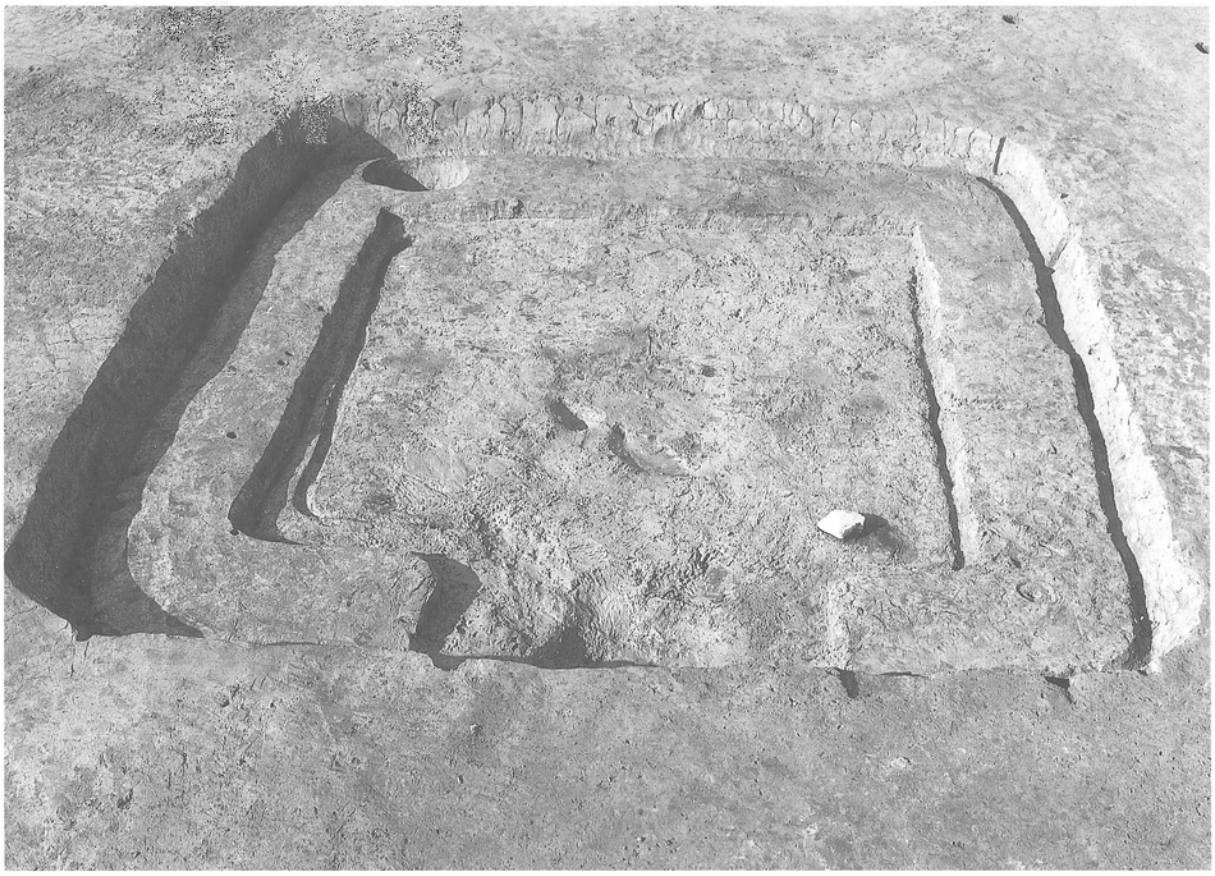
C地区　遺構検出状況（南から）



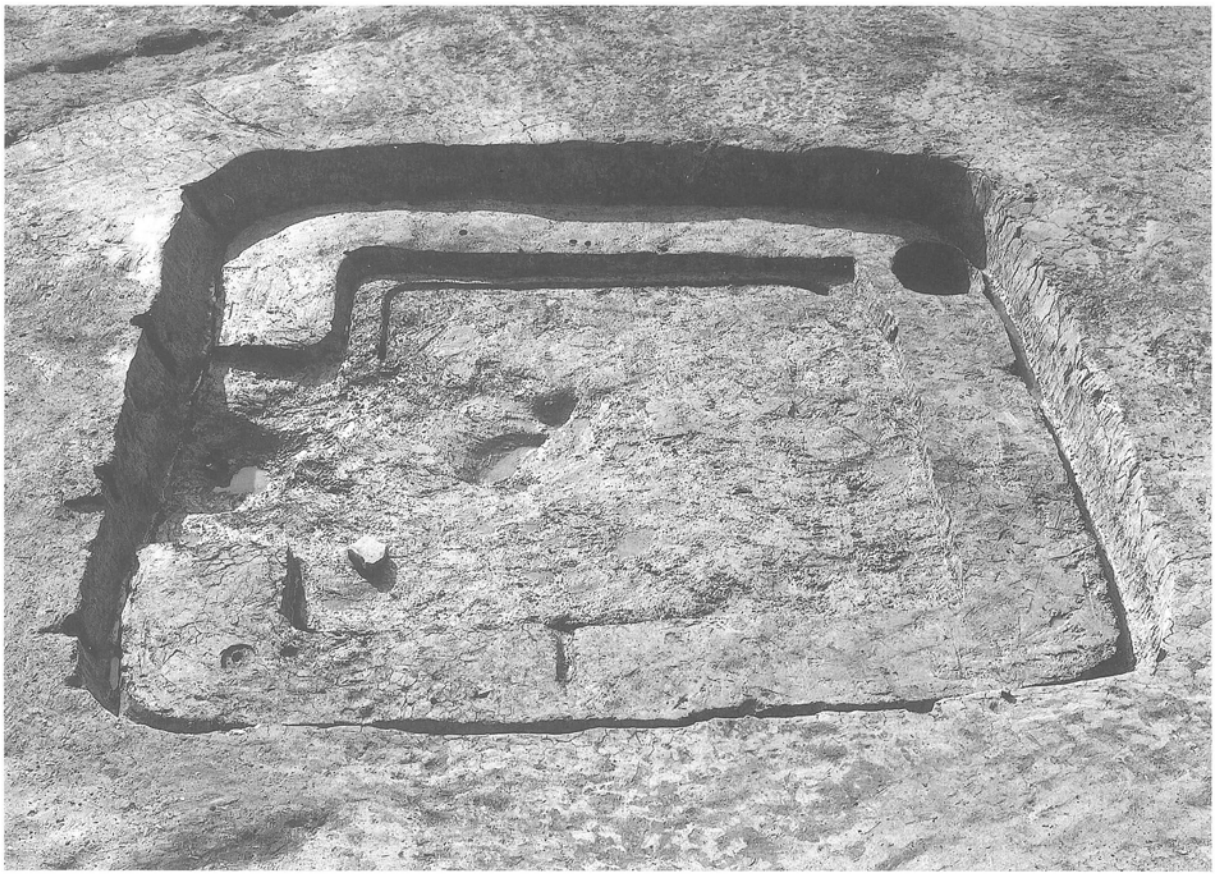
SH36　全景（南から）



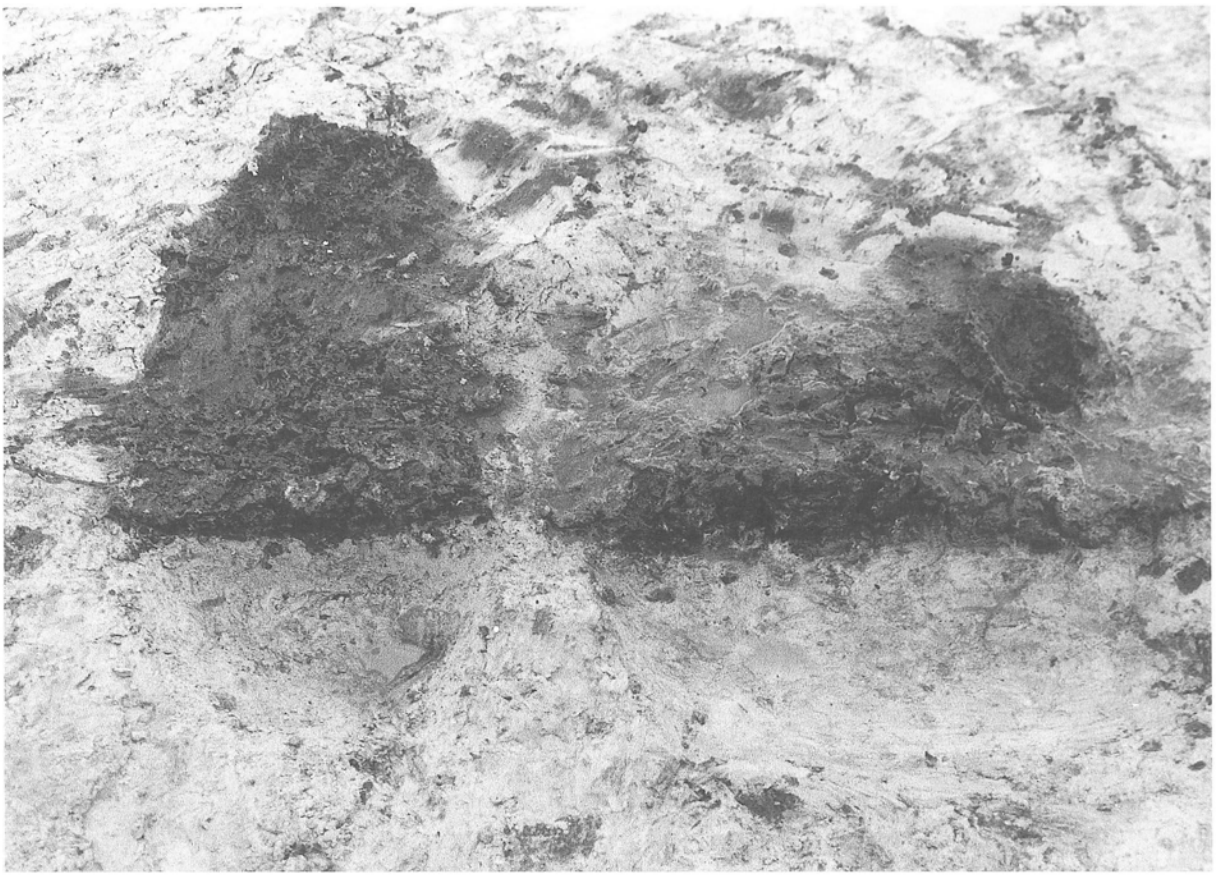
SH36　集石検出状況（西から）



SH37　全景（南東から）



SH37　全景（北東から）

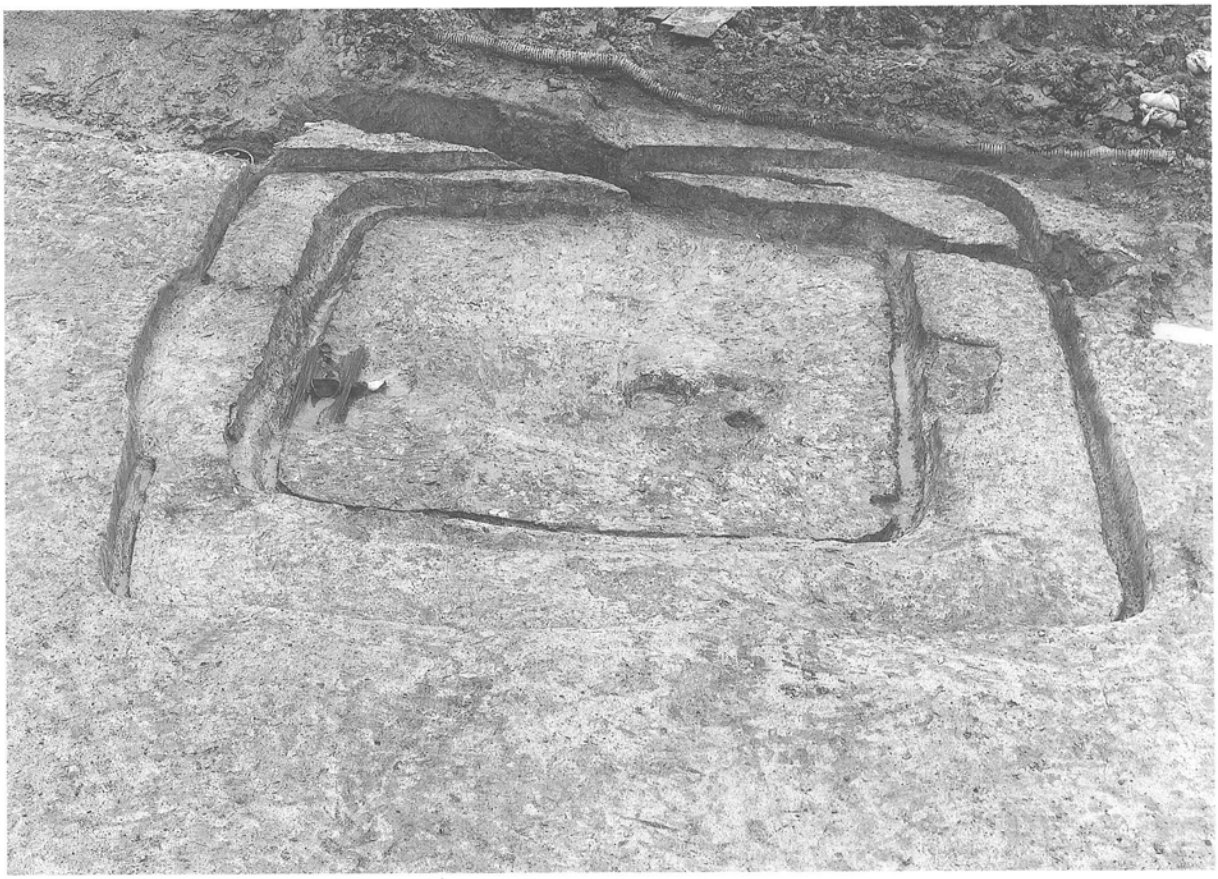


SH37　中央土坑（南から）

SH37　高床部（南東から）

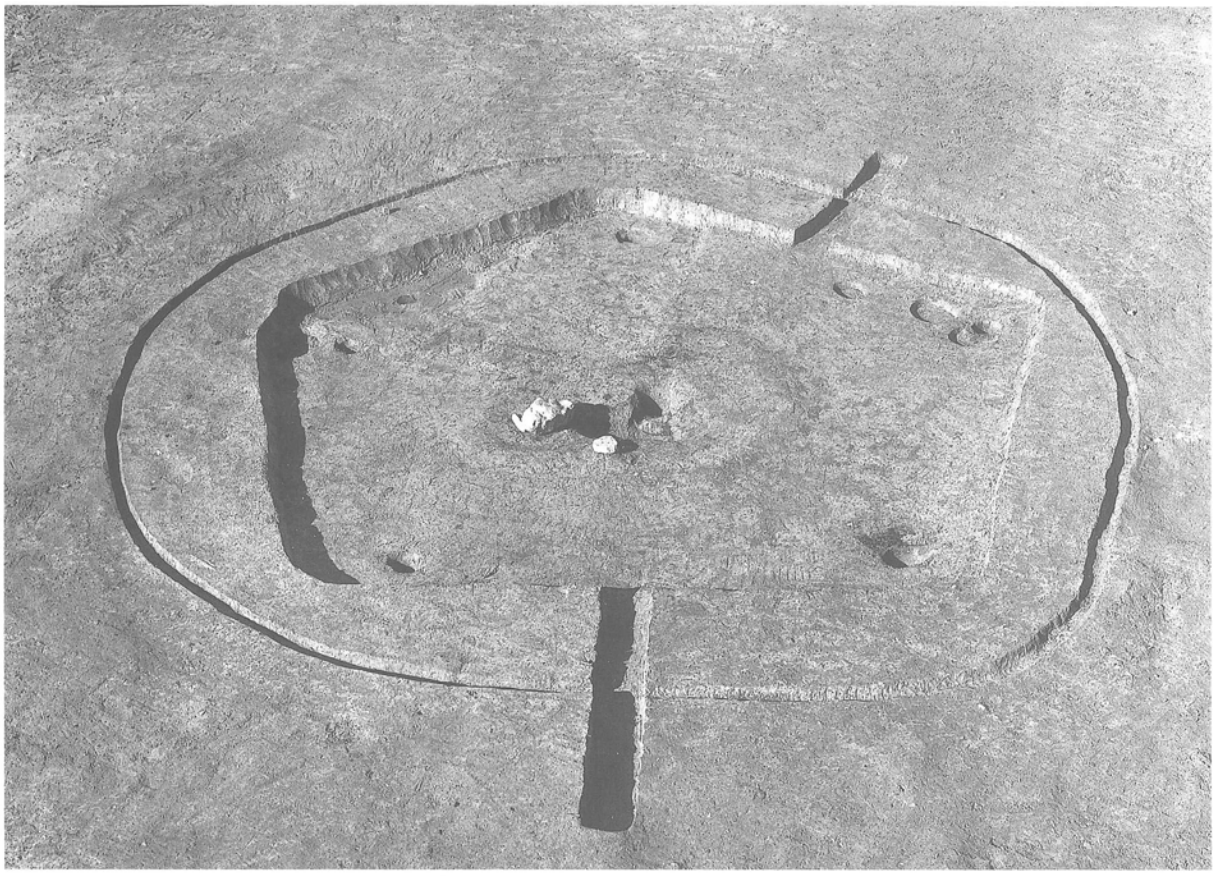
SH37　土坑4（北東から）

SH37　土坑3（南東から）



SH38　全景（北から）

SH38　土坑3遺物出土状況（東から）

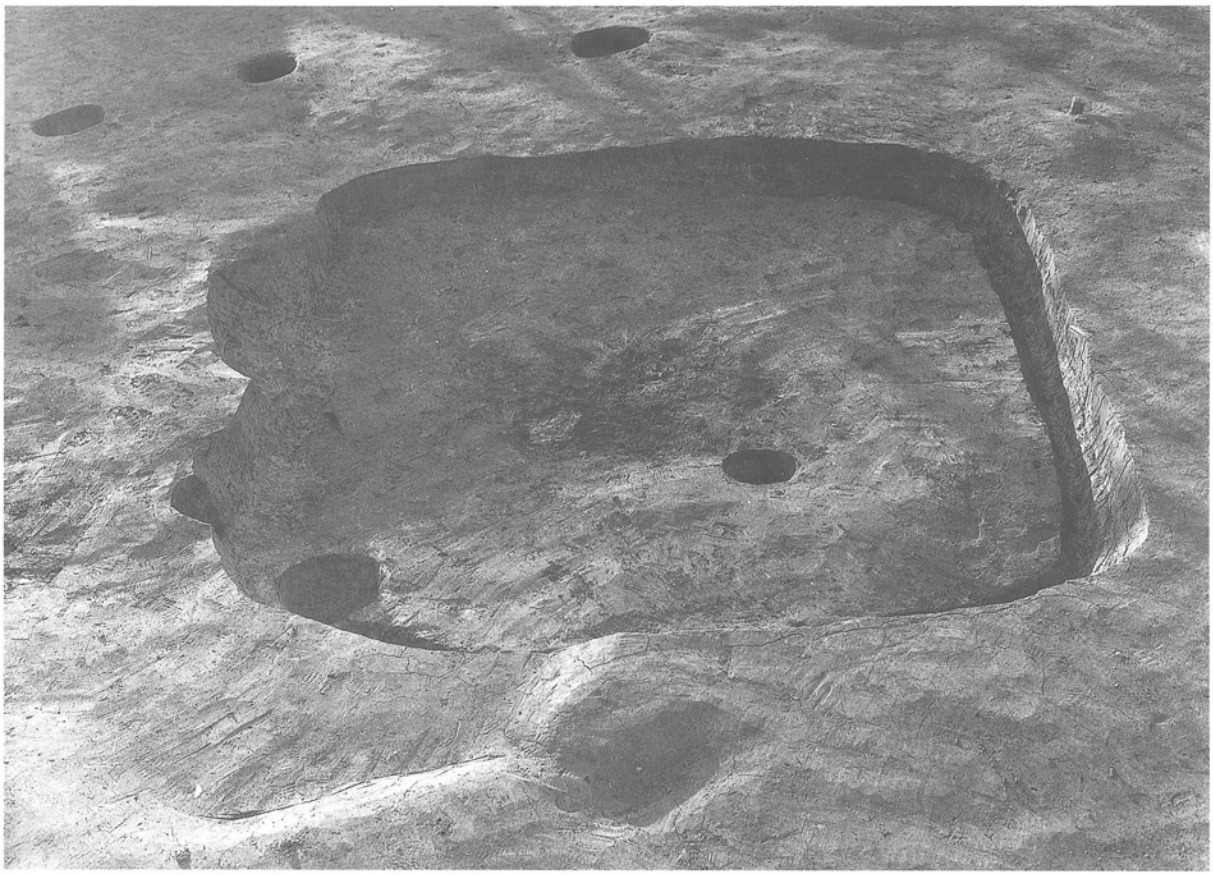


SH39　全景（東から）

SH39　中央土坑（北から）

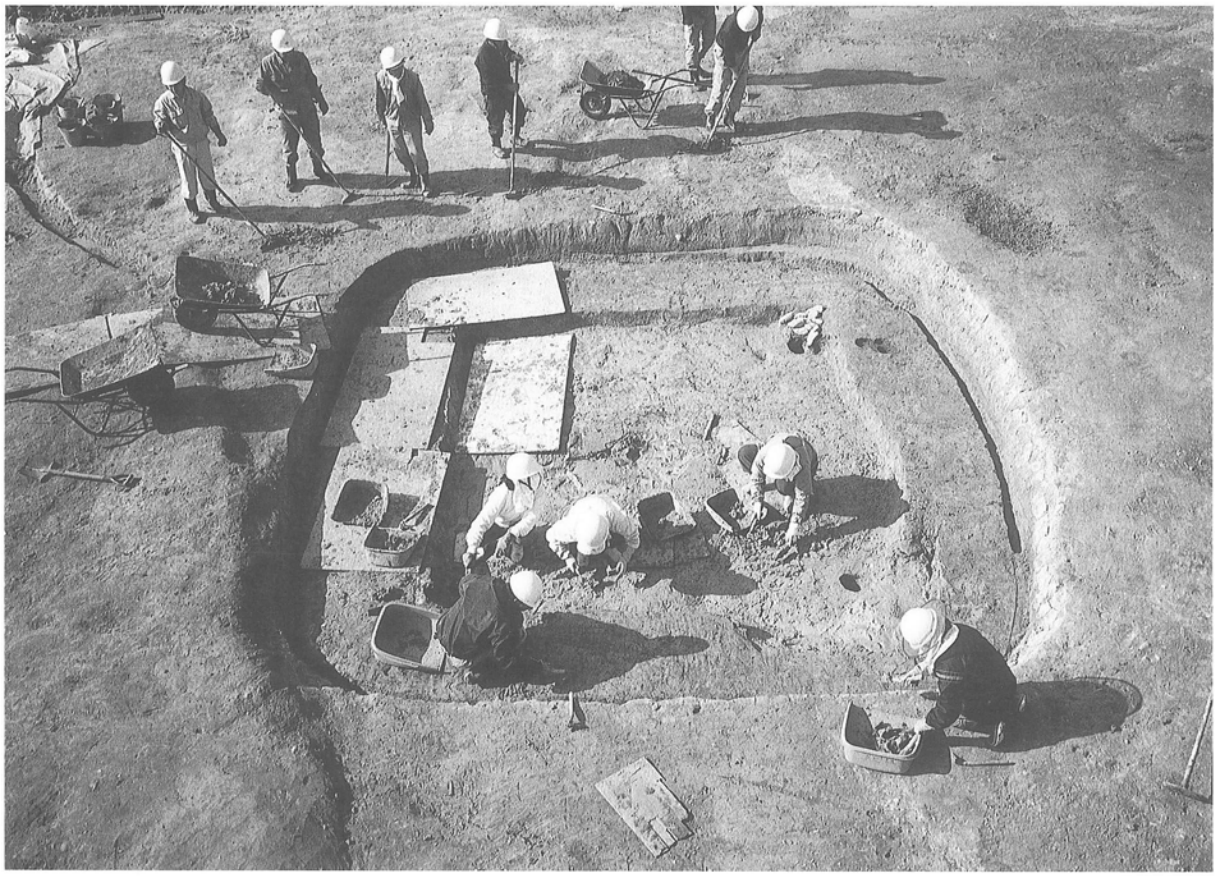
SH39　中央土坑断面（北から）

SH39　中央土坑完掘状況（北から）

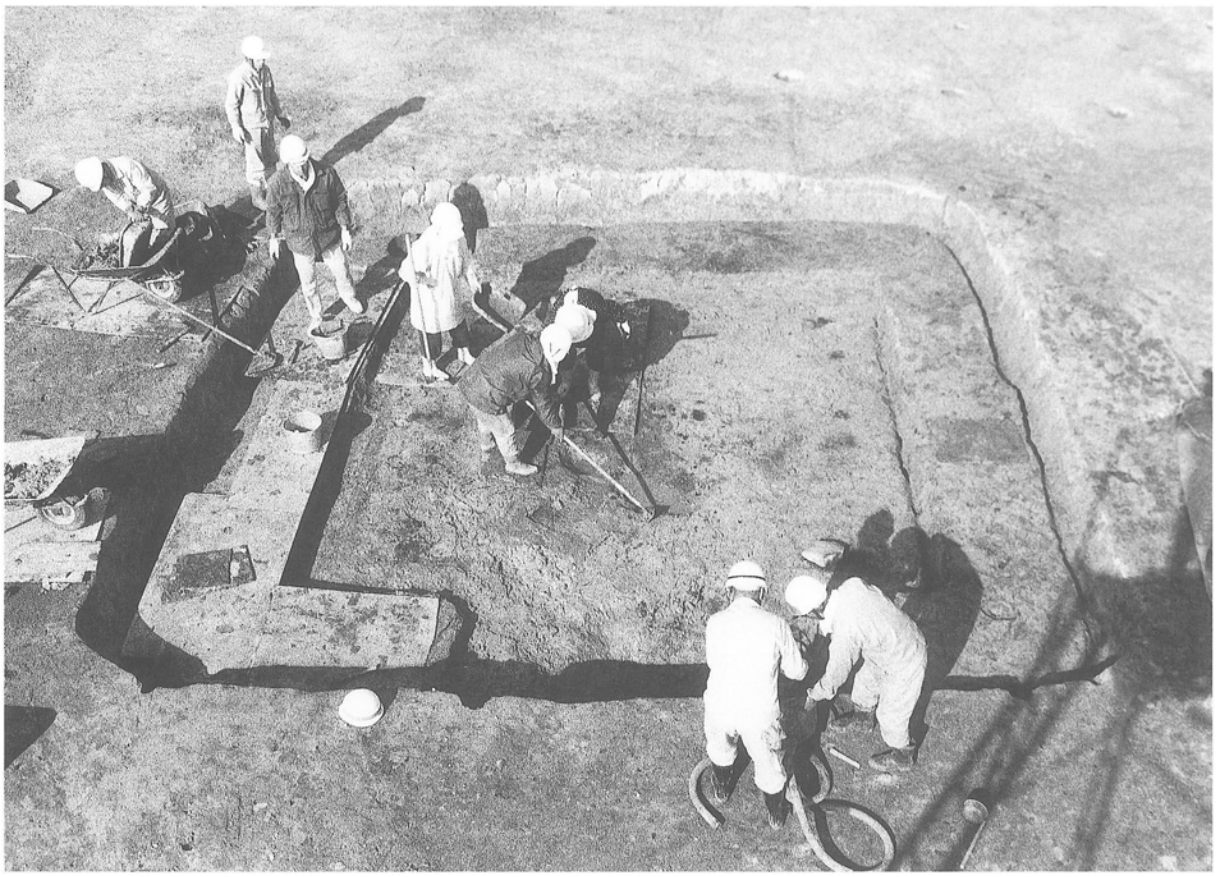


SH40　全景（東から）

SB02　全景（北西から）

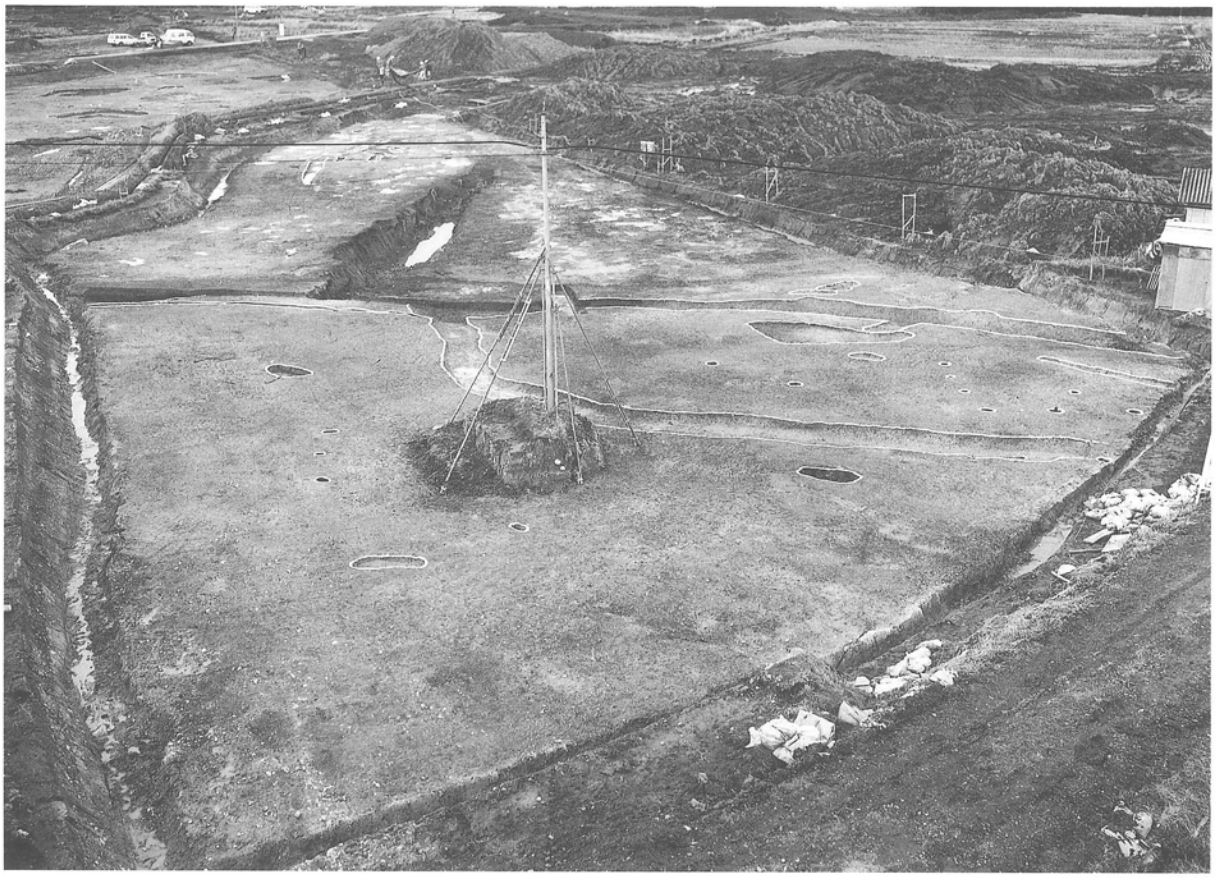


SH36　調査風景



SH37　調査風景

D地区　全景（上空から）

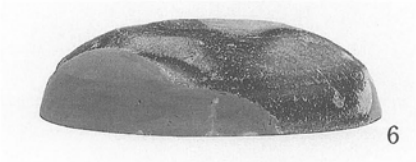


D地区　全景（南東から）

E地区　全景（上空から）

E地区　全景（南東から）

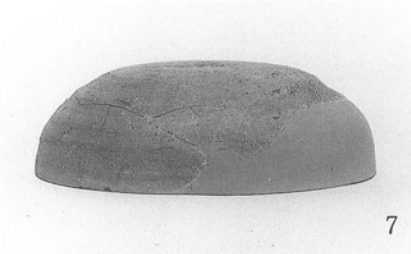
2


6

3

5

10


7

9

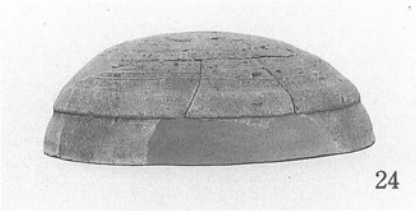
13

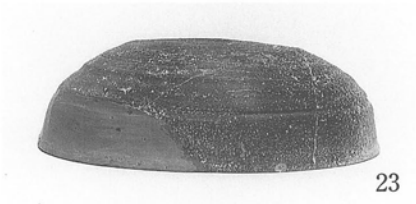
11

12

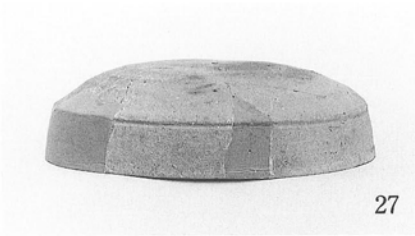
14

22


24


23

A地区出土土器（1）SH01・02・03・05


27

28

29

32

31

34

38

41

42

45

51

49

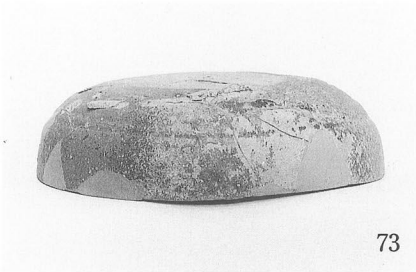
58

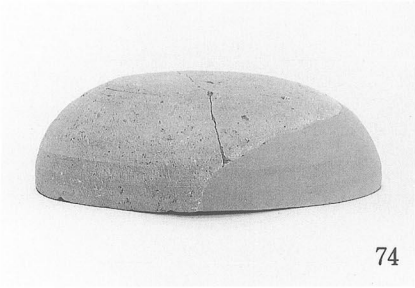
A地区出土土器（2）SH04・06・07

63

66

65


73


74

81

82

77

78

83

A地区出土土器（3）SH10・12

84

91

89

93

96

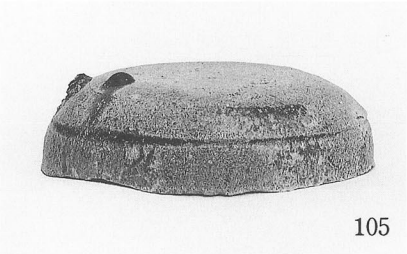
101

97

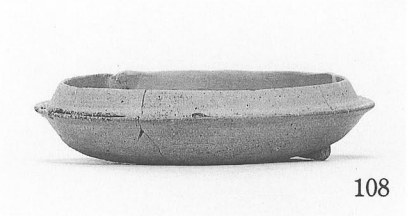
95

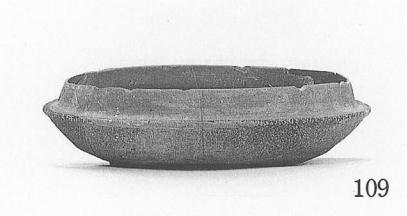
107

104


105

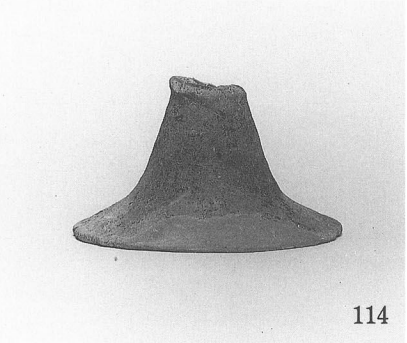
110

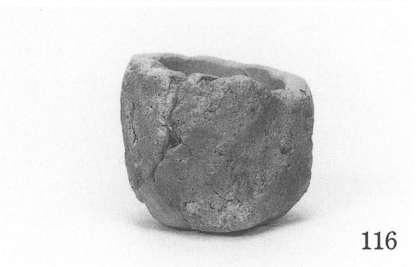

108


109

115

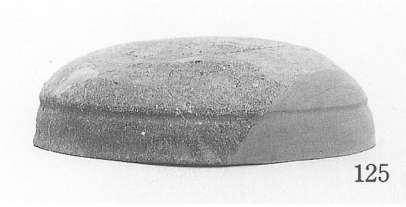
111


114


116

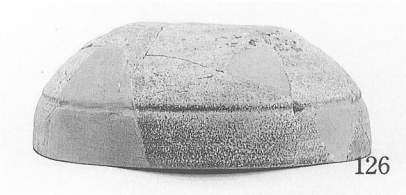
A地区出土土器（4）SH14・15・16・18・20・13・21

117


125

129

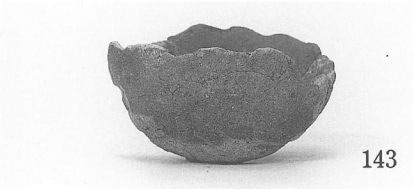
120


126

130

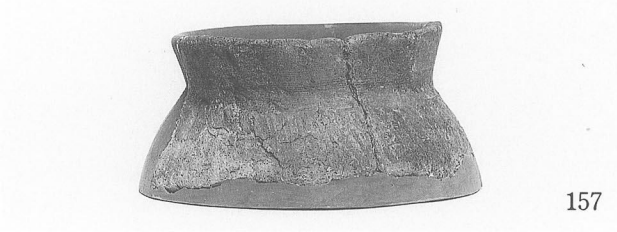
128

131


143

154

148


157

158

161

A地区出土土器（5）SH23・24・26・34・35，SB01

164

165

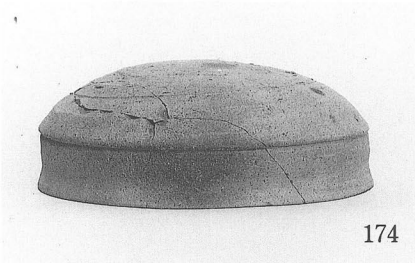
166

167

168

169

170


174

175

176

177

178

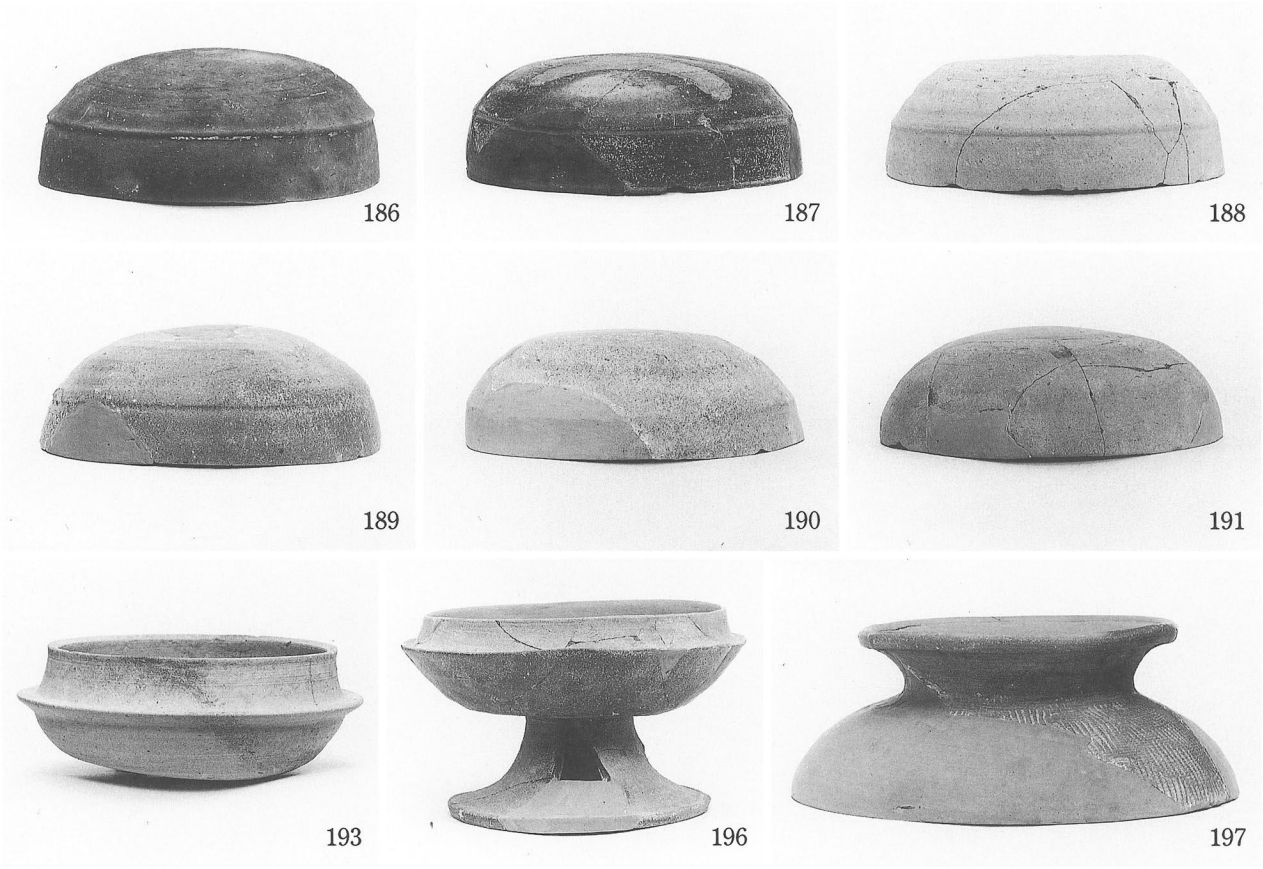
179

180

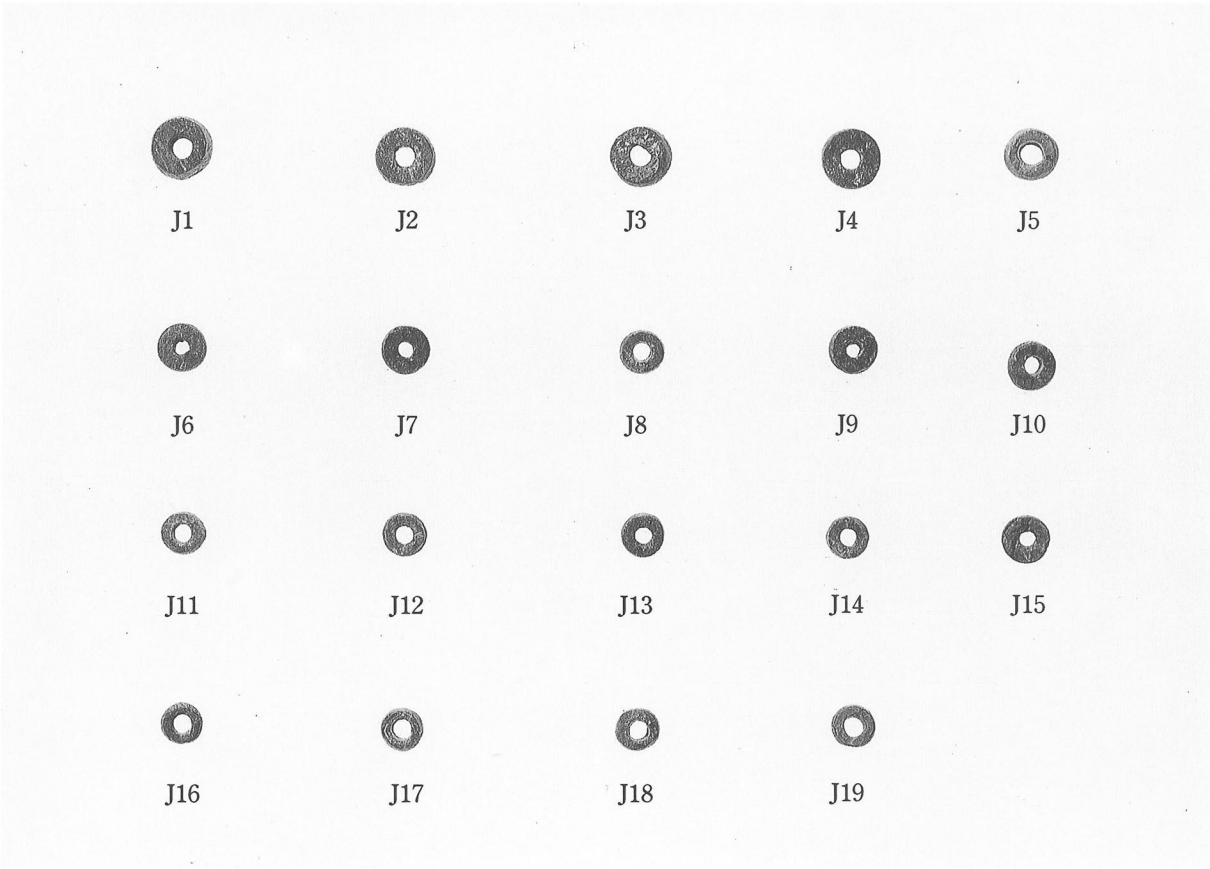
181

184

A地区出土土器（6）SX01・02



A地区出土土器（7）包含層出土



包含層出土小玉

202

206

207

208

209

213

214

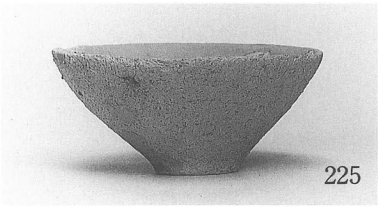
215

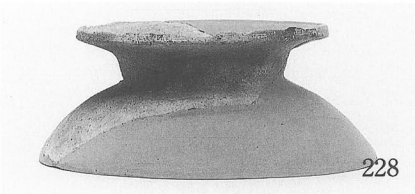
218

222

223

221


225


228

231

233

C地区出土土器　SH36・37・38・39，SD02

239

240

242

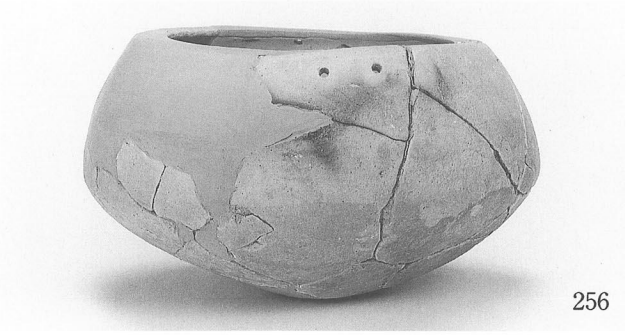
244

247

248

252

249


256

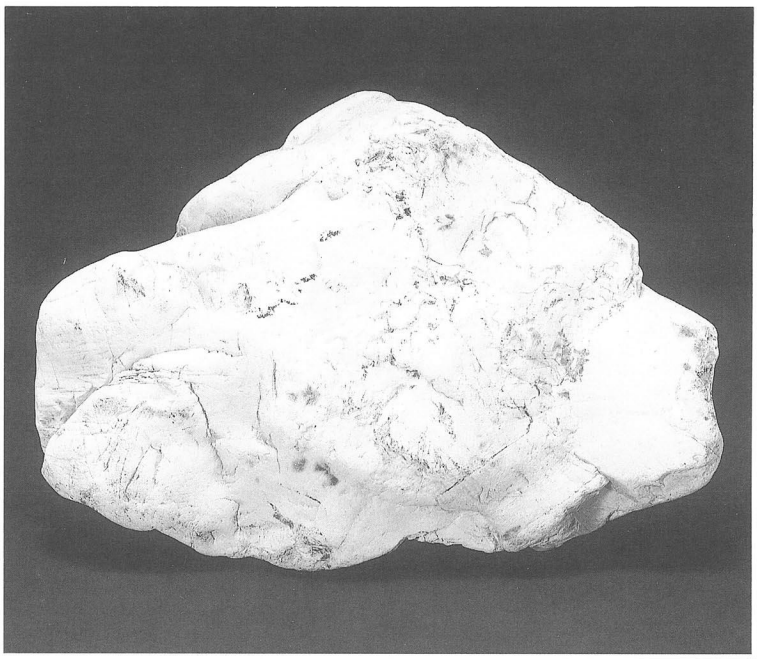
257

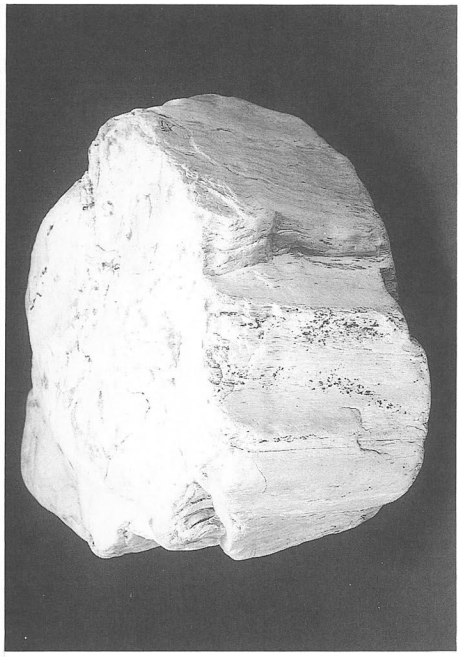
259

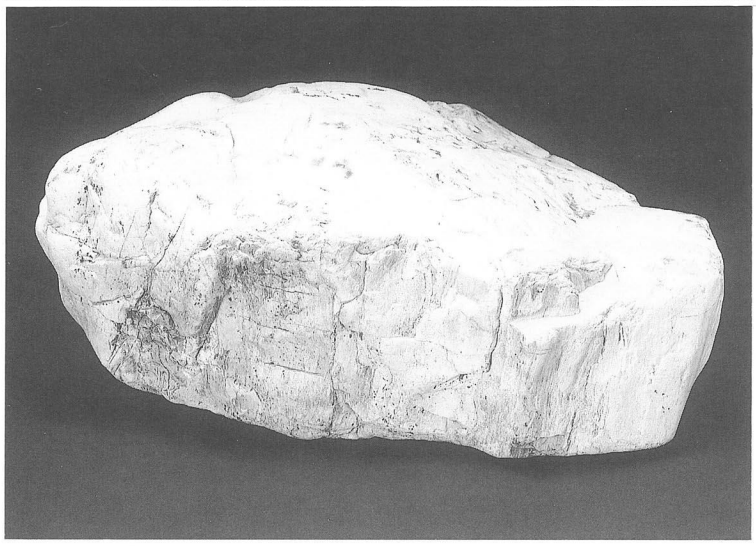
260

262

C地区包含層出土土器，D地区出土土器　SD07

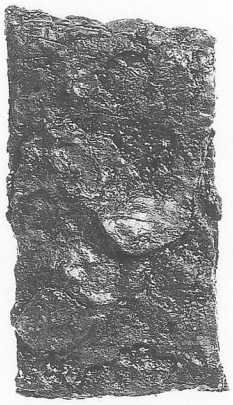






S1

S2



S3

SH39　出土珪化木，出土鉄器

兵庫県文化財調査報告　第151冊

西ケ原遺跡発掘調査報告書

― 山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XIX ―

平成８年３月29日発行

編　集　　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652　神戸市兵庫区荒田町２丁目１番５号
ＴＥＬ　078-531-7011
発　行　　兵庫県教育委員会
〒650　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号
印　刷　　光印刷株式会社 関西事業部
〒650　神戸市中央区下山手通2-16-12